

前 谷 遺 跡 群

(東原遺跡 · 前谷東遺跡 · 前谷西遺跡)

東 原 觀 音 塚

田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 4 集

1998

土 浦 市 教 育 委 員 会
土 浦 市 遺 跡 調 査 会
田 村 ・ 沖 宿 土 地 区 画 整 理 組 合

前 谷 遺 跡 群

(東 原 遺 跡 · 前 谷 東 遺 跡 · 前 谷 西 遺 跡)

東 原 觀 音 塚

田 村 · 沖 宿 土 地 区 画 整 理 事 業 に
伴 う 埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

第 4 集

1998

土 浦 市 教 育 委 員 会
土 浦 市 遺 跡 調 査 会
田 村 · 沖 宿 土 地 区 画 整 理 組 合



旧石器時代出土遺物



板状土偶（前谷西遺跡エリア採集）

例　　言

- 1 本書は、土浦市田村沖宿土地区画整理事業に伴う、同市田村町に所在する前谷遺跡群(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡)及び東原觀音塚の発掘調査報告書である。各遺跡の所在地は、東原遺跡は同町字東原1970他、前谷東遺跡は同町字前谷ツ2441他、前谷西遺跡は同町前谷ツ2445他、東原觀音塚は同町東原2449-1他に所在する。
- 2 調査は田村・沖宿土地区画整理組合の委託を受け土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 各遺跡の調査期間及び調査面積は以下の通りである。東原遺跡が1991年(平成3年)4月22日～同年6月26日で約9,424m²、前谷東遺跡は1991年6月17日～同年10月17日で約12,480m²、前谷西遺跡は1991年9月9日～同年10月17日で約13,108m²、東原觀音塚は1991年9月10日～同年10月17日で約50m²ある。
- 4 発掘調査は関口　潤が担当し、調査員として吉澤　悟、駒沢悦郎が当たった。
- 5 本書の編集は関口が担当し、福田礼子が補佐した。
- 6 本書の執筆は旧石器時代を窪田恵一、縄文時代を関口・福田・火葬墓・方形区画墓を吉澤、その他を関口が行った。執筆者と実測担当者、図版作成者は必ずしも一致していない。
- 7 整理分担は下記の通りである。

実測　雨宮瑞生　加藤博文　加藤慎二　窪田恵一(石器)　吉田　匠　福田　関口(縄文)　吉澤(火葬墓・方形区画墓)　小松葉子(古代以降遺構外出土遺物)　吉澤(塚)
須貝和子　浜田久美子　富田シズエ　小松崎廣子　松川さち子　川田光子　大野美津子
遠藤成江　椎名まさ子
遺構図版作成　関口　小松
遺物図版作成　雨宮　窪田(石器)　関口(縄文)　吉澤(火葬墓・方形区画墓・塚)　小松(古代以降)
写真　(現地)関口　(遺物)黒澤　関口
- 8 本調査及び報告書の作成には下記の方々よりご協力・ご助言を賜った。

田村沖宿土地区画整理組合　株川鉄商事　株清水建設　茨城県教育委員会　県南教育事務所
- 9 本調査及び報告書の作成には下記の方々よりご協力・ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

磯前類一　小川和博　瓦吹　堅　小林謙一　斎藤弘道　中山英樹　原田昌幸　福田卓志
松田光太郎　森本岩太郎
- 10 本遺跡の資料は土浦市教育委員会が保管する。
- 11 本遺跡の発掘調査報告書は全11集の予定である。各集共通の事項や、考察、科学分析は第11集の総集編に掲載予定である。

凡　　例

- 1 前谷遺跡群(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡)の遺構番号は現地調査時において各遺跡毎に付けたが、整理作業の段階で各遺跡の内容が類似するため、同遺跡群として3遺跡通し番号に振り替えた。そして各遺構番号の項目に「(旧～)」として現地調査時の遺構番号を付け加えた。この表記中の「HH」は東原遺跡、「MH」は前谷東遺跡、「MN」は前谷西遺跡を意味する。よって本書の構成も各遺跡毎に記載せず、時代別・遺構別としてある。しかし東原觀音塚については独立して取り扱った。また先の前谷遺跡群と言う名称は、本報告にあたって新たに設けたものであり、旧来から使用されている田村沖宿遺跡群の中に含まれるものである。
- 2 遺跡内の遺構の表記は次のものを用いた。

S I…堅穴住居跡 S K…土坑 S D…溝 F P…焼土遺構 C T…火葬墓 G K…近現代の遺構(芋穴等)
- 3 土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」(日本色研事業株式会社)を使用した。
- 4 各遺構の実測図は原図(20分の1)を使用し、縮尺3分の1を基本としたが、大きさによって2分の1・4分の1を用いた。
- 5 実測図中の標高はすべてm単位で示している。
- 6 実測図中の「K」は、搅乱または「芋穴」として遺構として図化しなかったものを示す。
- 7 実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また接合関係にある遺物は、各々を実線で結んだ。
- 8 実測図中の破線は推定線を示す。
- 9 実測図中におけるスクリーントーンの指示は下記の通りである。

焼土 [] 炭化物 []
- 10 遺物の縮尺は3分の1を基本としたが、物により大きさを変えた。変えたものに関してはスケールを変えてある。
- 11 遺物実測図中心線の一点鎖線は回転(復元)実測を示す。
- 12 遺物実測のスクリーントーンの指示は下記の通りである。

繊維 [] 須恵器 [] 剥れ口 [] 陶磁器の釉 []
- 13 土器観察表について、図版番号は実測図中の番号である。表中のAは口径・Bは器高・Cは底径・Dは最大径を示す。()の数字は推定値であり、〔 〕は回転復元径である。胎土中の半透明・透明の鉱物は石英、不透明・白色の鉱物を長石とした。
- 14 色調は原則として外面のみを記してある。

調査者名簿

試掘調査 石川 功 土浦市教育委員会社会教育課

中澤達也 土浦市教育委員会社会教育課

調査主任 関口 満 土浦市教育委員会社会教育課

調査員 福田礼子

小松葉子

雨宮瑞生 筑波大学大学院

吉澤 哲 筑波大学大学院

駒沢悦郎 東洋大学大学院

吉田 匠 国学院大学大学院

事務担当 秋元照子(～H5.3.31) 中村博子(H5.4.1～)

市川律子(～H3.9)

事務局 土浦市教育委員会社会教育課(H5.4.1から文化課)

発掘調査参加者

浅川和代 安達浩二 伊勢山こう 伊勢山とき 岩瀬いま 岩本よし子 大久保さだ江 大槻
陽子 大竹きみ子 大原 繁 岡村美樹 小倉はる 貝塚雪枝 加藤博司 川島敏子 川俣茂
子 倉田俊夫 郡司征子 坂本みつい 桜井久代 清水せつ子 清水たまの 鈴木きみ 鈴木
秀男 鈴木みね 土肥 末 細野重雄 野口八重子 横浜長一郎

整理作業参加者

青木光恵 阿部秀子 天谷瑛子 石浜敏子 石山春美 五十嵐耀子 遠藤成江 大坪美知子
大野美津子 川田光子 小松崎廣子 佐久間郁子 椎名まさ子 島津恵美子 須貝和子
田辺利予 富田シズエ 長嶺道子 中村節子 浜田久美子 松川さち子 村井律子

調査会組織(平成5年度まで)

会長	永山 正	土浦市文化財保護審議会長
会長	須田直之	"
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木雅博	土浦市文化財保護審議会委員
	大塚 博	"
	雨貝 宏	土浦市建築指導課長
	横田紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	"
	野口幹雄	土浦市区画整理課長
	小川和博	日本考古学研究所
監事	藤枝 正	土浦市教育委員会教育次長
	二野屏昌男	"
	鶴町喜美雄	"
	滝ヶ崎洋之	土浦市企画課長
	廣田宣治	"
幹事	田中紀夫	土浦市教育委員会社会教育課長
	福田統太	"
	竹本喜一郎	"
	宮本 昭	土浦市教育委員会文化課長
	久松一夫	土浦市教育委員会社会教育課副参事
	岩沢 茂	土浦市教育委員会社会教育課課長補佐
	加倉井藤雄	土浦市教育委員会文化課主査
	石山淳一	土浦市教育委員会社会教育課担当係長
	飯村 甚	土浦市教育委員会社会教育課主幹
	石川 功	土浦市教育委員会文化課主事
	黒澤春彦	"
	中澤達也	"
	関口 満	"
	塙谷 修	土浦市立博物館学芸員

目 次

口絵

例言

凡例

調査組織

調査会組織

目次

第1章 調査経過	1 P
第2章 調査.....	3
第1節 地区設定.....	3
第2節 基本層序.....	3
第3節 遺構調査.....	5
第3章 前谷遺跡群(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡).....	9
第1節 旧石器時代.....	9
第2節 繩文時代	17
第3節 平安時代以降	99
第4章 東原觀音塚	129
第5章 調査のまとめ	133
抄録	134

挿図目次

第1図 遺跡分布図	2 P	第10図 遺構外出土遺物(2)	15
第2図 基本層序	4	第11図 第1号住居跡	17
第3図 調査エリア図	6	第12図 第1号住居跡遺物出土状況	18
第4図 前谷遺跡群(東原遺跡・前谷東遺跡・ 前谷西遺跡)の遺構全体図	7	第13図 第1号住居跡出土遺物	19
第5図 旧石器時代調査区設定状況	10	第14図 第2号住居跡	21
第6図 旧石器時代遺物出土状況	11	第15図 第2号住居跡出土遺物	22
第7図 出土遺物	12	第16図 第3号住居跡・出土遺物	23
第8図 遺物接合図	13	第17図 第4号住居跡	24
第9図 遺構外出土遺物(1)	14	第18図 第4号住居跡出土遺物	26
		第19図 第5号住居跡	28

第20図	第5号住居跡出土遺物	29	第53図	遺物集中区出土遺物(3)	88
第21図	第6号住居跡	30	第54図	遺構外出土土器	91
第22図	第6号住居跡出土遺物	31	第55図	遺構外出土土製品	93
第23図	ピット群全体図	33	第56図	遺構外出土石器(1)	95
第24図	ピット群内遺構配置図	35	第57図	遺構外出土石器(2)	96
第25図	ピット群出土遺物	36	第58図	遺構外出土石器(3)	97
第26図	土坑(1)	38	第59図	第1号火葬墓	99
第27図	土坑(2)	40	第60図	第1号火葬墓出土遺物	100
第28図	土坑(3)	42	第61図	第2号火葬墓	101
第29図	土坑(4)	44	第62図	第2号火葬墓出土遺物	101
第30図	土坑(5)	45	第63図	第3号火葬墓	102
第31図	土坑(6)	47	第64図	第4号火葬墓	103
第32図	集石出土状況・接合図	49	第65図	第4号火葬墓出土遺物	104
第33図	焼土址	52	第66図	第1号方形区画墓	107
第34図	埋没谷土層堆積状況	54	第67図	第2号方形区画墓	109
第35図	埋没谷遺物出土状況	55	第68図	第2号方形区画墓出土遺物	110
第36図	埋没谷出土土器(1)	60	第69図	第3号方形区画墓	112
第37図	埋没谷出土土器(2)	61	第70図	平安時代以降の土坑(1)	114
第38図	埋没谷出土土器(3)	62	第71図	平安時代以降の土坑(2)	115
第39図	埋没谷出土土器(4)	63	第72図	第1号溝	118
第40図	埋没谷出土土器(5)	64	第73図	第2号溝	119
第41図	埋没谷出土土器(6)	65	第74図	第3号・第5号溝	120
第42図	埋没谷出土土器(7)	66	第75図	第3号溝出土遺物	121
第43図	埋没谷出土土器(8)	67	第76図	第4号溝	122
第44図	埋没谷出土土器(9)	68	第77図	遺構外出土遺物(1)	124
第45図	埋没谷出土土器(10)	69	第78図	遺構外出土遺物(2)	125
第46図	埋没谷出土土器(11)	70	第79図	遺構外出土遺物(3)	126
第47図	埋没谷出土土器(12)	71	第80図	遺構外出土遺物(4)	127
第48図	埋没谷出土土製品	79	第81図	東原觀音塚	130
第49図	埋没谷出土石器(1)	82	第82図	東原觀音塚出土遺物	131
第50図	埋没谷出土石器(2)	83			
第51図	遺物集中区出土遺物(1)	86			
第52図	遺物集中区出土遺物(2)	87			

写真図版

- P L 1 航空写真(1975年1月14日国土地理院撮影)
- P L 2 試掘調査状況、基本層序、旧石器時代調査区、同遺物出土状況、第1号住居跡完掘状況
- P L 3 第1号住居跡床面検出状況、同遺物出土状況、同小ビット確認状況、同小ビット土層堆積状況、第2号住居跡完掘状況
- P L 4 第2号住居跡遺物出土状況、同土層堆積状況、第4号住居跡作業状況、同遺物出土状況、同完掘状況
- P L 5 第5号住居跡完掘状況、第6号住居跡完掘状況、ビット群完掘状況、第6号土坑遺物出土状況、第13号土坑完掘状況
- P L 6 第14号土坑完掘状況、第24号土坑土層堆積状況、第34号土坑土層堆積状況、第50号土坑完掘状況、第51号土坑完掘状況、第54号土坑完掘状況、第2号焼土址遺物出土状況、第5・6号焼土址遺物出土状況
- P L 7 集石出土状況上位、同出土状況下位、埋没谷全景、同遺物出土状況、同作業状況
- P L 8 第1号火葬墓検出状況、第2号火葬墓検出状況、第4号火葬墓検出状況、第3号火葬墓完掘状況、第1号方形区画墓完掘状況
- P L 9 第2号方形区画墓完掘状況、同遺物出土状況、第3号方形区画墓完掘状況、第29号土坑完掘状況、第33号土坑完掘状況、第36号土坑完掘状況、第37号土坑完掘状況、第1号溝完掘状況
- P L 10 第3号溝完掘状況(東から)、同溝完掘状況(北から)、第4号溝完掘状況、第5号溝完掘状況
- P L 11 旧石器時代出土遺物、同遺構外出土遺物
- P L 12 旧石器時代接合資料
第1号住居跡出土遺物(1)
- P L 13 第1号住居跡出土遺物(2)
第2号住居跡出土遺物
- P L 14 第3号住居跡出土遺物
第4号住居跡出土遺物(1)
- P L 15 第4号住居跡出土遺物(2)
第5号住居跡出土遺物
- P L 16 第6号住居跡出土遺物
ビット群出土遺物(1)
- P L 17 ビット群出土遺物(2)
土坑・焼土址出土遺物(1)
- P L 18 土坑・焼土址出土遺物(2)
埋没谷出土土器(1)
- P L 19 埋没谷出土土器(2)
埋没谷出土土器(3)
- P L 20 埋没谷出土土器(4)
埋没谷出土土器(5)
- P L 21 埋没谷出土土器(6)
埋没谷出土土器(7)
- P L 22 埋没谷出土土器(8)
埋没谷出土土器(9)

- P L23 埋没谷出土土器(10)
埋没谷出土土器(11)
- P L24 埋没谷出土土器(12)
埋没谷出土土器(13)
- P L25 埋没谷出土土器(14)
埋没谷出土土器(15)
- P L26 埋没谷出土土器(16)
埋没谷出土土器(17)
- P L27 埋没谷出土土器(18)
埋没谷出土土製品(1)
- P L28 埋没谷出土土製品(2)
埋没谷出土石器(1)
- P L29 埋没谷出土石器(2)
埋没谷等出土石製品
- P L30 板状土偶(表)、同(裏)、同胸部接写
- P L31 第1号火葬墓出土遺物、第2号火葬
墓出土遺物、第4号火葬墓出土遺物
(1)、同出土遺物(2)、第2号方形
区画墓出土遺物
- P L32 第3号溝出土遺物、遺構外出土遺物
- P L33 東原觀音塚全景、同調査状況
- P L34 塚上にあった石造仏・板碑(神國寺
境内)、同出土遺物

第1章 調査経過

- 1989年3月 (平成元年) 試掘調査を行う。トレンチは周知の遺跡部分に5本、これ以外の未周知部分に3本設定した。未周知部分からは遺構などは確認されなかった。
- 1990年10月 (平成2)11月 前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）の表土排除を行う。前谷東遺跡内に敷設される仮設道路部分の調査を本調査に先立って実施する。旧石器時代の遺物・遺構が確認される。常総粘土層までの基本層序を確認。
- 1991年4月22日 (平成3) 前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）の本調査を開始する。東原遺跡エリアから遺構確認を行う。縄文時代の堅穴住居跡や土坑、そして古代の火葬墓などが確認された。
- 4月26日 前谷西遺跡エリアにて板状土偶採集される。
- 5月10日 東原遺跡エリアの遺構精査開始。
- 5月26日 東原觀音塚の調査に先立ち、供養を行う。塚に安置されていた石造仏・板碑は、田村町の神国寺境内に移設した。
- 6月17日 前谷東遺跡エリアの調査開始。仮設道路の西側から遺構確認を始める。縄文時代の遺物を包含する埋没谷が確認され多量の土器が出土。火葬墓も確認される。
- 6月26日 東原遺跡エリア調査終了。テントを移動する。
- 7月4日 前谷東遺跡エリアの火葬墓の調査開始。
- 8月19日 前谷東遺跡エリアの仮設道路東側遺構確認開始。溝から陶磁器類が出土。
- 9月9日 前谷西遺跡エリア遺構確認開始。
東原觀音塚の調査を実施する。
- 10月1日 大雨が降り事務所周辺が浸水する。
- 10月14日 縄文時代中期の堅穴住居跡の中に水が溜る。
- 10月16日 前谷遺跡群のエリア全体図測量。
- 10月17日 前谷東遺跡エリア及び前谷西遺跡エリア調査終了。
テント・器材を撤収し、次の調査地である八幡脇遺跡に移動する。



第1図 遺跡分布図

(国土地理院発行 1/50,000 に加筆)

第2章 調査

第1節 地区設定(第4図)

発掘調査を開始するにあたり、日本平面直角座標を用い、調査地区を設定した。調査区の名称はアルファベットと算用数字を用い、4m毎に西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…とし、「3 A-30区」のように呼称した。「3 I-30区」は日本平面直角座標第IV座標系、X=9500,00、Y=38,300m相当である。

今回の前谷遺跡群としたエリア内には東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡が含まれている。現地調査時には、上記3遺跡のエリア区分を行った上で調査を実施した。それぞれの遺跡の区分は(第4図参照) 東原遺跡は30ラインの南、2Eラインの西のエリアである。前谷東遺跡は一部30ラインの南、2Eラインの東のエリアである。前谷西遺跡は2遺跡の残りのエリアである。

本報告にあたっては、各遺跡内容が共通した要素を持つことなどから、独立した遺跡として扱うことと避け、上記3遺跡を前谷遺跡群としてまとめた報告内容になっている。東原觀音塚については、独立して扱った。

第2節 基本層序(第2図 PL2)

基本層序は、本調査に先立ち行われた前谷東遺跡エリア内仮設道路部分のものである。2m×2mのトレンチを設定して常緑粘土層まで掘り下げたものである。近接して旧石器時代のブロックが確認された地点がある。同時代の遺物は第1層中から出土している。トレンチの深さは約2mで、土層は9層に分層された。

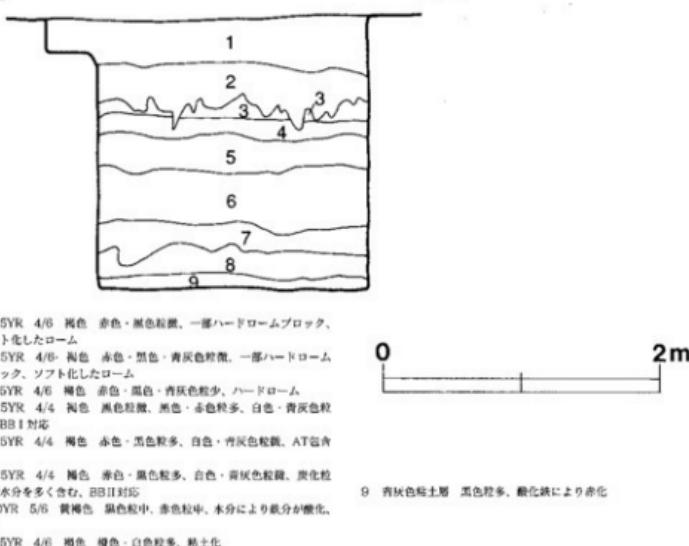
第1層は7.5YR4/6褐色のソフトロームである。微量の赤・黒色粒を含み、部分的にハードロームブロックが含まれる。しまりなし。

第2層も7.5YR4/6褐色のソフトロームである。ほぼ第1層同様の土層であるが、青灰色粒が含まれ、全体的に黄味が強い。最下層はクラック状を呈する。第1層よりもしまりあり。

第3層は7.5YR4/6褐色のハードロームである。1~2mm大の赤・黒・青灰色粒を含み、上層のものより明瞭に含まれる。色調は上層よりも黄味が強い。

第4層は7.5YR4/4褐色のハードロームである。黒色帶に相当するものと考えられる。3mm大の黒色粒を含み、極小赤・黒粒を多量に含む。白・青灰色粒も含まれる。非常にしまりあり。

第5層は7.5YR4/4褐色のハードロームである。極小赤・黒色粒を多量に含み、微量白・青灰色粒も含む。透明な火山ガラスを含む。同火山ガラスは姶良丹沢火山灰に相当するものと考えら



第2図 基本層序

れ、太陽の光にかざすとキラキラ光る。第4層よりやや明るい。

第6層は7.5YR4/4褐色のハードロームである。極小赤・黒色粒を多量に含み、微量白・青灰色粒も含む。炭化物粒子が含まれる。第5層より暗い色調。武藏野台地における第2黒色帯に相当するものと考えられる。

第7層は10YR5/6褐色のハードロームである。全体に砂質感があり、色調は明るくなる。鉄分の酸化状況が窺われる。3mm大の黒色粒が目立って含まれる。粘性あり。

第8層は7.5YR4/6褐色の粘土化した土層である。橙・白色粒子が多く含まれる。

第9層は青灰色を呈する粘土層である。鉄分の酸化状況が窺われる。黒色粒が多く含まれる。常総粘土層に相当するものと考えられる。

以上が遺跡内の台地上における基本層序である。文章中で赤・黒色粒などとしたものは火山噴出起源のスコリアやバミスに相当するものと考えられる。また本遺跡内では浅い谷部分の調査も行っている。同所の土層については埋没谷の項目を参照されたい。

第3節 遺構調査

1. 試掘調査(第3図 PL2)

平成元年3月に重機による試掘調査を実施した。トレーナーは幅1mで周知の遺跡部分に5本設定し、周知の遺跡外に3本設定した。トレーナーはソフトローム上面まで掘り下げ、遺構の確認を行った。試掘調査の結果、周知の遺跡外の部分からは遺構が確認されず、本調査の対象から除外した。遺構の確認面の深さは、地表面から約30cmであった。

2. 表土除去

表土排除は重機により行った。これは試掘調査時の状況から勘案し、重機による表土排除を行っても地下の遺構・遺物を痛めることはない判断したからである。

3. 遺構確認

旧石器時代の調査は、遺構確認時に同時代の遺物が確認された場所を中心に、適宜トレーナーを設定してローム層を精査した。多くの場合は、基本層序第1・2層のソフトロームを掘り下げ遺物の確認に努めた。

縄文時代の堅穴住居跡の調査は、土層観察用ベルトを十字に設定して床面を検出する方法を原則とした。縄文時代以降の土坑については主軸方向に分割し調査を行った。埋没谷は横断面図と縦断面図を作成する上で一部深掘りを行った。

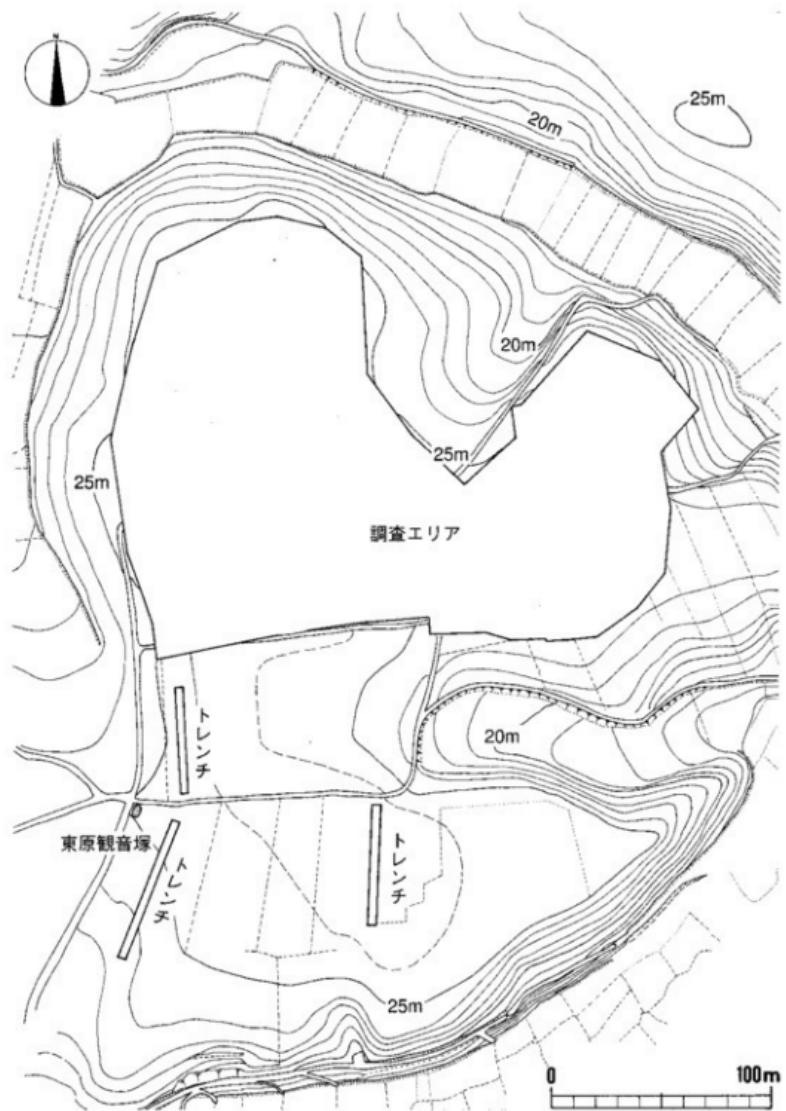
古代の火葬墓の調査にあたっては墓壙の断ち割りを行って土層を観察し、出土した炭化物は後の科学分析のため取り上げた。取り上げた骨蔵器の中で遺存状況の良いものは、骨蔵器内の火葬骨の状況も観察した。

遺構の検出作業にあたっては、覆土の変化や遺物に注意して掘り進めた。検出された遺物は微小なものや中近世以降のもの以外、出土した位置を記録し取り上げた。土層観察は、色調・含有物の種類と量・しまり・粘性等を観察した。土層観察用のベルトを除去した後、写真・図面等の記録を行って終了した。

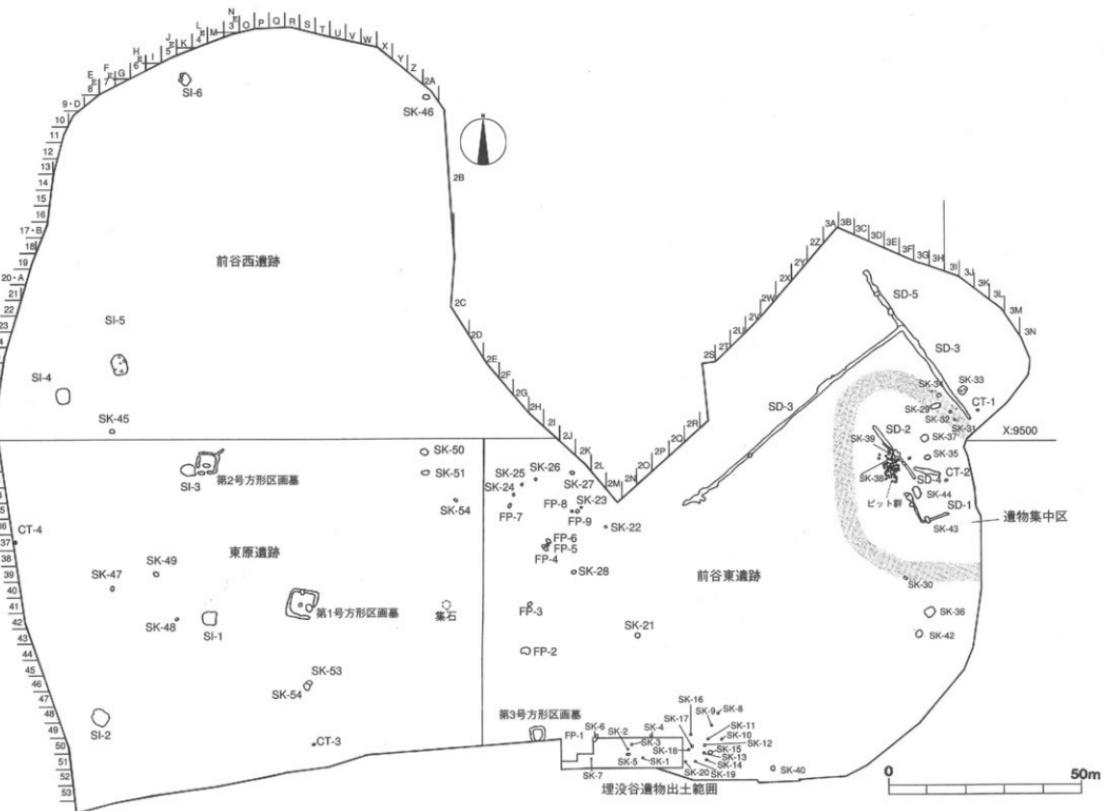
なお調査した遺構の中には、帰属年代が近現代に位置付けられる「芋穴」も多数確認された。これらについては現地調査で、できるだけ覆土中に含まれる遺物を採集した。これらの遺構のほとんどは報告の対象から除外した。

遺構平面図は水糸を1m毎に張って測量した。現地調査写真はローリングタワーや脚立の上から35mmのレンズで撮影し、フィルムは35mmモノクロ・リバーサルを使用した。

東原觀音塚については、初めにコンタ図作成を行った。その後塚上の石造仏や板碑を移設し、1/4分割して土層などを観察した。記録の仕方は上記と同様である。



第3図 調査エリア図



第4図 前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）の遺構全体図

第3章 前谷遺跡群(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡)

前谷遺跡群は、東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡の3遺跡からなり、これら3遺跡は同一台地上に所在する。3遺跡からは、同様な時代の遺構・遺物が確認された。

遺跡群内からは旧石器時代・撫文時代・平安時代・近世以降の遺構・遺物が確認された。旧石器時代ではブロック1ヶ所が確認された。撫文時代では竪穴住居跡が6軒と土坑・焼土址・集石やピット群、そして埋没谷から多数の土器が出土した。平安時代には同台地が墓域として利用され、火葬墓や方形区画墓などが確認された。近世以降は溝や土坑が確認された。

第1節 旧石器時代

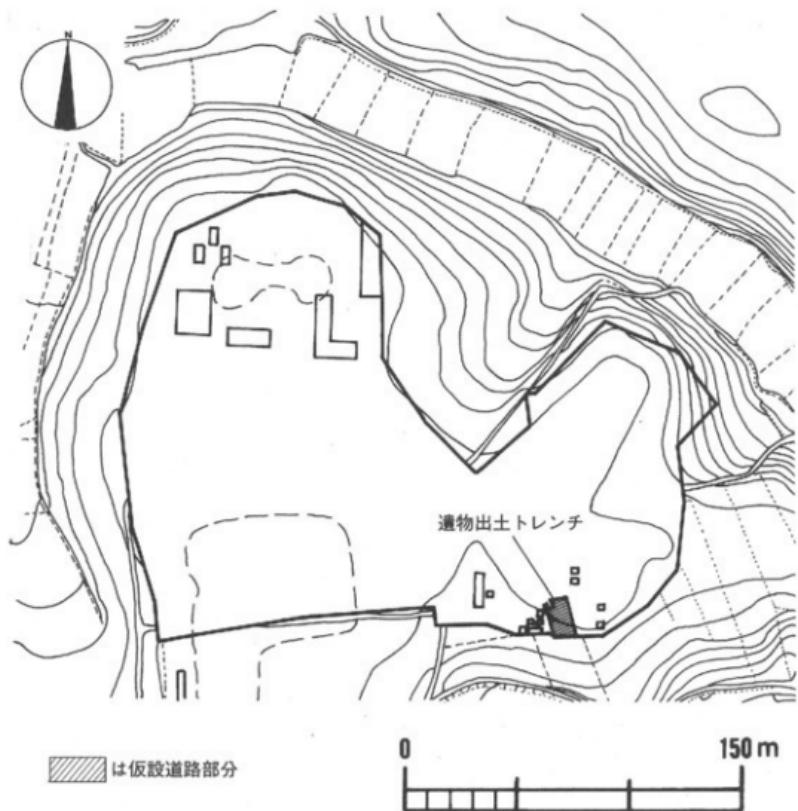
1. 調査の概要(第5図)

本遺跡群では、試掘調査時に旧石器時代の遺物が出土している。この他、前谷東遺跡エリアの本調査に先立ち行われた仮設道路部の調査によって、2W-49区を中心に旧石器時代の文化層が確認された。同所は南側が谷に面しており、緩やかに傾斜している。この文化層は、基本層序第1層のソフトロームから該当時期の遺物が出土し、遺構を形成していることを確認するに至った。また同遺跡エリア内において、埋没谷覆土の第7層(ローム層の崩落土)から、若干の安山岩製の剥片が二次堆積の状態で出土した。この状況から埋没谷の北側などの台地上にもトレンチを設定して調査を行ったが、旧石器時代の遺物は確認されなかった。

前谷西遺跡エリア内でも表土排除後に黒曜石製の尖頭器が採集されたため、本調査時にトレンチを設定して調査を行った。しかし旧石器時代の遺物は皆無であった。

2. 検出した遺構(第6図 PL2)

検出した遺構はブロック1ヶ所である。東西に延びる谷津の北側台地の緩い傾斜地で、標高は25m付近に位置する。この場所は仮設道路設置部分にある。構成遺物は母岩資料チャート1の剥片5点、石核1点からなる小規模なものである。この資料のうち剥片1点を除き接合資料(A・B)であることを確認した。この接合資料については次項にて述べる。



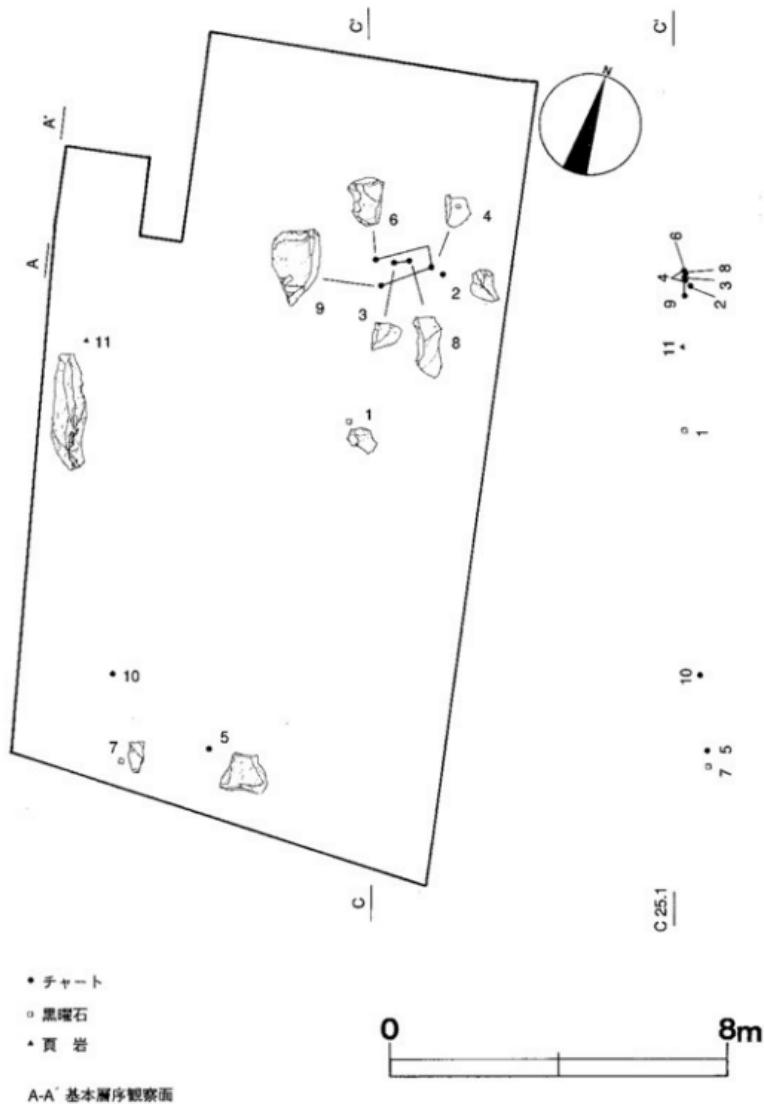
第5図 旧石器時代調査区設定状況

3. 接合資料(第8図A・B PL12)

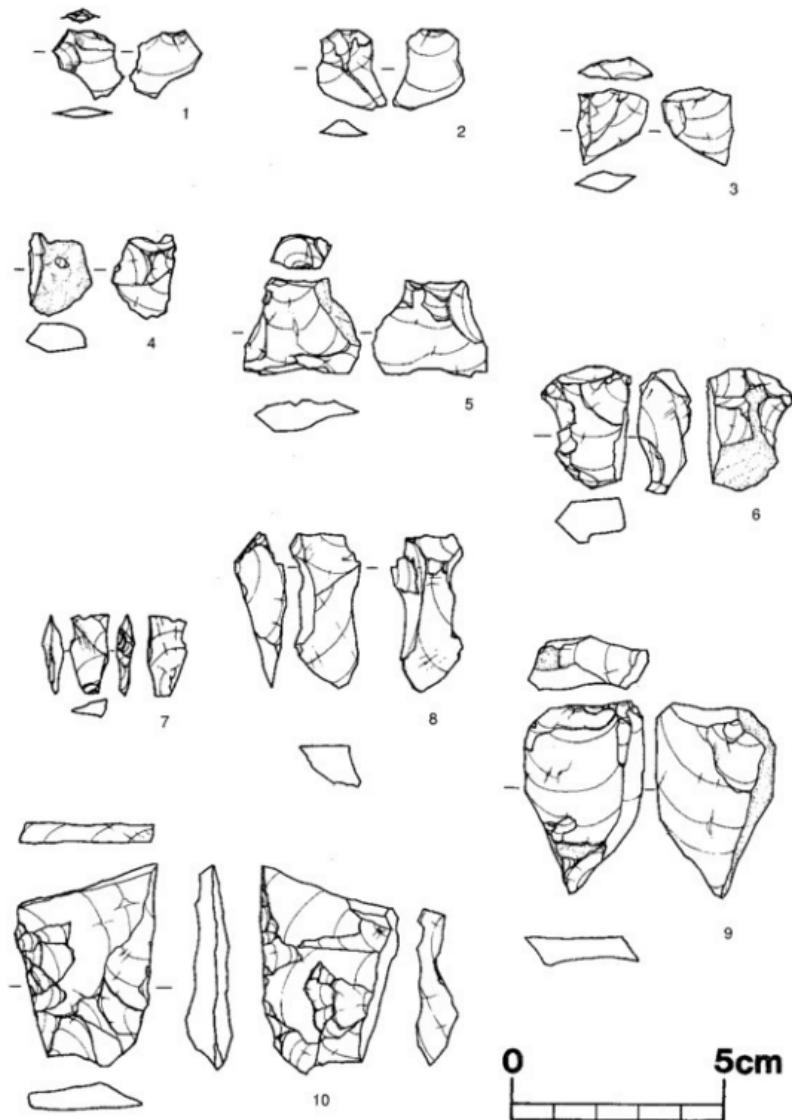
基本層序第1層より出土した石器のうち、母岩資料チャート1に分類した個体別資料中から、接合資料A・Bの二組を確認した。以下剥離工程について述べてみたい。

チャート1は青灰色で節理面の発達がほとんどなく、均質で良好な石材である。

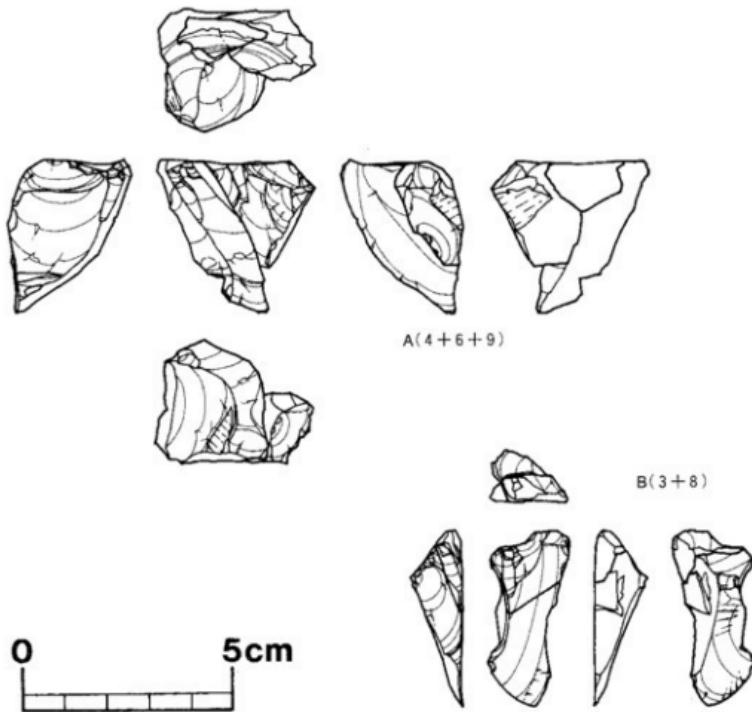
接合資料Aは、剥片2点、石核1点からなる。剥離工程は、旧剥離作業面を打面とし90度の打面転移を繰り返しながら縦長剥片を剥離している。打面調整は行わずに、打点位置は直線的に後退している。剥離角は122度～125度の範囲で推移している。パルプは作業面長の1/2を占めるほ



第6図 旧石器時代遺物出土状況



第7図 出土遺物



第8図 遺物接合図

どに達していて、剥離長最終段階では末端形状がヒンジフラクチャーを起こしている。

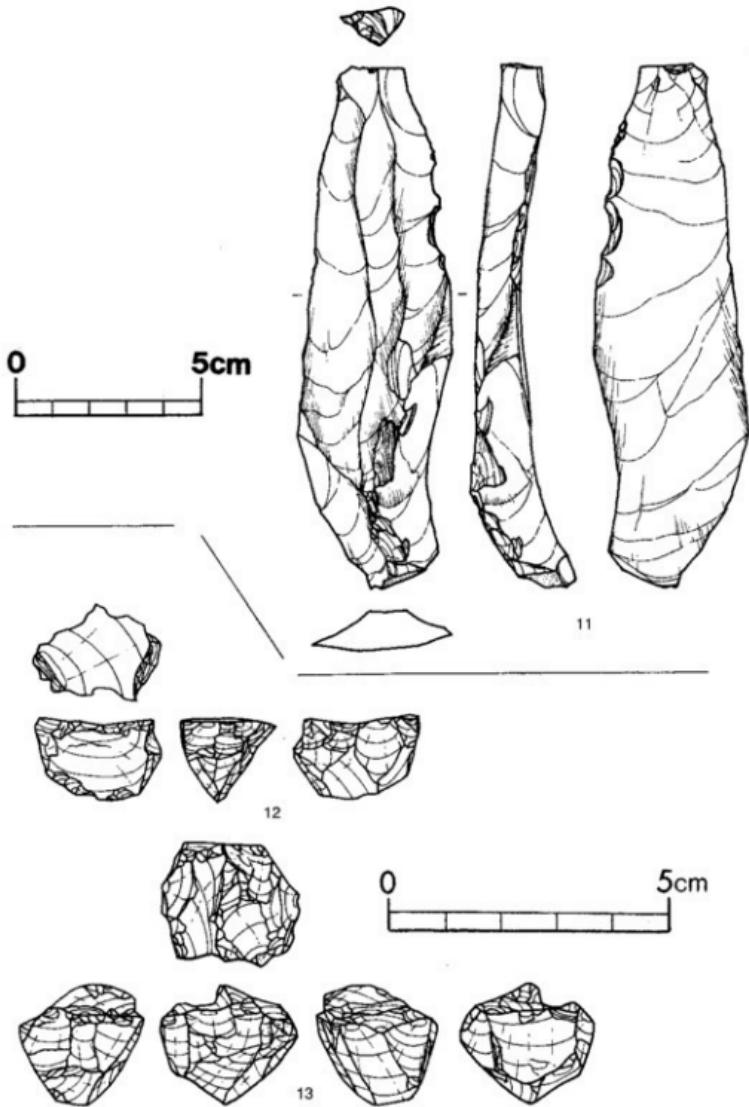
接合資料Bは、剥片2点からなる。平坦打面を使用して90度の打面転移を繰り返しながらの剥離であったことを示す。剥離角は、125度～130度を測る。末端形状はフェザーエッジである。

4. 遺物(第7・9・10図 PL11)

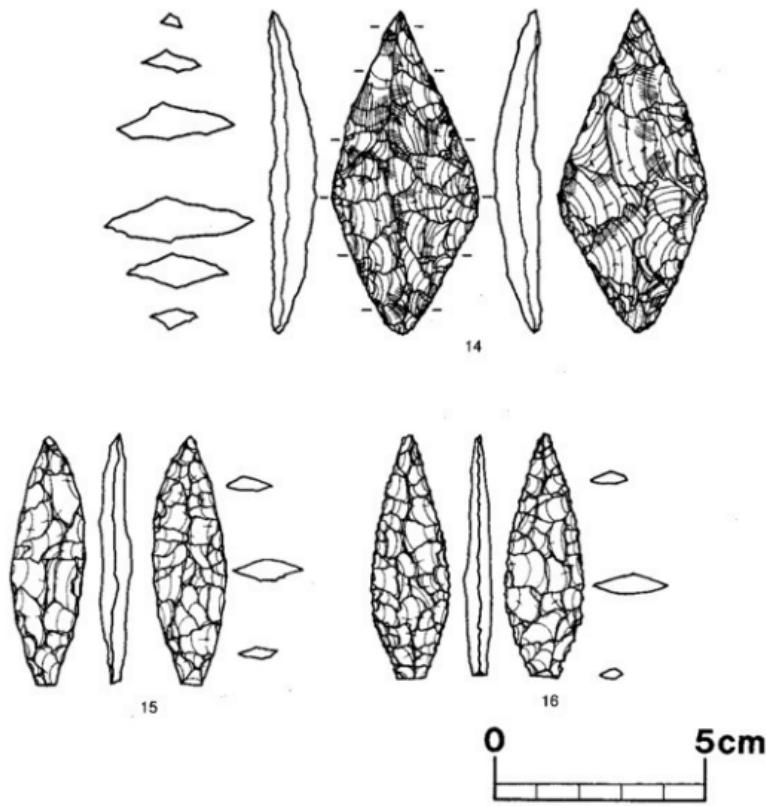
基本層序第1層からは、スクレイパー類1点(No.10)、剥片8点(No.1～5・7～9)、石核1点(No.6)の合計10点の石器が出土した。

スクレイパー類は、ブロックより南側に離れた場所からの単独出土資料である。

剥片は、小型かつ打面調整の行われないものが大半であり、打面に対して剥離軸が傾斜する傾



第9図 遺構外出土遺物(1)



第10図 遺構外出土遺物(2)

長指向がうかがわれる。

石核は、生産した剥片と同程度の厚みになるまで石材消費が進んでいる。

縄文時代以降の遺構確認面にて、稜付石刃1点(No.11)、槍先形尖頭器3点(No.14~16)、石核2点(No.12・13)の6点が出土した。槍先形尖頭器の内1点は男女倉型尖頭器(No.14)で、先

端左側縁に楕状剥離面が残り、左右対称形に仕上げている。石材には信州系黒曜石を使用している。また埋没谷覆土第7層からは安山岩製の剥片8点が出土している。

稜付石刀は調整打面を持ち、背面下部に稜形成の調整を施している。サイズから見るとA.T降灰期・武藏野編年^{IC}期の可能性がある。

石核No.12・13はいずれも黒曜石製で後世の土坑や埋没谷から出土した。

※赤沢誠・小田静夫・山中一郎「日本の旧石器」立風書房1980における武藏野台地編年による。

旧石器時代遺物表

単位(cm·g)

圆版No.	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
1	剥片	MH仮設道路標No. 2	0.9	0.8	0.15	0.54	黒曜石
2	剥片	MH仮設道路標No. 7	1.0	0.8	0.2	1.06	チャートI
3	剥片	MH仮設道路標No. 9	0.9	0.5	0.75	1.44	チャートI
4	剥片	MH仮設道路標No. 11	0.7	0.5	0.4	1.96	チャートI
5	剥片	MH仮設道路標No. 6	1.3	1.5	0.4	4.24	チャート
6	石核	MH仮設道路標No. 8	1.65	1.1	0.7	7.26	チャートI
7	調整剥片	MH仮設道路標No. 3	1.05	0.5	0.2	0.52	黒曜石
8	剥片	MH仮設道路標No. 10	2.0	0.75	0.7	4.65	チャートI
9	剥片	MH仮設道路標No. 4	2.5	1.6	0.6	15.71	チャートI
10	スクレイバー類	MH仮設道路標No. 6	2.5	1.8	0.6	15.24	チャート
11	石刀	MH仮設道路	14.0	3.8	1.9	73.95	頁岩
12	石核	MNHSK-50新SK-37	2.1	3.2	2.5	10.68	黒曜石
13	石核	MH2N-51区 No.258	3.3	3.2	3.6	4.42	黒曜石
14	尖頭器	MN・若	7.1	3.4	1.1	17.80	黒曜石
15	尖頭器	HHK-45区	5.9	1.6	0.6	7.01	安山岩
16	尖頭器	テストピット	5.7	1.8	0.65	6.26	安山岩

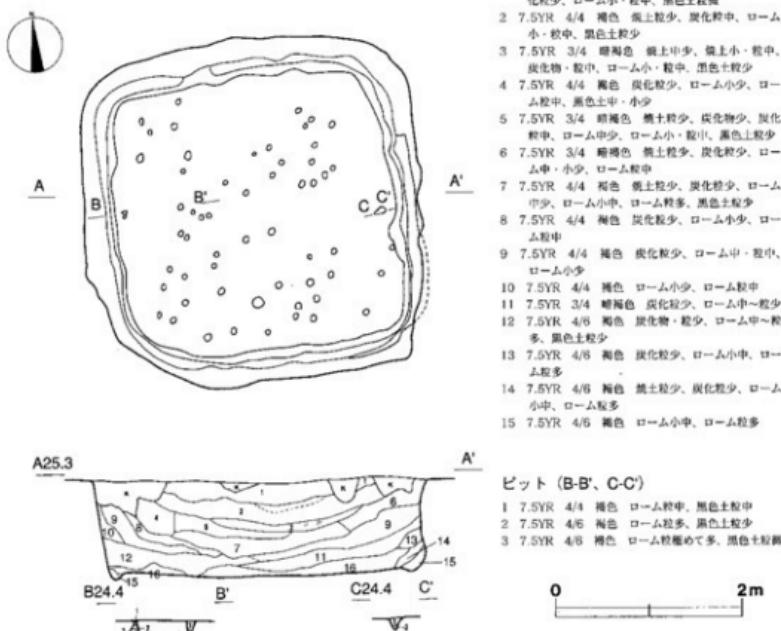
第2節 繩文時代

1. 壺穴住居跡(S I)

壺穴住居跡は縄文時代のもののみが確認された。縄文時代の中でも前期のものが3軒と、中期のものが3軒で、合計6軒確認された。第1号住居跡から第3号住居跡は東原遺跡エリアで確認され、第4号住居跡から第6号住居跡は前谷西遺跡エリアで確認された。いずれの壺穴住居跡も平坦な台地上に占地している。縄文時代前期の壺穴住居跡と中期の壺穴住居跡は、それぞれ形態的特徴が異なり、明確に区別が可能であった。

第1号住居跡(旧H S I - 1) (第11~13図 P L 2 · 3 · 12 · 13)

(位置) 東原遺跡エリアのL・M-42区に確認された。周囲には第48号土坑が存在する。第2号住居跡から約40m離れ、第4号住居跡から約70m離れている。



第11図 第1号住居跡



第12図 第1号住居跡遺物出土状況

(形状) 平面形が方形を呈する。規模は $3.5 \times 3.5\text{m}$ で、深さが約1mを測る。壁は四辺ともほぼ急激に立ち上がり、南東壁は部分的に抉れている。主軸は南北方向にある。

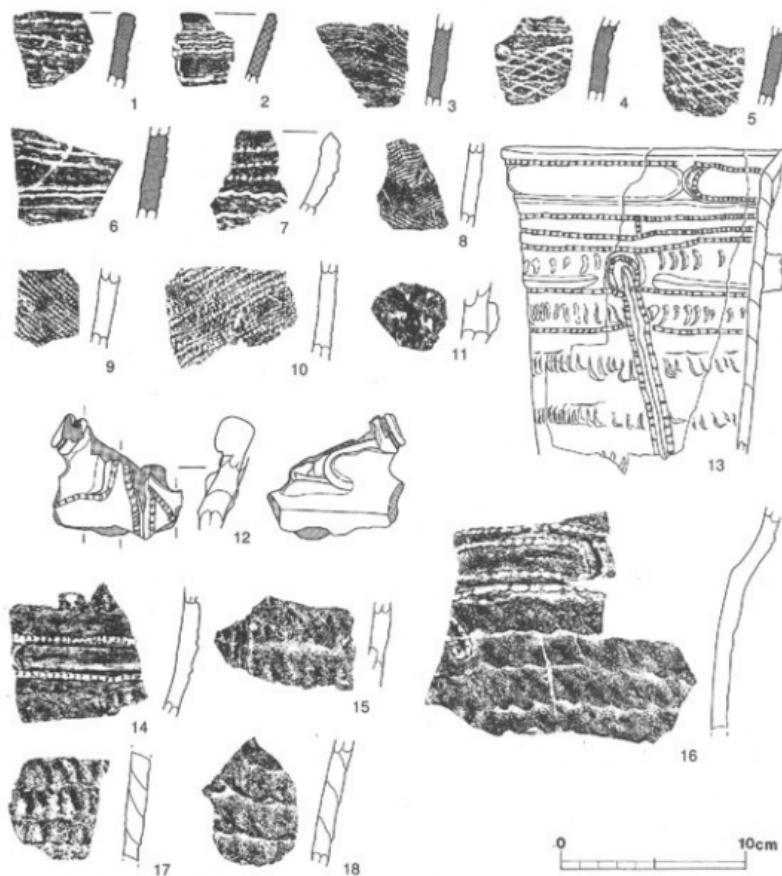
(床) 平面形と同様な形状を見せ、平坦で非常に固く踏み固められている。周囲には壁溝が全周する。壁溝の深さは深いところで8cmを測る。また床面全体には、径10~20cmの小ピットが約50ヶ所検出された。これらの一部を断ち割ったところ(第11図B-B', C-C')が得られた。これら的小ピットは深さ10cm位のもので、覆土は褐色土でありローム粒子が多く含まれる。

床面の中央東側には焼土粒・炭化物粒がまとまって面的に確認されたが、一般的な炉のようにこの場で火が燃やされ、底面が赤化している様子はない。

(柱穴) 柱穴と考えられるものは確認されず、柱を据えた跡も見られない。

(炉) 炉と認定できるものは確認されていない。

(覆土) 全体的には中央部分が凹んだレンズ状を呈して、土層が堆積している。特徴的な土層として、第2層の上部に非常に締まった部分(第11図中の破線部分)が見られた。覆土の中で焼土粒や炭化物粒が目立ったのは第3層で、径3~4cm大の赤褐色のブロック状の焼土が含まれていた。北壁側には第12層と同様な土層が多量に堆積していた。



第13図 第1号住居跡出土遺物

(遺物出土状況) 出土した遺物は土器のみで、縄文時代前期のものから中期のものが混在して出土している。中期阿玉台式期のもの以外は小破片で接合関係も見られない。

(出土遺物) 遺物の出土量は少ない。No. 1～6は前期黒浜式のもので、半截竹管状工具による平行沈線や網目状撚糸文が施文されている。No. 8～10は前期末葉から中期初頭の土器である。No. 7・11～18は阿玉台式期のもので、I a 式から I b 式期のものである。

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	口唇上平坦面。一部区切りをもつ波状沈線文。	橙	纖維	黒浜	
2	深鉢	口縁	口縁下半段竹管状工具による波状沈線文。下方腹壁起文上下に有筋沈線文。	橙	纖維	黒浜	
3	深鉢	肩	單輪鉗条体1a類。rが2本。	橙	纖維	黒浜	
4	深鉢	肩	上方外反。半段竹管状工具による波状沈線文。半輪鉗条体5類。	橙	纖維	黒浜	
5	深鉢	肩	單輪鉗条体5類。	に赤い赤褐	纖維	黒浜	外面炭化物
6	深鉢	肩	半段竹管状工具による波状・平行沈線文。	橙	纖維	黒浜	内面炭化物
7	深鉢	口縁	内湾。断面三角形籠帶文の上下に連続刻尖。波状沈線文。	に赤い褐	雲母・石英	阿玉台I b	
8	深鉢	肩	無筋R L・L r。一部単筋R L。	に赤い黄褐		前期I~中期II	
9	深鉢	肩	単筋L R。	に赤い黄褐	石英・長石	前中期~中期II	
10	深鉢	肩	単筋L R上に一部単筋R Lを回転方向を変えて施文。	褐色		前中期~中期II	
11	深鉢	肩	Y字状垂下隆突文。	赤灰	石英	阿玉台I a~I b	
12	深鉢	把手	有筋沈線が張る起突。断面三角形の捲葉文に沿って有筋沈線文。	黒褐	石英・長石	阿玉台I a	
13	深鉢	口縁	側面起文。有筋沈線による窓状区画文。輪縁上ヒダ状隆起。A15.4 B(17.6)	明赤褐	雲母・石英	阿玉台I a~I b	
14	深鉢	肩	内湾。断面の有筋沈線文がなでられ一部隆起。輪縁上ヒダ状隆起。	に赤い褐	雲母・石英	阿玉台I b	
15	深鉢	肩	断面三角形の窓状区画文。輪縁上ヒダ状隆起。	に赤い褐	石英・長石	阿玉台I a~I b	
16	深鉢	肩	腹部凸出。側面起文による窓状区画文。区画に赤い布形沈線。ヒダ状隆起。	に赤い黄褐	砂粒	阿玉台I a~I b	
17	深鉢	肩	輪縁上ヒダ状隆起。	に赤い褐	雲母・石英	阿玉台	
18	深鉢	肩	輪縁上ヒダ状隆起。	に赤い黄褐	石英	阿玉台	

(所見) 本堅穴住居跡は、炉や柱穴が無く壁高が高い特徴を持つ。また出土遺物から縄文時代中期阿玉台 I a 式から I b 式期のものと考えられる。

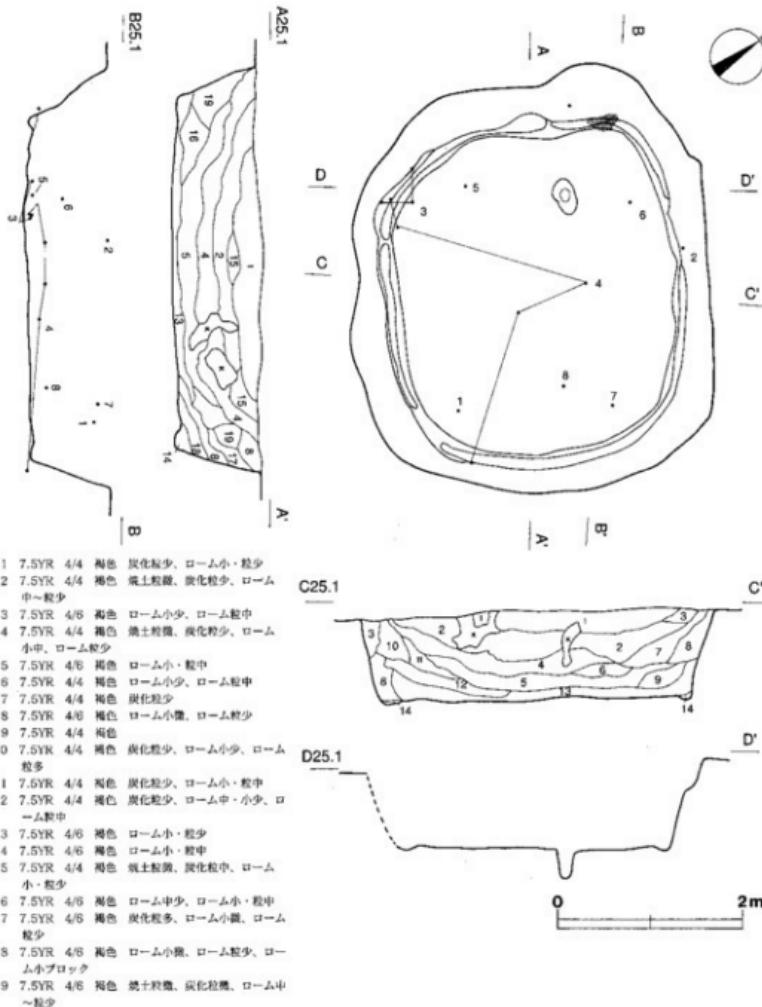
第2号住居跡(旧HHS I - 2)(第14・15図 PL 3・4・13)

(位置) 東原遺跡エリア南西部隅、E・F-48・49区に位置する。第1号住居跡から約40m離れ、第4号住居跡から約70m離れている。

(形状) 平面形は隅丸の方形を呈し、一部北西壁が外側に広がる。本来は底面同様の形態を持つものと思われる。規模は長軸4.3×短軸3.7mである。深さは0.95mである。壁は底面から外傾しつつ急激に立ち上がる。主軸はN-62°-Wである。

(床) 平面形と同様な形状を見せ、平坦であるが、踏み固められた痕跡は見られなかった。床面の周囲には壁溝が巡り、幅12cm、深さ5cmのものである。

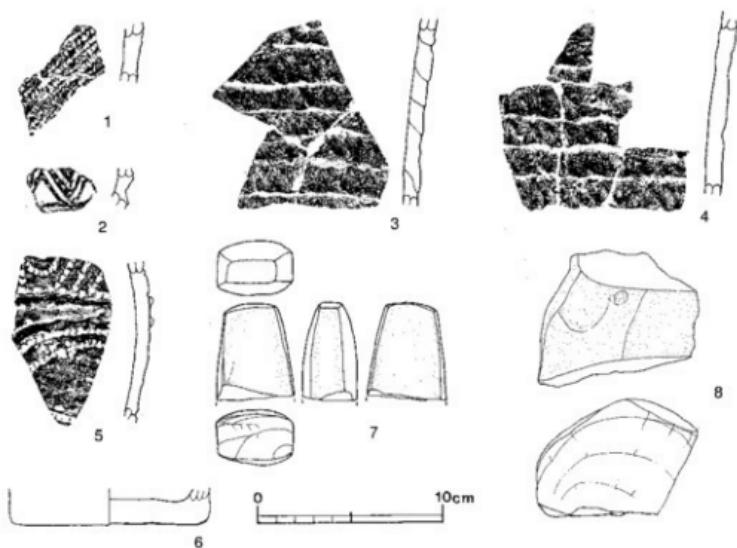
(柱穴) 住居内の床面北側に1ヶ所のみ確認され、深さは31cmを測る。積極的に柱穴といえる



第14図 第2号住居跡

かは、疑問が残る。

(炉)床面に炉は存在しない。



第15図 第2号住居跡出土遺物

(覆土) 全体的に中央部分が凹む、レンズ状の堆積が見られた。第1・2・4・5層と他の土層は明瞭に区分される。北側の壁溝上に、 $0.35 \times 0.15\text{m}$ の焼土の堆積が見られ、壁溝が埋まつた後に焼土が堆積したようである。覆土中には部分的に攪乱が見られ、西壁隅には壁より内側に入り込む攪乱が見られた(第14図D-D')。攪乱部分には桑の根などが混入していた。

(遺物出土状況) 遺物は土器と石器が出土している。上層から出土するものは少なく全体的に下層から出土している。土器は縄文時代前期から中期のものが出土している。

No.	器種	部位	形態・文様の特徴・法基(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	腹	単節LRSS字状結節文。	赤灰		中期初頭	
2	深鉢	腹	平行沈線による崩落状文。三角形刻文。	にぶい褐色	石英	五箇台Ⅱ?	
3	深鉢	腹	輪線上にヒダ状隆起。3と同一。	黒褐	石英	阿玉台	外面炭化物
4	深鉢	腹	輪線上にヒダ状隆起。3と同一。	褐色	石英	阿玉台	外面炭化物
5	深鉢	腹	隆起文に沿って有節沈線文。	にぶい褐色	雲母	阿玉台Ⅱ	
6	深鉢	底	無文。 B(2.0)C10.5	橙	石英・長石	阿玉台	
No.	器種	出土地点	特徴	長さ	幅	厚さ	重さ(g)
7	磨製石斧	SI-2 No.3	刃部側折損。	5.2	4.1	2.95	100.97
8	石皿	SI-2 No.20	折損。一部凹みあり。	8.4	6.9	6.2	434.0

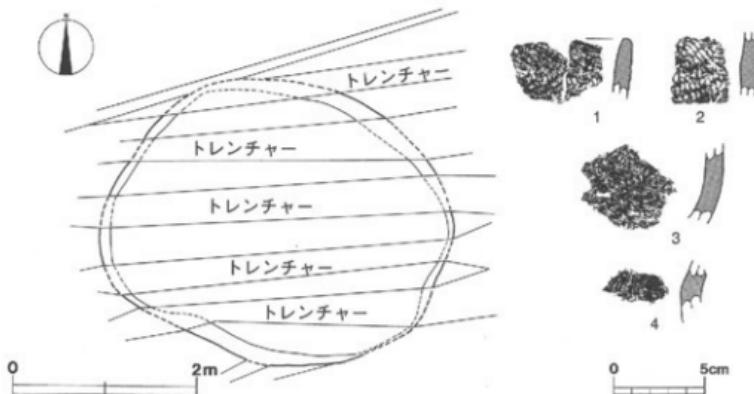
(出土遺物) 遺物出土量は少ない。No.1・2は中期初頭のものであり、No.3・4は阿玉台Ⅰa～Ⅰb式の土器と考えられる。No.3は3片の破片が接合したものである。No.4は5点の破片が接合したものである。No.5は阿玉台Ⅱ式の特徴を有する土器である。No.7は磨製石斧、No.8は石皿の破片か。この他に縄文時代前期黒浜式の土器が出土している。

(所見) 本堅穴住居跡は、炉が無く壁高が深い特徴を持ち、住居跡の形態や出土遺物から縄文時代中期阿玉台Ⅰa～Ⅱ式期のものと考えられる。

第3号住居跡(旧HHS I-3)(第16図 PL14)

(位置) 東原遺跡エリア内のK・L-32・33区内で確認された。近接して第2号方形区画墓が所在する。第5号住居跡から約30m離れ、第6号住居跡から約100m離れている。

(形状) 平面形は、不整方形を呈し、およそ長径3.5×短径3mである。現状は耕作用トレンチャ一が一定間隔で見られ、遺存状況は良くない。床までの深さは8cm位であった。主軸はおよそ、北西～南東方向にあるものと考えられる。



第16図 第3号住居跡・出土遺物

No.	面種	部位	图形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	波状口縁を呈するようである。R&Sとしの熱束による羽状模文。	褐	繊維	黒浜	
2	深鉢	胴	L.R幾文が施文される。胴体の長さは短かい。胴中央は黒褐色。	棕	繊維	黒浜	
3	深鉢	胴	胴部がやや湾曲するようである。L.R幾文施文。	にぶい棕	繊維	黒浜	
4	深鉢	頭	緩く屈曲する頭付近の破片。単純籠目文による木目状模文が施文。	にぶい赤褐	繊維	黒浜	

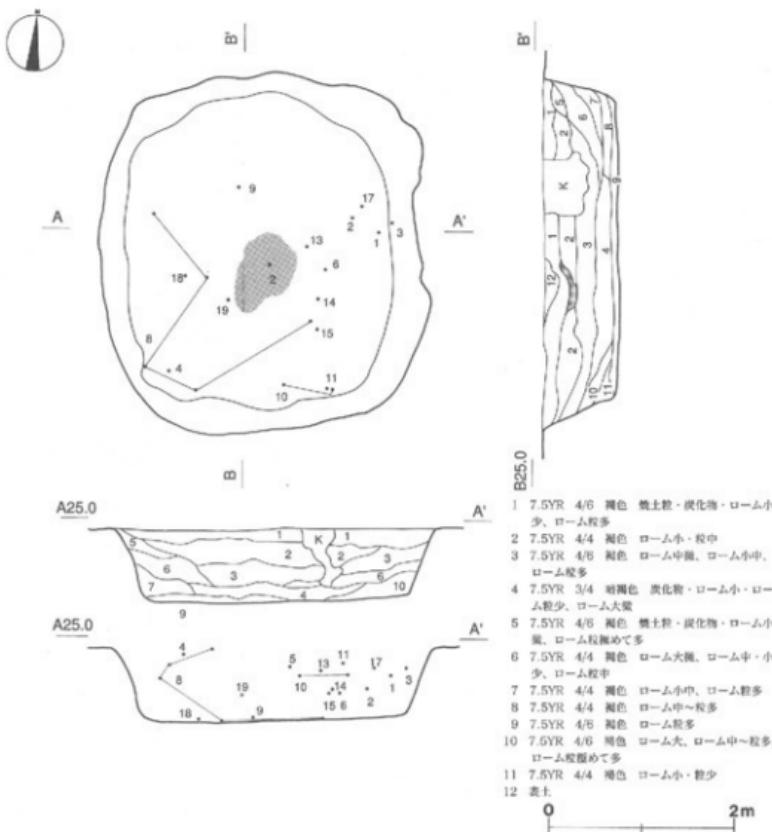
(床) ほぼ平坦である。

(柱穴) 確認されていない。

(炉) 確認されていない。

(覆土) 覆土中に、焼土粒や炭化物粒の混入が見られた。

(出土遺物) No. 1 ~ 4 はいずれも前期黒浜式の土器片で、No. 1 は口縁部で他は胴部破片である。それぞれ器面に縄文のみが施されている。竪穴住居跡外の近接したトレンチャー内からも同時期の遺物が若干出土している。



第17図 第4号住居跡

(所見) 本遺構は竪穴住居跡とするには疑問視する見方もあるが、耕作用トレンチャーによる影響などをかんがみ、出土遺物から縄文時代前期黒浜式期の竪穴住居跡と考えた。

第4号住居跡（旧MNS I-1）(第17・18図 P L 4・14・15)

(位置) 前谷西遺跡エリアの北側で、C・D-27・28区に確認された。第1号住居跡から約70m離れ、第2号住居跡から約85m離れている。

(形状) 平面形は3.7×3.2mの隅丸の方形を呈する。深さは0.75mを測る。壁は急激に外傾して立ち上がる。主軸はN-9°-Wである。

(床) 床面は平坦で、踏み固められた様子は見られない。壁溝も見られない。

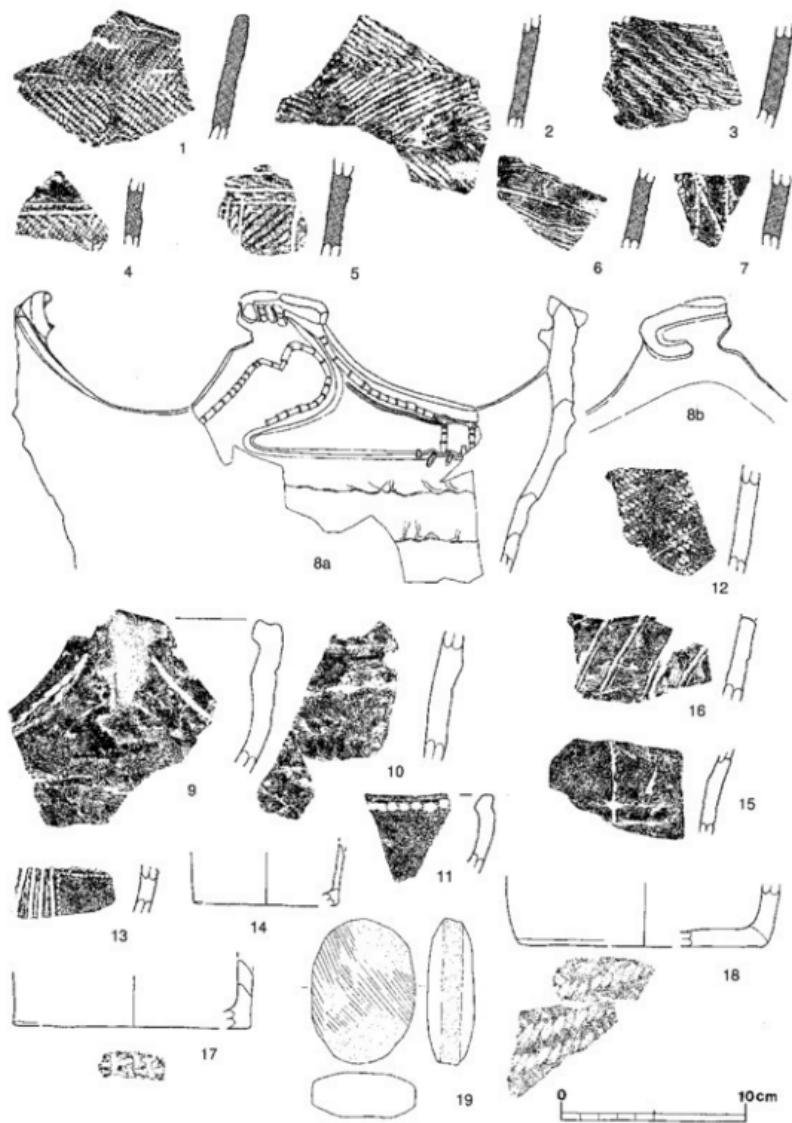
(柱穴) 柱穴は確認されず、柱を据えた痕跡も見られない。

(炉) 確認されなかった。

(覆土) おむねレンズ状の堆積をしている。覆土下層の壁寄りにロームを多く含む土層が堆積している。中央部には、径約50cmの梢円形を呈する焼土の堆積が見られた。焼土は約10cmの厚さで凹みに堆積していた。周辺には焼土粒が多く見られた。

(遺物出土状況) 覆土上層から出土しているものが多い。接合関係が見られるものはNo.8や

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法線(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	波状縁。單脚Rし・LR羽状縁文。口唇に平行に波状沈縁文。	にぶい橙	織維	黒浜	
2	深鉢	胴	無脚Rえ・Lえによる羽状縁文。	にぶい黄	織維	黒浜	外表面炭化物
3	深鉢	肩	R $\frac{1}{2}$ 反撫り	にぶい橙	織維	黒浜	外表面炭化物
4	深鉢	胴	單脚Rし・Lしによる羽状縁文。半纏竹管状工具による斜平行沈縁文。	橙	織維	黒浜	
5	深鉢	肩	地文無脚Rえ・しれ羽状縁文。半纏竹管状工具による平行沈縁文。	にぶい橙	織維	黒浜	
6	深鉢	胴	半纏竹管状工具による斜位平行沈縁文・波状沈縁文。	橙	織維	黒浜	
7	深鉢	胴	アナダラ属系の貝による貝殻度縁波状文。	褐	織維	黒浜	
8	深鉢	口縁	4単脚波状縁。断面三凸形復原文と有脚比較文による判明。A30.4B(15.4)	橙		阿玉台1a	外表面炭化物
9	深鉢	口縁	波状縁。皮質部より下する有脚付。波状縁に沿う有脚比較文。下半部無縁。	にぶい赤褐		阿玉台1a	外表面炭化物
10	深鉢	胴	上半に障泥文。下半は輪環上にヒダ状隆起。	にぶい橙	石英	阿玉台1a	外表面炭化物
11	深鉢	口縁	波状縁。内湾。波状縁に沿う刻突列。	にぶい赤褐	石英・砂粒	阿玉台1a	外表面炭化物
12	深鉢	胴	單脚Rし。	橙	石英	中期初頭	
13	深鉢	胴	半纏竹管状工具による斜位平行沈縁文。茎部は丸底に深い溝孔。	にぶい黄	石英	五領ヶ台II	
14	深鉢	底	直立。無文。	B(3.3) C7.8	橙	中期初頭	
15	深鉢	胴	内面に後。下半に低く狭な障泥文。	にぶい赤褐	石英・砂粒	阿玉台	外表面炭化物
16	深鉢	胴	半纏竹管状工具による斜位平行沈縁文。	にぶい黄		中期初頭	
17	深鉢	底	無文。底面サル彫み痕。	B(3.6) C13.0	青石	中期初頭	
18	深鉢	底	無文。底面サル彫み痕。	B(4.1) C12.8	橙		阿玉台
No.	器種	出土地点	特徴	長さ	幅	厚さ	重さ(g)
19	磨石類	SI-6 №26	梢円形で扁平なものである。	7.8	5.6	2.55	162.53
							安山岩



第18図 第4号住居跡出土遺物

10の阿玉台Ⅰa式期のものである。No.8は床面近くのものと覆土上層のものが接合し、No.10は覆土中位で接合している。

(出土遺物) 遺物の出土量は少ない。No.1~7は前期黒浜式の土器である。No.8~11は中期阿玉台Ⅰa式土器である。No.8のa・bは波状口縁の表裏の表現である。No.15・18も阿玉台Ⅰa式相当のものと思われる。No.12~14・16・17は中期初頭の土器と考えられる。No.19は覆土中層から出土した磨石類である。

(所見) 本竪穴住居跡は、炉や柱穴が無く壁高が深い特徴を持つ。また出土遺物から縄文時代中期阿玉台Ⅰa式期のものと考えられる。

第5号住居跡(HMN S I-2)(第19・20図 P L 5・15)

(位置) 前谷西遺跡エリア内の西側で、F・G-25・26区に確認された。第6号住居跡から約85m離れ、第3号住居跡から約30m離れている。

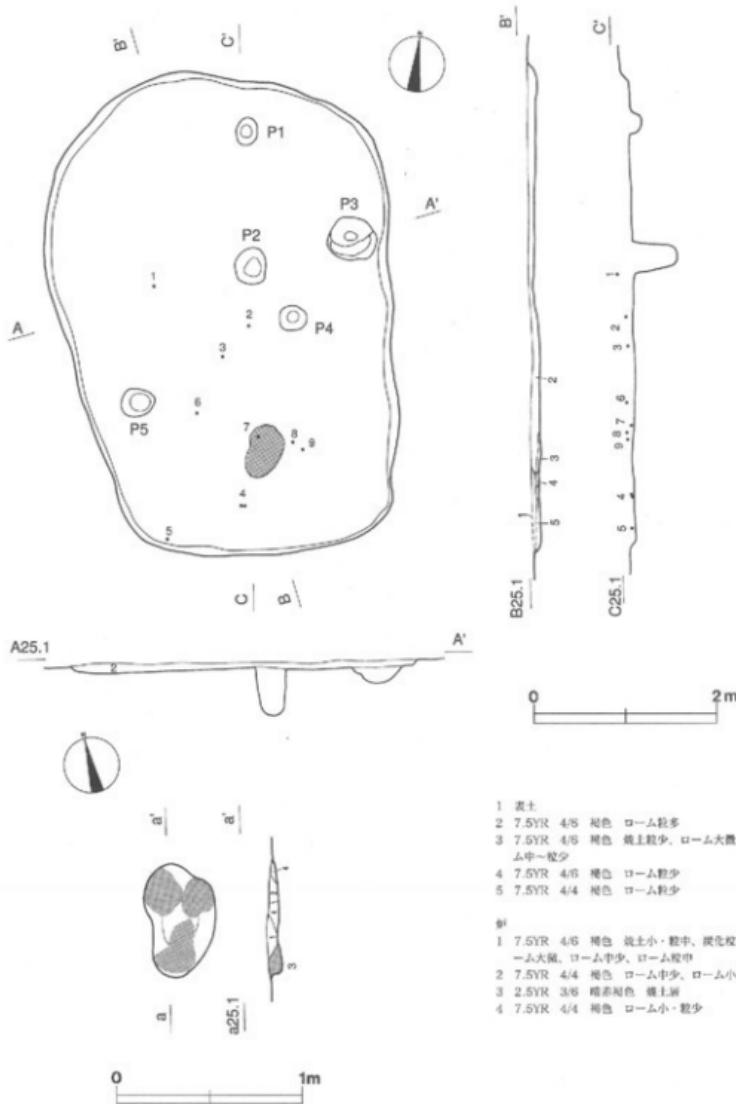
(形状) 平面形は、不整梢円形を呈する。長径5.2×短径3.5mである。深さは10cm前後である。主軸はN-19°-Wである。

(床) 全体的に平坦である。床面を踏み固めたような部分は見られなかった。

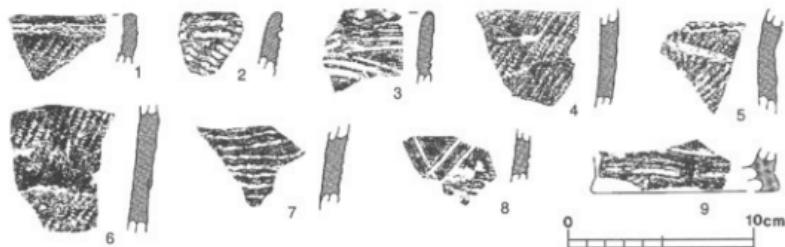
(柱穴) P1~P5の5ヶ所のピットが確認された。P1は深さ10.5cm、P2は48.5cm、P3は32cm、P4は51cm、P5は15.5cmの深さを測る。P2・P4が深く掘り込まれ、主柱穴の可能性があろう。

(炉) 住居跡の南壁付近に確認された。形状は長径60×短径32cmの梢円形を呈する。深さは6cmを測り、炉床はやや凹んでいる。底面には、大きく3ヶ所の赤変硬化した焼土が見られた。炉断面図中の第3層は、炉底面下の半蔵した状況を示す。

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	内湾。口唇上半削面。地文單節LR。半截竹管状工具による波状沈線文。	橙	繊維	黒浜	
2	深鉢	口縁	地文無節R&L。半截竹管状工具による短沈線文。	明褐	繊維	黒浜	
3	深鉢	口縁	口唇部削文。半截竹管状工具による横位・斜位沈線文。	明赤褐	繊維	黒浜	内面炭化物
4	深鉢	腹	地文単節LR。上縁に波状沈線文。	にぶい橙	繊維	黒浜	
5	深鉢	腹	外反。地文単節LR。半截竹管状工具による波状沈線文。	褐	繊維	黒浜	
6	深鉢	腹	単節LR。輪摺痕がなきられずに残る。	にぶい褐	繊維	黒浜	
7	深鉢	腹	半截竹管状工具による有節沈線文。	にぶい黄褐	繊維	黒浜	
8	深鉢	腹	半截竹管状工具による鋸齒状文。	にぶい黄褐	繊維	黒浜	
9	深鉢	腹	半截竹管状工具による短沈線文。B(2.0) C10.2	にぶい黄褐	繊維	黒浜	



第19図 第5号住居跡



第20図 第5号住居跡出土遺物

(覆土)もともと遺存状況が良くないせいもあり薄い。ほとんどが第2層であり、炉の近辺は焼土粒が散っている。

(遺物出土状況)遺物の大半は炉の周辺から出土した。いずれも土器小破片である。接合した遺物はない。

(出土遺物)遺物の出土量は少ないが、いずれも同一時期のものである。No. 1～9は縄文時代前期黒浜式の土器片である。いずれも小破片であった。

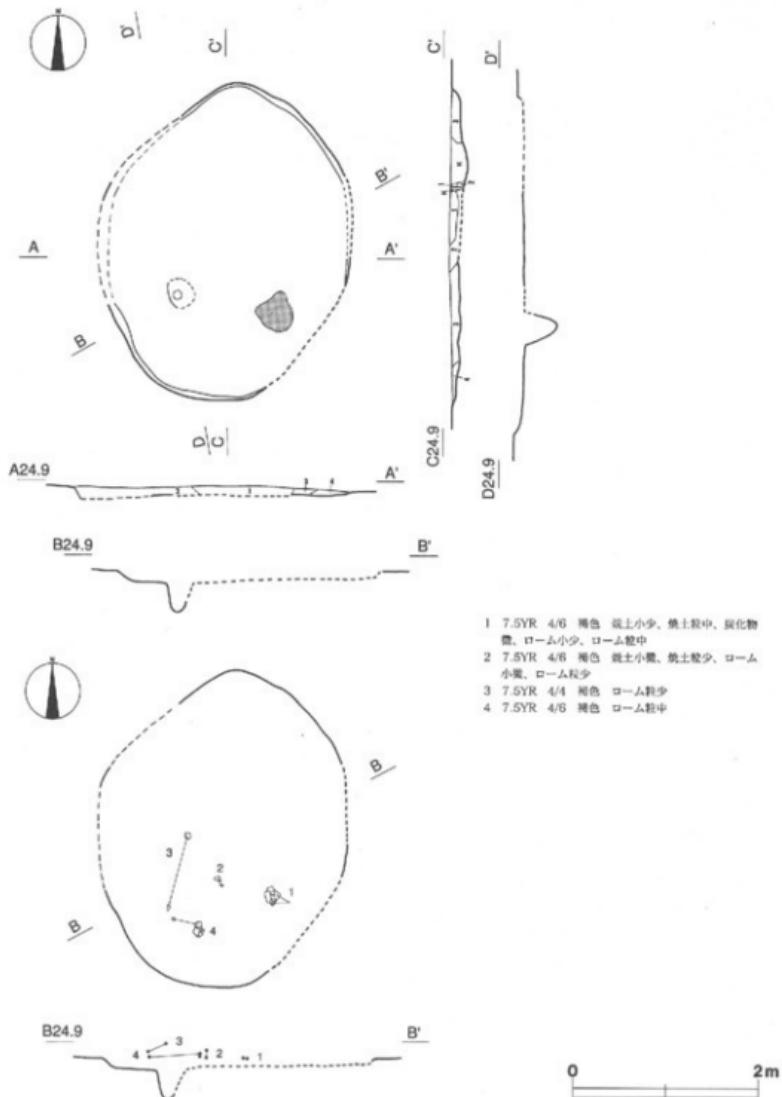
(所見)本竪穴住居跡は縄文時代前期黒浜式のものである。本住居の特徴は、炉の位置が南側に寄っており、北壁までの空間が広い。

第6号住居跡(旧MNS I-3)(第21・22図 PL5・16)

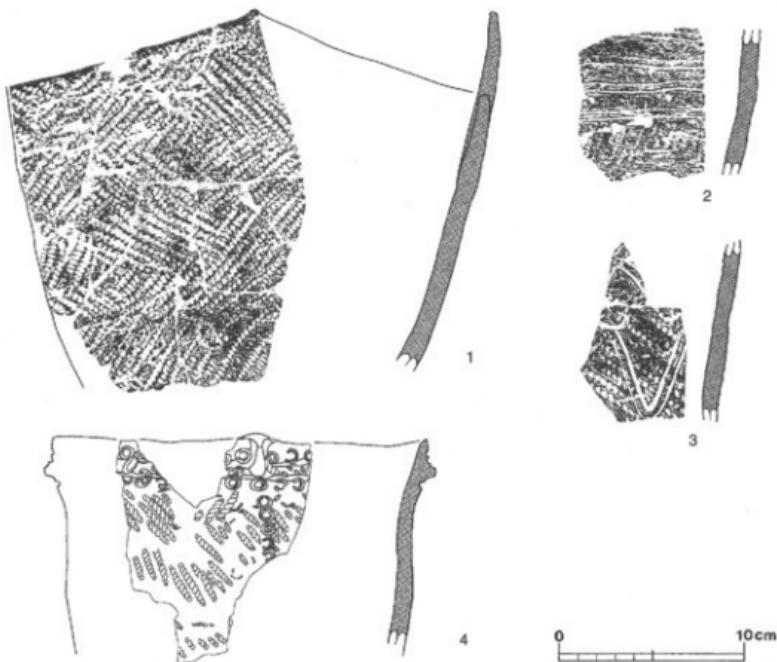
(位置)前谷西遺跡エリア内の北端部分のK-7・8区に確認された。第5号住居跡から約75m離れ、第3号住居跡から約100m離れている。

(形状)平面形は楕円形を呈し、長径3.4×短径2.7mである。壁高は約10cm前後で、西側は現代の掘削により壊されている。現代の掘削の痕跡は住居跡内にも見られた。東壁が不明なのは調査時の掘り過ぎによるものである。

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	4半径の波状縁。单脚LR・RLによる羽根彫文。A26.2 B(19.5)	にぶい橙	織維	黒浜	
2	深鉢	腹	地文單脚LR。半截竹管状工具による有節平行沈線文。	黒褐	織維	黒浜	外面炭化物
3	深鉢	腹	地文單脚RL。半截竹管状工具による墨绘状沈線文。	にぶい褐	織維	黒浜	外面炭化物
4	深鉢	口縁	地文单脚RL。陰文上下と小突起下に円形竹管文。A20.3 B(11.3)	明赤褐	織維	黒浜	



第21図 第6号住居跡



第22図 第6号住居跡出土遺物

(床) 平坦な状況を呈し、踏み締められたような痕跡は見られない。

(柱穴) 柱穴らしいものは南西寄りに1ヶ所確認され、深さ30cmを測る。

(炉) 南東寄りに1ヶ所確認された。40×40cm大のもので、床面を掘り凹めていない。

(覆土) 4層から構成される。第1層に焼土粒が多く含まれた。部分的に確認面から底面に及ぶ搅乱が見られた。

(遺物出土状況) 坪穴住居跡内の南半分から遺物が出土している。No. 1の土器は炉上を覆うように出土し、炉と土器の間には褐色土の間層が見られた。接合した遺物はいずれも近いところでの接合資料である。

(出土遺物) 遺物の出土量は少ないが、いずれも同一時期のものである。No. 1～4はいずれも胎土に纖維を含む縄文時代前期黒浜式のものである。No. 4は口縁部に突起やたが状の突帯が巡る。

(所見) 本坪穴住居跡は、出土遺物から縄文時代前期黒浜式期のものと考えられる。本住居の特徴は、炉の位置が南東側に寄っており、北西壁までの空間が広い。

2. ピット群 (第23~25図 PL5・16・17)

(位置) 前谷東遺跡エリア内の3E-32区を中心に、その周囲に展開している。どちらかといえば南北方向に細長くまとまって確認された。近接して第2号溝が存在する。

(形状) ピット群は長軸10×短軸6mの範囲内に多数のピットが確認されている。一部第2号溝に沿うように並んだものも見られた。確認されたピットは全部で65基(この内2基は第38・39号土坑としたものである。)である。各ピットの形状は、平面形がほぼ円形または楕円形のもので、平面径は50~20cmのものが多い(ピット最大径一覧参照)。深さは100~10数cmのものまで幅広い。それぞれのピットの深さは一覧表のとおりである。一番深いものはP1の105cmで、一番浅いものはP37の7cmである。ピットの深さにはまとまりがあり、深さ70cm以上のものはP1・6・16・21・36・44・54である。これらに他のピット・土坑(P7・49・第38・39号土坑)を加えて図化したものが(第23図)である。炉を囲むような配列が見られる。

ピットの中にはP9・11・21のように斜めに穿たれたものがある。P11・21は西を向き、P9は南東方向を向いて穿たれていた。

これらのピットの覆土は、基盤となるものが褐色土で、斑状にロームブロックが混じっているものもある。ピットの土層断面図を示してはいないが、特異な土層の堆積状況は見られない。

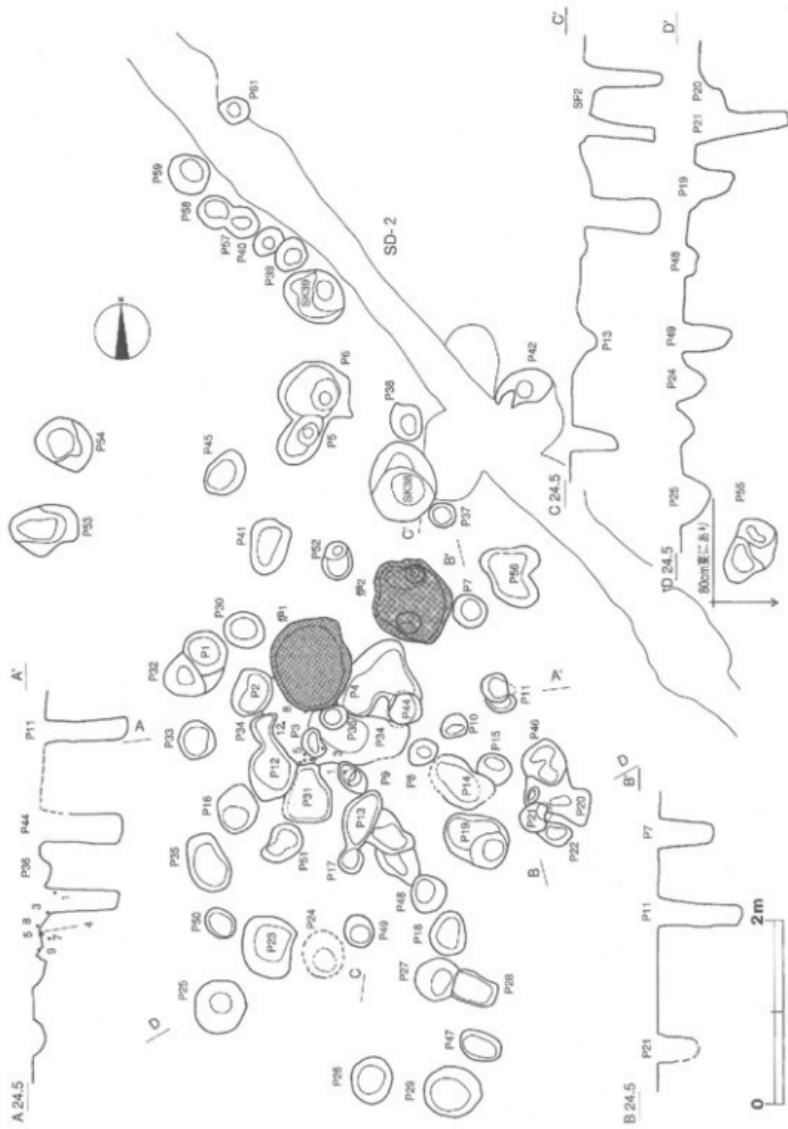
(炉) 炉跡が近接して2基確認された。いずれも径約1mの円形を呈する。焼土を取り去ると凹み、壁は緩く立ち上がる。両方とも同様に火床面は軟弱である。炉2の焼上を取り去ると、火床部にピットが2基(北から炉2内P1、炉2内P2)確認された。炉1から少量の土器片が出土している。炉南側の凹みから出土した土器と同様な時期のものである。

(床) 確認面で竪穴住居跡のような踏み締められた床状のものは確認されなかった。

(遺物出土状況) 炉1の中やその南側の凹みから土器が出土している。また同地区付近の一括遺物も同様な時期の遺物が出土している。No.1の土器はP9上から出土し、No.3はP3から出土し、No.4・5・7~9・12は近接した場所から同様なレベルで出土している。

(出土遺物) No.1~11は中期初頭五領ヶ台式土器である。No.12は異系統のものか。

(所見) このピット群としたものは、炉1・2を取り囲む一定の深さのピットの配列が見られることなどから、建物遺構を想定することが可能といえる。しかし他のピットを踏まえた構造は現在のところ想定しえない。遺構の時期は出土遺物から中期初頭のものと考えられる。そして炉も近接して2基存在することと、他にも多数のピットが群在していることから、主要な柱を一定に配した建物構造の変遷(重複)も考えられよう。



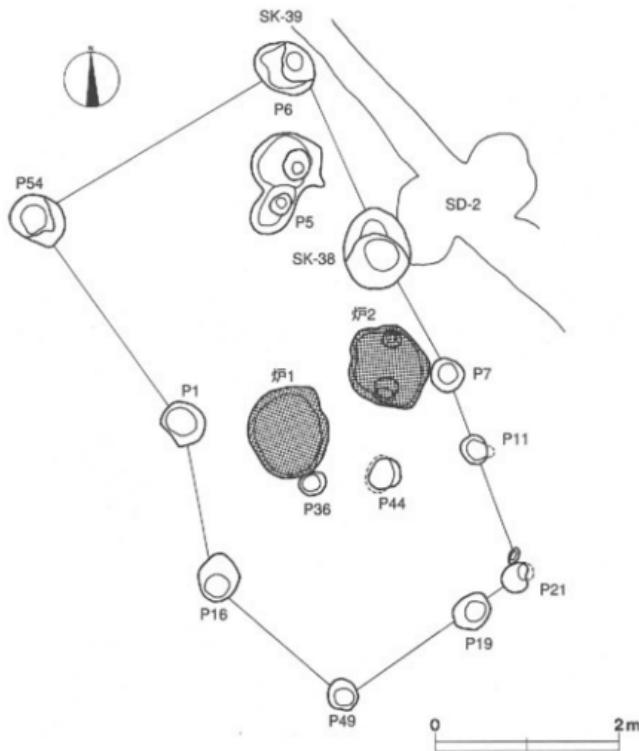
第23図 ピット群全体図

ピット群の深さ一覧(cm)

ピットNo.	深さ	ピットNo.	深さ	ピットNo.	深さ	ピットNo.	深さ	ピットNo.	深さ
1	105	14	12	27	26	40	47	53	30
2	16	15	30	28	8	41	14	54	100
3	10	16	88	29	24	42	不測	55	54
4	9	17	12	30	6	43	欠番	56	9
5	43	18	11	31	8	44	72	57	16
6	84	19	42	32	16	45	22	58	12
7	55	20	30	33	12	46	31	59	47
8	29	21	102	34	14	47	20	60	欠番
9	31	22	12	35	9	48	13	61	50
10	12	23	23	36	77	49	50	炉2内P1	85
11	88	24	12	37	7	50	9	炉2内P2	78
12	9	25	30	38	34	51	21	SK-38	112
13	25	26	11	39	57	52	26	SK-39	110

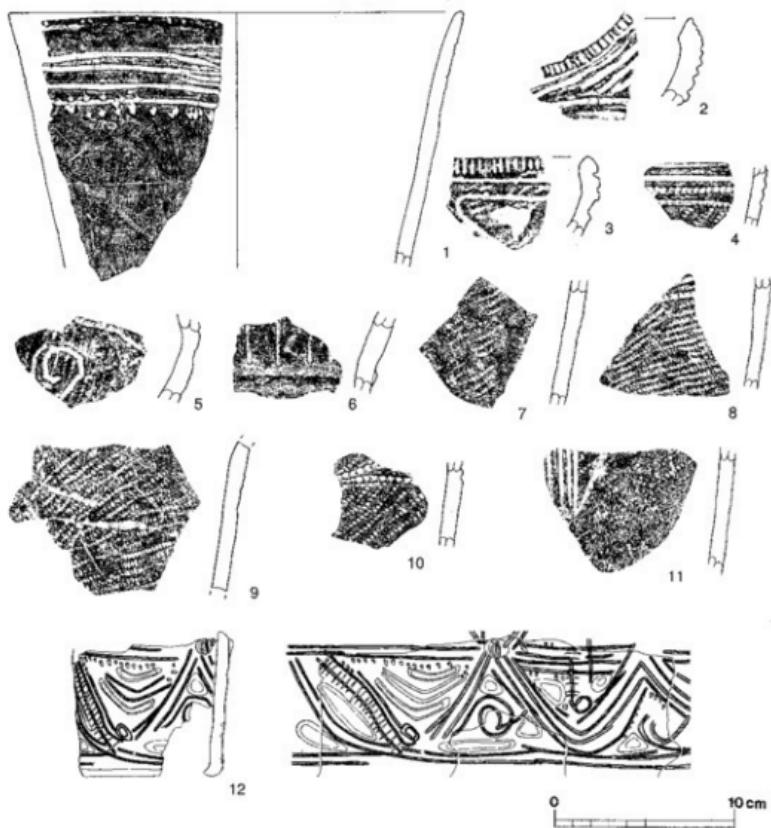
ピット群の最大径一覧(cm)

ピットNo.	平面径								
1	50	14	75	27	41	40	35	53	73
2	50	15	35	28	50	41	60	54	77
3	30	16	55	29	62	42	65	55	73
4	85	17	30	30	45	43	欠番	56	77
5	62	18	48	31	62	44	37	57	35
6	65	19	74	32	48	45	50	58	35
7	37	20	80	33	47	46	50	59	47
8	35	21	33	34	30	47	47	60	欠番
9	25	22	30	35	65	48	40	61	33
10	30	23	70	36	30	49	35	炉2内P1	19
11	30	24	50	37	29	50	35	炉2内P2	27
12	55	25	60	38	44	51	50	SK-38	86
13	65	26	50	39	38	52	40	SK-39	69



第24図 ピット群内遺構配置図

No.	面種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	口縁部に不規則な削光。4条の横段沈線の上下に軽突乳。A23.0 B14.0	にぶい褐	石英・長石	五領ヶ台Ⅱ	内外面炭化物
2	深鉢	口縁	波状縁。口縁に沿って有節沈線による区画文。	にぶい黄褐	石英・長石	五領ヶ台Ⅱ	
3	深鉢	口縁	内渦。地文單節R L。口縁下沈線1条。下半は三叉状彫刻文を有する区画文。	褐灰	雲母・石英	五領ヶ台Ⅱ	
4	深鉢	胴	地文單節R L。上半は沈線。下半は有節沈線。	にぶい橙	石英・長石	五領ヶ台Ⅱ	
5	深鉢	胴	地文單節R L。曲線的な有節沈線文。渦巻文。	褐灰	雲母・石英	五領ヶ台Ⅱ	
6	深鉢	胴	陶帶1条通り、上半は半截竹管状工具による縦位刺突列。	にぶい褐	石英・長石	五領ヶ台Ⅱ	
7	深鉢	胴	單節R L。	にぶい赤褐	石英・長石	中期初頭	
8	深鉢	胴	地文單節R L。上半に半截竹管状工具による有節沈線。	にぶい赤褐	石英	五領ヶ台Ⅱ	



第25図 ピット群出土遺物

No.	器種	部位	型形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
9	深鉗	崩	単節R L。一部S字状紡節文。	に赤い黄緑	長石	五領ヶ台	外面炭化物
10	深鉗	崩	地文単節R L。半戻竹管執工具による有節沈線。	灰黄褐	石英	五領ヶ台II	P48
11	深鉗	崩	地文単節R L。有節沈線と3条の沈線文が重下。	緑	石英・長石	五領ヶ台II	P44
12	深鉗	底	上下端輪轍で欠損。側面枕縫間に斜行文で三角形区画を作成。文帯部にコブ状突起。区画内は横巻文、横円形区首文、斜突円、斜下沈線文。B(7.9) C7.6	に赤い黄緑	石英	中期初頭 (大木系)	P8

3. 土坑(S K) (第26~31図 P L 5・6・17・18)

各遺跡エリア内から確認された土坑は、各時代のものを含め総数53基を数える。一番多く確認されたものは、前谷東遺跡エリア内で43基である。前谷西遺跡エリアでは2基で、東原遺跡では8基である。時代的には、大多数のものが縄文時代に位置付けられ、中でも中期の阿玉台式期に位置付けられるものが多い。少數であるが覆土の状況や出土した遺物から古代や近現代に位置付けられるものもある。(古代以降の土坑については第3節 3. 土坑参照)

縄文時代の土坑としたものは、覆土の状況や出土遺物をもとに時代決定の根拠としている。これらは形態的にいくつかに分類することが可能である。分類の基準としたものは平面形と断面形などである。

1. 土坑の平面形が径50cm前後の円形で断面形が柱穴のように細長く、ほとんどのものが50cmを超える深さを持つものである。多くは埋没谷付近や北側の谷頭付近にまとまって見られ、竪穴住居跡が検出された周辺には全く見られない。それぞれの土坑は、建物遺構のような一定の配列は見られなかった。この内の一部の土坑の穿たれ方は、垂直方向ではなく、斜め方向に穿たれている。ほとんどの場合は、覆土から縄文時代中期阿玉台式期の土器が出土している。

(第1・3・4・8・9・11~14・16~18・20・22~24・26・28・38・39・54号土坑)

2. 土坑の平面形が長梢円形または長方形のもので、底面が比較的平坦であるのが特徴である。壁は急激に立ち上がる。第50・51号土坑は近接して並び確認されている。遺物は数少ないながら縄文時代前期から中期の遺物が出土しているが、所属時期については明確さに欠ける。土坑が多く確認されている埋没谷付近からは確認されていない。いずれも主軸がほぼ東西方向にあり、規模や深さも同様といえる。

(第50・51号土坑)

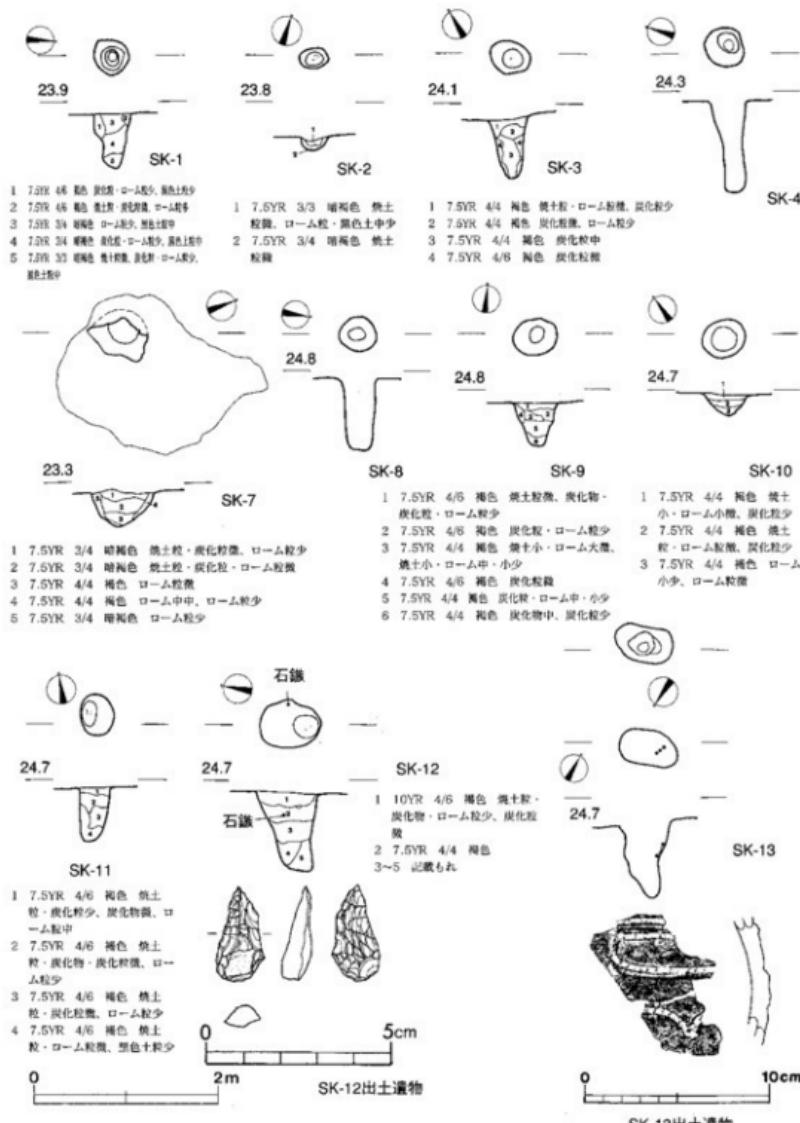
3. 土坑の平面形が円形や梢円形のもので、平面径の長さより深さの方が短く、底面は平坦で形状が「たらい状」を呈するものである。各遺跡エリアにわたり散発的に確認されている。

(第5・6・21・27・34・45・47号土坑)

4. その他のものである。いずれも縄文時代の遺物が出土している。

(第2・10・15・19・30~32・40・46・48・49号土坑)

以下は特徴的な遺構について述べる。



第26図 土坑(1)

第3号土坑(旧MHS K-5)(第26図)

(位置) 埋没谷のある2N-50区から確認され、付近には第2・5号土坑が確認された。

(形状) 平面形は径45cmの不整円形を呈し、断面形は深さ66cmの先細る形状をもつ。

(出土遺物) 上層から中層にわたり阿玉台式期の土器片が出土している。

(所見) 土層図中の第3層は炭化物粒を多く含む土層で柱痕状の痕跡を示す。他の土坑にも同様な土層が見られるものがある。阿玉台式期のものである。

第6号土坑(旧MHS K-9)(第30図 PL5)

(位置) 埋没谷付近の2L-50区で第1号焼土址と重複関係にあり、本遺構が新しい。

(形状) 平面形は長径95×短径90cmの不整円形で、断面形は深さ24cmの皿状をなす。

(出土遺物) 黒曜石製剥片や土器片鉢、土器が出土している。

(所見) 土器は熱のためか表面が発泡している。土器の時期は阿玉台Ib式期のものか。

単位(cm・g)

No.	種類	出土位置	残存	大きさ	厚さ	重量	縁線形	色調	文様	時期	備考
1	土器片鉢	SK-6	完形	3.7×3.15	1.0	17.0	全周磨り	灰黄褐色	波状沈線	阿玉台	切り目一対
No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量					色調	胎土	時期	
2	深鉢	鉢	有節沈線による平行線、鋸歯状文、表面発泡。					にぶい橙	長石	阿玉台Ib	

第12号土坑(旧MHS K-15)(第26図 PL18)

(位置) 埋没谷の東側の2S-50区から確認され、付近には第11・15号土坑が存在する。

(形状) 平面形は長径65×短径53cmの楕円形で、断面形は深さ74cmの先細り状を呈する。

(出土遺物) 第2層から黒曜石製の石鐵未製品や土器が出土している。

(所見) 繩文時代中期阿玉台式期のものである。

単位(cm・g)

No.	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
-	石 鉢	SK-12No.1	2.5	1.3	0.6	2.28	黒曜石	石鐵未製品 材木の打削残る

第13号土坑(旧MHS K-16)(第26図 PL5・17)

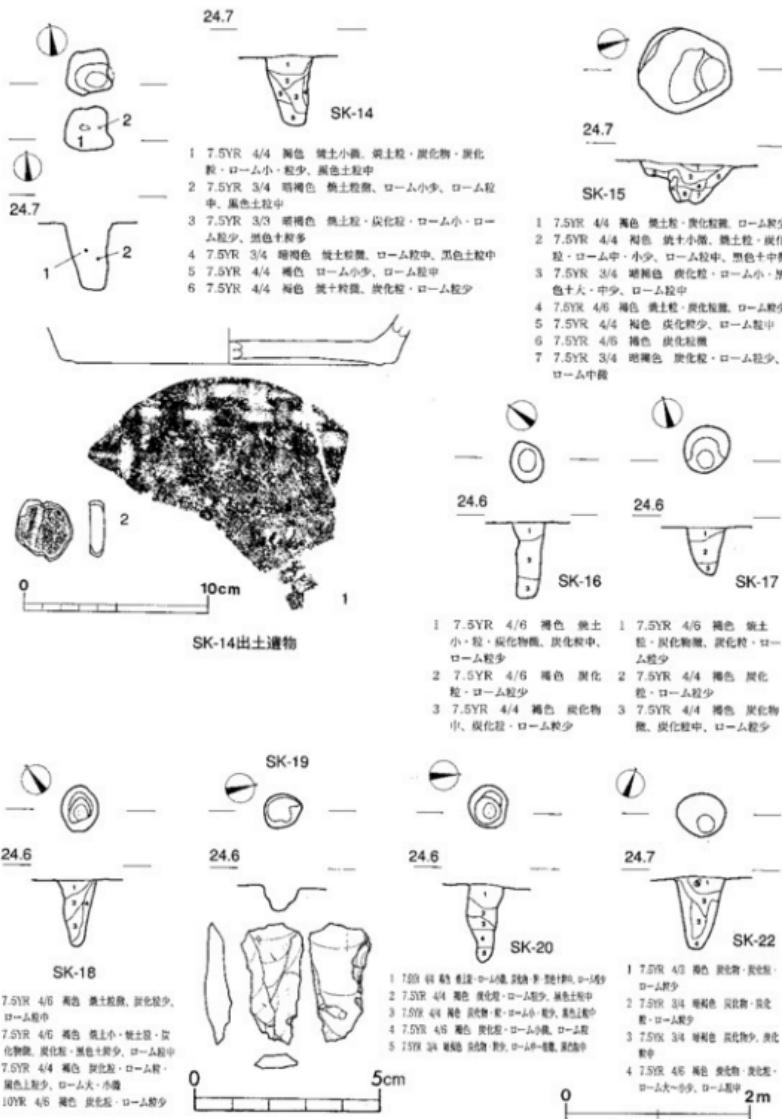
(位置) 埋没谷の東側の2S-50・51区から確認され、付近に第12号土坑等が所在する。

(形状) 平面形は長径60×短径37cmの楕円形を呈し、断面形は深さ66cmの先細り状を呈する。

(出土遺物) 土坑内の中位から土器が3点出土し、それぞれ接合した。

(所見) 第12号土坑と同様な土層堆積状況を持つ。遺物から阿玉台式期のものである。

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期
-	深鉢	鉢	有節沈線による楕円区両文、波状文	灰褐	紫母・長石	阿玉台Ib



第27図 土坑(2)

第14号土坑(旧MHS K-17) (第27図 PL 6・17)

(位置) 埋没谷の東側の2S-51区から確認された。

(形状) 平面形は径44cmの不正円形を呈する。断面形は先細りし深さ74cm、底面が平坦になる。

(出土遺物) 土器底部や土器片錠が土坑中位から出土した。

(所見) 遺物は阿玉台式期のものである。

										単位(cm·g)
No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量					色調	胎土	時期
1	深鉢	底	無文、底面中央部を除き編物痕、ザル編み	B(1.8)C18.0			棕	雲母・石英		阿玉台
No.	種類	出土位置	残存	大きさ	厚さ	重量	周縁整形	色調	文様	時期
2	土器片錠	SK-14	完形	2.3×3.0	0.75	8.5	全周磨り	に赤い海	山形輪廓線	阿玉台
										切り刃一対

第19号土坑(旧MHS K-22) 出土遺物(第27図 PL 18)

							単位(cm·g)	
No.	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
-	スクレイバー	SK-19	3.1	1.6	0.7	2.74	黒曜石	打凸部ステップフレイキング

第24号土坑(旧MHS K-28) (第28図)

(位置) 前谷東遺跡エリア北側谷頭の2G-34区に確認された。

(形状) 平面形は径75cmの円形で、断面形は傾斜し先細り状を呈する。深さ127cmである。

(出土遺物) 第1層から礫が出土。

(所見) 第2・3層は炭化物粒を多く含む。時期は阿玉台I b式期のものか。

第26号土坑(旧MHS K-36) 出土遺物(第28図 PL 17)

										単位(cm·g)	
No.	種類	出土位置	残存	大きさ	厚さ	重量	周縁整形	色調	文様	時期	備考
-	土器片錠	SK-30	一部欠	4.1×3.3	0.7	15.0	一部磨り	に赤い赤褐色	無文	不明	切り刃一対

第28号土坑(旧MHS K-32) (第28図 PL 17)

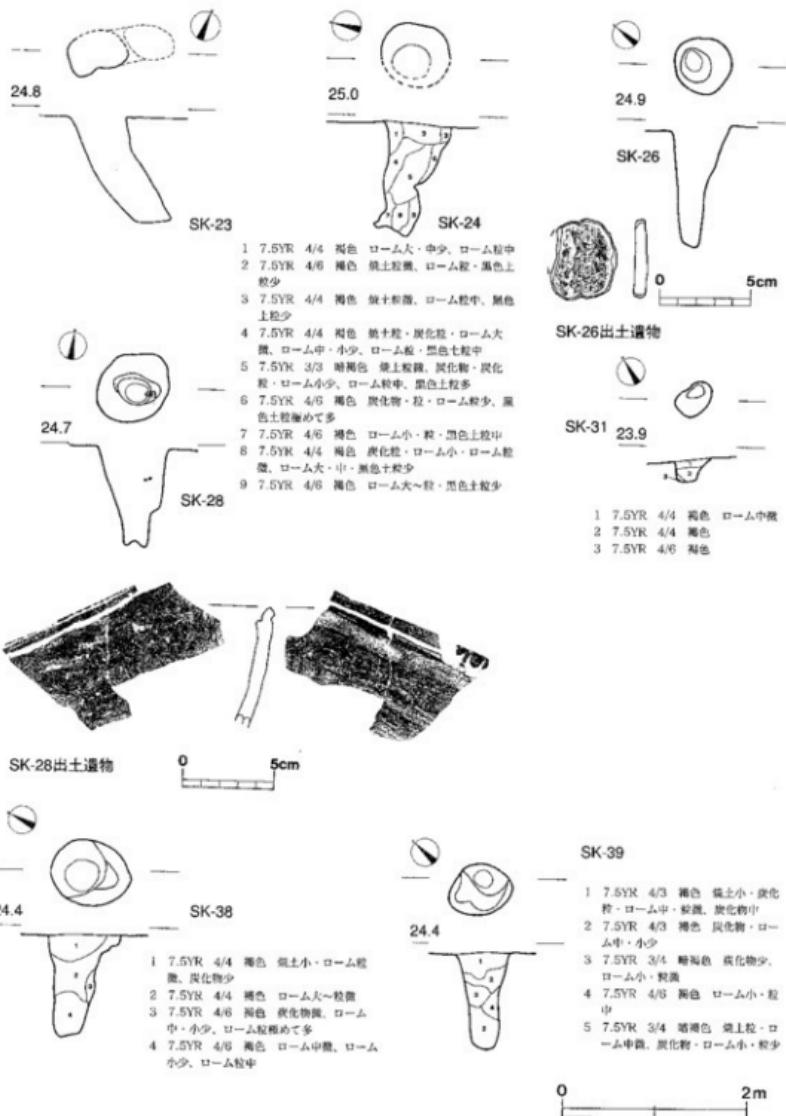
(位置) 前谷東遺跡エリア北側谷頭の2J-39区に確認された。

(形状) 平面形は径85cmの円形で、断面形は中段にテラス部がある。深さ107cmである。

(出土遺物) 土坑内の中位から土器2点が出土し、それぞれ接合している。

(所見) 出土した遺物は阿玉台I a式期のものであろう。

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期
-	深鉢	口縁	波状縁に沿った平行沈模文、内面微隆起、三叉文、U字状沈模文	に赤い赤褐色		阿玉台I a



第28図 土坑(3)

第34号土坑(旧MHSK-47) (第30図 PL6・17)

(位置) 前谷東遺跡エリア北端3H-35区に確認され、近接して第29号土坑が確認された。

(形状) 平面形は径105cmの円形で、深さ45cmのたらい状を呈する。底面は平坦である。

(出土遺物) 中期初頭の土器が出土している。

(所見) 覆土第5・6層は黒褐色土で非常にしまっている。

No.	層種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期
1	深鉢	口縁	口縁がまっすぐ開く、口唇部内側が状、内面丁寧な削ぎ。表面に纏毛状彫文。	にぶい黄褐色	董母・長石・石英	中期初頭
2	深鉢	口縁	口唇部内側が状、表面へら削り。	灰黄褐色	砂粒・長石	中期初頭

第38号土坑(旧MHSK-51) (第28図)

(位置) 前谷東遺跡エリア東端の3E-31・32に確認された。ちょうどピット群の中に確認された。第39号土坑が北側に近接して位置する。

(形状) 平面形は長径86×短径72cmの楕円形で、断面形は先細り状を呈する。深さ110cmである。上部にはテラス状の平坦な部分がある。

(出土遺物) 五領ヶ台式土器や焼碟が出土した。

(所見) 覆土は4層からなる。本報告の中では、ピット群の一部として取り扱っている。

第39号土坑(旧MHSK-52) (第28図)

(位置) 前谷東遺跡エリア東端の3E-31に確認された。ちょうどピット群の中に確認された。第38号土坑が南側に近接して位置する。

(形状) 平面形は長径69×短径55cmの楕円形で、断面形は先細り状を呈する。深さ108cmである。一部テラス状になっている。

(出土遺物) 五領ヶ台式土器が出土した。

(所見) 覆土は5層からなる。本報告の中では、ピット群の一部として取り扱っている。

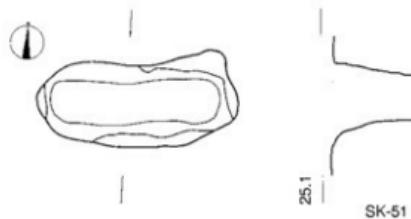
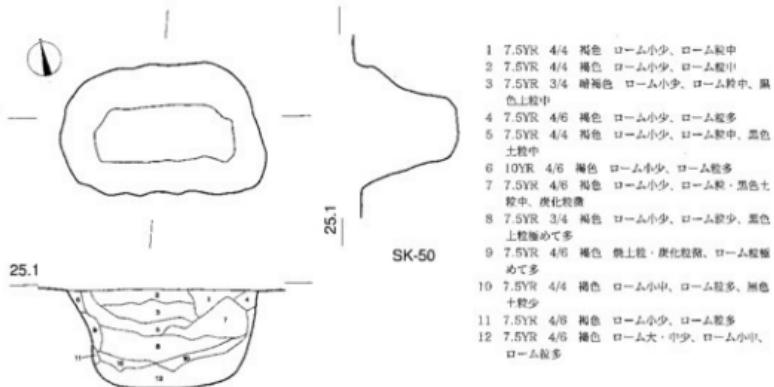
第50号土坑(旧HHSK-13) (第29図 PL6)

(位置) 東原遺跡エリア内のZ・2A-31・32区に第51号土坑と5m離れて確認された。

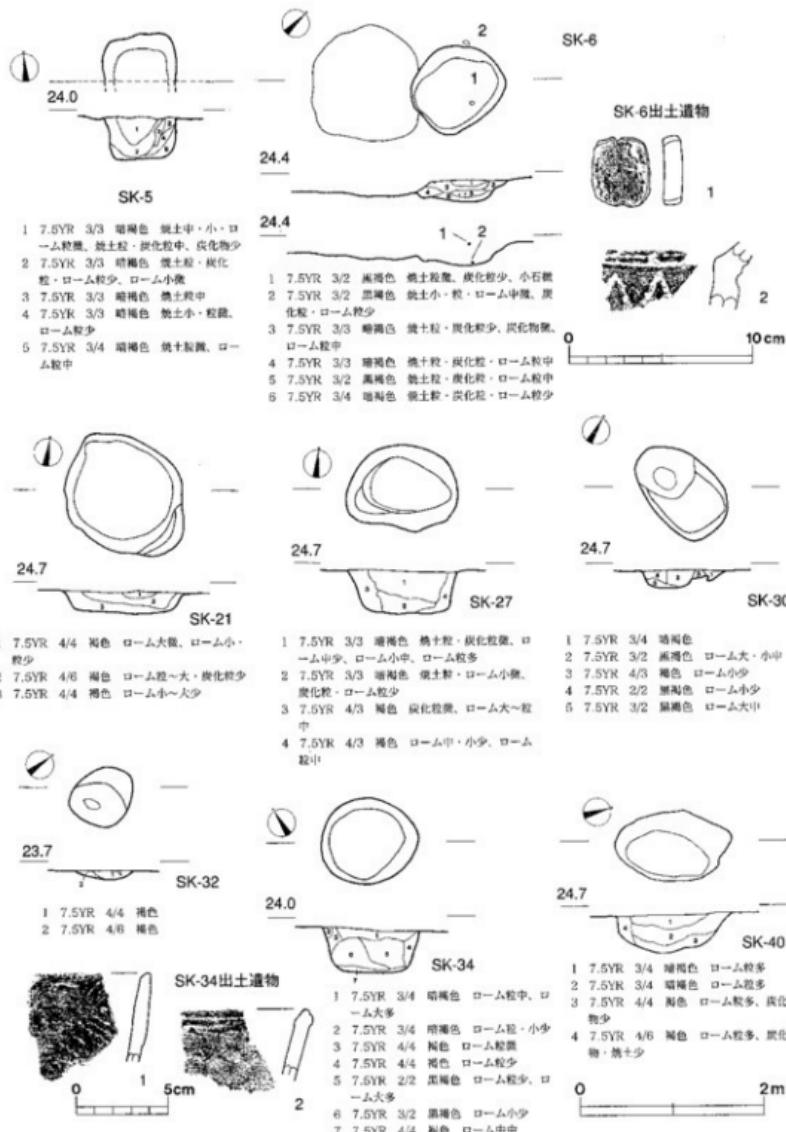
(形状) 平面形は長径210×短径135cmの楕円形で、深さ116cm、底面は平坦である。主軸はN-84°-W。第51号土坑はN-90°-Wであり、ほぼ同様な主軸をもつ。

(出土遺物) 確認されていない。

(所見) 覆土は暗褐色土や褐色土が堆積。上層に焼土・炭化物粒をほとんど含まない。



第29図 土坑(4)



第30図 土坑(5)

第51号土坑(旧HHSK-14) (第29図 PL6)

(位置) 東原遺跡エリア内の2A-32区に第50号土坑と5m離れて確認された。

(形状) 平面形は長径216×短径85cmの梢円形で、深さ105cm、底面は平坦である。主軸はN-90°-W。第50号土坑はN-84°-Wであり、ほぼ同様な主軸をもつ。

(出土遺物) 確認されていない。

(所見) 覆土は暗褐色土や褐色土が堆積。土層に焼土・炭化物粒をほとんど含まない。

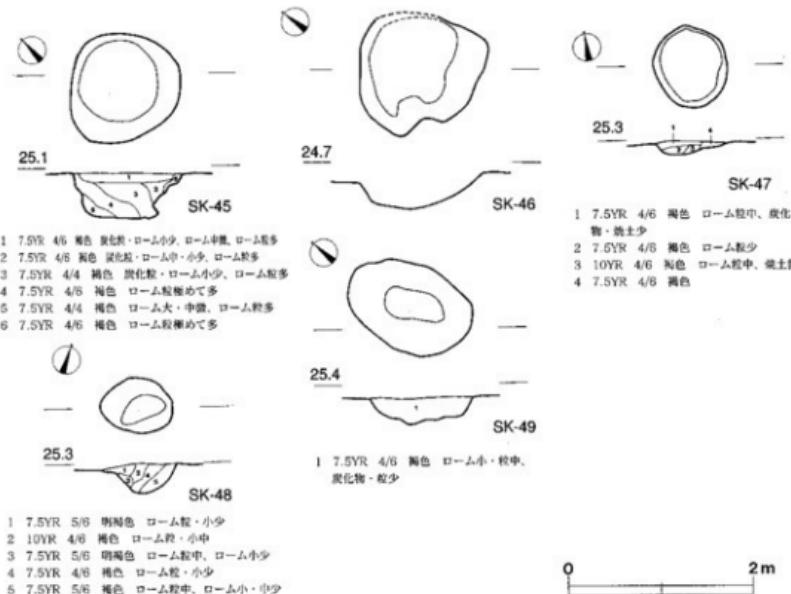
第54号土坑(旧HHSK-17) (第29図 PL6)

(位置) 東原遺跡エリアと前谷東遺跡エリアの境界2D-34区に位置する。

(形状) 平面形は長径90×短径70cmの梢円形で、上部は開き深さ114cmである。

(出土遺物) 繩文土器が3点出土している。

(所見) 覆土最下層の第6層は黒褐色土で非常にしまっている。



第31図 土坑(6)

土坑一覧表

遺構番号	旧遺構番号	位置(1C)	形態	規模(cm)	主 輸	遺 物	時 期	繪 図
SK-1	MHSK-1	2O-51	円 形	径40・深さ57	不 明	土器片	縄文(阿玉台)	第26図
2	MHSK-4	2N-50	椭円形	径33・深さ9	不 明	土器片	縄文	第26図
3	MHSK-5	2N-50	不整円形	径45・深さ66	不 明	土器片・石皿	縄文(阿長台)	第26図
4	MHSK-6	2N-50	不整円形	径40・深さ98	不 明	土器片・石皿	縄文(阿玉台 I a, I b)	第26図
5	MHSK-7	2N-51	方 形	長辺?×短辺55・深さ50	南 北	土器片・土製品	縄文(阿玉台 I a, I b)	第26図
6	MHSK-9	2L-50	不整円形	長辺95×短辺90・深さ24	不 明	土器片・黒曜石	縄文(阿玉台 I b)	第26図
7	MHSK-10	2L-51-52	不整円形	径40・深さ25	不 明		縄文	第26図
8	MHSK-11	2T-48	円 形	径62・深さ77	不 明	土器片	縄文(阿玉台)	第26図
9	MHSK-12	2S-49	円 形	径55・深さ55	不 明	土器片	縄文(阿玉台)	第26図
10	MHSK-13	2T-50	円 形	径48・深さ26	不 明		縄文	第26図

遺構番号	出土地番号	位置(尺)	形態	規模(cm)	主軸	遺物	時期	説明
11	MHSK-14	2 S -50	小盤円形	径45・深さ55	不明		繩文	第26回
12	MHSK-15	2 S -50	楕円形	長径65×短径53・深さ74	不明	土器片 石器	繩文(阿玉台)	第26回
13	MHSK-16	2S-50-51	楕円形	長径60×短径37・深さ66	N-70°E	土器片	繩文(阿玉台)	第26回
14	MHSK-17	2 S -51	不整円形	径44・深さ73	不明	土器片 土器片	繩文(阿玉台)	第27回
15	MHSK-18	2S-50-51	不整円形	径100・深さ43	不明	土器片	繩文(阿玉台)	第27回
16	MHSK-19	2 R -49	不整円形	径43・深さ80	不明	土器片 魚鱗状土塊	繩文(阿玉台)	第27回
17	MHSK-20	2 R -50	円形	径50・深さ57	不明		繩文	第27回
18	MHSK-21	2R-50-51	不整円形	径55・深さ120	不明	土器片	繩文(阿玉台)	第27回
19	MHSK-22	2 R -50	円形	径40・深さ30	不明	石器	繩文	第27回
20	MHSK-23	2 R -50	円形	径43・深さ30	不明	石器	繩文	第27回
21	MHSK-24	2N-20-43	円形	径120・深さ26	不明	土器片	繩文(阿玉台)	第30回
22	MHSK-25	2 L -36	円形	径52・深さ97	不明	土器片	繩文(阿玉台)	第27回
23	MHSK-27	2 K -35	楕円形	長径65×短径40・深さ113	不明		繩文	第28回
24	MHSK-28	2 G -34	円形	径75・深さ127	不明	土器片	繩文(阿玉台Ⅰb)	第28回
25	MHSK-29	2 G -33	不整円形	径55・深さ41	不明		時期不明	ナシ
26	MHSK-30	2 I -33	円形	径60・深さ123	不明	土器片 土器片	繩文(阿玉台Ⅰb)	第28回
27	MHSK-31	3J-32-33	楕円形	長径125×短径85・深さ48	東-西	土器片	繩文	第30回
28	MHSK-32	2 J -39	円形	径85・深さ107	不明	土器片	繩文(阿玉台Ⅰa)	第28回
29	MHSK-33	3 H -28	楕円形	長径260×短径114・深さ77	N-64°E	土器片	古代か	第70回
30	MHSK-36	3 F -39	楕円形	長径113×短径72・深さ32	N-72°W	土器片	繩文(阿玉台)	第30回
31	MHSK-43	3H-3I-29	楕円形	長径43×短径33・深さ30	N-72°E	土器片	繩文(五領ヶ台)	第28回
32	MHSK-44	3 H -29	円形	径70・深さ32	不明	土器片	繩文(阿玉台)	第30回
33	MHSK-45	3J-37-38	楕丸形	長軸230×短軸185・深さ94	N-43°E	土器片 磁器片	古代(平安)	第70回
34	MHSK-47	3 H -35	円形	径105・深さ45	不明	土器片 磁器片	繩文(中期初頭)	第30回
35	MHSK-48	3G-3H-41-42	楕円形	長軸260×短径130・深さ26	N-90°E	土器片	古代	第70回
36	MHSK-49	3G-2H-41-42	楕円形	長軸260×短径235・深さ115	N-110°W	土器片	時期不明	第70回
37	MHSK-50	3G-3H-30-31	楕円形	長軸195×短径175・深さ27	N-24°W	土器片	古代	第71回
38	MHSK-51	3E-3I-32	楕円形	長軸86×短径72・深さ110	N-22°W	土器片 磁器	繩文(五領ヶ台)	第28回
39	MHSK-52	3 E -31	楕円形	長軸69×短径55・深さ108	N-62°W	土器片	繩文(五領ヶ台)	第28回
40	MHSK-56	3 X -51	楕円形	長軸120×短径75・深さ40	N-12°E		繩文	第30回
41	欠番							
42	MHGK-20	3 G -43	円形	径172・深さ92	不明	土器片 磁器片	近代以降	第71回
43	MHGK-25	3G-3H-45-46	長方形	長軸225×短軸77・深さ57	N-22°W	土器片 磁器片	近代以降	第71回
44	MHGK-41	3 G -34	不整方形	長軸300×短軸170・深さ73	N-29°W	須恵器破片	近代以降	第71回
45	MNSK-1	F -30	I' 形	径150・深さ55	不明		繩文	第31回
46	MNSK-2	2 A -9	不整円形	径135・深さ39	不明		繩文	第31回
47	HHSK-3	F -40	I' 形	径 90・深さ21	不明		繩文	第31回
48	HHSK-4	J-K-42	楕円形	長軸 80×短径 70・深さ36	N-71°E		繩文	第31回
49	HHSK-5	I -39	楕円形	長軸190×短径85・深さ38	N-38°W		繩文	第31回
50	HHSK-13	Z-2A-31-32	楕円形	長軸210×短径135・深さ116	N-84°W		繩文	第29回
51	HHSK-14	2 A -32	楕円形	長軸216×短径85・深さ105	N-90°W		繩文	第29回
52	HHSK-15	S -46	不整円形	径185・深さ48	不明		古代以降	第71回
53	HHSK-16	S -46	不整円形	径210・深さ64	不明		古代以降	第71回
54	HHSK-17	2 D -34	楕円形	長軸 90×短径 70・深さ114	N-69°W	土器片	繩文	第29回

4. 集石(第32図 PL7)

(位置) 東原遺跡エリア内の南端部分の2B-41・42区にまたがり検出された。

(形状) 遺構確認時に円碟が数個見られたことから、調査に至った。出土した土層はソフトローム層と上層の褐色土層の層界付近であった。調査の結果は、ほぼ1mの範囲内で、南北にそれぞれまとまって出土した。深さは最上の碟と最下層の碟のレベル差が約8cmである。この集石が確認された場所には、土坑と判断できる明瞭な窪みは確認されなかった。このようなものは、旧石器時代の碟群の可能性も考えられようが、明瞭にローム層中に検出されたものではないことから集石とした。

(遺物) 出土した碟は全部で19個である。すべて自然面を残す碟である。ほとんどのものが熱を受けた影響からか、赤化しており煤の付くものも2点見られた。多くは割れて出土した。これらの碟は整理作業の中で多數接合した。石材を母岩別に分けると3種類の砂岩・流紋岩、1種類の泥岩・ホルンフェルスに分けられた。砂岩Aの接合資料は7個の破片が接合した。接合資料で一番離れて接合したものは、約50cm離れている。

(所見) この集石が使用された時期については、時期を明確に示すものが伴出していないが、縄文時代のものと位置付けたい。



集石出土礫一覧表

No.	石材No.	重量(g)	赤化	煤	接合資料
1	砂岩B	129.0	○		
2	砂岩C	150.0			
3	流紋岩C	110.5	○		
4	砂岩A	6.5	○		5.17
5	砂岩A	209.5	○		4,14,16,17,18,19
6	流紋岩A	125.0	○		8.9
7	流紋岩A	42.0	○		8
8	流紋岩A	67.5	○		6.7.9
9	流紋岩A	23.5	○		6.7.8
10	泥岩A	180.0	○		
11	ホルンフェルスA	101.5	○	○	
12	流紋岩B	26.5	○		13
13	流紋岩B	111.0	○		12
14	砂岩A	9.5	○		5.17
15	流紋岩D	90.5	○		
16	砂岩A	29.0	○		5.18,19
17	砂岩A	5.5	○		4.5,14
18	砂岩A	52.0	○	○	5.16,19
19	砂岩A	9.0	○		5.16,18

石材No.	重量(g)
砂岩A	320.5
砂岩B	129.0
砂岩C	150.0
流紋岩A	258.0
流紋岩B	137.0
流紋岩C	110.0
流紋岩D	90.0
泥岩A	180.0
ホルンフェルスA	101.5

5. 焼土址 (F P) (第33図 PL 6・17・18)

(規模・状況) 焼土址としたものは全部で9基確認された。形態的には第1・3・8・9号焼土址のように平面形が円形に近いものと、第2・4・5・6・7号焼土址のような梢円形に近いものがある。これらはいずれも皿状の底面を持ち、壁は緩く立上りを見せる。覆土上層は焼土ロックや焼土粒が多量に含まれ赤みを帯びる。下層は褐色土であり、焼土粒が含まれる。底面は、堅穴住居跡内に作られる炉のように赤変硬化しているものは認められない。

いずれの焼土址も深さは10~20cm前後であり、底面は平坦である。部分的に底面より深く焼土粒を含む凹みが見られた。

それぞれの焼土址の確認された位置は、前谷東遺跡エリア内の2Fラインから2Mライン内に取まり、南北方向に間隔をあけて展開している。第1号焼土址は埋没谷に近接した2L-49・50区に所在し、第6号土坑と重複関係にある。第6号土坑は時期的に新しいものであるが、遺物は縄文時代中期阿玉台式期のものが出土している。第2号焼土址は2G-44区にあり、第3号焼土址は2G-H-41区に所在する。第4・5・6号焼土址は2H-L-37区にそれぞれ近接して確認され、第7号焼土址は2G-35区に、第8号焼土址は2J-35区に、第9号焼土址は2K-35区に確認された。

(出土遺物) それぞれの焼土址から少なからず遺物が出土している。遺物は土器片や石器の剥片などである。出土した土器の中で時期が決定できるものは、いずれも縄文時代中期阿玉台式期のもので、僅かに中期初頭の特徴を持つ土器も出土している。第2・4・5号焼土址やその周辺から出土した土器の中には、赤化しろくなつたものが含まれている。第1号焼土址と重複関係を持つ第6号土坑からは土器表面が発泡した土器が出土しており、本来は第1号焼土址に帰属するものかも知れない。また第1号焼土址からは黒曜石の剥片が出土し、第2号焼土址からはチャートの剥片が出土している。第8号焼土址からは調整剝離がなされた黒曜石が出土し、同資料は熱または摩耗のためか表面が非常に劣化している。

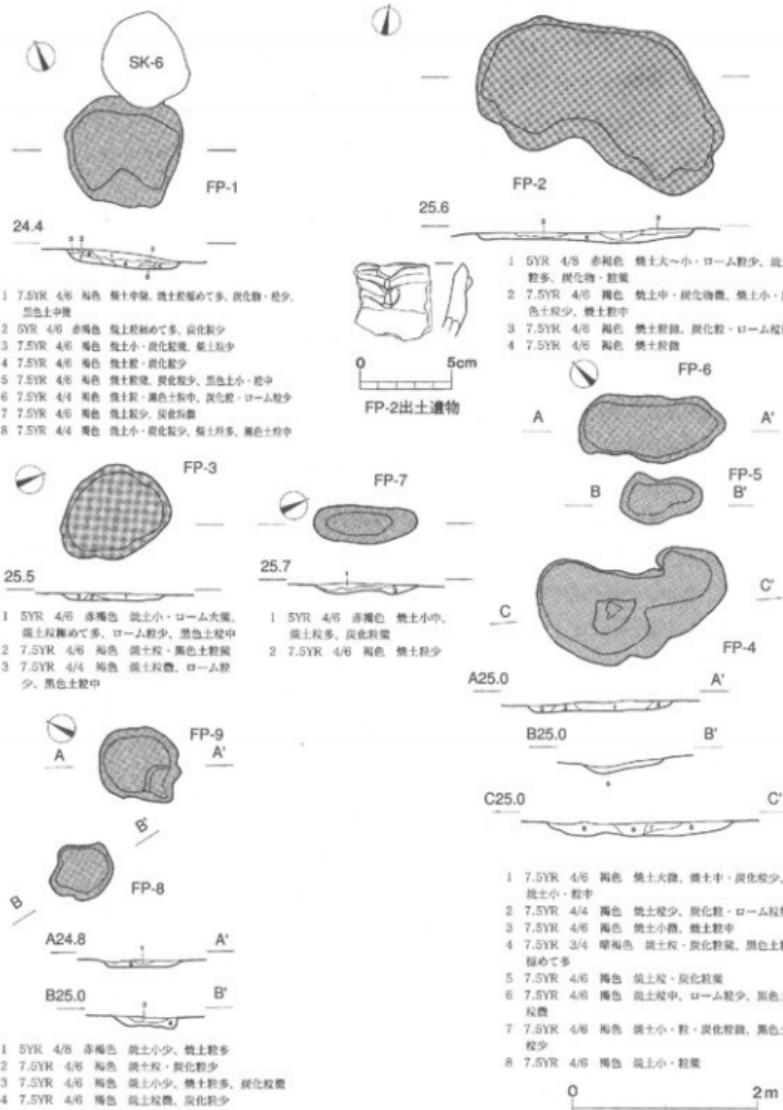
(所見) これらの焼土址の底面は、いずれも赤変硬化しておらず、覆土上層が赤味を帯びるのみである。炉のような恒常的な機能は想定できないよう思う。遺構の時期は数少ない遺物から判断すると阿玉台式期(中でも阿玉台I b式には確実に伴うものと思われる)のものである。

現状の遺構確認面がソフトローム上面であることから判断すれば、使用当時の掘り込み面からの深さは増すものと考えられる。

これらの遺構の立地は、ほぼ同様な時期の堅穴住居跡が確認されたエリアから離れていることから、堅穴住居跡を基軸とした居住に関連した機能は考え難いように思われる。

第2号焼土址出土遺物

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期
-	深鉢	口縁	内部内削ぎ状の口唇部。口縁部Y字状の粘土帶	明赤褐	長石・石英	阿玉台



第33図 焙土址

6. 埋没谷(第34・35図 PL7)

(位置) 遺跡群の所在する台地に、東方向から奥深く入り込む谷の最奥部付近北側に位置する。前谷東遺跡エリア内の2K・2L・2M・2N・2O-50・51区にある。表土排除後の標高は約23.6mで、南に向け緩やかに傾斜している。

(調査) 表土排除後の埋没谷は、南に開いた半円形の暗褐色土のプランとして確認され、その中には多量の遺物が含まれていた。遺物は土器片が目立ち、時期的には縄文時代中期阿玉台式期のもののみが含まれているように観察された。

調査は埋没谷にかかるグリッドごとに掘り下げ、遺物を取り上げて行うこととした。2M系区のグリッドについては最終的に地山面まで掘り下げ、南北方向の土層観察をすることとした。また52ライン(前谷東調査エリア南端ラインと符合)についても幅1mで地山面まで掘り下げ、東西方向の土層堆積状況を観察した。

出土遺物は微小ものは除き、各グリッドごとに位置を記録して取り上げた。取り上げた遺物は、各グリッドの合計で1,000点を越えた。出土した遺物のほとんどは埋没谷覆土最上層からのものであり、縄文時代中期阿玉台式土器破片である。加えて黒曜石の刷片も目立って含まれていた。下層からは旧石器時代の遺物が少数出土した。

(形状) 遺構確認面上の埋没谷プランは北から南に緩く傾斜している。埋没谷地山面の南北方向の状況は、2M-51区杭から南に60cm付近まで緩やかに傾斜し、その後急傾斜となり、2M-52区杭付近で谷底に至りやや平坦となる。これらの地山面を標高で表すと2M-50区杭で24.2m、2M-51区杭で23.4m、2M-52区杭で22.1mを示す。

同じく東西方向の状況は、谷地山面が2J-52区杭付近で下降し始め、2K-52区杭の東に2m付近で底面に至る。逆に2N-52区杭付近で上昇して、2O-52区杭で傾斜が緩くなる。現状で計測出来る調査エリア内の埋没谷の規模は、深さ1.7m・幅約18mで南に向いて開いている。

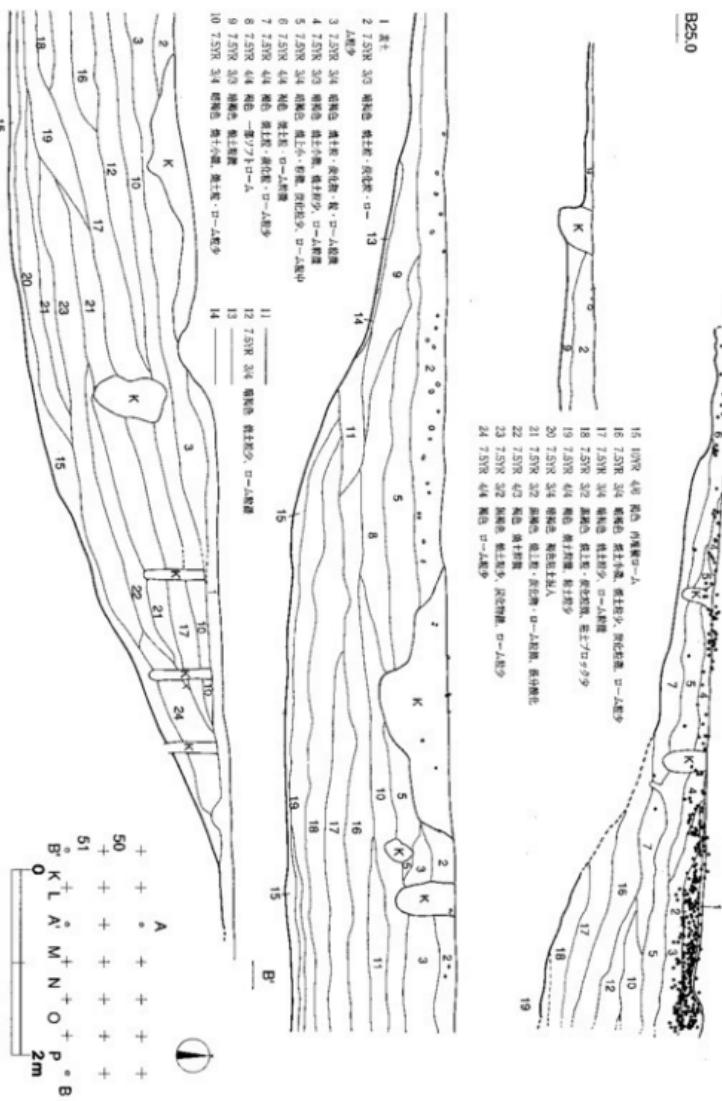
(堆積土層) 埋没谷の最上層から地山面までの土層は全部で24層に分層ができた。南北土層断面図では、最上層は暗褐色土の第2層が大部分を占め、遺物包含層となる。部分的にこの上層に表土が存在する。谷北側では第4層や第6層が最上層となり、やはり遺物を含んでいる。第2層の下層にあたる第3層からも若干遺物が出土している。この包含層に含まれる遺物のほとんどは、縄文時代中期阿玉台式期の土器・石器などである。包含層の厚さは北側で約10cm、南側では約30cmと厚みを増している。遺物出土量も南側ほど多くなる。

東西土層断面図における遺物の包含状況は、ほぼ第2層中に収まる。

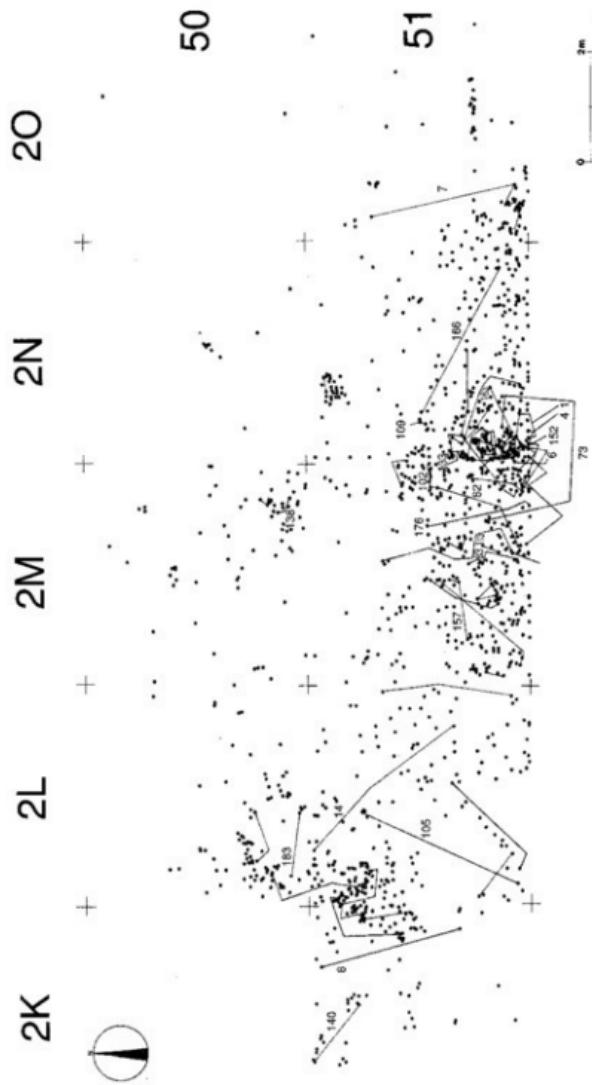
縄文時代の遺物以外に旧石器時代の遺物が少量出土している。この遺物が確認されたのは第7層中や第5層と第10層の層界付近であり、縄文時代の遺物出土レベルとは異なる。第7層は褐色土層でローム粒を多量に含み、ローム層の再堆積土層と考えられる。

A24.4

A'



第34図 埋没谷土層堆積状況



第35図 埋没谷遺物出土状況(図中にNo.を付けたものは、接合したもので報告書に掲載されているもの)

上記土層以降は遺物の確認された土層はないが、最下層に及ぶ土層にはそれぞれ焼土粒のようなものが含まれていた。

(所見) 本埋没谷の最上層には多量の遺物が確認された。これらのことから、縄文時代中期阿玉台式期には同時代の人々により廃棄行為が行われる場所であったことが理解できる。そして同時期には谷のほとんどが埋没していたことが分かる。埋没谷の近接地には、多数の土坑や焼土塙があるものの同時期の竪穴住居跡は確認されていない。このことから、東原遺跡エリアに確認された同時期の竪穴住居跡で使われたものがこの埋没谷に捨てられたことが考えられた。しかし土器接合では両出土遺物の接合は見られなかつた。

(出土遺物) 各グリッドの図中に記録した遺物は、2L-50区88点・2M-50区67点・2N-50区10点・2O-50区2点で2K-51区103点・2L-51区199点・2M-51区333点・2N-51区342点・2O-51区88点である。出土遺物は多数の阿玉台式土器と土製品として土器片錐・土製円盤が出土している。この他に石器や剥片が出土している。石器は黒曜石製のものが多く、スクレイパー類が多数を占めている。また蛇紋岩製の垂飾品も出土した。

多くの出土遺物の時期は、阿玉台Ⅰa・Ⅰb式期を主体とし、阿玉台Ⅱ式期のものも若干出土している。この他、中期初頭や中期後半や後期前半の土器が僅かながら出土した。

(出土土器) (第36~47図 P L18~27)

埋没谷から出土した土器は、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式のものから後期堀之内式のものが出土している。これらの土器の大多数は阿玉台式期のものであり、この中でも特に阿玉台Ⅰa・Ⅰb式期のものが目立つ。以下出土土器についてその特徴などについて述べる。

第1群 五領ヶ台式

第2群 五領ヶ台式から阿玉台式にかけてのもの

第3群 阿玉台Ⅰa式及びⅠb式

- A 阿玉台Ⅰa式の口縁部
- B 阿玉台Ⅰb式の口縁部
- C 無文土器の口縁部
- D 脚部
- E その他の土器

第4群 その他の時期のもの

第5群 底部

第1群 五領ヶ台式(第39図No.8~12)

出土した量は非常に少ない。No.8~10は口縁部付近に平行した有節沈線が引かれている。No.11は無文の土器であるが同群に含めた。いずれも五領ヶ台II式と考えられる。

第2群 五領ヶ台式から阿玉台式にかけてのもの(第39図No.13~17・25・27~31)

出土量は少數である。これらの土器は近年注目されており、「阿玉台直前型式」とも呼ばれている。ここでは上記土器の特徴を持つものとして五領ヶ台II式や阿玉台I a式とは区別した。

土器口縁部は、波状口縁波頂部下に隆起線や有節沈線による渦巻文が見られる(No.13・16・17)。また波状口縁波頂部裏に、粘土貼付による、「C」や「O」または「△」状の貼付がなされ、独立した突起となる(No.25・27~31)。これらの中には粘土紐を取り付けたものと、粘土貼付後削り取ったものがある。この突起部に三角彫刻文が施文されるものもある。これらの土器の一部には、突起下の口唇上に有節沈線が施文されるものがある。

第3群 阿玉台I a式及びI b式(第36~44図No.1~7・18~23・32~156)

埋没谷から出土した土器の中で大多数を占めるものは、本群の土器である。本群は阿玉台I a・I b式を含む。本群の土器の記載にあたっては、下記の項目に分けて述べる。

- A 阿玉台I a式の口縁部
- B 阿玉台I b式の口縁部
- C 無文土器の口縁部
- D 腹部
- E その他の土器

A 阿玉台I a式の口縁部(第39~41図 No.18~24・32~49・51・54・56・58~60・62・63・66・69・73~81)

いずれも口縁部破片である。口縁部は波状口縁のものと平縁のものがあるが、波状口縁のものが目立ち、一部口縁波頂部が叉状になるものもある(No.48)。波状口縁のものは、波頂部裏側に粘土紐を貼付したり(No.32・34・35・37)、有節沈線及び沈線により施文がなされるもの(No.33・36・39~44)や、彫刻文や類似した施文を持つもの(No.45~47)がある。また波頂部直下に粘土棒を挟み込んだ突起が付されるものもある(No.24)。また口縁部等には隆起線により、区画文の祖形的なもの(No.18~22)や、区画の幅の狭い稚拙な表現のもの(No.49・51・74・75・77)が見られる。口縁部の区画と区画の中間に丸い扁平な粘土が貼付されるものがあり、文様割付けの中心的な位置付けがなされていると考えられる。

これらの隆起線に沿って1条の角押文が施文される。隆起線に沿う角押文は、円形の竹管または半截竹管を施文方向と平行に引きずっと様子が伺えるものが多い。

No.37は本類土器の中で唯一縄文が施文されているものであるが、本来は第2群土器の中に入れられる可能性がある。一部口縁部から胴部にかけてのものを見ると、胴部にはなでただけのような粗雑な輪積痕が残っている (No.21・48)。

口縁部の断面形を見ると、内側が削がれたような状態で、内面に稜を持つものが多い。

土器の胎土には砂粒を多く含むものが目につき、金雲母を多量に含むものは少ない。

B 阿玉台 I b 式の口縁部 (第36~38・40~42図No.1・2・7・50・52・53・55・57・61・64・67・68・70~72・82~98)

埋没谷出土の遺物の中で、比較的形態が理解できるものが出土している (No.1・7)。これらはいずれも胴部に最大径を持ち、これより口縁部径が小さい。頸部は屈曲し、口縁部が内湾するいわば「甕」と言った方が妥当な形態である。いずれも平縁の土器で、非常に大型の土器である。この他の口縁は平縁のもの (No.1・2・7・50・53・68・70~72・82・83・85~87・89~96) や、若干波状のもの、叉状のものもある (No.61・64・67・88・97・98)。これらの口縁部には、明瞭な隆起線による楕円区画文が作り出されているものが多い。口縁部の区画文直下には、竹管状工具による波状文が横位に施文されている。区画文内外には角押文による意匠文も見られる。

口縁部には、隆起線による区画文と同時に突起が付くものと、突起のみが付されるものがある。突起は1個のものと、2個連結したものがある (No.71・69)。この2個連結した突起は、扇状把手の未発達な状態のものと思われる。口縁部に付く突起には、粘土棒を挟み込む形態のものは見られず、粘土帯を二段に指で摘んだものが多い。この類の口縁部内面の状況は、口唇部や頸部に明瞭な稜が存在する場合が多い。

土器の胎土は、金雲母を多量に含むものが多い。金雲母を多量に含むものは、大粒の石英や長石も含まれている。

C 無文土器の口縁部 (第42図No.101~110)

多くは口縁部が平縁で、一部波状口縁を示す (No.110)。口唇部断面形は多くが、先端に丸みを持つものである。頸部は屈曲しているものがある (No.102・105・106)。一部沈線や隆起線による区画文状の痕跡が見られるものもある (No.107・110)。阿玉台 I a・I b 式の一部をなすものと思われる。口縁下に粗雑なヒダ状文を持つものもある。

D 脣部(第37・43図No.3~6・118~153)

これらは深鉢の脣部でも上半部分のものと下半部のものがある。上半部には、梢円区画文や角押文を伴う隆起線が見られ、波状沈線も見られる(No.118~130)。これら様々な文様は脣部の最大径付近まで施文されているようである。これらの文様は口縁部の突起や区画文と対応して割付けられているようである。

脣部破片の中でも下半部のものと思われるものはNo.118・131~145・150~153であり、多くは土器製作時の輪積み痕を利用したヒダ状文が見られる。ヒダ状文には、粗雑なものと比較的整っているものとがあり、傾向として整っているものは阿玉台I b式以降の可能性が考えられる。一部には縱位に隆起線が貼付されているものがある。

No.150~153は直立ぎみの脣部を持ち、頸部は外側に屈曲しているようである。頸部より上には、ヒダ状文がみられないものもある。

無文のものもある(No.146~149)。

E その他の土器(第44図No.154~156)

No.154・155は小型の土器口縁部である。いずれも無文である。No.156は口縁部が脣部に対しすばまる器形を持つもので、口唇直下に円孔が巡る。土器の胎土には多量の金雲母が含まれている。

第4群 その他の時期のもの(第45図No.157~159)

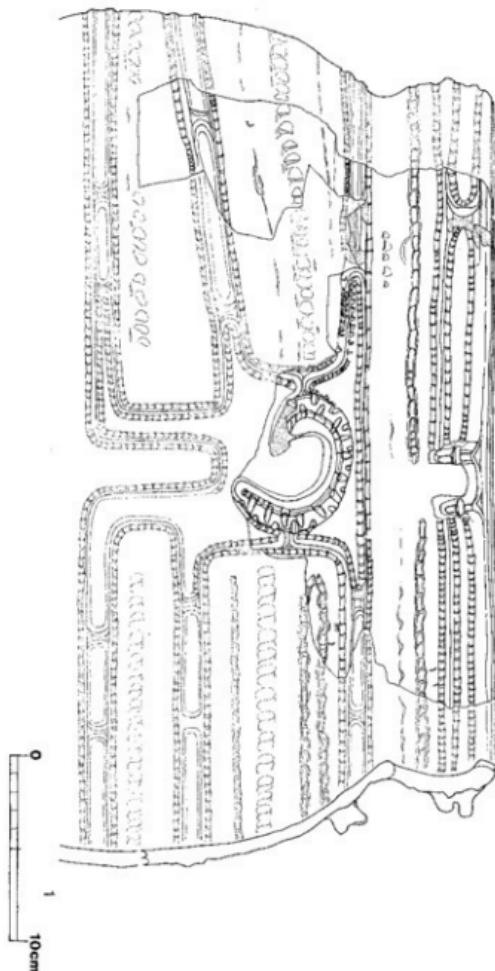
本群に含めたものは、埋没谷出土の土器の中で極少量出土したもので、縄文時代中期後半以降のものを一括して扱う。No.157・158は加曾利E式土器である。No.159は後期壠之内I式の注口土器破片である。脣部破片でソロバン玉状を呈し、微隆起線による渦巻文が施文されている。

第5群 底部(第46・47図No.160~187)

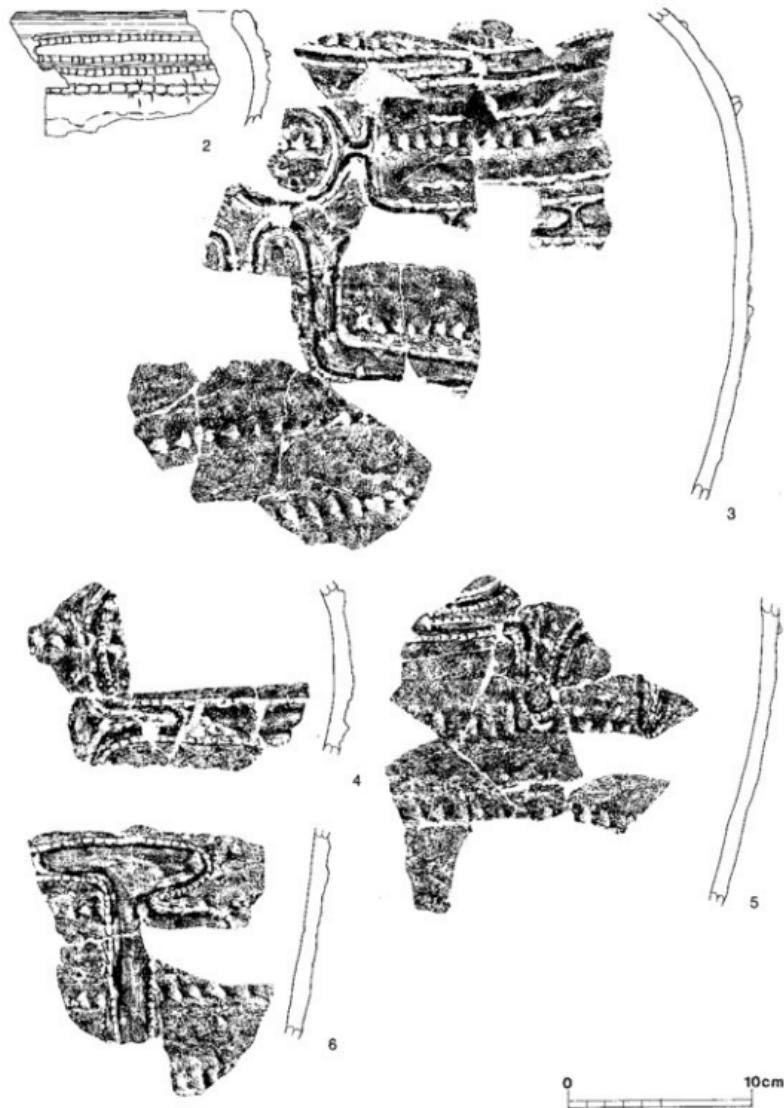
本群に含めた土器底部は、複数時期のものが含まれていると考えられる。多くは縄文時代中期の阿玉台式期のものと思われるが、その前後の時期のものも含まれていると考えられるため、第3群には入れず独立して扱う。

多くの場合は底面からほぼ直立気味に脣部が立ち上る(No.163~177)。この種のもの以外に、底面からすばまる形態を持つものとしてNo.160・161がある。No.178~185は底面から外側にやや外傾する形態をもつものである。

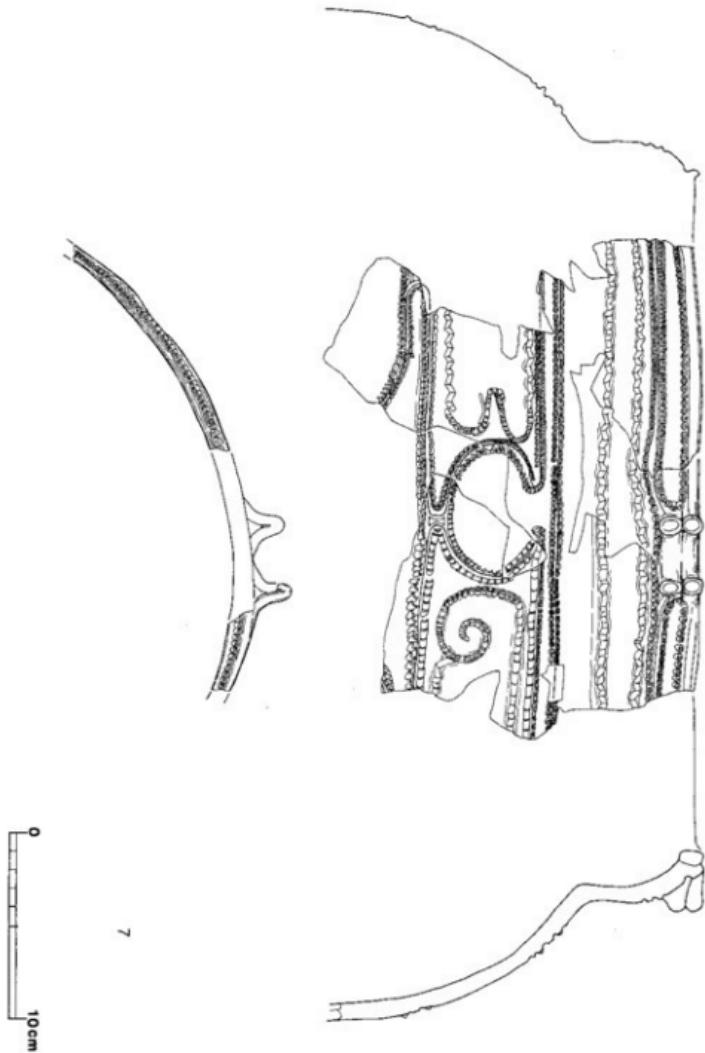
胎土の觀点では、大きく分けて金雲母が含まれるものと、砂粒を多く含むものがある。金雲母の含有が目立つものとして、No.161・166~172・174・177・178・180・181・183~185がある。金雲母が多量に含まれる胎土には大粒の石英や長石が含まれる割合が高い。砂粒が多く含



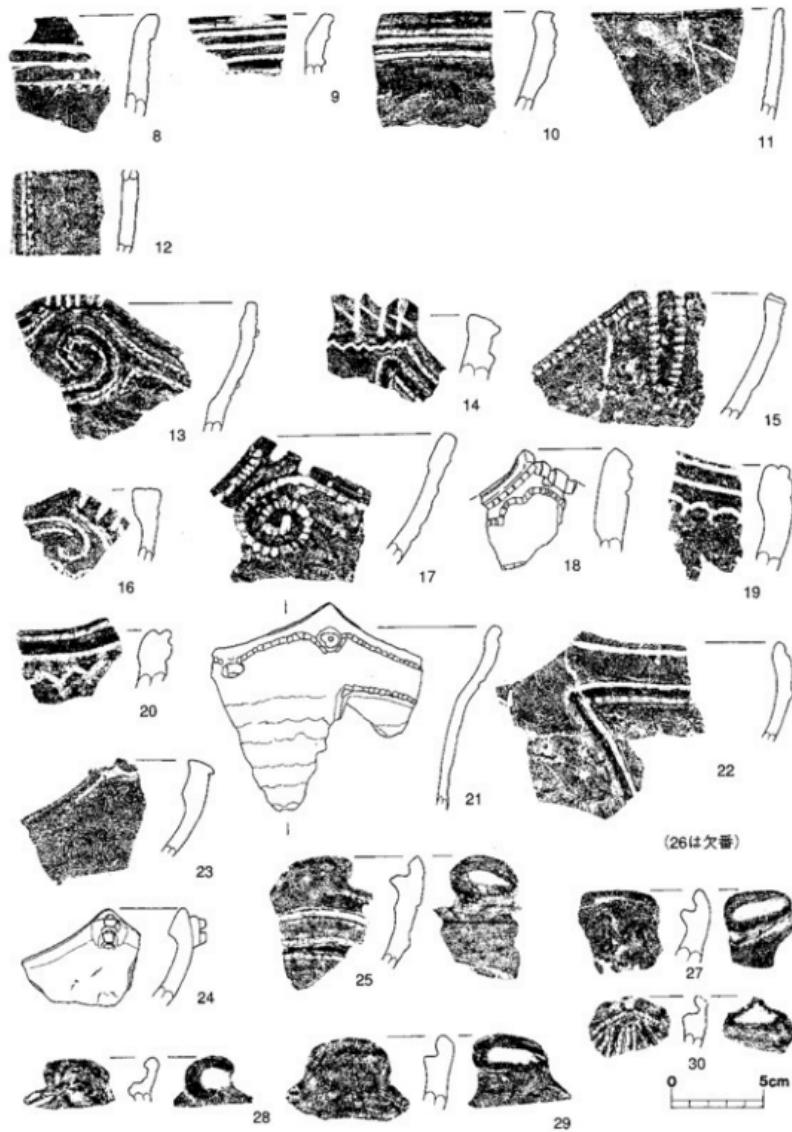
第36図 埋没谷出土土器(1)



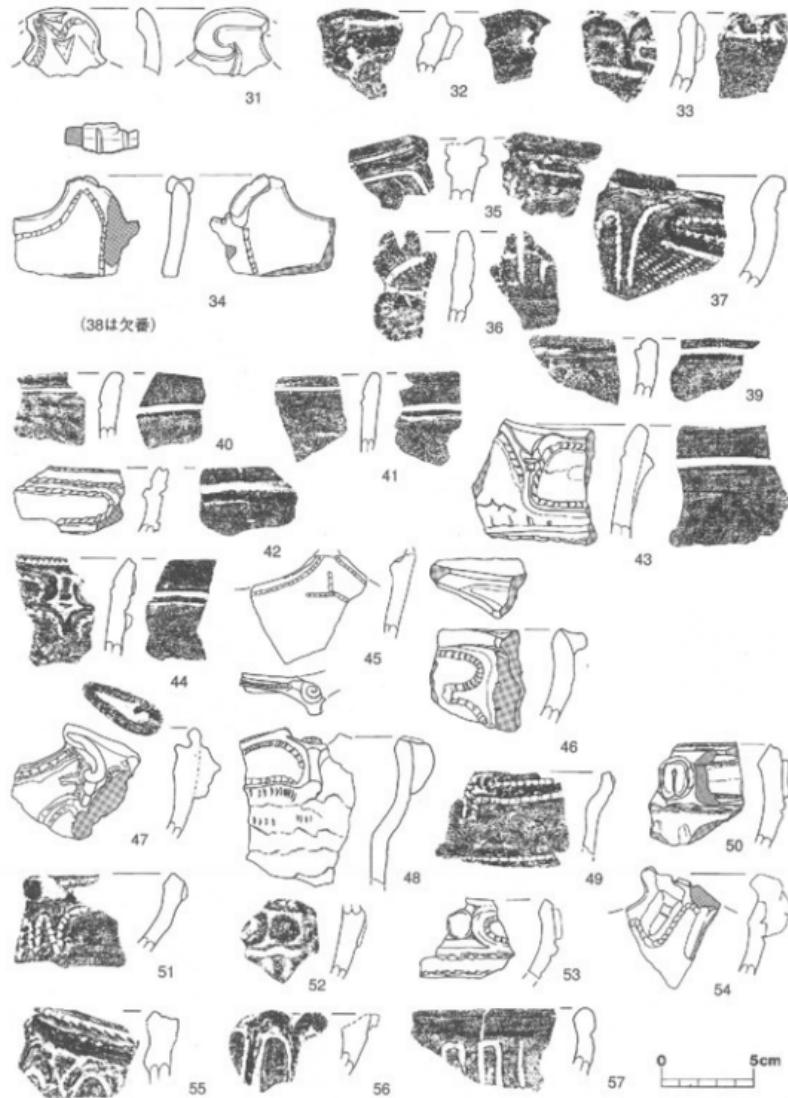
第37図 埋没谷出土土器(2)



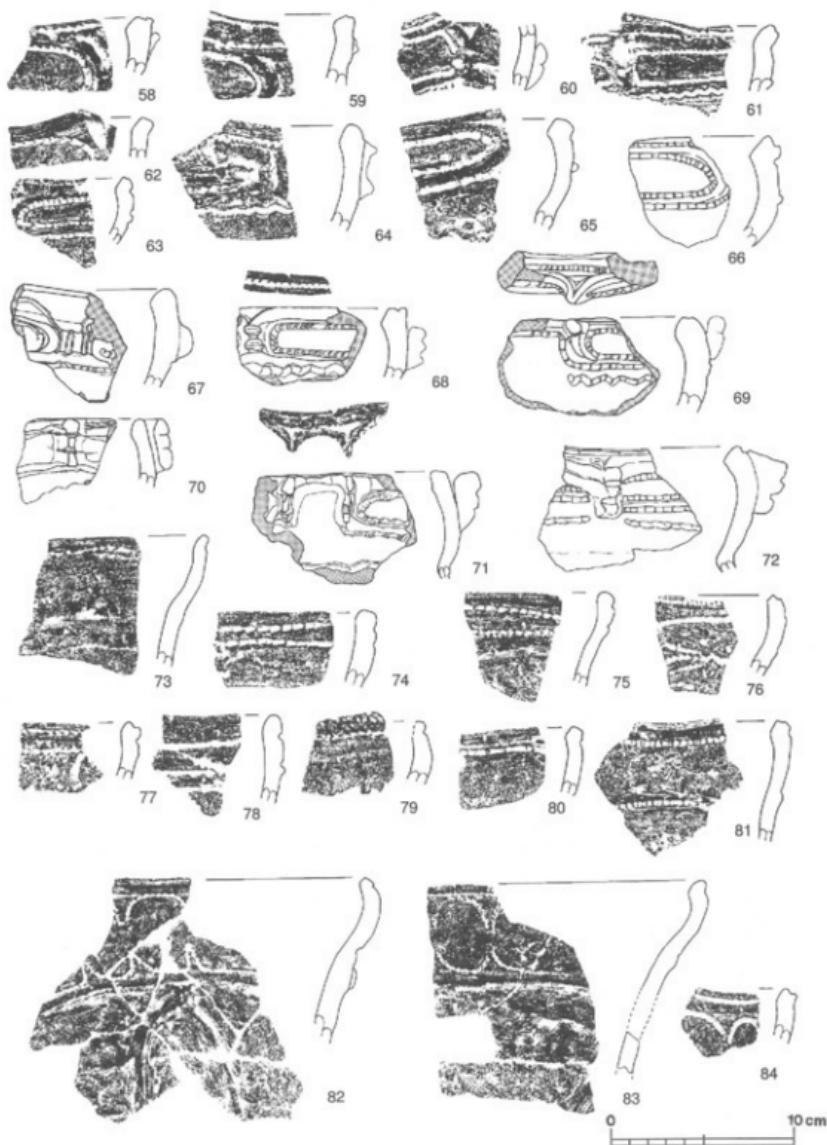
第38図 埋没谷出土土器(3)



第39図 埋没谷出土土器(4)



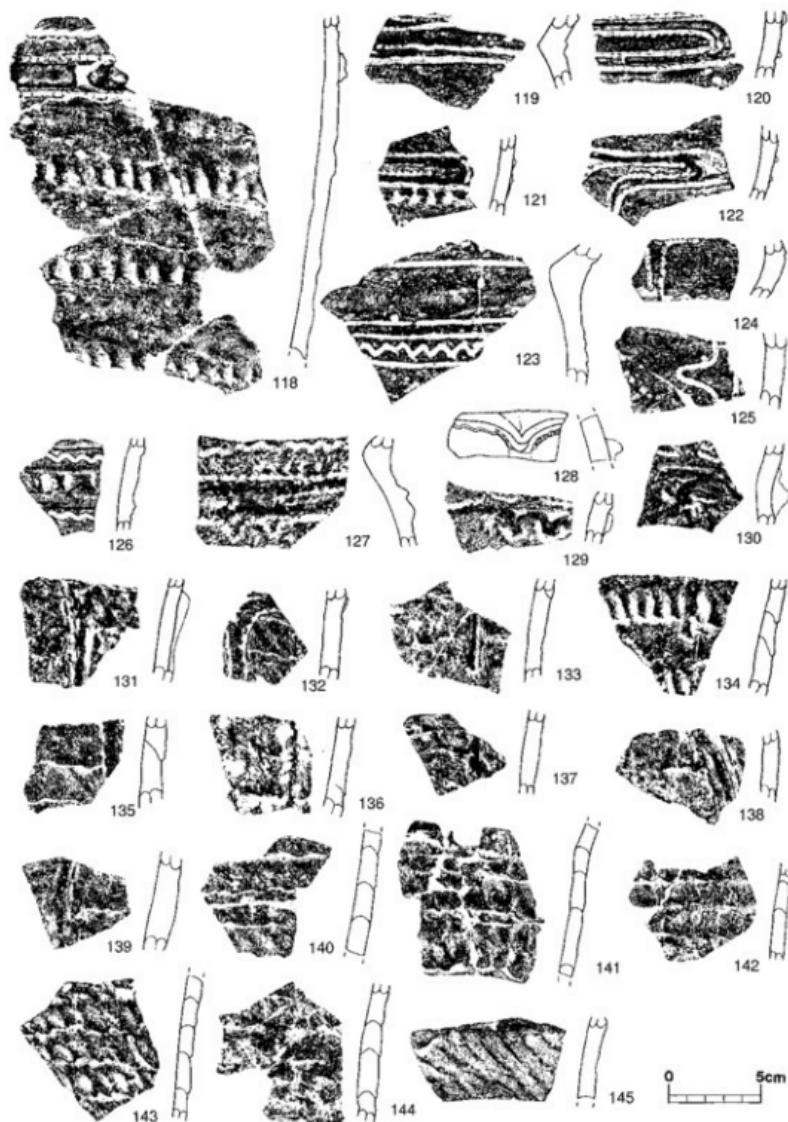
第40図 埋没谷出土土器(5)



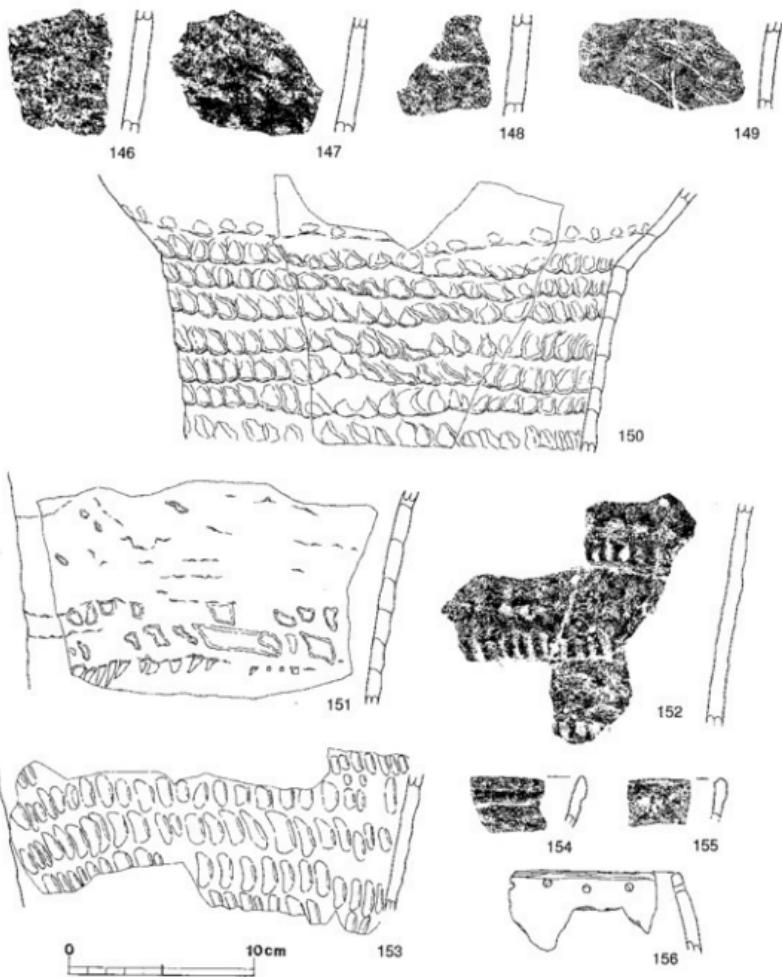
第41図 埋没谷出土土器(6)



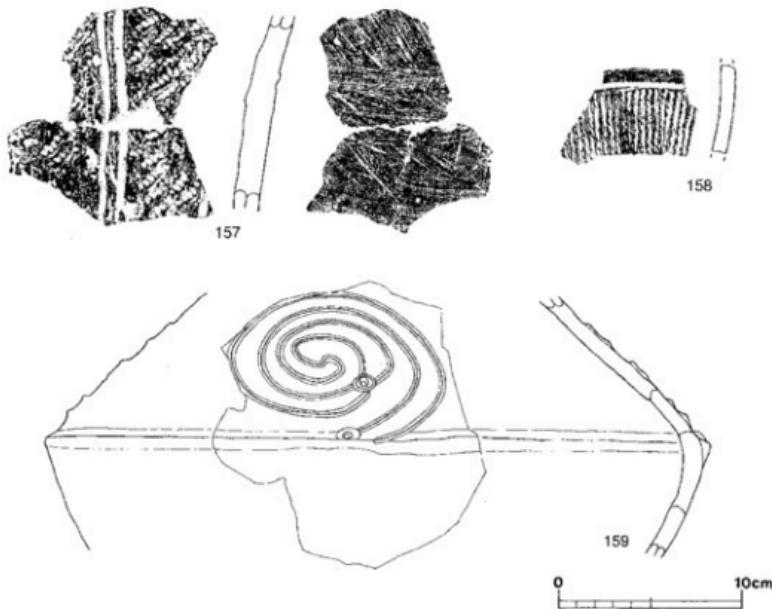
第42図 埋没谷出土土器(7)



第43図 埋没谷出土土器(8)



第44図 埋没谷出土土器(9)

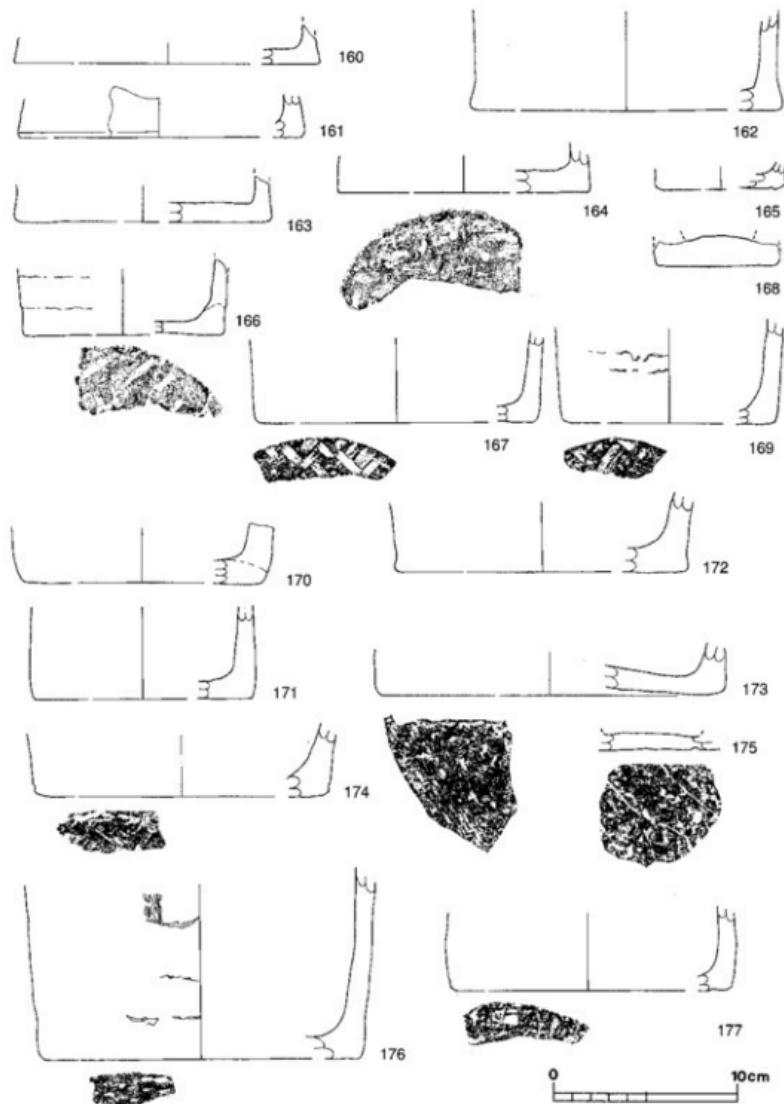


第45図 埋没谷出土土器(10)

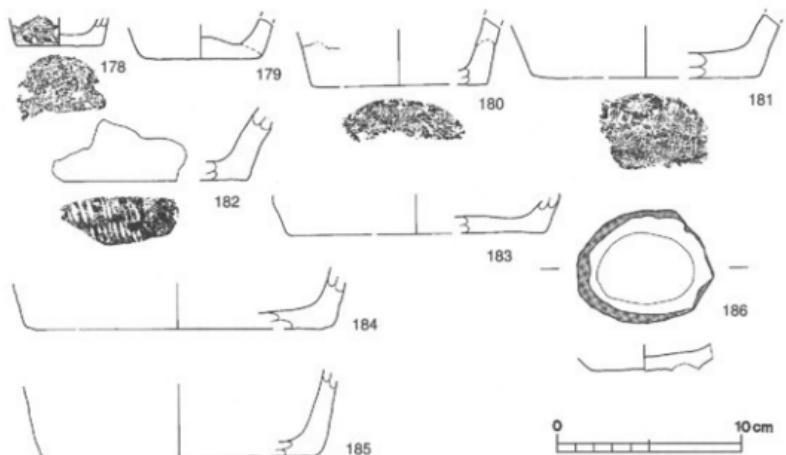
まれるものとして、No162・164・175・176・179がある。

これらの土器底面には編物痕を残すものが多く、特に底面の中央より周縁にその圧痕をとどめるものが多い。

これらの土器底部は、阿玉台Ia・Ib式期のものが多く含まれていると考えられる。一般的には阿玉台Ia式には砂粒を含むものが多く、阿玉台Ib式の土器には金雲母を含むものが多いようである。



第46図 埋没谷出土土器(11)



第47図 埋没谷出土土器(12)

No.	器種	部位	彫形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	圓弧形。口唇有節波紋。斜付縦條ヒダ状捺目。縦帶上三叉状。縦帶下斜夷。外側交叉刻突・中央有滑波紋。輪郭部被磨耗文。A36.0 B(23.6)	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	2・3と同一
2	深鉢	口縁	口唇部有節波紋。有節波紋が沿う費現縦條円周文。ヒダ状捺目。	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	1・3と同一
3	深鉢	胸	有節波紋が沿う費現縦條により円形・方形刻突文、意匠文。ヒダ状捺目。	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	1・2と同一
4	深鉢	胸	有節波紋が沿う費現縦條意匠文。輪郭上ヒダ状捺目。	灰褐	雲母・長石	阿玉台Ⅰb	
5	深鉢	胸	有節波紋が沿う費現縦條意匠文。輪郭上ヒダ状捺目。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
6	深鉢	胸	有節波紋が沿う費現縦條意匠文。輪郭上ヒダ状捺目。	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	1と同一?
7	深鉢	口縁	圓弧形。口唇圓刻突。斜付縦條ヒダ状捺目。縦帶上三叉状。縦帶下斜夷が沿う費現縦條上向き横状文。意匠文。有節波紋、波状波紋。A37.0 B(20.5)	明赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
8	深鉢	口縁	外折。口唇に沿い2条の平行弦波紋。下唇波紋を読み難夷。	にぶい橙		五領ヶ台Ⅱ	
9	深鉢	口縁	内面に残。數段の平行有節波紋。	橙	長石	五領ヶ台Ⅱ?	
10	深鉢	口縁	3条の有節波紋。下唇に向かい3つの葉瓣が広がる。下半葉瓣のケズリ痕。	にぶい橙	石英・雲母	五領ヶ台Ⅱ	
11	深鉢	口縁	無文	にぶい黄褐	石英・長石	五領ヶ台	
12	深鉢	胸	重下波紋、沈模に沿い斜夷。	にぶい黄褐	石英	五領ヶ台Ⅱ	
13	深鉢	口縁	波紋縞。底部波紋刻突。有節波紋が沿う費現縦條意匠文。口唇沿い有節波紋。	にぶい赤褐	長石	五領ヶ台Ⅱ~	
14	深鉢	口縁	波紋縞。斜位一撮波紋刻突。波状波紋。有節波紋が沿う費現縦條意匠文。	橙	長石	阿玉台Ⅰa	
15	深鉢	口縁	波紋縞に沿い斜夷。ここより字状有節波紋下。口唇に沿い有節波紋。	にぶい黄褐	長石	五領ヶ台Ⅱ~	
16	深鉢	口縁	波紋縞を模に口唇部右は縦位有節波紋、左は斜夷。有節波紋による轍き文。	褐	雲母	五領ヶ台Ⅱ~	

No.	型種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
17	深鉢	口縁	波頭部右の口沿に深い凹窓。口縁沿いの右側有節沈線。左は有節沈線。有節沈線による波状文。	灰褐	長石	五領ヶ台日~	
18	深鉢	口縁	波頭部を後に口唇部右は最左短沈線。左は有節沈線。有節沈線による波状文。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
19	深鉢	口縁	波状線。口唇部・口縁沿いに有節沈線。有節沈線波状文。各板底部に刺突。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
20	深鉢	口縁	波状線。口唇部・口縁沿いに有節沈線。有節沈線波状文。各板底部に刺突。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
21	深鉢	口縁	波頭部下ボタン状貼付。口縁沿い右側有節沈線が堤付内側で垂下。微隆起垂下文。	明赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
22	深鉢	口縁	波状線と横筋起線文に追い有節沈線。左側面横筋沈線。横筋上ヒダ状窪み。	にぶい赤褐	石英・長石	阿玉台Ⅰa	
23	深鉢	口縁	内湾。波頭部腰線短沈線。	にぶい褐	長石	阿玉台Ⅰa	
24	深鉢	口縁	内湾。波頭部に縦包模状貼付→腰位に2本駆付を重ねる。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰa	
25	深鉢	口縁	波頭部内側系対称の雨だれ状貼付。口縁・腰部文沿いに有節沈線。	にぶい赤褐	雲母	五領ヶ台日~	
26	欠番						
27	深鉢	口縁	波頭部。内面に非対称の雨だれ状貼付。外面左側有節沈線。	橙	長石	五領ヶ台日~	
28	深鉢	口縁	波頭部。内面にC字状貼付。口縁・口縁沿い有節沈線。	にぶい赤褐	雲母・長石	五領ヶ台日~	
29	深鉢	口縁	波頭部。内面に横円形貼付。波頭部左側刺突列。	にぶい橙	長石	五領ヶ台日~	
30	深鉢	口縁	波頭部。内面に三角状貼付。口縁・微隆起縫沿いに有節沈線。	褐灰		五領ヶ台日~	
31	深鉢	口縁	波頭部。パン先状工具による有節沈線。三角彌縫文。内面C字状貼付。	にぶい褐		五領ヶ台日~	
32	深鉢	口縁	波頭部。口唇部有節沈線を読み内外面対称に貼付文。	明赤褐		阿玉台Ⅰa	
33	深鉢	口縁	波状線。内面三叉状有節沈線。外面ヒダ状器蓋文。横位有節沈線。	明赤褐		阿玉台Ⅰa	
34	深鉢	口縁	波頭部不規則な短沈線。内面器蓋貼付。有節沈線による垂縫文。	にぶい橙	石英	阿玉台Ⅰa	
35	深鉢	口縁	波状線に沿い横円形貼付。内面刺突列。	赤灰	長石	阿玉台Ⅰa	
36	深鉢	口縁	波頭部角部有節沈線。曲線的な有節沈線。内面波頭部より有節沈線垂下。	にぶい褐		阿玉台Ⅰa	
37	深鉢	口縁	波頭部角円状突起。口縁有節沈線。蛙文草跡R L。慈忍藤草文。刺突列。	にぶい赤褐	雲母・長石	阿玉台Ⅰa	
38	欠番						
39	深鉢	口縁	無文。口唇下など。内面に秋。沈線1条。	にぶい黄橙		阿玉台Ⅰa	
40	深鉢	口縁	波状線に沿い秋葉1条。慈忍時のケズリ痕残る。内面水平に沈線1条。	にぶい黄橙		阿玉台Ⅰa	
41	深鉢	口縁	口唇部平坦。内外面に沈線1条。	にぶい褐		阿玉台Ⅰa	
42	深鉢	口縁	波状線。口唇部・外縁横円形区画。パン先状工具による有節沈線。内面貼付。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰa	
43	深鉢	口縁	波状線。有節沈線が沿う垂帶文。内面水平に沈線1条。	灰黄褐	長石	阿玉台Ⅰa	
44	深鉢	口縁	波状線。口唇部直面三角形彌縫文。有節沈線が沿う垂帶文。垂帶文間に横半円形貼付。	橙	石英	阿玉台Ⅰa	
45	深鉢	口縁	波状線。波頭部直面三角形彌縫文。口縁に沿い有節沈線。有節沈線三文。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰa	
46	深鉢	口縁	口唇部三角文。割文を有する高い隆脊。有節沈線波状文。	にぶい黄褐	雲母	阿玉台Ⅰa	
47	深鉢	口縁	波状線。橋円形突起。内側に三文义。裏巻状貼付に沿う割突起。有節沈線文。	にぶい褐	雲母	阿玉台Ⅰa	
48	深鉢	口縁	波頭部凹み唇下溝状貼付。ここより脣帯卓下し左侧に唇文。ヒダ痕起。	にぶい褐	石英・長石	阿玉台Ⅰa	
49	深鉢	口縁	低い横円区画間に縦半円形貼付。区画下に沿う脣帯が脣付下で垂下。	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰa	

No.	器種	部位	基形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎上	時期	備考
50	深鉢	口縁	口唇端部削尖形。有節沈線が沿う横円区画面横筋に沿付。区画下波状沈線。	橙		阿玉台Ⅰb	
51	深鉢	口縁	内面に接。扁平円形點付文。有節沈線波状文。	にぶい橙	石英	阿玉台Ⅰa	
52	深鉢	腹	有節沈線が沿う横円区画面間に扁平円形點付。区画下波状沈線。ヒダ状隆起。	橙		阿玉台Ⅰb	
53	深鉢	口縁	有節沈線が沿う横円区画面間に扁平円形點付。区画下平行する有節沈線文。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰb	
54	深鉢	口縁	波頂部片側に扁平円形點付。短沈線文。口縁と短文付斜位斜付に寄り有節沈線。	にぶい黄	雲母・石英	阿玉台Ⅰa	
55	深鉢	口縁	波頂部有段、平洋口口部に有節沈線。有節沈線が沿う長い懸垂V字彫。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰb	
56	深鉢	口縁	波状線。横円区画面帯文。区画文後方に刻文。区画内有節沈線。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
57	深鉢	口縁	両側の連U字状文・曲線文は有節沈線。中央の連U字状文・並下文は沈線。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰb	
58	深鉢	口縁	波状線。横円区画面帯文。区画文後方に刻文。区画内有節沈線。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
59	深鉢	口縁	波状線。口唇端部有節沈線。口縁に沿う斜面三角形彫籠・有節沈線。	明赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
60	深鉢	腹	口縁直下。有節沈線が沿う横円区画文。区画が接する隣帶上に刻文。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰa	
61	深鉢	口縁	非対称の波状部有節圓形點付。並部下底付點付(欠失)。区画文。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
62	深鉢	口縁	非対称の波底部下に點付(火失)。有節沈線区画文。ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
63	深鉢	口縁	波状線。低い横円帶文沿い・口唇端部に有節沈線。	にぶい橙	雲母・石英	阿玉台Ⅰa	内面炭化物
64	深鉢	口縁	波状線に沿う横円区画・有節沈線。区画下水平に波状沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
65	深鉢	口縁	波状線に沿う横円区画。区画内外・下半の波状文は有節沈線。	にぶい橙		阿玉台Ⅰa	外外面族化物
66	深鉢	口縁	波状線。横円区画陰帶文に沿う有節沈線。	橙	長石	阿玉台Ⅰa	
67	深鉢	口縁	波状線。横円区画陰帶文は有節沈線。隣付上短沈線から出雲。	にぶい橙	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
68	深鉢	口縁	波状線。横円区画陰帶文沿い・口唇端部有節沈線。区画面刻文。波状沈線。	にぶい赤褐	石英	阿玉台Ⅰb	
69	深鉢	口縁	刻文を持つ垂下路筋が右側で区画化。上から見ると舞弊文による三叉状。	にぶい赤褐	石英	阿玉台Ⅰa	
70	深鉢	口縁	刻文を持つ垂下路筋。この上・下方は三叉状。横位沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
71	深鉢	口縁	刻文を持つヒダ状起出。上方2ヶ所三叉状。突起左右区画文。波状沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
72	深鉢	口縁	波状線。刻文付根抵近付。上方は三叉状。横位路筋に沿う有節沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
73	深鉢	口縁	内面に接。口縁に沿う有節沈線1条。輪縁上ヒダ状隆起。	暗赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
74	深鉢	口縁	有節沈線口縁下に2条。	明赤褐	石英・長石	阿玉台Ⅰa	
75	深鉢	口縁	波状線。口縁下は波状線に沿い、下方は水平に通る有節沈線。ヒダ状隆起。	灰褐	長石	阿玉台Ⅰa	
76	深鉢	口縁	波状線。口唇端部・外面有節沈線文。	にぶい橙	雲母	阿玉台Ⅰa	
77	深鉢	口縁	口唇端部・口縁下有節沈線。垂下沈線文。	にぶい黄	石英・長石	阿玉台Ⅰa	
78	深鉢	口縁	口唇平坦。低い舞弊文。有節沈線。	にぶい橙	雲母	阿玉台Ⅰa	
79	深鉢	口縁	内溝。口唇端部・口縁下有節沈線。	褐色	雲母	阿玉台Ⅰb?	
80	深鉢	口縁	口縁下・下方曲線文は有節沈線。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
81	深鉢	口縁	波状線に沿う有節沈線。報広の舞弊文を介し微降起線文が水平に通る。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
82	深鉢	口縁	波状線。角張有節沈線。X状突起より撫近起座下。輪縁上ヒダ状現出。	褐	雲母・長石	阿玉台Ⅰb	

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
83	深鉢	口縁	波状線。対置弧文有節沈線。唇部後縁に横帶上ヒダ状突起。斜置接縫文。	にぶい褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
84	深鉢	口縁	波状線。口唇端部・口縁下の連弧文は有節沈線。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰb	
85	深鉢	口縁	蘭瓣起縫文。有節沈線。	橙		阿玉台Ⅰa	
86	深鉢	口縁	波状線。微隆起縫文。口唇端部有節沈線。波状沈線。	褐灰	長石	阿玉台Ⅰb	
87	深鉢	口縁	波状線。瓣帶文。有節沈線による扇円区画。波状沈線。	明赤褐		阿玉台Ⅰb	
88	深鉢	口縁	波状線。水平に微隆起縫文・有節沈線が巡る。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
89	深鉢	口縁	棒状貼付上に斬文。口唇部三文内円形貼付(末括き三文?)有節沈線。	にぶい褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
90	深鉢	口縁	2字の横帯貼付をつまみ上げ収位貼付。ヒドから見ると扁平な三文。	灰褐	石英	阿玉台Ⅰb	
91	深鉢	口縁	内湾。瓣位蓋封。口唇部三叉状。口縁沿い有節沈線貼付に引い帝下。	明赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
92	深鉢	口縁	新文付瓣位貼付。口唇部三叉状。口唇下有段、沈線1条。瓣形吻ケズリ乳。	明赤褐	長石	阿玉台Ⅰb	
93	深鉢	口縁	劍文付瓣位貼付。貼付脇なし。口唇部三叉状。	にぶい橙	雲母	阿玉台Ⅰb	
94	深鉢	口縁	劍文付瓣位貼付。貼付脇なし。口唇部三叉状。	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
95	深鉢	口縁	口縁下X状瓣帶文。輪積上ヒダ状隆起。	にぶい褐	長石	阿玉台Ⅰb	
96	深鉢	口縁	瓣位貼付(上部欠失)。口唇部三叉状。瓣横板なできられず残る。	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
97	深鉢	口縁	波状線。波頂部下刻文付瓣位貼付。口唇端部剝突彌。	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
98	深鉢	口縁	赤封唇の世状紋。左側口唇部有節沈線。外唇輪横板なできられず残る。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
99	深鉢	口縁	波状線。波頂部下貼付剥落痕。	灰褐	長石	阿玉台Ⅰb	
100	深鉢	口縁	口縁下沈線1条。	にぶい褐	長石	阿玉台	
101	深鉢	口縁	無文。	にぶい黄		阿玉台	
102	鉢	口縁	口縁下なし。輪積上ヒダ状隆起。 A21.6 B(6.6)	橙	長石	阿玉台	
103	鉢	口縁	口縁下浅く凹む。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台	
104	鉢	口縁	内湾。無文。	橙		阿玉台	発泡
105	深鉢	口縁	屈曲。無文。	灰黃褐	雲母	阿玉台	
106	深鉢	口縁	屈曲。無文。	にぶい褐		阿玉台	
107	深鉢	口縁	内湾。口唇平粗。口縁下沈線1条。範広の無文帶を介し微隆起縫文。	灰褐	雲母	阿玉台	
108	深鉢	口縁	内湾。無文。口縁下なし。	灰黃褐	雲母	阿玉台	
109	鉢	口縁	内湾。口唇平坦。口縁下沈線1条。沈線下なし。下半輪積上ヒダ状隆起。	にぶい褐	雲母	阿玉台	
110	深鉢	口縁	波状線。微隆起縫文水平に巡る。	にぶい赤褐	石英	阿玉台	
111	深鉢	胸	微隆起縫による横円区画。区画間より垂下隙帶。隙帶沿い有節沈線。	にぶい褐	長石	阿玉台Ⅰb	
112	深鉢	胸	微隆起縫による横円区画。区画接点三叉状。上方有節沈線。	橙	長石	阿玉台Ⅰb	
113	深鉢	胸	微隆起縫による横円区画。区画下有節沈線。無文帶を介し波状沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
114	深鉢	胸	微隆起縫による横円区画。有節沈線による鉗歯状文。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰb	
115	深鉢	胸	微隆起縫による横円区画。区画上下有節沈線。ヒ・下半輪積ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
116	深鉢	胴	側面起線による楕円区画。区画内變化に有節沈線。上平輪積上ヒダ状隆起。	にぶい橙		阿玉台Ⅰb	
117	深鉢	胴	上方側起線・有節沈線による楕円区画。横位有節沈線。輪積上ヒダ状隆起。	褐灰	長石	阿玉台Ⅰb	
118	深鉢	胴	有節沈線が沿う側面起線有節沈線。被就沈線。圓周の広いヒダ状隆起。	にぶい褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
119	深鉢	胴	扁曲。上半横位有節沈線。下半無文。	にぶい橙		阿玉台Ⅰb	
120	深鉢	胴	有節沈線が沿う側面起線による楕円区画。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰb	
121	深鉢	胴	有節沈線が沿う側面起線による楕円区画。輪積上ヒダ状隆起。	にぶい橙		阿玉台Ⅰb	外縁模化物
122	深鉢	胴	有節沈線が沿う側面起線による区画文・垂下文。	にぶい橙	雲母	阿玉台Ⅰb	
123	深鉢	胴	扁曲。有節沈線による平行文・波状文。扁曲部は無文帯。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
124	深鉢	胴	有節沈線垂下文。波状沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰa	
125	深鉢	胴	有節沈線角状垂下文。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
126	深鉢	胴	横位微隆起沿い波状沈線。ヒダ状隆起。	にぶい褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
127	深鉢	胴	扁曲。側面微隆起斜上方有節沈線・波状沈線。下方弧状有節沈線文。	橙	雲母	阿玉台Ⅰb	
128	深鉢	胴	断面三角形縦帯区画文。区画接点は三叉状。区画沿い有節沈線。	橙	長石	阿玉台Ⅰa	
129	深鉢	胴	横位微隆起線下波状降帯文。	橙	雲母	阿玉台Ⅰa~b	
130	深鉢	胴	側面起線区画文。区画接点は上から見ると三叉状。区画内無文。有節沈線。	にぶい橙	雲母	阿玉台Ⅰa~b	
131	深鉢	胴	Y字状垂下縦帶文。縦帶左側有節沈線。ヒダ状隆起。	橙	長石	阿玉台Ⅰa~b	
132	深鉢	胴	有節沈線が沿う区画縦帶文。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa~b	
133	深鉢	胴	垂下微隆起縦文。輪積上ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰa~b	
134	深鉢	胴	垂下微隆起縦文。圓周の広いヒダ状隆起。	橙	雲母・長石	阿玉台Ⅰa~b	
135	深鉢	胴	有節沈線が沿う垂下陰帯文。輪積痕がなきられずに残る。	にぶい黄橙	長石	阿玉台Ⅰa~b	
136	深鉢	胴	断面三角形垂下微隆起縦線。ヒダ状隆起。	灰黃褐	長石	阿玉台Ⅰa~b	
137	深鉢	胴	垂下微隆起縦文。輪積上ヒダ状隆起。	にぶい橙	長石	阿玉台Ⅰa~b	
138	深鉢	胴	垂下微隆起縦文。微隆起両側なで。輪積上ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	石英	阿玉台Ⅰa~b	
139	深鉢	胴	曲線的な微隆起縦文。輪積痕がなきられずに残る。	明赤褐	雲母・長石	阿玉台Ⅰa~b	
140	深鉢	胴	輪積上ヒダ状隆起。	明褐	長石	阿玉台	
141	深鉢	胴	輪積上ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	長石	阿玉台	
142	深鉢	胴	輪積上ヒダ状隆起。	灰褐	長石	阿玉台	
143	深鉢	胴	輪積上ヒダ状隆起。	にぶい褐	雲母・長石	阿玉台	
144	深鉢	胴	輪積上ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台	
145	深鉢	胴	上方なで。蓋形時のケスリ痕を残す。	にぶい黄橙	長石	阿玉台	
146	深鉢	胴	無文。	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台	
147	深鉢	胴	無文。下半磨き。	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台	内面炭化物
148	深鉢	胴	無文。	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台	

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法算(cm)	色調	胎土	時期	備考
149	深鉢	脛	整形時斜位ケズり一なで。	にぶい褐	長石	阿玉台	
150	深鉢	脣	脣曲。唇曲上なで。脣曲下輪積上ヒダ状隆起。B(14.0) D(32.4)	にぶい橙	長石	阿玉台 I a	
151	深鉢	脣	輪積上ヒダ状隆起。上半なで。 B(11.5) D(22.2)	赤	雲母・石英	阿玉台 I a	
152	深鉢	脣	輪積上ヒダ状隆起。	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台	
153	深鉢	脣	輪積上ヒダ状隆起。 B(7.4) D(23.0)	明赤褐	雲母	阿玉台 I a	
154	鉢	口縁	口縁下輪積をなできらざに残し文様効果とする。	にぶい褐	雲母・長石	中期前半?	
155	ミニチュア	口縁	無文。整形直を残す。内面不規則な刻文。	橙		中期前半?	
156	鉢	口縁	内傾。口唇平坦。焼成前円形剝穴5孔。有孔鉗付?	にぶい赤褐	雲母・長石	中期前半	
157	深鉢	脣	地平甲部Rなし。1本引き双線2条單位で塗下。内面ケズリ痕。	橙	長石	加賀利E	
158	深鉢	脣	口縁直下片。横位沈線1条。r 摂糸文。	にぶい黄澄	長石	加賀利E	
159	往口	脣	強い唇曲。彫刻起縫による唇凹。円形削穴。内面磨き良好。	赤		塙之内I	
160	深鉢	底	内傾。無文。底面磨き。 B(1.4) C16.6	にぶい橙	長石	中期前半	
161	深鉢	底	内傾。無文。外側・底面磨き良好。 B(2.2) C15.3	にぶい赤褐	雲母	中期前半?	
162	深鉢	底	直立。彫文。	B(5.5) C17.0	橙	長石・砂粒	中期前半
163	深鉢	底	直立。無文。外側・底面磨き。	B(2.0) C13.6	橙	長石	中期前半
164	深鉢	底	直立。無文。外側磨き。底面細物痕。B(2.0) C13.8	にぶい橙	長石・砂粒	中期前半	
165	深鉢	底	直立。無文。	B(1.2) C7.2	暗褐		中期
166	深鉢	底	直立。輪積痕を残す。底面文様?上げ底。B(3.6) C10.8	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台	
167	深鉢	底	直立。無文。底面アジロ編み。2本透え1本透り1本透り。B(4.6) C14.8	にぶい黄澄	雲母	阿玉台	
168	深鉢	底	直立。底面光存。無文。 B(0.9) C6.6	にぶい赤褐	長石・雲母	中期前半	
169	深鉢	底	直立。無文。下半磨き良好。底面細物痕。B(5.2) C11.6	にぶい褐	雲母	阿玉台	
170	深鉢	底	直立。無文。底面磨き。	B(3.0) C13.0	にぶい褐	雲母・石英	阿玉台 内面炭化物
171	深鉢	底	直立。無文。外側・底面磨き。	B(5.0) C11.8	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台
172	深鉢	底	外傾。彫文。外側・底面磨き良好。	B(3.8) C15.6	にぶい赤褐	雲母・長石	阿玉台
173	深鉢	底	直立。底面アジロ編み。2本透え1本透り1本透り1本透り一なで。B(2.5) C18.6	明赤褐	長石	中期前半	上げ底
174	深鉢	底	外傾。無文。底面アジロ編み。	B(3.4) C16.0	にぶい褐	雲母・長石	阿玉台
175	深鉢	底	底面のみ残存。木瘤痕。	にぶい赤褐	長石・砂粒	中期前半	
176	深鉢	底	重下輪積窓有節仕組。サル編み1透え1本透り1本透り。B(0.5) C17.2	にぶい黄澄	長石・砂粒	中期前半	ヒダ状隆起
177	深鉢	底	直立。無文。外側磨き。底面編物模。 B(4.3) C15.2	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台	
178	深鉢	底	外傾。底面から立ち上がる根部一部に新文列。底面文様? B(1.5) C4.6	にぶい赤褐	雲母・長石	阿玉台	
179	深鉢	底	外傾。無文。	B(1.8) C6.4	にぶい赤褐	長石・砂粒	中期前半
180	深鉢	底	外傾。輪積上ヒダ状隆起。底面細物痕? B(3.0) C9.6	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台	
181	深鉢	底	外傾。底面細物痕一なで。	B(2.8) C12.4	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
182	鉢	底	外輪。無文。外面磨き。底面ザル彫み。B(3.1) C21.6	にぶい赤褐	長石	中期	
183	深鉢	底	外傾。無文。外面・底面磨き。B(2.0) C14.0	橙	雲母・石英	阿玉台	
184	深鉢	底	外傾。無文。	B(2.5) C16.6	にぶい赤褐	雲母	阿玉台
185	深鉢	底	外傾。無文。外面・底面磨き良好。アジロ痕。B(4.0) C14.8	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台	
186	脚付	底	外輪。無文。外面なで。高台付着痕?	B(0.6)	橙	中期	内面稍円形

*五領ヶ台II式から阿玉台Ia式の間に「五領ヶ台直後型式」「阿玉台直前型式」の呼称を当てることがある。また、限られた地域で出土する土器群に新たな型式名称が付される例があるが、その実態は不明瞭で共通の認識を持つに至っていない。

当遺跡群の埋没谷範囲内からは、少量ながら從来言われている五領ヶ台II式から阿玉台Ia式の間に位置付け可能な土器が出土している。本報告ではこれらの土器について、阿玉台式土器を精力的に研究された西村正衛氏の業績とこれ補完した大村裕氏の論拠に基付き、「阿玉台直前型式」の名称を用いた。

なお本報告の中で「阿玉台直前型式」として扱った土器は、①口縁部に隆帶文が巡り、ここより隆帶文を垂下させ、上から縹文を施文するもの。②口縁部文様帯が幅の狭い山形状を呈するものに限定した。

参考文献

- 大村 裕 「所謂「五領ヶ台直後型式」研究の現状について」「下總考古」9 1987
 西村正衛 「阿玉台式土器編年的研究の概要—利根川下流域を中心として—」
 『早稲田大学文学研究科紀要』18 1972

阿玉台式土器全般に関わるものとして

- 西村正衛 「石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—」早稲田大学出版部 1984

(埋没谷出土土器片錐・土製円盤) (第48図 P L27・28)

埋没谷からは多量の土器に混じって土器片錐や土製円盤が出土している。

土器片錐の出土した数は総数40個で、土器片錐の各グリッドごとの出土量は、2J-50区0個・2J-51区1個・2K-50区2個・2K-51区2個・2L-50区1個・2L-51区9個・2M-50区1個・2M-51区9個・2N-50区0個・2N-51区10個・2O-50区0個・2O-51区5個である。大方の傾向として、埋没谷の北側よりも南側の方が多く出土している。このような出土状況は土器片錐だけに特有なものではなく、多量に出土した土器についても同様である。

形態的には、長方形のもの(No.1)、円形に近いもの(No.6)、正方形に近いもの(No.11)、楕円形のもの(No.24)などがある。大きさでは、大方の傾向として、2グループ位に分かれそうである。多くのものは周縁部分が擦られており、上下に1対の切り目(刻み目)が付けられている。ものによっては周縁部が擦られておらず、打ち欠いたのみのものもある。また切り目もNo.26のように上端に1つあるのに対し下端に2つあるものもある。No.9は裏面にもともと沈線がひかれているが、それを意識してその両端に切り目を加えている。

これらの土器片錐の材料とされた土器の時期は、多くが縄文時代中期阿玉台式の土器を利用して作っている。中でも埋没谷の投棄遺物と同様な時期の、阿玉台Ia・Ib式期の特徴を窺うことができるものがある。無文であり特徴が乏しいものについても、前述同様な時期のものであると思われる。

埋没谷から出土した土製円盤は7個である。土製円盤の各グリッドごとの出土数は、2K-51区1個・2L-51区1個・2M-51区2個・2N-51区2個・2O-51区1個である。

形態的には円形のもの(No.41)、方形のもの(No.34)、不整形のものなどがある。ほとんどのものは、周縁部に擦られた痕跡が残る。中には打ち欠いたのみのものもある。

これらについても、土器片錐と同様な時期の所産と考えられる。

今回の調査の結果、他の場所からも土器片錐や土製円盤が出土しているが、そのまとまった出土量については埋没谷出土遺物の比ではない。

縄文時代土器片錐観察表

単位(cm・g)

No.	種類	出土位置	残存	大きさ	厚さ	重量	周縁整形	色調	文様	時期	備考
1	土器片錐	2L-50区	一部欠	2.6×2.1	0.75	5.5	全周磨り	にぶい赤褐	無文	中期前半	切り目
2	土器片錐	2J-51区	完形	3.4×2.2	1.0	10.0	全周磨り	にぶい橙	無文	中期前半	切り目
3	土器片錐	2N-51区	一部欠	2.7×2.05	0.8	5.0	全周磨り	明黄褐	単節LR	中期前半	切り目
4	土器片錐	2M-51区	一部欠	3.5×2.0	0.9	8.0	全周磨り	にぶい赤褐	ヒダ状隆起	中期前半	切り目1対
5	土器片錐	2M-51区	完形	2.75×3.0	0.9	9.5	全周磨り	褐	無文	中期前半	切り目1対
6	土器片錐	2O-51区	完形	3.25×3.15	1.0	13.0	全周磨り	にぶい褐	単節LR	中期前半	切り目1対
7	土器片錐	2M-51区	1/2	2.65×3.45	0.7	6.0	一部磨り	橙	微隆起縞文	中期前半	切り目1対
8	土器片錐	2O-51区	完形	3.05×2.8	1.3	12.0	全周磨り	にぶい黄褐	堆疊文	中期前半	切り目1対



第48図 埋没谷出土土製品

No.	種類	出土位置	残存	大きさ	厚さ	重量	周縁整形	色調	文様	時期	備考
9	土器片鱗	2L-51区	完形	3.0×2.6	1.0	9.0	全周磨り	にぶい赤褐色	有節沈線、裏面沈線	阿玉台	切り目1対
10	土器片鱗	2O-51区	完形	3.2×2.6	1.0	11.0	全周磨り	にぶい黄褐色	無文	不明	切り目1対
11	土器片鱗	2N-51区	完形	3.4×3.6	1.05	16.0	全周磨り	にぶい褐色	有節沈線、隕帯文	阿玉台	切り目1対
12	土器片鱗	2M-51区	一部欠	3.05×2.6	1.0	10.0	全周磨り	にぶい橙	ヒダ状隆起	阿玉台	切り目1対
13	土器片鱗	2L-51区	完形	3.5×3.5	0.8	15.0	一部磨り	黒褐色	有節沈線、隕帯文	阿玉台	切り目1対
14	土器片鱗	2N-51区	完形	3.7×2.9	0.9	12.0	一部磨り	褐色	ヒダ状隆起	阿玉台	切り目1対
15	土器片鱗	2N-51区	1/2	2.1×3.2	0.9	11.0	全周磨り	にぶい黄褐色	ヒダ状隆起	阿玉台	切り目1対
16	土器片鱗	2N-51区	完形	3.5×4.05	0.8	15.0	打削	にぶい赤褐色	ヒダ状隆起	阿玉台	切り目1対
17	土器片鱗	2L-51区	1/3	2.0×3.0	1.1	6.0	全周磨り	灰褐色	接線	中期前半	切り目1対
18	土器片鱗	2O-51区	1/2	1.9×3.2	1.0	7.0	一部磨り	にぶい黄褐色	無文	中期前半	打ち欠き
19	土器片鱗	2K-50区	一部欠	3.3×2.95	1.2	16.0	一部磨り	にぶい橙	口緑、有節沈線	阿玉台	切り目1対
20	土器片鱗	2O-51区	完形	3.2×2.7	1.0	12.0	全周磨り	にぶい橙	無文	中期前半	切り目1対
21	土器片鱗	2N-51区	一部欠	3.7×3.5	1.0	14.0	全周磨り	褐色	有節沈線、隕帯文	中期前半	切り目1対
22	土器片鱗	2K-51区	1/2	3.0×2.9	1.1	12.0	全周磨り	橙	波状沈線	阿玉台	切り目1対
23	土器片鱗	2K-51区	1/2	2.4×3.7	0.8	10.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	切り目1対
24	土器片鱗	2M-51区	完形	4.4×3.65	0.9	20.0	全周磨り	灰褐色	無文	中期前半	切り目1対
25	土器片鱗	2L-51区	1/2	2.4×3.3	0.8	7.0	一部磨り	にぶい褐色	無文	中期前半	切り目1対
26	土器片鱗	2M-51区	完形	4.5×3.85	0.85	20.0	一部磨り	褐色	有節沈線	阿玉台	切り目1対
27	土器片鱗	2N-51区	完形	3.8×3.9	0.9	14.0	全周磨り	にぶい褐色	無文	中期前半	切り目1対
28	土器片鱗	2K-50区	2/3	4.4×3.1	0.9	14.0	全周磨り	にぶい橙	隕帯文、裏面沈線	中期前半	切り目1対
29	土器片鱗	2L-51区	完形	5.0×3.65	0.9	22.0	全周磨り	にぶい黄褐色	無文	中期前半	切り目1対
30	土器片鱗	2M-51区	完形	3.3×3.3	1.05	14.0	全周磨り	褐色	ヒダ状起線文	中期前半	切り目1対
31	土器片鱗	2N-51区	完形	3.6×3.6	0.8	14.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	切り目1対
32	土器片鱗	2L-51区	1/2	2.2×3.3	0.95	8.5	全周磨り	褐色	無文	中期前半	打ち欠き
33	土器片鱗	2L-51区	完形	4.1×4.2	1.3	24.0	全周磨り	にぶい褐色	有節沈線、内面被	阿玉台	切り目1対
34	円盤	2N-51区	完形	3.6×4.15	0.65	15.5	一部磨り	にぶい赤褐色	有節沈線、ヒダ状隆起	阿玉台	埋没谷範囲
35	土器片鱗	2M-50区	完形	4.2×4.5	1.15	25.0	一部磨り	にぶい褐色	沈線	中期前半	切り目
36	土器片鱗	2N-51区	1/2	3.1×2.9	1.1	12.5	一部磨り	明赤褐色	有節沈線、隕帯文	阿玉台	打ち欠き
37	土器片鱗	2M-51区	1/2	3.35×1.7	0.95	0.6	全周磨り	褐色	隕帯文上刻文	中期前半	切り目
38	土器片鱗	2L-51区	2/3	4.0×6.4	0.8	12.5	一部磨り	にぶい褐色	無文	中期前半	打ち欠き
39	土器片鱗	2N-51区	1/2	3.65×6.3	1.0	26.0	全周磨り	にぶい赤褐色	ヒダ状隆起	阿玉台	打ち欠き
40	土器片鱗	2L-51区	2/3	3.45×3.95	1.0	13.0	一部磨り	赤褐色	有節沈線、隕帯文	阿玉台	打ち欠き
41	円盤	2N-51区	完形	2.7×2.9	0.9	9.0	全周磨り	にぶい黄褐色	沈線	中期前半	埋没谷範囲
42	円盤	2O-51区	完形	2.6×2.4	0.9	8.0	全周磨り	明赤褐色	無文	中期前半	埋没谷範囲
43	円盤	2M-51区	完形	3.0×2.6	0.85	6.5	一部磨り	にぶい赤褐色	口緑、三叉文、有節沈線	阿玉台	埋没谷範囲
44	円盤	2M-51区	完形	3.75×3.8	1.0	15.5	全周磨り	にぶい褐色	鶴突	中期前半	埋没谷範囲
45	円盤	2K-51区	一部欠	3.7×4.4	0.9	17.0	打削	明褐色	ヒダ状隆起	阿玉台	埋没谷範囲
46	円盤	2L-51区	完形	3.3×2.9	1.1	12.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	埋没谷範囲
47	土器片鱗	2M-51区	完形	3.1×3.5	0.9	14.0	全周磨り	にぶい褐色	無文	中期前半	打ち欠き

(埋没谷出土石器) (第49・50図 P L28・29)

埋没谷からは多量の縄文時代中期の阿玉台式土器に伴って石器が出土している。出土した石器の構成器種は石鎌・石錐・石匙・スクレイパー類・磨製石斧・磨石類などと、多くの剥片・碎片そして自然礫である。いずれの遺物も他の遺物と混在した状況の中で出土している。

剥片・碎片のほとんどは黒曜石を石材としており、同所から出土したものは86点を数える。このような石材の指向性はスクレイパー類に端的に表されている。同類石器は、2N-51区出土のもののが多くを占める。これらの傾向は今回国化した石器についても同様な状況が見られた。

以下は出土石器について特徴などを述べたいと思う。

1. 石鎌 (No.1~10)

全部で10点出土している。いずれの石鎌も無茎鎌であり、No.5が平基無茎鎌である以外は凹基無茎鎌である。先端から脚部に向い両側縁が緩やかに曲線を描くものが多く、脚部中央の抉り込みが浅いものが大半を占めている。No.8~10は石鎌の可能性のあるものとして本項目で取り上げたものである。これらはスクレイパー類の可能性もある。

2. 石匙 (No.11)

一方の端部とつまみ部が欠損している。本来は横型石匙の形態をなすものと思われる。

3. 石錐 (No.13)

横長剥片を素材に錐部を作り出している。錐先端の稜線が磨滅している。

4. スクレイパー類 (No.12・14~25)

ここでスクレイパー類と分類したものは、剥片の一部に二次加工を加えたものである。このため定形的なスタイルでは分類することが困難なものである。そのものの自体の形態を整えたものと、全くの剥片の一部に加工したものがある。No.14・18以外はすべて黒曜石製のものである。

5. 磨製石斧 (No.26)

小型のものであり、一見すると打製石斧のようでもあるが、裏面・刃部や側面に研磨された痕跡をとどめている。

6. 磨石 (No.27)

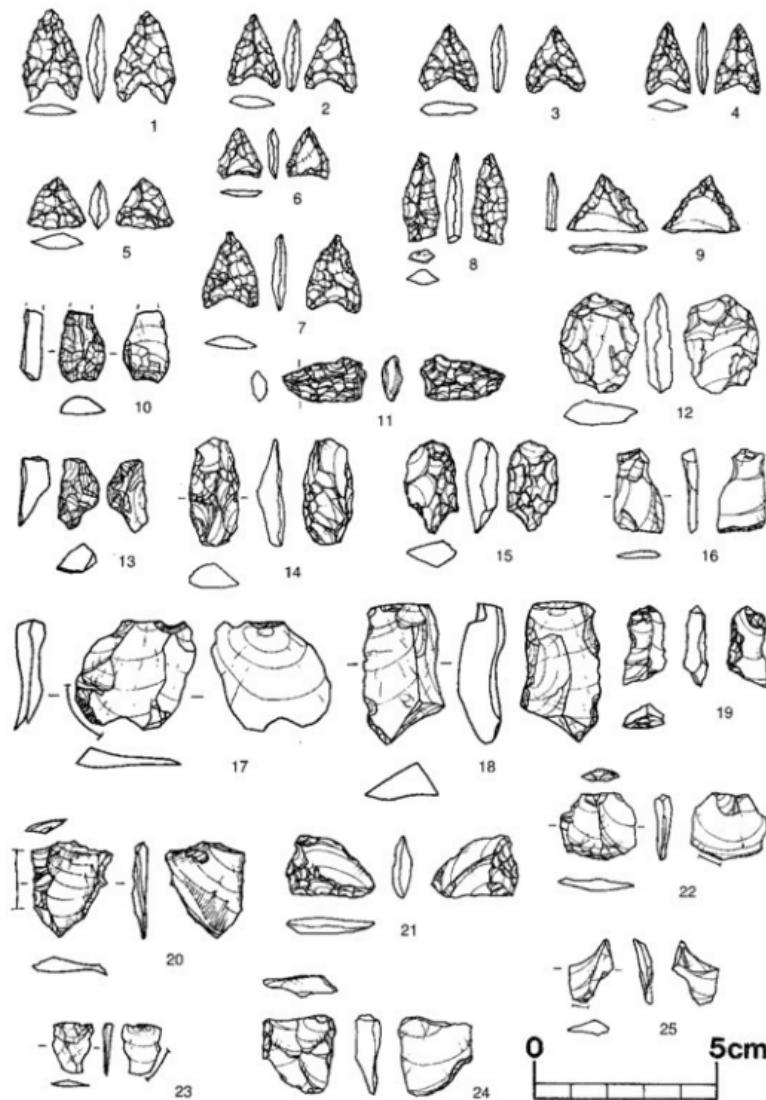
安山岩製のもので欠損品である。表裏面に使用痕が残り、平滑になっている。

7. 石皿 (No.28)

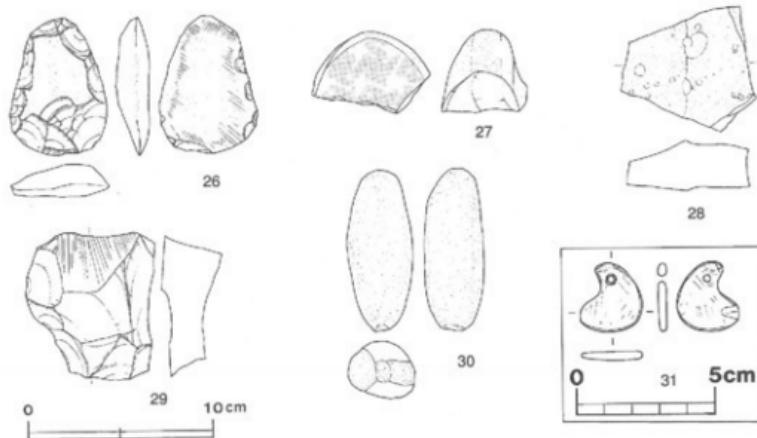
石皿の破片である。安山岩製のもので、石皿中央部の凹みが一部残る。凹み周縁には凹石状の凹みも見られる。

8. 砥石 (No.29)

砥石と考えられるもので、多方向からの剥離が見られ旧来の形態をとどめていない。砥石として使われた面には縱方向の線条痕が見られる。側面の一部には自然面が残り、同所は砥石として



第49図 埋没谷出土石器(1)



第50図 埋没谷出土石器(2)

は使われていない。

9. 敗石 (No.30)

梢円形の石の端部の一方に明瞭な敲打痕を残す。上下の端部には一文字の刻みが見られるが、旧米からのものかは疑問である。側面の一部にも敲打痕が残る。

10. 乗飾品 (No.31)

蛇紋岩を石材として作られたものである。一ヶ所に穿孔がなされており、ペンダントとして使用されたものと考えられる。表裏面と抉られた部分に粗い線条痕が残っている。

埋没谷出土石器観察表

単位(cm・g)

No	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
1	石 砺	埋没谷	1.9	1.5	0.5	1.34	黒曜石
2	石 砺	2K-51区	1.7	1.4	0.45	0.70	流紋岩
3	石 砺	埋没谷	1.4	1.5	0.9	0.72	黒曜石
4	石 砺	2M-51区	1.6	1.25	0.3	0.53	チャート
5	石 砺	2N-51区	1.3	1.45	0.5	0.76	チャート
6	石 砺	2N-51区	1.2	1.2	0.2	0.35	黒曜石
7	石 砺	2N-51区	1.7	1.5	0.3	0.93	チャート
8	石 砺	2M-50区	2.35	1.0	0.45	1.02	黒曜石
9	石 砺	20-51区	1.6	2.1	0.3	0.80	チャート
10	石 砺	2L-51区	1.9	1.2	0.5	1.26	黒曜石
11	石 鋏	2N-51区	1.2	2.2	0.5	1.50	黒曜石
12	スクレイバー類	2M-51区	2.6	2.1	0.65	3.73	黒曜石
13	石 錐?	2N-51区	1.0	1.9	0.8	1.19	黒曜石
14	スクレイバー類	2N-51区	2.9	1.3	0.6	2.44	チャート
15	スクレイバー類	2M-51区	2.5	1.4	1.3	2.50	黒曜石
16	スクレイバー類	2M-51区	2.2	1.3	0.4	0.95	黒曜石
17	スクレイバー類	2M-51区	2.9	2.9	0.75	4.01	黒曜石
18	スクレイバー類	2N-51区	3.8	2.1	1.1	7.88	チャート
19	スクレイバー類	2M-48区	1.9	1.1	0.6	1.04	黒曜石
20	スクレイバー類	2N-51区	2.6	2.1	0.35	1.45	黒曜石
21	スクレイバー類	2M-51区	1.6	2.3	0.5	1.79	黒曜石
22	スクレイバー類	2N-51区	1.8	2.0	0.4	1.15	黒曜石
23	スクレイバー類	2L-50区	1.4	1.0	0.2	0.19	黒曜石
24	スクレイバー類	2K-51区	2.1	1.9	0.65	2.07	黒曜石
25	スクレイバー類	2N-51区	1.3	1.1	0.4	0.47	黒曜石
26	磨製石斧	2L-51区	7.4	5.2	1.8	87.99	閃緑岩
27	磨 石	2L-50区	4.1	6.2	4.5	123.92	安山岩
28	石 目	2M-51区	6.7	7.0	2.7	137.77	安山岩
29	砥 石	2K-51区	8.0	6.7	2.6	203.93	安山岩
30	敲 石	2L-50区	8.8	3.6	3.2	165.21	砂岩
31	垂 飾 品	埋没谷付近	2.45	2.2	0.3	2.69	蛇紋岩

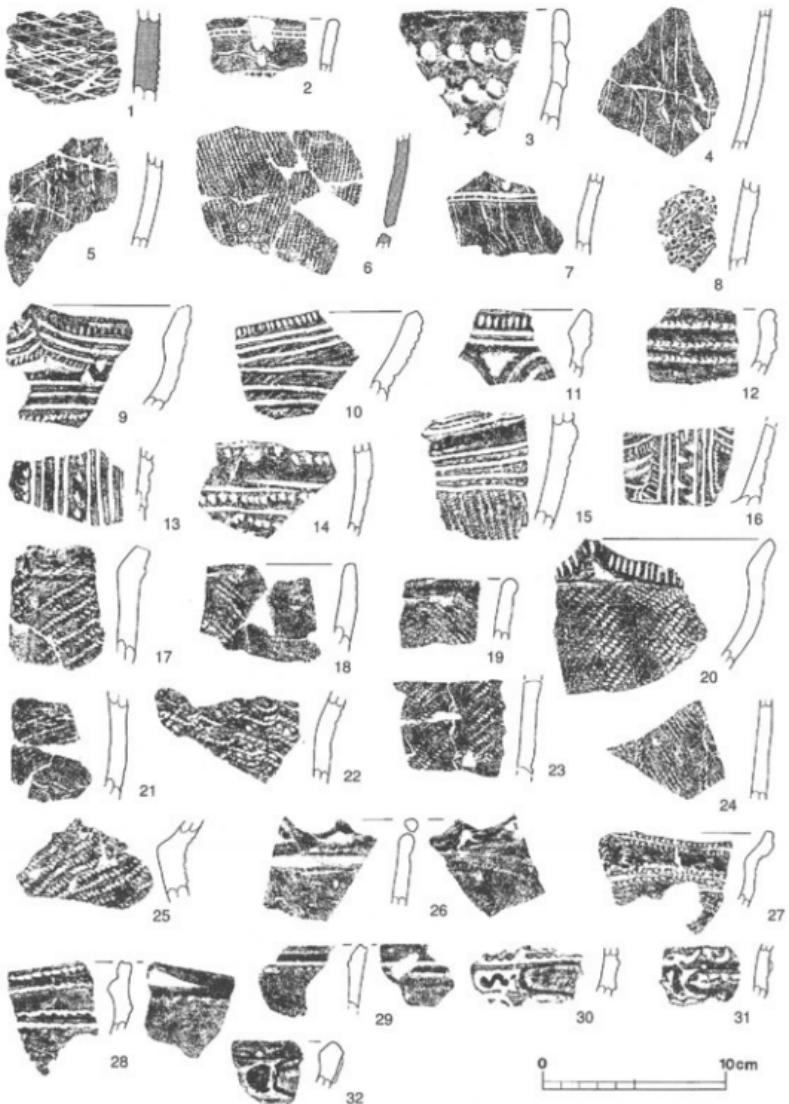
7. 遺物集中区出土遺物(第51~53図)

ここで扱う出土遺物は、前谷東遺跡エリア東端の緩い傾斜地から出土したものである。この集中区は3B~3K-26~39区に及ぶものである。このエリア内には縄文時代中期初頭の時期に位置付けられるピット群などがある。これらの土器の出土層位は、表土排除後の確認面(褐色土)からローム層上面までの10cm位の間である。なお同所のローム層は斜面部のせいか粘性が強い。

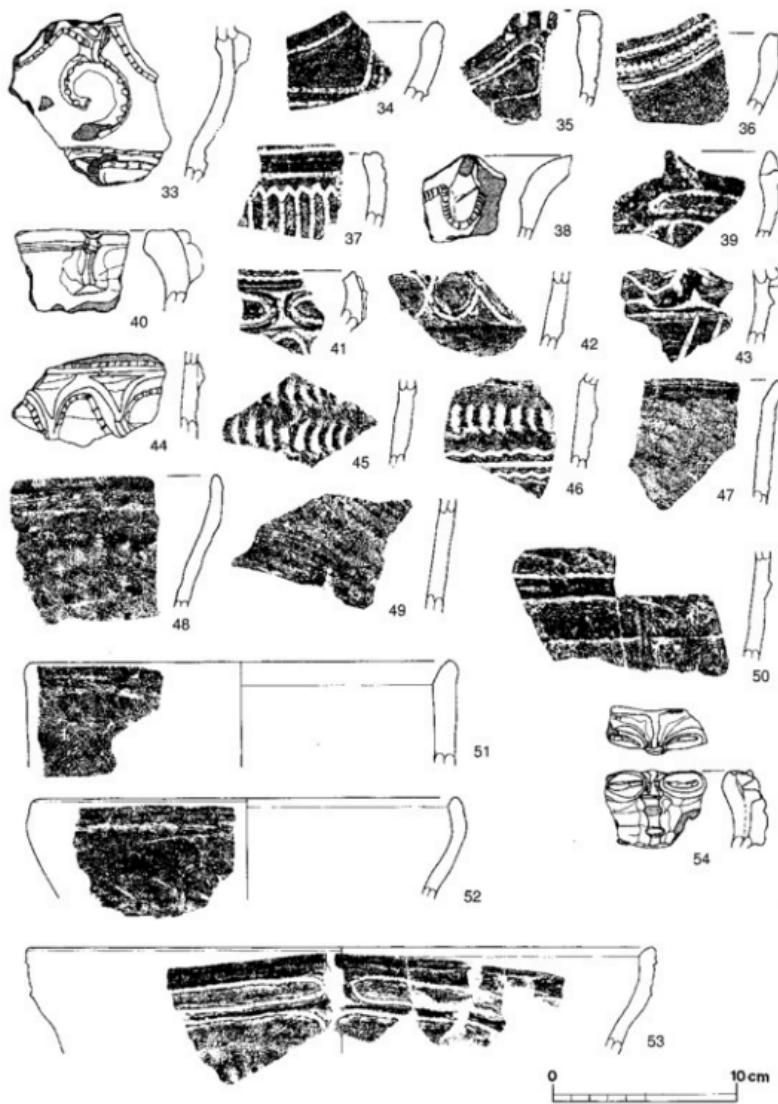
出土遺物は土器や土器品である。いずれも破片となっている。時期的には縄文時代前期前半の黒浜式土器から中期後半の加曾利E式土器に及ぶ。

No.1・6は前期前半の黒浜式の土器で、黒浜式の出土量は極少量である。No.2~5・7・8は前期後半の浮島式・諸磯式の土器である。No.9~11・13~27・29・37は中期初頭に位置付けられる土器である。これらの土器はピット群出土の土器と同様な時期の物が多い。五領ヶ台式土器や阿玉台式土器への中間的な特徴を持つものも含まれる。No.12・28・30~36・38~46・50・53・54は中期前半阿玉台式期の土器である。阿玉台式の中でも初期のものが多い。No.54は目の表現か。No.56は中期後半加曾利E式のもので、No.55は後期初頭のものか。No.57~62は土器底部である。No.52は中期の浅鉢で、No.61は前期後半期の特徴を持つ赤彩された浅鉢底部である。No.62は手捏ね土器で、No.63は焼成粘土塊である。

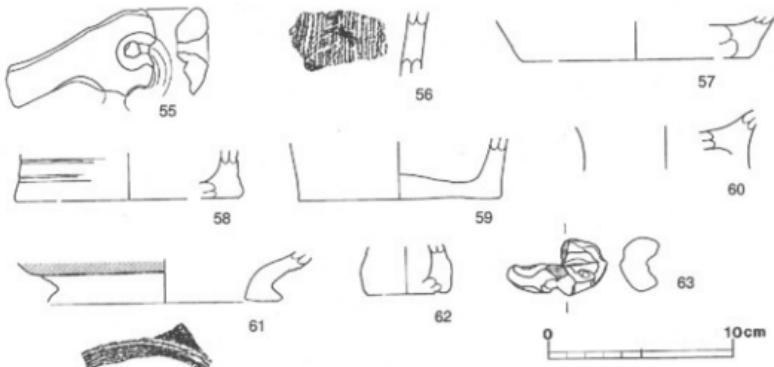
No.	器種	部位	形状・文様の特徴・法量(cm・g)	色調	胎上	時期	備考
1	深鉢	胴	單輪絞条体5類	にぶい赤褐	織維	黒浜	
2	深鉢	口縁	地文直線段反覆?平行する堅広の有筋沈縁。沈縁間に突文垂下。	赤	長石	浮島	7と同一
3	深鉢	口縁	輪積上に連続する指痕痕列。	にぶい褐		浮島	
4	深鉢	胴	單輪絞条体1類。広い間隔で巻かれたもの。	赤褐	長石	浮島	
5	深鉢	胴	アナダラ溝系貝殻腹縫による波状文。	橙		浮島	
6	深鉢	胴	単節R L。外面より穿孔された修理孔1孔。	にぶい赤褐	織維	黒浜	
7	深鉢	胴	地文単輪絞条体1類。半截竹管状工具による有筋沈縁。沈縁上方刺突。明赤褐	長石	浮島	2と同一	
8	深鉢	胴	不規則に配置された円形竹管文、上端に区画文。	黒褐		諸儀	
9	深鉢	口縁	波状縁に沿った3条の沈縁による区画文。三角形交互刺突。	褐	石英	五領ヶ台II	
10	深鉢	口縁	波状縁。地文単節R L。口縁に沿った3条の沈縁による区画文。	にぶい褐		五領ヶ台II	
11	深鉢	口縁	波状縁。有筋沈縁文。三角形刻文。	にぶい黄褐	長石	五領ヶ台II	
12	深鉢	口縁	半截竹管状工具での刺突の連続による沈縁状文。	橙	長石	阿玉台I a	
13	深鉢	胴	垂下沈縁間に半截竹管状工具による刺突列。	にぶい橙		五領ヶ台II	
14	深鉢	胴	平行沈縁間に半截竹管状工具による刺突列。	橙	石英	五領ヶ台II	
15	深鉢	胴	地文単節R L。下半2条の沈縁を除き、底面文・沈縁文は波状。垂下沈縁文。	にぶい黄褐		五領ヶ台II	
16	深鉢	底	3条の垂下沈縁文互に刺突。沈縁周縁三角区画文。区画内異なる刺突列。	にぶい褐	長石	五領ヶ台II	底部直上
17	深鉢	胴	輪積で低い輪帶文底下。輪縁の輪帶文底に沿り、文点に墨付文。単節R L。完形 大きさ6.7×5.0 厚さ1.0 重量50.0 全周磨り	褐	石英	阿玉台直上	打ち欠き1ヶ



第51図 遺物集中区出土遺物(1)



第52図 遺物集中区出土遺物(2)



第53図 遺物集中区出土遺物(3)

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法蓋(cm)	色調	胎土	時期	備考
18	深鉢	口縁	波状線。単節L R。	橙	長石	中期前半	
19	深鉢	口縁	口唇下輪鉛痕がなきられず残る。単節L R。	橙		中期前半	
20	深鉢	口縁	被状線。口唇に沿い鋸齿状波文。波底部下三角区画内斜尖。単節R L。	にぶい褐	石英	阿玉台直前	
21	深鉢	肩	無縫L r S字結節文。	灰黄褐	長石	後期末～中期初	
22	深鉢	肩	輪の狭い単節L r S字結節文。	にぶい橙	長石	後期末～中期初	
23	深鉢	肩	単節L R羅位S字茎葉文。右側肩部の波状に沿い範界が割られている。	にぶい黄橙		五領ヶ台	
24	深鉢	肩	単節L R羅位S字結節文。	灰黄褐	長石	五領ヶ台	
25	深鉢	肩	屈曲部。単節R L。	橙		中期前半	
26	深鉢	口縁	口縁水平に沈線が巡り、口唇部に波状突起。	明黄褐		中期前半	
27	深鉢	口縁	波状幕下底曲。口唇・直唇に浅い波文。波文之上に削尖突。単節L R。	にぶい黄橙		五領ヶ台Ⅱ	
28	深鉢	口縁	波状線。口唇部削尖突。直唇三角形の横位置於上下に削尖突。直唇三文。	褐灰	長石	阿玉台Ⅰa	
29	深鉢	口縁	口唇部削尖突。口唇下有削凹線。直唇下半削尖。内直唇葉文・沈葉文。	にぶい褐	長石	阿玉台直前	
30	深鉢	肩	直唇三角形葉文葉文ゾーメン文・片側開起の区画文。葉文之上に削尖突。	灰褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
31	深鉢	肩	U字状部・隆帶文間は有削沈線。隆帶文之下波状沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
32	深鉢	口縁	扁平な円形貼付文。片側が隆起した区画文。	にぶい橙		阿玉台Ⅰa～b	
33	深鉢	口縁	波状線。口唇に沿い有削沈線。直唇部下斜平行葉文葉文。葉文有削沈線文。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰb	
34	深鉢	口縁	波状線。口唇に沿い有削沈線。波頂部より垂下し模様に巡る。	にぶい赤褐	長石	阿玉台Ⅰa	
35	深鉢	口縁	波状線。波頂部削尖突。口唇に沿い有削沈線。波頂部より垂下して並行。	橙	雲母	阿玉台Ⅰa	
36	深鉢	口縁	波状線。口唇部と直唇三角形葉文部削尖突。葉文之下有削沈線。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰa	

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法量(cm)	色調	胎土	時期	備考
37	深鉢	口縁	波状線。口唇垂弧。口縁下横に有節沈線。波状。波状開口下も同様。	にぶい澄	雲母	五箇ヶ台Ⅱ	
38	深鉢	口縁	波状線。口縁に沿う有節沈線。波頭部下でU字状。	灰褐色	雲母・石英	阿玉台Ⅰa	
39	深鉢	口縁	波状線。口唇三角尖端。斜位隆面に重い側突別による区別。下方有節沈線。	にぶい澄	石英・長石	阿玉台Ⅰa	
40	深鉢	口縁	断面三角形で横円形の突起。突起上刺突。口縁に沿う沈線文。	灰褐色	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
41	深鉢	口縁	口唇底下有節沈線。横円区画内、区画下も同様。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
42	深鉢	腹	大抵の波状有節沈線文を交差させ凹凸形文。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
43	深鉢	肩	横位断面三角形開口文。上方は沈線が沿う波状渦巻文。下方は斜位有節沈線。	にぶい褐		阿玉台Ⅰb	
44	深鉢	肩	下方に有節沈線が沿う波状渦巻帶文。波底部コブ状突起。	にぶい褐	長石	阿玉台Ⅰb	
45	深鉢	肩	ヒタ状隆起。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台	
46	深鉢	肩	屈曲下ヒダ状隆起。波状沈線間に横位沈線文。	褐	雲母	阿玉台Ⅰb	
47	深鉢	口縁	内面に棱。外正面縁下なで、斜位ケズリ整形須残る。	にぶい赤褐	石英	中期前半?	
48	深鉢	口縁	内面に棱。外正面輪郭痕なできられず残る。	褐	長石	中期前半?	
49	深鉢	肩	斜位ケズリ整形痕残る。	にぶい赤褐	長石	中期前半?	
50	深鉢	肩	低い横位隆基上に刺突孔。輪郭痕を残し塑型痕残・一部削失。範囲隆面文。	にぶい赤褐	雲母	阿玉台Ⅰa?	
51	深鉢	口縁	内面に棱。外面無文。 A23.0 B(5.7)	にぶい澄	雲母	中期前半	
52	浅鉢	口縁	内面に棱。口縁下数度に亘り沈線が引かれる。波線下無文。A23.0 B(5.4)	にぶい赤褐	雲母	中期前半	
53	深鉢	口縁	有節沈線区画文。区画間単位文(消失)。単位文下有節沈線基下。A35.2 B(5.7)	にぶい赤褐	雲母・石英	阿玉台Ⅰb	
54	深鉢	口縁	刻文付垂下隣上側に横位有節沈線がひきかれた横円形貼付文。	にぶい赤褐		阿玉台Ⅰb~II	
55	深鉢	口縁	波状線。波頂部下穿孔。片側のみ口縁に沿う沈線文。	褐		堀之内1	
56	深鉢	肩	し黒条文。	にぶい赤褐		中期後半	
57	深鉢	肩	無文。外面横なで。	B(2.2) C12.4	にぶい褐	石英	不明
58	深鉢	底	底面直上に横位2条沈線文。	B (2.6) C12.0	澄	雲母・石英	中期
59	深鉢	底	無文。外面横なで。	B (3.2) C11.0	にぶい澄		不明
60	脚付	底	無文。	褐灰	長石	不明	
61	脚付	底	半截竹管狀工具による有節平行沈線文。	B (2.4) C12.4	にぶい澄		前期後半 沈線上半赤彩
62	にげた7	底	無文。器壁が凸凹。	B (2.6) C4.6	褐		不明
63	焼成粘土塊			褐			不明

8. 遺構外縄文時代一括遺物

遺構外の一括遺物として、①土器、②土器片錐・土製円盤、③土偶、④石器が出土している。

①土器（第54図）No.1～9は中期初頭の土器である。No.10～30は阿玉台式の範疇の土器である。No.31～34は中縄式・加曾利E式の土器である。

No.	器種	部位	器形・文様の特徴・法差(cm)	色調	胎土	時期	備考
1	深鉢	口縁	波状縁。口縁下腹位短沈縁。口縁に沿って平行沈縁文。三角形文瓦刺突。	灰褐色	石英	五縄ヶ台II	
2	深鉢	口縁	波状縁。口縁下腹位沈縁。口縁に沿って平行沈縁文。二角形文瓦刺突。	にふい赤褐色	長石	五縄ヶ台II	
3	深鉢	口縁	波状縁。口縁に沿って隕帶文。Y字状隕帶文垂下。單節R L。	にふい赤褐色	雲母	阿玉台直前	
4	深鉢	口縁	波状縁。口縁下部平坦。中節R L。	橙	長石	中縄前半	
5	深鉢	口縁	波状縁。口部平明。口縁に沿って沈縁1条。自縫的な沈縁文。	にふい赤褐色	雲母・長石	五縄ヶ台II	
6	深鉢	腹	地文単節R L。垂下沈縁文。右端有節沈縁文。	橙	雲母・長石	五縄ヶ台II	
7	深鉢	腹	上半横位微隆起線文。単節R L。	にふい赤褐色	長石	中縄前半	
8	深鉢	肩	垂下路研文。単節R L。	にふい黄褐色		阿玉台直前	
9	深鉢	口縁	波状縁。頂部凹み。肉厚有段。二叉状沈縁。口界部V字縫と水平に質突丸。	橙	長石	阿玉台直前	
10	深鉢	口縁	波状縁。口唇部円形竹管文列。水平に有源沈縁。波状沈縁。	にふい赤褐色	雲母	阿玉台I a	
11	深鉢	口縁	波状縁。頂部凹み。微隆起線文を背ぎテ織竹管状工具で有節沈縁。	橙		阿玉台I a	
12	深鉢	口縁	平行する微隆起線文の内側に沿う有節沈縁文。	にふい橙	長石	阿玉台I a	
13	深鉢	口縁	内面に縦。口唇部斜対突。窪による単位文。有節沈縁文。	にふい赤褐色	雲母	阿玉台I a~b	
14	深鉢	口縁	波状縁。窪縫による人型のヒダ状突起。有節沈縁、波状沈縁文。	にふい橙	石英・長石	阿玉台I b	
15	深鉢	口縁	内面に縦。有節沈縁3条による平行縫。	橙		阿玉台I a~b	
16	浅鉢	口縁	波状縁。低い凹む。口唇部斜対突。有節沈縁が造る隕帶文。横円形文瓦刺突。	橙	長石	阿玉台I b~II	
17	深鉢	肩	弧曲面。ヒダ状縫起上に波状沈縁文。上部延舌し有節沈縁の一部が凹斬新。	にふい赤褐色	雲母	阿玉台I b	
18	浅鉢	口縁	波状縫。内面に凹む。口縁下でなで浅く凹む。	にふい橙	石英・長石	中縄前半	
19	深鉢	口縁	幣形時の斜ケズリ痕。	にふい橙	長石	中縄前半?	
20	深鉢	口縁	波状縫。瘤部による區画文。其肩に窪い内側は有節沈縁、縫合隕縫文瓦刺突。	にふい橙	雲母	阿玉台Ⅱ	
21	深鉢	把手	三角形で口縁部に接し両面に凹み。水平に窪いた。下方延舌とともに单節R L。	にふい黄褐色	石英	阿玉台Ⅱ	
22	深鉢	肩	平行する有節沈縫線に沿う斜状沈縫文。	にふい橙	長石	阿玉台I b	
23	深鉢	口縁	内面。無文。口縁下端など。	にふい橙	長石	中縄前半	
24	深鉢	肩	横位有節沈縫文に後し、Y字状の微隆起線文垂下。	灰褐色	長石	阿玉台I a~b	
25	深鉢	肩	微隆起線文による巻き筋形竹管文。縫合隕縫を残しヒダ状降起。	にふい橙	長石	阿玉台I a~b	
26	深鉢	肩	肩部凹部。縫合隕縫を残し、ヒダ状降起。	褐灰色	長石	阿玉台	
27	深鉢	肩	輪縫痕を残し、浅いヒダ状降起。	にふい橙	雲母	阿玉台	
28	深鉢	肩	隕縫によるY字文。区画に沿う内側は有節沈縫。	褐灰色	長石	阿玉台I a~b	
29	深鉢	肩	地文単節R L。自縫的な隕帶文。沈縫文。	橙		阿玉台Ⅱ	
30	深鉢	肩	口縁直下。低い弧状の隕帶文。隕縫上縫文施文。	にふい橙	長石	阿玉台Ⅱ	
31	深鉢	肩	隕帶文による斜筋ヒダ・背筋ヒダ・区画文。下半地文单節R L。横位沈縫文。	にふい黄褐色		加曾利E II	
32	深鉢	把手	ミミズク状把手の一部。把手中心に向かい弧状沈縫文と刻文列。	にふい黄褐色	雲母・石英	中縄	
33	深鉢	口縁	内面。斜面二角状隕帶文横位。斜面下部隕縫と沈縫による区画文。單節R L。	にふい橙	長石	加曾利E II~III	
34	深鉢	底	無文。外面横ミガキ。	B (3.3) C9.2	明赤褐色		中期後半



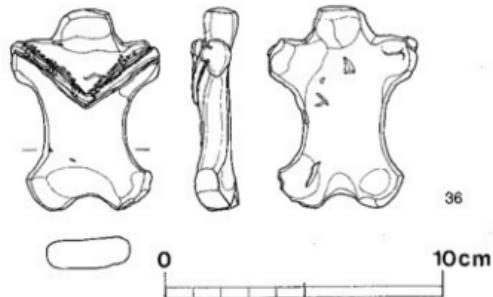
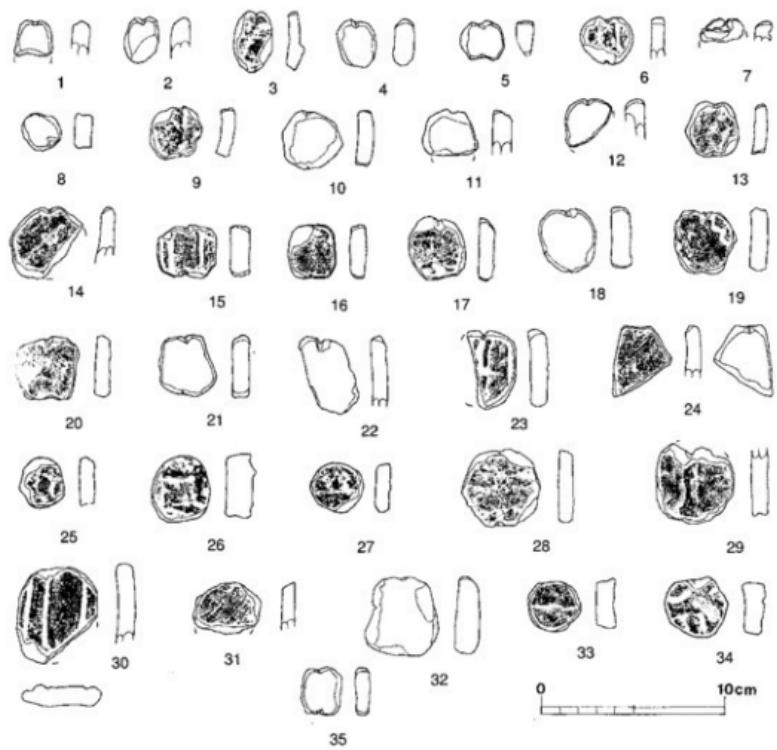
第54図 遺構外出土土器

②土器片鍤・土製円盤（第55図No.1～35）一括資料として土器片鍤が30点と土製円盤が5点出土している。No.1～29・35は土器片鍤であり、他は土製円盤である。Z-31区から土器片鍤が5点出土していることが興味深い。時期は阿玉台式期のものが多く、埋没谷出土のものと同様である。

縄文時代土器片鍤観察表

単位(cm・g)

No.	種類	出土位置	残存	大きさ	厚さ	重量	周縁整形	色調	文様	時期	備考
1	土器片鍤		1/2	2.2×2.0	0.9	4.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目
2	土器片鍤	ZG-38区	一部欠	2.4×1.9	1.0	6.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目
3	土器片鍤	Z-36区	一部欠	3.25×2.6	0.85	6.0	全周磨り	明赤褐色	縦帶、ヒダ状隆起	阿玉台	切り目
4	土器片鍤		完形	2.5×2.1	1.1	7.0	全周磨り	楕	単節LR	中期	切り目1対
5	土器片鍤		一部欠	2.0×2.4	0.9	5.0	一部磨り	明赤褐色	無文	阿玉台	切り目1対
6	土器片鍤	Z-36区	一部欠	2.5×2.8	0.75	6.5	全周磨り	にぶい赤褐色	沈線	中期前半	切り目1対
7	土器片鍤		1/2	1.2×2.25	0.8	2.0	全周磨り	褐灰	沈線	中期前半	切り目1対
8	土器片鍤		完形	2.0×2.1	0.9	3.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	切り目1対
9	土器片鍤		一部欠	2.7×2.75	0.7	8.0	一部磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目1対
10	土器片鍤		完形	3.05×3.2	0.8	10.0	打削	楕	無文	前・中期	切り目1対
11	土器片鍤	2K-38区	一部欠	2.5×3.0	1.0	9.0	打削	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	打ち欠き
12	土器片鍤		1/2	2.35×2.4	1.1	6.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	切り目1対
13	土器片鍤	Z-46区	完形	2.9×2.9	0.7	8.0	一部磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目1対
14	土器片鍤	Z-31区	2/3	3.05×3.4	0.9	13.0	全周磨り	にぶい黄褐色	輪積痕残す	阿玉台	切り目1対
15	土器片鍤	3D-36区	完形	2.8×3.2	1.1	12.0	全周磨り	にぶい赤褐色	口縁・有節沈線	阿玉台	切り目1対
16	土器片鍤	3F-44区	一部欠	2.9×2.6	0.9	8.5	全周磨り	にぶい赤褐色	単節LR	中期	切り目1対
17	土器片鍤		完形	3.3×3.0	0.85	10.0	全周磨り	明赤褐色	微降起縞文	阿玉台	切り目1対
18	土器片鍤	Z-41区	一部欠	3.4×3.1	1.1	15.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目1対
19	土器片鍤	3L-39区	完形	3.3×3.3	0.9	14.0	全周磨り	にぶい赤褐色	波状沈線	阿玉台	切り目1対
20	土器片鍤	3E-40区	完形	3.3×3.5	0.8	12.0	一部磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目1対
21	土器片鍤	Z-41区	完形	3.3×3.05	0.85	13.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	切り目1対
22	土器片鍤	P-36区	一部欠	3.9×2.55	0.8	11.0	一部磨り	にぶい赤褐色	無文	中期前半	切り目1対
23	土器片鍤	Z-31区	1/2	4.2×2.4	0.9	12.0	全周磨り	にぶい赤褐色	輪積痕・沈線文	中期前半	切り目1対
24	土器片鍤		1/2	3.0×3.1	0.8	11.0	打削	にぶい黄褐色	r無系文	中期前半	切り目1対
25	土器片鍤	Z-31区	完形	2.7×2.4	0.8	7.0	全周磨り	褐灰	ヒダ状隆起	阿玉台	切り目1対
26	土器片鍤	Z-31区	完形	3.5×3.2	1.6	20.0	全周磨り	にぶい赤褐色	輪積痕・有節沈線	阿玉台	打ち欠き
27	土器片鍤	Z-31区	完形	2.15×2.9	0.75	7.5	全周磨り	にぶい赤褐色	ヒダ状隆起	阿玉台	打ち欠き
28	土器片鍤	3D-43区	完形	4.1×4.2	0.8	16.0	全周磨り	にぶい赤褐色	輪積痕残す	阿玉台	切り目1対
29	土器片鍤		一部欠	4.1×4.2	0.9	20.0	一部磨り	明赤褐色	輪積痕	阿玉台	切り目1対
30	円盤		一部欠	3.4×4.3	0.9	27.0	全周磨り	にぶい赤褐色	輪積痕文・有節沈線	阿玉台	
31	円盤	K-51区	一部欠	2.7×3.6	0.7	8.0	全周磨り	楕	無文	前期	
32	円盤	3H-49区	一部欠	4.2×3.95	1.3	23.0	打削	にぶい楕	単節LR	中期	
33	円盤	U-31区	完形	2.15×2.8	1.0	10.0	全周磨り	楕	ヒダ状隆起	阿玉台	
34	円盤	5D-3区	完形	2.7×3.4	1.1	14.0	全周磨り	楕	沈線・ヒダ状隆起	阿玉台	
35	土器片鍤		完形	2.6×2.1	0.75	6.0	全周磨り	にぶい赤褐色	無文	阿玉台	切り目1対



第55図 遺構外出土土製品

③土偶（第55図No.36 PL30）この土偶は表土排除後に、前谷西遺跡エリア中央のS-17区から調査前に採集された。この土偶が確認された地点を精査したが、他の遺物や遺構は確認されなかつた。全長は7.2cm、幅5.3cm、胴部の厚さ1.05cm、頭部の厚さ1.2cm、重量41g。頭部を除きほぼ均等な厚さの板状の土偶で、完形である。全体の容姿は、大の字に手足を広げたような形態である。側面から見ると、ややねじれた様子が窺える。この土偶には足があるが自立できない。

土偶の製作については、粘土板を削り出し・つまみ出しなどを行って、胴体及び手足を整形しているようである。頭部は胴体に粘土塊を貼り付けナデている。全体的に表面はナデられている。そして、胸部から腕部にかけてV字状の粘土組貼り付けを行っている。この貼り付けに沿って細い竹管状工具（半截または多截）により沈線を引き、後にその上や平行して同様な工具による刺突列が施される。一部押し引き状の施文が見られる。頭頂部は平坦に整形されている。

色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）で、表裏に一部黒斑が見られる。胎土には砂粒を多く含む。

本土偶は形態が板状であることと施文の特徴から、前期後半を中心とした範囲内に入るものと考えられ、その下限は遺跡内の遺物出土状況や胎土の状況から中期初頭まで及ぶ可能性も考えられよう。

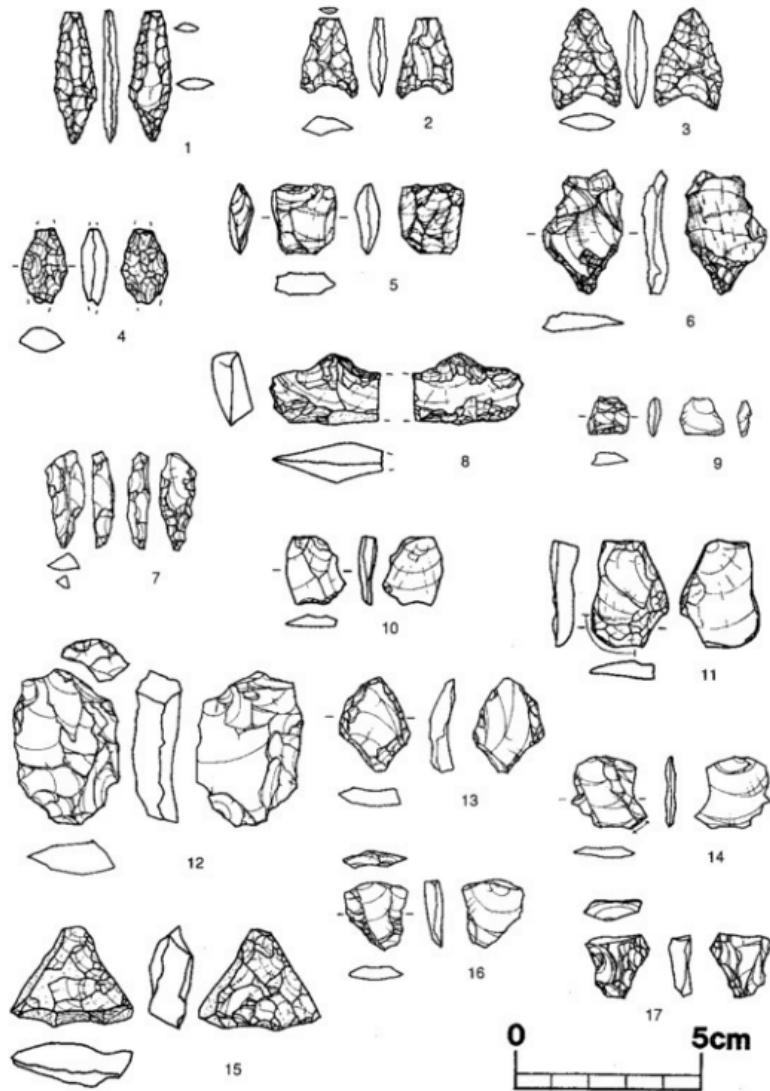
※下記文献の中で原田氏は、本土偶の装飾について「…遠慮がちではあるが、貝殻腹縫文の装飾もある。」と表記されている。しかしながら、実際は貝殻を施文工具とした文様ではなく、半截または多截した竹管状の工具の先端を尖らせて、刺突文等を施している。

参考文献

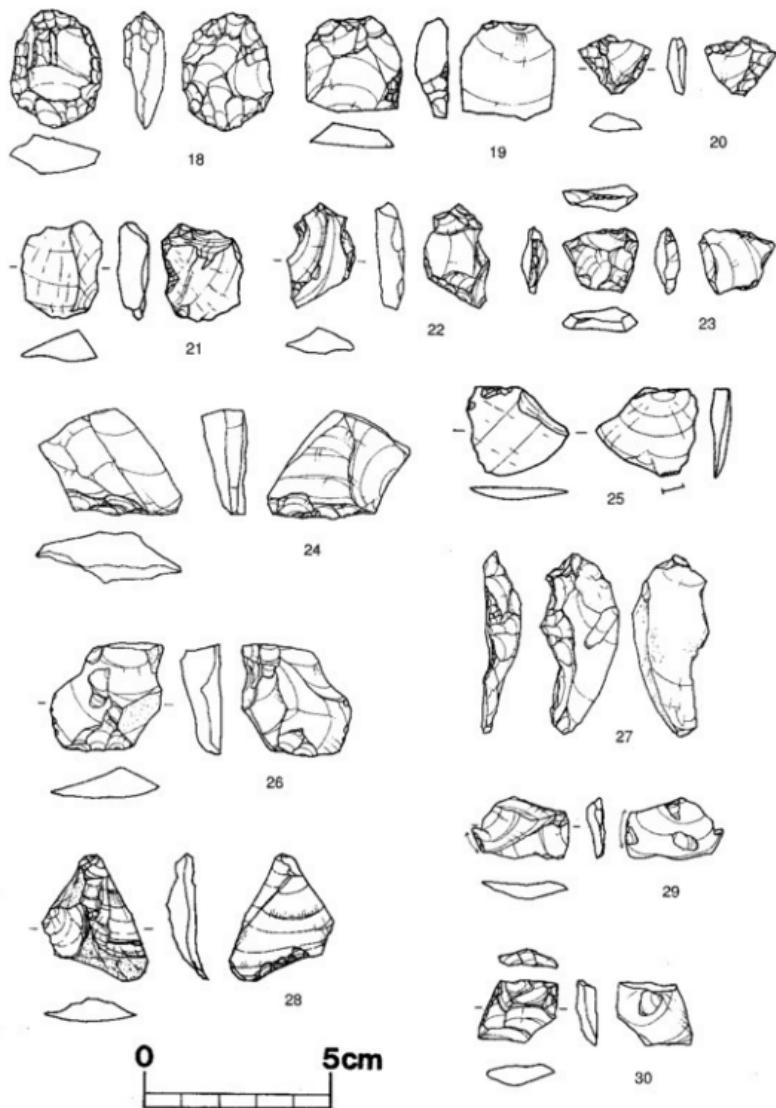
原田昌幸 「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』 魁誠社 1997に所収

④石器（第56～58図No.1～44）一括資料として取り上げた石器は、剥片石器と礫石器に分かれ、多くは剥片石器である。剥片石器の石材は黒曜石とチャートに二分される。器種は有茎尖頭器1点、石鏃3点、ビエスエスキュー1点、石錐2点、スクレイバー類が23点、磨製石斧が3点、分銅形打製石斧が1点、磨石2点、両刃礫器が1点、敲石が6点、垂飾品が1点である。

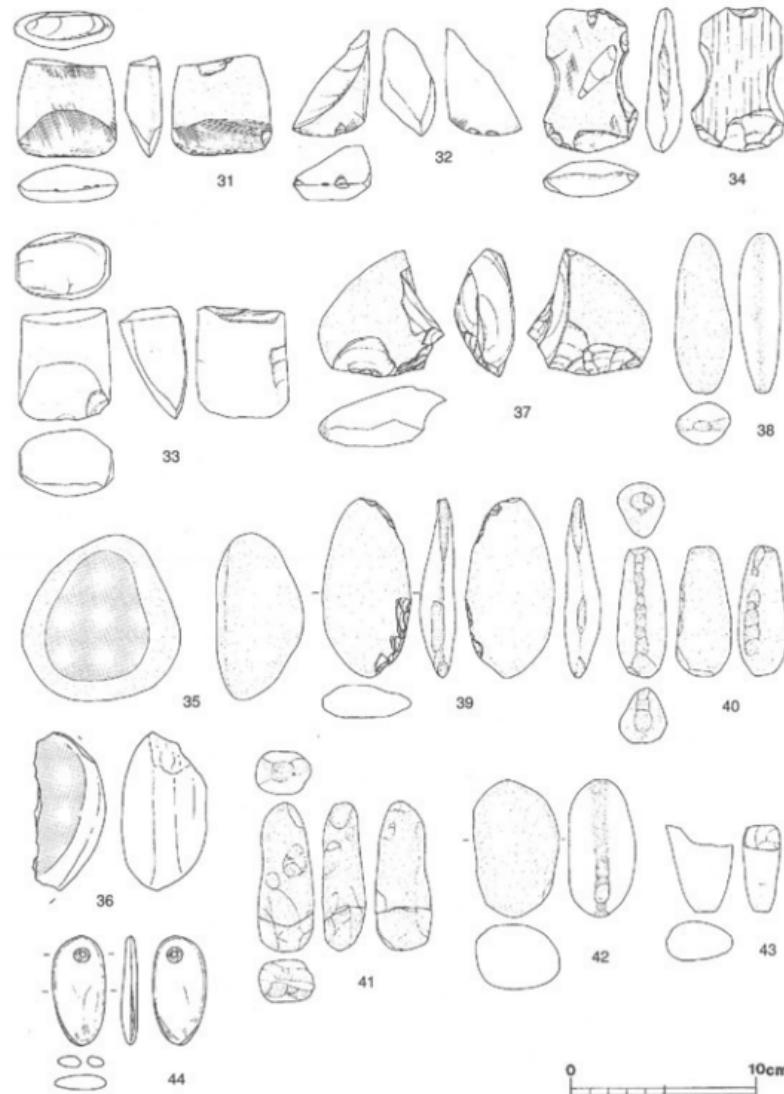
有茎尖頭器はチャート製のものであり、安山岩製のものが目立つ当地域においては、異色な存在である。そしてこれらの石器の中では、スクレイバー類の出土量の多さが目立ち、その石材は多くが黒曜石である。黒曜石の質は良好である。No.8はスクレイバー類とはしたが、石匙の未製品の可能性もある。No.1は草創期のものと想定できる。この他は、繩文時代前期から中期のものと思われる。



第56図 遺構外出土石器(1)



第57図 遺構外出土石器(2)



第58図 遺構外出土石器(3)

出土石器観察表

単位(cm・g)

No.	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
1	有茎尖頭器	3D-41区	1.7	1.4	0.45	1.14	チャート
2	石 簾		2.3	1.8	0.5	2.17	黒曜石
3	石 簾		3.5	1.1	0.4	1.45	チャート
4	石 簾		2.0	1.1	0.65	1.48	黒曜石
5	ピエススキーユ	F-16区	1.9	1.7	0.6	2.44	安山岩
6	石 鑿	2W-27区	3.1	2.1	0.5	3.21	黒曜石
7	石 鑿	U-6区	2.5	1.0	0.55	1.12	黒曜石
8	スクレイバー類	3D-39区	1.9	2.9	1.05	4.83	チャート
9	スクレイバー類	2J-48区	1.0	1.1	0.35	0.31	黒曜石
10	スクレイバー類	Z-49区	1.8	1.5	0.5	1.02	黒曜石
11	スクレイバー類	3D-36区	2.8	2.0	0.7	3.22	黒曜石
12	スクレイバー類	3D-41区	4.1	2.2	1.1	13.51	黒曜石
13	スクレイバー類		2.5	1.9	0.5	2.67	チャート
14	スクレイバー類	Z-46区	1.9	1.7	0.3	0.79	黒曜石
15	スクレイバー類	2E-36区	2.6	3.2	1.1	7.72	頁岩
16	スクレイバー類	Z-31区	1.8	1.7	0.5	1.28	黒曜石
17	スクレイバー類	3E-40区	1.7	1.1	0.6	1.55	黒曜石
18	スクレイバー類	3D-36区	3.2	2.3	1.1	7.71	砂岩
19	スクレイバー類		2.5	2.5	0.8	5.00	黒曜石
20	スクレイバー類	3F-41区	1.55	1.9	0.5	1.03	チャート
21	スクレイバー類	3D-36区	2.5	2.1	0.75	3.78	黒曜石
22	スクレイバー類		2.5	1.8	0.7	2.86	黒曜石
23	スクレイバー類		1.2	2.0	0.6	1.85	黒曜石
24	スクレイバー類	3D-43区	2.8	3.1	1.2	11.62	チャート
25	スクレイバー類	3B-31区	2.4	2.6	0.55	2.33	黒曜石
26	スクレイバー類		2.85	2.9	1.05	9.29	チャート
27	スクレイバー類	3I-31区	4.8	2.1	0.9	7.64	チャート
28	スクレイバー類	2N-46区	3.0	2.4	0.75	5.08	チャート
29	スクレイバー類	Z-46区	1.6	2.55	0.4	1.48	黒曜石
30	スクレイバー類		1.7	1.9	0.5	1.38	黒曜石
31	磨 石 斧		5.3	5.3	2.0	80.27	蛇紋岩
32	磨 石 斧		5.1	3.7	2.95	48.29	蛇紋岩
33	磨 石 斧	3I-25区	5.9	5.0	3.4	167.23	閃綠岩
34	分離形打翼石斧	3E-45区	7.6	5.0	1.9	100.86	絆泥片岩
35	磨 石		8.9	8.55	4.7	510.69	閃綠岩
36	磨 石	3A-29区	8.35	3.8	4.6	177.65	閃綠岩
37	両刃礫器	2U-30区	6.5	6.8	3.2	144.09	ホルンフェルス
38	磨 石	2Y-29区	8.5	2.95	2.2	91.15	砂岩
39	磨 石		9.55	4.8	1.9	110.04	砂岩
40	磨 石	Z-46区	7.0	2.6	2.8	78.09	砂岩
41	磨 石	3E-33区	8.0	3.0	2.3	87.45	砂岩
42	磨 石	2Y-29区	7.4	4.6	3.6	179.28	砂岩
43	磨 石	2Z-48区	3.1	3.3	2.0	38.13	閃綠岩
44	乘 簡 品	Z-46区	5.8	2.8	0.9	18.66	砂岩

第3節 平安時代以降

平安時代の遺構は火葬墓や方形区画墓、そして土坑などが確認されている。火葬墓は前谷東遺跡エリヤから2基出土し、東原遺跡エリヤ内では2基出土した。方形区画墓は東原遺跡エリヤで2基、前谷東エリヤで1基確認された。この内の2号方形区画墓内には骨蔵器が埋納されていた。前谷遺跡群内の平安時代の土地利用は、居住の場という要素は稀薄で墓域としての性格が強い。平安時代より後は、近世以降の時期に位置付けられる溝や土坑が確認されている。

1. 火葬墓(CT)

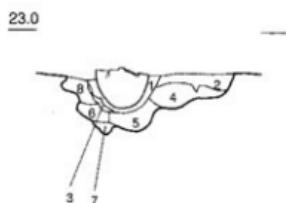
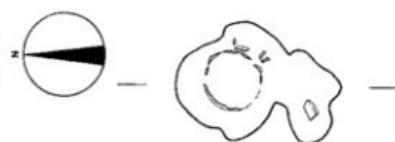
今回確認された火葬墓は全部で4基である。遺跡群内では方形区画墓内から火葬骨蔵器が出土した例があるが、これは方形区画墓の頂で扱うこととした。

第1号火葬墓(HM H CT-2)

(第59・60図 PL 8・31)

(遺構) 前谷東遺跡エリヤの北東隅、2号火葬墓からは北へ56mの地点に位置する。確認面において黒褐色が充填された円形プランと上部が破壊された土師器甕が発見された。土坑は、径40cm、深さ20cm程の不整円形の土坑を中心に、長径30cm、深さ10cmの長楕円形の土坑が南に付随する複雑な形状を呈していた。土師器甕は、中心となる土坑の底から約10cm程上に正位の状態で埋納されていた。覆土は主にローム粒混じりの黒色土で構成され、僅かに焼土や炭化物の混入が認められた。特に骨蔵器の周囲の黒色土中からは、1cm程の大きさの木炭を微量ながらも混ぜている状況が確認されている。

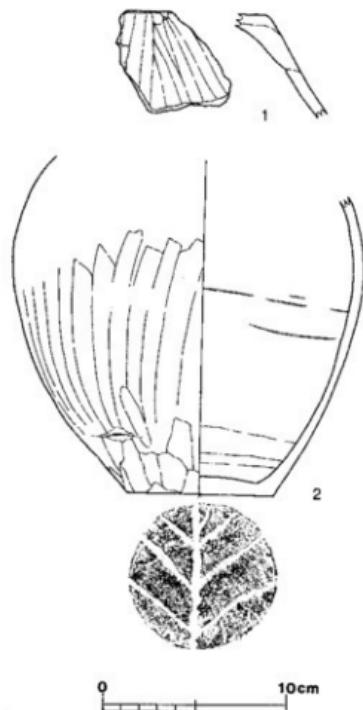
(遺物) No.2の土師器甕を骨蔵器の本体とする。比較的器高が小さく体部に丸みをもつ



- 1 2.5Y 3/1 黒褐色 燃土少、炭化物少、骨蔵器下に1cm大の炭化片
- 2 2.5Y 3/1 黒褐色 炭化物微、炭化粒、ローム中少、ローム粒中
- 3 2.5Y 5/6 黒褐色 ローム塊
- 4 10YR 3/4 喜褐色 燃土少、燃土粒少、ローム大中、ローム粒多
- 5 10YR 3/3 喜褐色 炭化物微、炭化粒少
- 6 2.5Y 3/2 黒褐色 ローム小粒、ローム粒少
- 7 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 黒色土まじりのローム



第59図 第1号火葬墓



第60図 第1号火葬墓出土遺物

1号火葬墓

No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	壺 土解器	B. (5.5)	細片	普通	φ 1 mm の石英粒を中纏、 雲母片を少量	にぶい褐色 にぶい褐色	壺の底部付近の細片。本体に被せて蓋としたものの破片か。外側は縦方向の細かな縫き、内側は横方向の粗な縫を施す。	骨壺本体の壺の中より検出
2	壺 土師壺	C. 8.0 B. (18.0)	2/3	普通	φ 1 mm の長石・石英粒を中纏	にぶい黄色 にぶい黄色	中型の壺。最大径は体部中位にあり、下位から丸みを帯びて立ち上がる。外側は体部中位以下に縦方向の縫を施し、蓋の端部が当たった部分は僅かな段ができる。比較的丁寧な作りである。	底部に木葉痕

中型の壺で、特殊なものではない。肩部以上を欠損し、蓋の存在も明らかではない。ただし、壺の中を精査中に土師器壺の底部片(No. 1)を検出しておらず、壺の体部以下を蓋として被せていた可能性も考えられる。

壺の中には調査以前から褐色上が入り込んでおり、人骨の残存状況は非常に悪い。鑑定結果によれば性別不詳の小児とのことである。

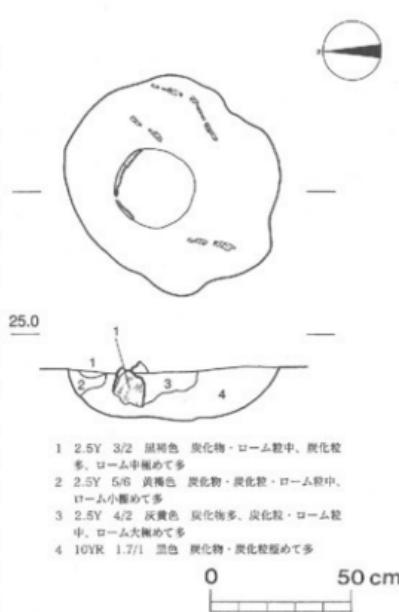
(時期) 平安時代の9世紀中葉に位置付けられる。

第2号火葬墓(旧MH CT-1)

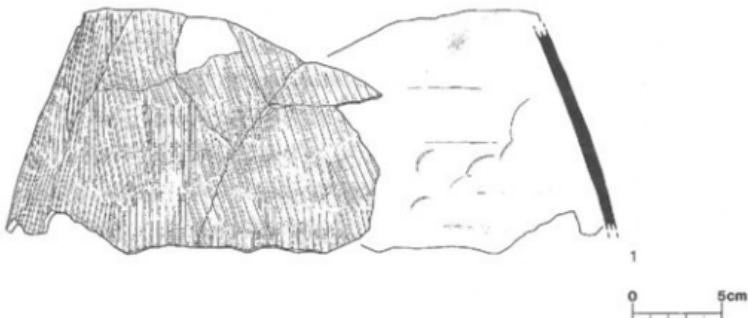
(第61・62図 PL 8・31)

(遺構) 前谷東遺跡エリア内、西から東に向かって三角形状に延びる丘陵のほぼ中央平坦部、当調査エリアにおいては最東端に立地する。ローム層上面の確認面より炭化物が円形に詰まった状態で発見された。径70~80cm、深さ18cmの不整円形の土坑に炭化物が充填され、そのほぼ中央にはロームブロック混じりの茶褐色土が円形に詰まっていた。またその茶褐色土を囲むように須恵器の鉢の破片が倒位の状態で埋設されていた。骨蔵器に相当する遺物は鉢の破片以外に検出されず、その内側の茶褐色土はしまりがないことから、骨蔵器本体は既に抜き取られたものと思われる。倒位の状態で検出された鉢の破片は骨蔵器の蓋として被せられたものの残りであろう。なお、茶褐色土中には僅かであるが骨片が確認された。従って当遺構が火葬墓であることは間違いない、また骨蔵器は抜き取られ、以前から土圧等によって若干破損していたことが推測される。

なお、当火葬墓の骨蔵器が曲げ物や桶などの有機質の材料によるものであった可能性も考慮したが、土坑中央の茶褐色土は単一層でそれらしき痕跡は検出されなかった。また骨片について



第61図 第2号火葬墓



第62図 第2号火葬墓出土遺物

もごく僅かな量が土中に局所的に混ざるように検出されたのみで、容器に納められていた状況を想定させるものではなかった。さらに須恵器鉢の破片が有機質の容器の蓋として適当であったことは考えにくく、田村・沖宿遺跡群から出土した他の20基の火葬墓にも例がないため、上記のように後世の破壊を想定するのが妥当と考えた次第である。

(遺物)須恵器の鉢の体部片が全周の1/3程残存する。体部の傾き等から判断すると、本来はバケツ状の深い鉢の形態を持っていたと思われる。体部上位から口縁部にかけては埋設以前に打ち欠かれており、土坑内および周辺からも破片は検出されていない。

骨片は微細なもので量も少なく鑑定に堪えないものである。

(時期)平安時代の9世紀代のものと考えられる。

2号火葬墓

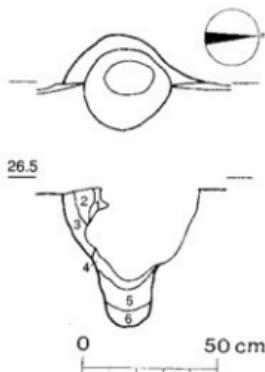
No.	器 形	法 量 (cm)	残存率	焼成	胎 土	色調 外 面 内 面	器形・技法の特徴	備 考
1	鉢 須恵器	B.(11.4)	細片	普通	φ 1~2mm の長石・石英 粒を多量、雲 母片を少量	褐色 明褐色	鉢の体部中位の破片。約1/3周分残存している。 外縁は縱方向の平行線を基調とする網目状の叩き が施され、内面は横方向の籠なでと押さえ跡がみ られる。	口縁部のある 方向の割れ口 は消耗がみら れる。

第3号火葬墓(旧H H C T - 3)(第63図 PL 8)

(遺構)東原遺跡エリアの南端、丘陵上平坦面に位置し、1号方形区画墓の南約30mの地点に位置する。

当火葬墓は農作業用トレッサによる破壊が著しく、確認時には土坑の半分以上の部分が掘削溝の中に属し搅乱されていた。掘削溝の土を除去し、土坑プランの確認と土層觀察が辛うじて行えたに過ぎない。土坑は径50cmの円形で、2段に掘り込まれ、最も深い部分は確認面から51cmである。覆土は焼土粒や炭化物を含む褐色土で構成され、特に土坑が深く掘り込まれる2段目の部分の土層からは焼骨片が検出された。骨蔵器は搅乱によって存在しないが、焼骨片の検出と覆土の状況から当遺構を火葬墓と判断した。焼骨片は骨蔵器が破碎された際にこぼれ出たものであろう。

(遺物)土坑からは骨片以外に遺物は検出されず、周辺にも遺構に伴うと考えられる遺物は採集されなかった。骨片は微細なもので、量も僅かしか残存しておらず鑑定に堪えないものである。



第63図 第3号火葬墓

- | | | | | |
|---|------|-----|-----|-----------------------------|
| 1 | 10.9 | 4.6 | 褐色 | 安灰灰少 |
| 2 | 5.5 | 4.6 | 灰褐色 | 灰土少・黄化度・ローム軽中・灰土稍多、黄化度・ローム少 |
| 3 | 7.5 | 4.6 | 褐色 | 灰土少・ローム少、灰土多、ローム少 |
| 4 | 7.5 | 4.6 | 褐色 | 灰土较多、氧化较少、ローム中 |
| 5 | 7.5 | 4.6 | 褐色 | 灰土稍多、氧化度多、灰土少 |
| 6 | 7.5 | 4.6 | 褐色 | 灰土少・灰土稍多、ローム少 |

(時期) 平安時代の可能性が考えられるが詳細は不明。

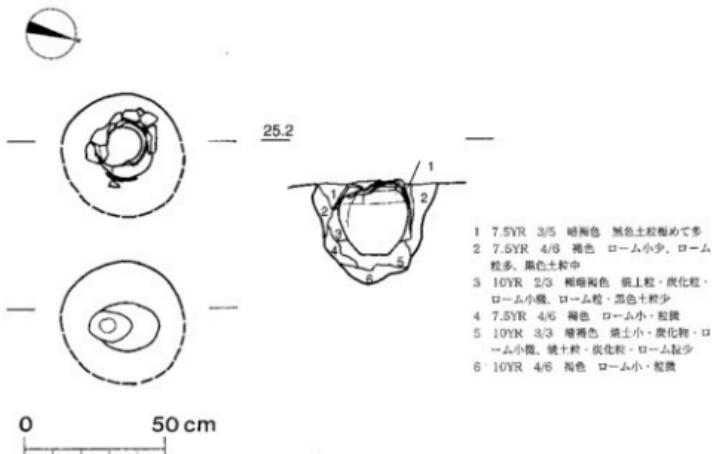
4号火葬墓(旧HH CT-1)(第64・65図 PL 8・31)

(遺構) 東原遺跡エリアの西端の平坦部に立地する。確認面において須恵器鉢の底部および土師器甕の口縁部が露出している状態で発見された。土坑は径45cmのほぼ正円形で、深さ35cm程の底にさらに一段浅く掘り込まれている。土師器甕を骨蔵器の本体とし、土坑の底から約10cm程上に正位の状態で埋納していた。覆土は暗褐色土を主体とし、甕の底部付近に多く炭化物を混入させていた。また甕の体部周辺や蓋としての鉢の直下にも僅かに炭化物の混入が確認されている。

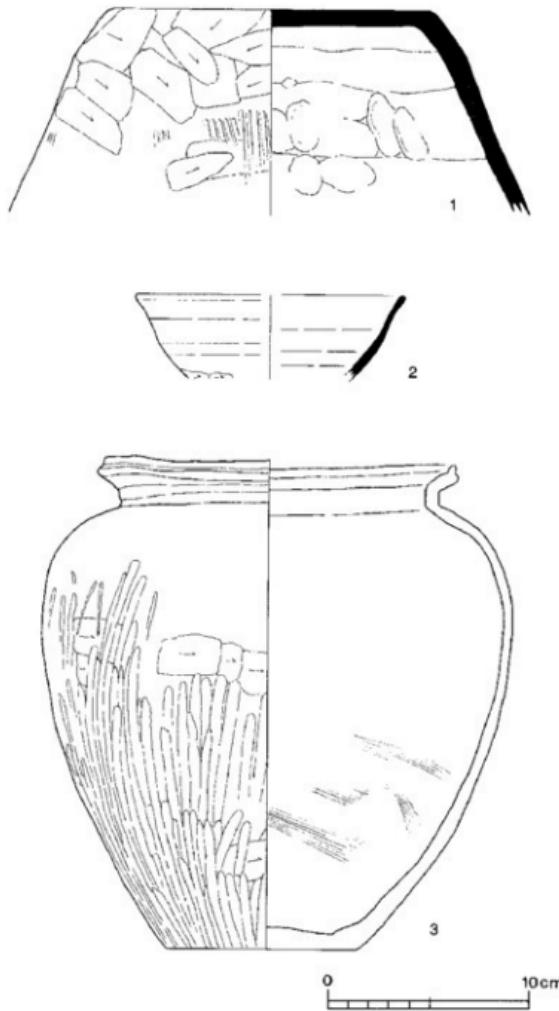
(遺物) 骨蔵器はNo.3の土師器甕とNo.1の須恵器の鉢で構成されている。甕は肩部の張りが強く、一般的な長胴な土師器甕と比べてやや異質な感じを受ける。これに須恵器の鉢を倒位に被せて蓋としていた。鉢は体部下位から底部にかけての部分であり、これより上部の破片は確認されていない。体部上位や口縁部は、使用に際し欠き取ってしまったものと思われる。器形は体部が直線的に開く大きめの鉢であり、軟質な焼成である。なお、骨蔵器本体である土師器甕を精査した際にNo.2の須恵器壺の破片を検出した。中蓋として使用された可能性もあるが、甕の口径に比して壺の口径は小さく、完形であったとしても蓋の機能を果たさなかつたと思われる。

火葬人骨は、甕の中に土が入り込んでおり良好な残存状況ではないが、歯や頭蓋骨、肩胛(甲)骨片などを確認することができる。150gを検出し、成人女性と鑑定されている。

(時期) 平安時代の9世紀後葉に位置付けられる。



第64図 第4号火葬墓



第65図 第4号火葬墓出土遺物

4号火葬墓

No.	器 形	法 量 (cm)	残存率	焼成	胎 土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備 考
1	鉢 須恵器	B.(10.2) C. 15.8		1/4	普通 φ 1 mmの長石・石英粒を少量、雲母片を多量	灰黄褐色 灰黄褐色	体部は直線的で渋めに立ち上がる。体部外面に竪方向の平行線の印き、下位に窓削りを施し、内面は横方向の窓なでと押さえ跡がみられる。	内面に豆粒状の剥離がみられる
2	环 須恵器	A.(13.6) B.(4.1)		細片	良好 微細な長石・石粒を中量	黄灰色 黄灰色	体部中位に若干丸みを帯び、外反ぎみの口縁部がつく。体部内外面に凹凸などで、外面下位に手持ち窓削りを施す。	内蓋か
3	壺 土師壺	A. 17.4 B. 9.4 C. 24.5		完形	良好 φ 1 mmの長石・石英粒を多量、雲母片を中量	橙色 にぶい橙色	最大径は体部上位にあり、強く肩を張る。頸部が短く立上がり、口縁部は肩部からコの字状の紐曲をもって體に張り出す。体部外腹は中位以下に横方向の窓削りを行い、その上から縱方向の窓を加えている。内面は横方向の窓なでを施す。	底部に木漬痕

2. 方形区画墓

方形区画墓は全部で3基確認されている。この内1基は区画内に火葬骨蔵器を埋納してある。またもう1基もやはり、区画内に火葬骨蔵器が埋納されたと想定できる状況が観察されているが、骨蔵器は確認されなかった。もう1基は区画する溝のみのものである。

1号方形区画墓(旧HH CT-2)(第66図 PL8)

(遺構) 東原遺跡エリアの中央、丘陵上の平坦面に位置し、4号火葬墓から東へ約70m、2号方形区画墓からは南東に35mの距離にある。確認面においては当初、炭化物の詰まった円形土坑のみが検出されていたが、周囲を精査した結果、浅い周溝が巡ることを確認した。周溝はほぼ正方形のプランを呈し、各辺を東西南北に合わせるように配置している。南東隅に溝が巡らない切れ目がある。周溝の規模は、西側の最長辺で6.8m、南北辺で6.5mを越える長さをもち、幅は南西隅の大部分で約1m程度、深さは深いところで20cm程度である。周溝に開まれた中央には径1.1mの土坑があり、深さは最深部でも30cm程度で、土層は炭化物混じりの層であった。

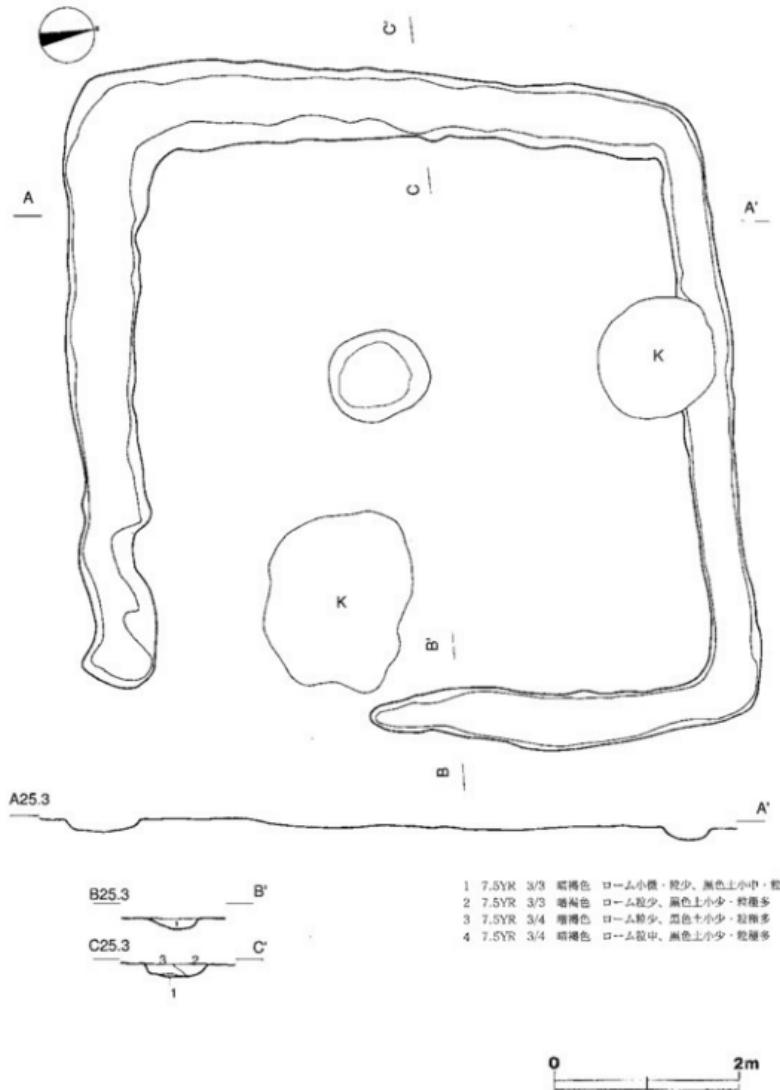
(遺物) 遺物は、周溝から土師器及び須恵器の微細な破片が数点検出されたが¹、図示可能なものはない。火葬人骨も確認されていない。従って、当遺構を火葬墓として認定する根拠は薄弱であるが、千葉県をはじめ各地の遺跡で報告されている所謂「方形周溝遺構」あるいは「方形区画墓」に類するものと思われる。また当遺跡の2号方形区画墓は、類似した周溝をもち、中央には骨蔵器が検出されているので、明らかに火葬墓と認めて良いものである。よって当遺構も、周溝で区画された主体部をもつて火葬墓であったと考えておきたい。恐らく骨蔵器は調査以前に削平されてしまい、周囲に充填された炭化物のみが土坑に残ったものであろう。

(時期) 平安時代のものと考えられるが詳細は不明。

*これらの名称については下記の文献において使用され、その性格が吟味されている。しかし、今回の報告にあたっては、その主体部が火葬によるものか土葬によるものか、この点のみを重視し、単純に「火葬墓」の名称を与えている。周溝をもつ墓に関しては、今後、それをもたないものとの関係を明確にし、地域を広げて論議すべきであろう。

参考文献

- ・金丸 誠 1982 「房総半島における方形・円形周溝について」『研究連絡誌』第1号
財團法人千葉県文化財センター
- ・渡辺修一 1983 「群小区画墓」の終焉—所謂「方形周溝遺構」をどうみるかー』
『研究連絡誌』第6号 財團法人千葉県文化財センター



第66図 第1号方形区画墓

- ・渡辺修一 1985 「群小区画墓」の終焉(2)－「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討－『研究連絡誌』第14号 財団法人千葉県文化財センター
- ・木村和紀 1987 「房総における改葬系区画墓の出現期－方形(円形)区画改葬墓の提唱－」『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』 財団法人市原市文化財センター
- ・神野信 雅生斎 1990 「武士遺跡におけるいわゆる「方形周溝遺構」について」『研究連絡誌』第29号 財団法人千葉県文化財センター

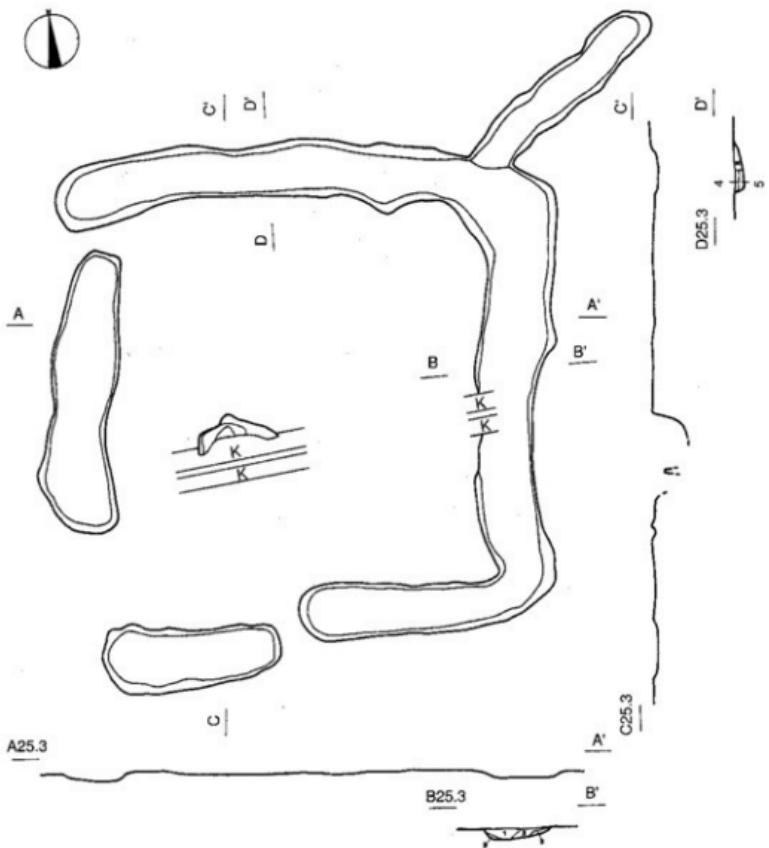
2号方形区画墓(旧HH CT-4)(第67・68図 PL9・31)

(遺構) 東原遺跡エリアの北辺、丘陵上の平坦面に立地し、1号方形区画墓から約35m離れている。須恵器甕の破片がトレンチャーの掘削溝の脇に散乱している状況で発見された。掘削溝内および周囲の精査により、方形の周溝と主体部となる土坑があることを確認した。周溝はおよそ正方形を意識して掘られており、東西南北の各方位に辺を合わせている。西面と南西部が独立した短い溝によって構成されるため、全周する溝とはなっていない。また北東隅からは、方形の周溝の対角線に合わせるかのように外側に延びる溝が敷設されている。周溝の規模は、最も長い北辺で5.5m、最大幅は北東隅で1.1m、深さは最深部で16cmである。南西部の短い溝がややずれるものの、およそ一辺5m程の正方形を企画したものと思われる。

周溝の内側には、中央より若干南西に寄った位置に主体部となる土坑が確認された。土坑の半分以上が掘削溝によって搅乱されており、北側の残存部分に僅かながらその掘り方を確認することができた。これに従って土坑の規模を推定するならば、平面形は長径90cmの横円形で、深さ50cm前後となる。土坑内とその周辺からは、破碎された須恵器の甕と鉢の破片が検出され、大きめの甕の破片中には焼骨片が残存していた。従って甕は骨蔵器の本体、鉢はこれの蓋であったと判断することができる。また、甕の底部は土坑の底の方から発見されており、骨蔵器の埋納は正位であったと推定される。

(遺物) 須恵器甕および鉢は両者とも約1/2が残存している。甕は比較的体部が長く、大きく開く口縁部をもつ。鉢は直角に近い角度で外反する口縁部をもち、甕と共に通する横方向を基調とする叩き目が体部に付く。胎土や焼成など質感が類似しており、同一地域の製品と思われる。両者を組み合わせて見ると、鉢が甕の口縁部をすっぽりと覆い、さらに甕の最大径の位置で鉢の口縁部が止まるようになり、相性良く組み合う。ただし、両者は住居跡等から検出される一般的な甕や鉢に比べて特別異なっている訳ではなく、骨蔵器としての専用器ではない。従って骨蔵器への転用にあたっては、良い組合せを選択しているものと考えられる。

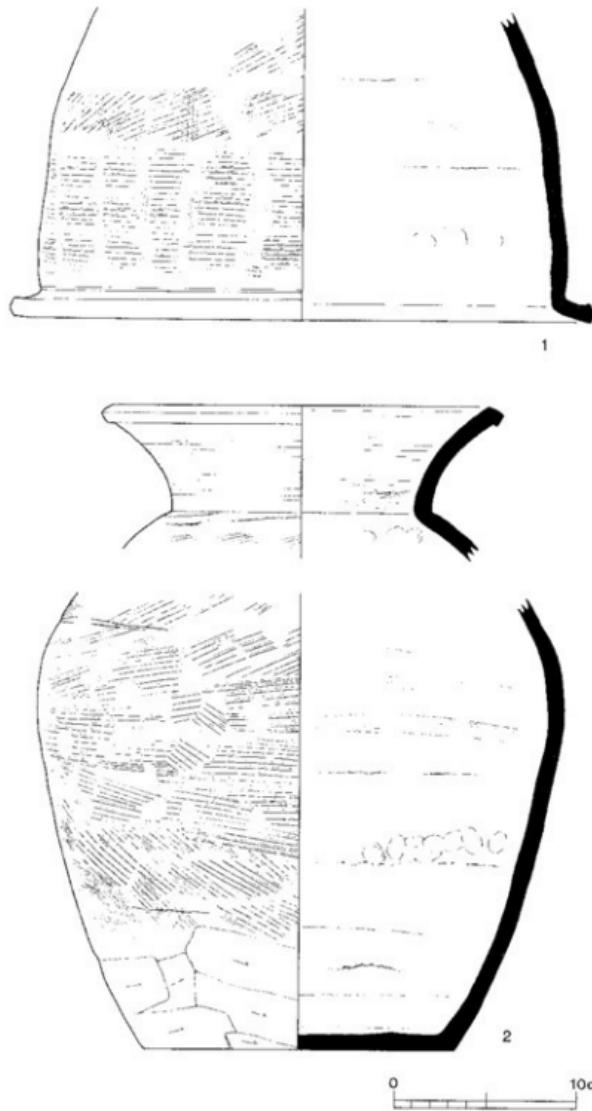
火葬人骨は385g残存し、成人女性と鑑定されている。周溝から当遺構に関連する遺物は一切検出されていない。



- 1 7.SYR 3/3 墓褐色 土化物少、ローム粒少、黑色土小少、粒少
- 2 7.SYR 4/4 棕褐色 土化物较少、ローム粒少、粒中、黑色土中偏、小少、粒少
- 3 7.SYR 4/6 棕褐色 ローム大少・中中・小中・粒多、黑色土粒少
- 4 7.SYR 3/2 黑褐色 ローム粒稍、黑色土中中・小少、粒多
- 5 7.SYR 3/4 棕褐色 土化物少、ローム粒中、黑色土小少、粒中



第67図 第2号方形区画墓



第68図 第2号方形区画墓出土遺物

(時期) 平安時代の9世紀前葉に位置付けられる。

2号方形区画墓

No.	器形	法量 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	鉢 須恵器	A.(31.0) B.(16.6)		1/2	堅緻 石・石英粒を多量	灰色 灰色	体部は中位から上位にかけてほぼ垂直に立るので体部自身の開きは小さい。口縁部は直角的に開口する。外面上位は横方向、中位以下は斜方向の平行線の叩きを施し、縱方向のなでにより部分的な擦り消しを行っている。内面は横方向の混なでと若干の指圧圧痕があらわれる。	焼成や胎土は組み合せると良く似ている
2	圓 須恵器	A.(20.4) B.(34.8) C.(17.0)		1/2	堅緻 石・石英粒を多量	灰色 灰色	最大径が体部中位や上にあり、ハの字状に外反しながら窓ぐロ縁部がつく。体部外面に横・斜方向の平行線の叩き、下位に見削りを施す。内面は胎土縁の離ぎ目をなで消すように横方向の粗なでを行い、指圧圧痕が若干みられる。	体部外面上位に跳ね状の工具が当たってできた沈線がつく

3号方形区画墓(旧HH1号周溝)(第69図 PL9)

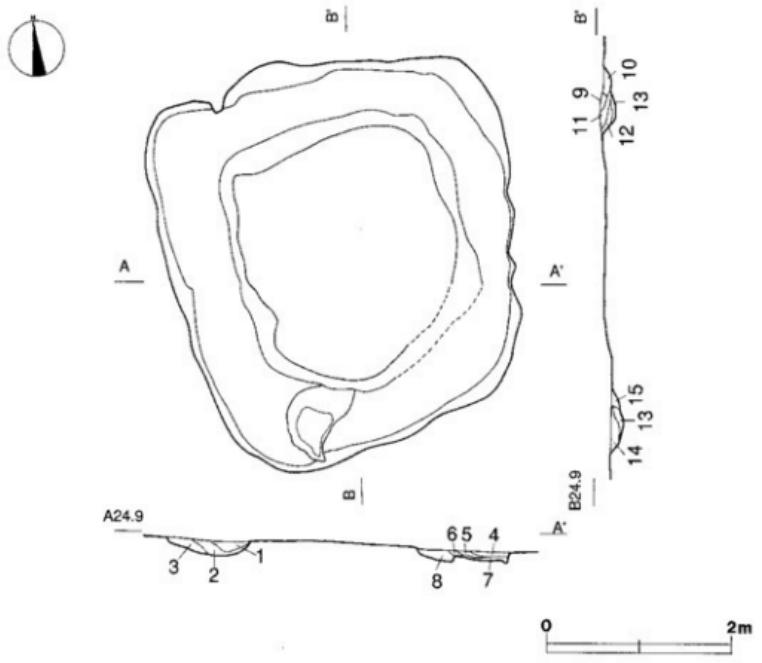
(遺構) 前谷東遺跡エリアの南東端、埋没谷の近接地に位置し、調査エリア境界と接している。1号方形区画墓から南東へ約70m、2号火葬墓からは南西に123mの距離にある。地形は西から東方向へ及び、北から南に緩く傾斜している。確認面においては当初、遺物を包含した周溝が検出されたが、遺物はいずれも縄文土器であった。

周溝はほぼ方形のプランを呈し、各辺を東西南北に合わせるように配置している。周溝の規模は、西側の最長辺で約4m、北辺で3.8mを測る。幅は南西隅の最大部分で約1.1m程度、深さは深いところで15cm程度である。周溝の南東隅は形態がやや崩れている。周溝の底面は皿状をなす。周溝の南西隅付近の底面には、浅い凹みが確認された。

周溝に開まれた中央部分には、掘り込みを持つ遺構は確認されていない。

(遺物) 遺物は、周溝からは縄文土器のみが確認されている。火葬人骨も確認されていない。従って、当遺構を方形区画墓として認定する根拠は薄弱であるが、近接して同様な周溝を持つ遺構が確認され、その溝の方向も同様であることから、方形区画墓とした。

(時期) 平安時代のものと考えられるが詳細は不明。



第69図 第3号方形区画墓

- 1 7.5YR 3/4 暗褐色 腐化物質、ローム少・小・粒少
- 2 7.5YR 4/4 暗色 ローム粒・黑色土粒少
- 3 7.5YR 4/4 暗色 ローム大・中・小少、ローム粒・黑色土大・中少
- 4 黄土
- 5 7.5YR 3/3 黑褐色 腐化物質、炭化物、ローム粒少
- 6 7.5YR 3/4 暗褐色 腐化物、ローム大粒、ローム小・粒少
- 7 7.5YR 3/4 暗褐色 黑土粒度、ローム少・粒少
- 8 7.5YR 4/4 黑色 燃土粒、炭化粒、ローム粒少

- 9 7.5YR 3/4 暗褐色 腐化物・粒、ローム粒少、ローム大・中少
- 10 7.5YR 4/4 暗色 黑土小塊、腐化物、ローム中・小・粒少
- 11 7.5YR 4/6 暗褐色 黑土粒、腐化物、ローム大・中微、炭化粒、ローム小・粒少
- 12 7.5YR 4/4 暗色 ローム大・中微、ローム粒・黑色土少
- 13 7.5YR 4/4 暗色 黑土小・ローム大・中微、ローム粒少
- 14 7.5YR 4/4 暗色 腐化物、ローム半・小・黑色土共産、ローム粒少
- 15 7.5YR 4/4 暗色 ローム小中、ローム粒少

3. 土坑(S K) (第70・71図 P.47土坑一覧参照)

ここで掲載した縄文時代以外の土坑のほとんどは、前谷東遺跡エリアから確認されている。特に、同遺跡エリアの東端付近に見られた。これらの遺構は、覆土の状況や出土遺物から古代または、近代以降のものと考えられる。古代の土坑としたものの覆土の多くは、暗褐色土や黒褐色土に近い色調を持つ。遺物は土師器や須恵器が出土している。遺物はいずれも小破片であるが、大方は平安時代に位置付けられよう。近代以降のものは、覆土にしまりがなく多量にロームブロックが含まれていることが特徴である。

今回図面として一部のみ掲載したものに、遺跡群内から多数確認された茅穴がある。形態的には円形のものや長方形のものが見られた(第42~44号土坑)。東原遺跡エリアでは表土排除前に存在した農道に沿って並ぶように確認された。この茅穴はいずれも近代以降のものと考えられる。第42~44号土坑の記述は省略した。

以下は特徴的な遺構について述べる。

第29号土坑(旧MHS K-33) (第70図 P L 9)

(位 置) 前谷東遺跡エリア北東端の3H-28区に確認された。

(形 状) 平面形は長径260×短径114cmの楕円形で、深さ77cm、底面は平坦である。

(出土遺物) 上坑内から縄文土器が出土した。

(所 見) 上層は黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積している。土層に焼土・炭化物粒を含まない。壁と覆土は明瞭に分けられる。

第33号土坑(旧MHS K-45) (第70図 P L 9)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの東端、3J-37・38区から確認された。

(形 状) 平面形は長径230×短径185cmの隅丸方形を呈し、深さは約20~30cmを測る。主軸はN-43°-Eである。底面は平坦でピットが2ヶ所確認された。ピットの深さは、深い方で45cmであった。深いピットの最上層にはローム粒を多量に含む土層が見られた。

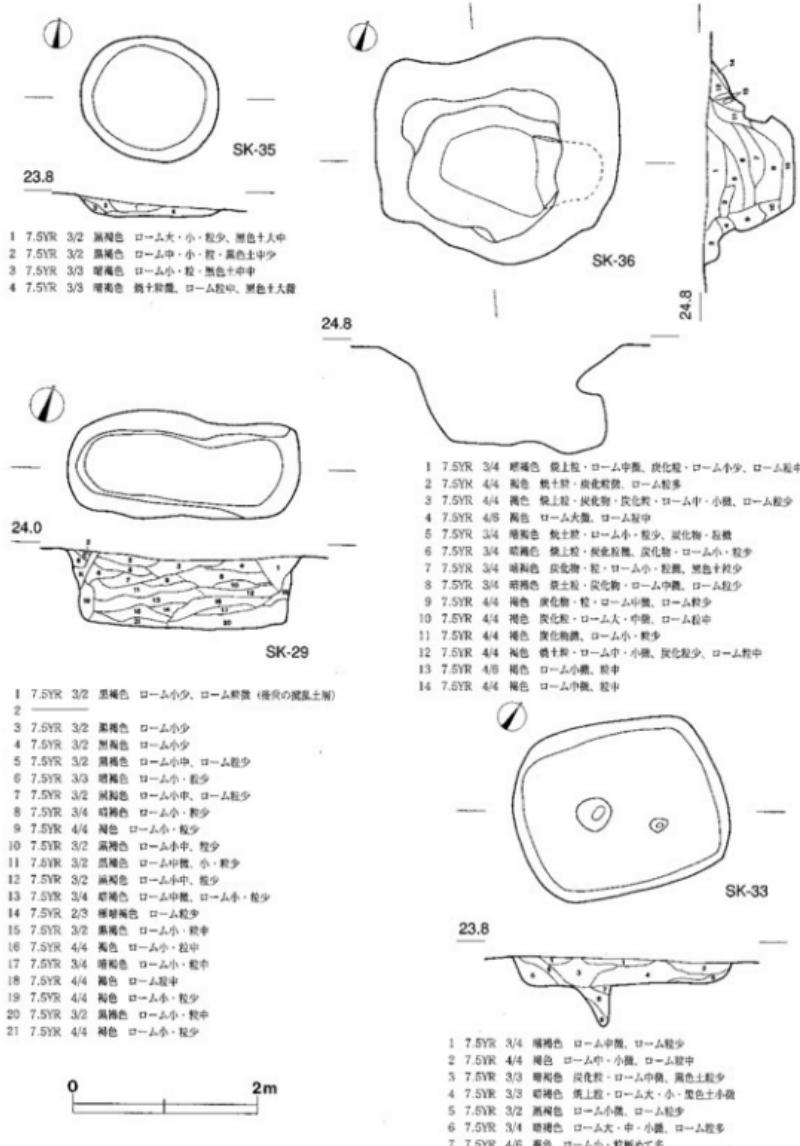
(出土遺物) 覆土中から土師器破片が極少量出土している。

(所 見) 覆土のほとんどは暗褐色土からなり、一部黒褐色土の土層も見られた。遺物から平安時代のものと判断した。火葬墓と同様な時期のものか。

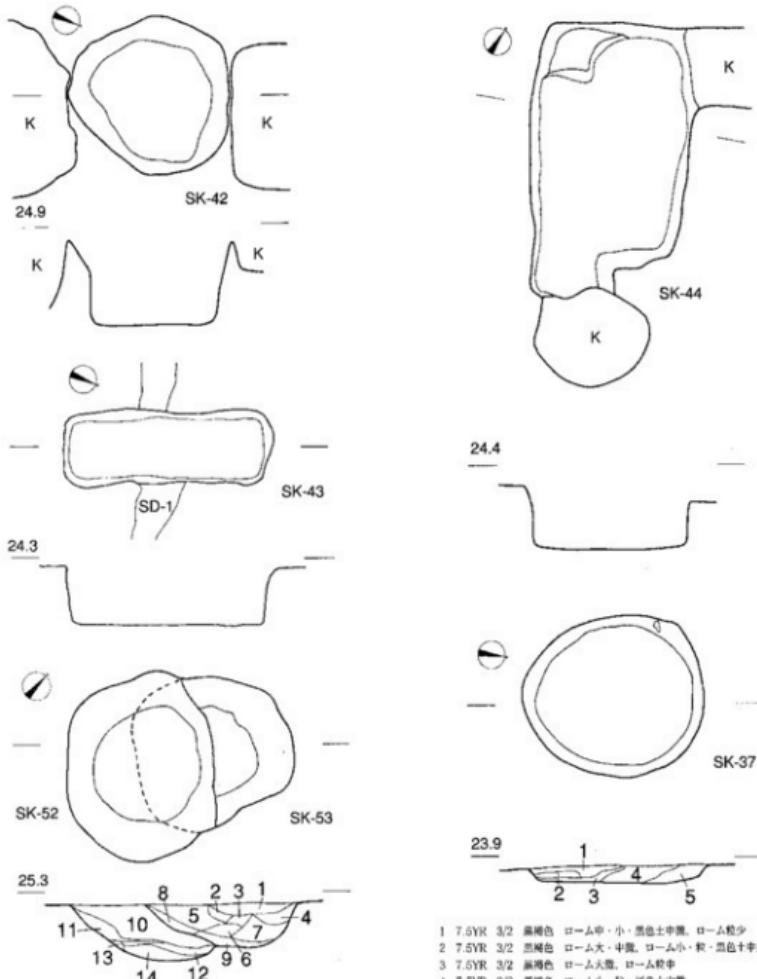
第35号土坑(旧MHS K-48) (第70図)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの東端、3J・H-32区から確認された。

(形 状) 平面形は長径150×短径130cmの不整円形で、断面形は最深部約20cmの皿状をなす。



第70図 平安時代以降の土坑(1)



- 1 7.5YR 4/4 黒褐色 腐化物・ローム少、ローム粒中
- 2 7.5YR 3/4 明褐色 腐化物・粒・ローム粒中、ローム少
- 3 7.5YR 3/4 明褐色 腐化物・粒・ローム少、黒色土少、ローム粒中
- 4 7.5YR 4/6 黑色 ローム粒中、黒色土少
- 5 7.5YR 3/3 明褐色 焙土粒・炭化物・ローム较少、炭化物中
- 6 7.5YR 3/4 明褐色 焙土粒・ローム少・粒少、炭化物・粒中
- 7 7.5YR 4/6 黑色 炭化物少、ローム小中、ローム粒極めて多
- 8 7.5YR 4/4 黑色 焙土粒・炭化物・ローム少・少、炭化物・ローム粒中

- 9 5YR 3/3 略歩褐色 表上少、鐵土粒・ローム粒中、炭化物・炭化粒多
- 10 7.5YR 4/6 黑色 炭化物・炭化粒・ローム少、ローム粒極めて多
- 11 7.5YR 4/6 黑色 表上粒少、炭化物・炭化粒・ローム粒中
- 12 7.5YR 4/6 黑色 腐化物・粒少、ローム粒極めて多
- 13 7.5YR 4/6 黑色 表上少、ローム小中、炭化物・粒多、ローム大・粗中
- 14 5YR 2/2 黑褐色 鐵土粒・粒中、炭化物・粒極めて多、ローム少、ローム粒中

第71図 平安時代以降の土坑(2)

(出土遺物) 繩文土器の混入が見られた。

(所 見) 覆土の色調や状況が第33号土坑と同様であり、古代のものと考えられる。

第36号土坑(旧MHSK-49)(第70図 PL9)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの東端、3J・H-41・42区から確認された。

(形 状) 平面形は長径260×短径235cmの楕円形で、底面部分は長径170×短径80cmの楕円形を呈する。断面形は深さ115cmで、東側に抉れた部分が見られた。

(出土遺物) 繩文土器の混入が見られた。

(所 見) 覆土はロームブロックの混入が多く見られた。土層の状況から近代以降のものと類似する。時期的には同様な時期の所産と考えられる。

第37号土坑(旧MHSK-50)(第71図 PL9)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの東端、3J・H-30・31区から確認された。

(形 状) 平面形は長径195×短径175cmの楕円形を呈し、断面形は深さ27cmの浅い皿状を呈する。

(出土遺物) 出土遺物はいずれも繩文土器であった。

(所 見) 第33・35号土坑と同様な土層を持つ。他の遺構の状況から古代のものと考えられる。

第42号土坑(旧MHGK-20)(第71図)

(位 置) 前谷東遺跡エリア内の3G-43区から確認された。近接して第36号土坑が存在する。

(形 状) 平面形は径172cmの円形を呈する。断面形は筒状を呈し、深さ92cm、底面が平坦になる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

(出土遺物) 土師器破片や鉄製品・瓦片が出土している。瓦は近代以降のものと考えられる。

(所 見) 近代以降の所産と考えられる。

第52・53号土坑(旧HHSK-15)(第71図)

(位 置) 東原遺跡エリア中央部分S-46区に確認された。北側に第53号土坑、南側に第52号土坑が確認された。これらの遺構は重複関係にあり、第53号土坑が新しい。

(形 状) 平面形は第52号土坑が径185cmの不整円形で深さ48cmである。第53号土坑は径210cmの不整円形で深さ64cmである。断面形はいずれも丸底を呈する。

(出土遺物) 最下層に多量の炭の混入が見られ、この場で火が焚かれたような痕跡が残る。時期を示す土器などの遺物は出土していない。

(所 見) 土層の色調などは古代の所産と考えられるものに類似している。一応古代以降のものとしておく。

4. 溝(S D)(第72~74・76図 P L 9・10)

ここで掲載した溝は、前谷東遺跡エリアから確認されている。特に、同遺跡エリアの東端付近に検出されている。これらの遺構は、覆土の状況や出土遺物から近世以降のものと考えられる。遺物は第3号溝から磁器類が出土している。

第1号溝(旧M H S D-1)(第72図 P L 9)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの東端、3G・F-34、3G-35・36、3H-36、3I-35区から確認された。やや緩い傾斜地である。付近にはピット群や第42号土坑が存在する。

(形 状) 平面形は「く」の字状の溝で、北西隅から約9mの部分で直角に折れ、7.5mで北東端に至る。主軸はN-67°-E・N-25°-Wである。同溝は第43号土坑と重複関係にあり、土坑のほうが新しい。北西端に搅乱とした穴が2ヶ所あり、いずれも芋穴で、重複関係は溝より古い。

(覆 土) 北西端の方が深く30cmで、第1・2・3層からなり、北東端の方が16cmで第3層のみである。第3層にロームブロックが多く含まれている。

(出土遺物) 繩文土器の混入が見られたのみである。

(所 見) 芋穴よりも新しく、近代以降のものか。

第2号溝(旧M H S D-2)(第73図)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの東端、3D-30・3E-31・3F-32・3G-33区から確認された。やや緩い傾斜地である。近接してピット群が存在する。

(形 状) 平面形は長さ19mの直線的なもので、幅40cm・深さ40cmを測り、断面形は底面はやや平坦で上部が開く。ピット群のP 42や芋穴と重複し、芋穴よりも古い。

(出土遺物) 繩文土器の混入が見られたのみである。

(覆 土) 第1層に焼土粒が見られ、第3層はロームが多量に含まれる。

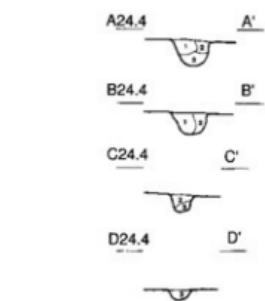
(所 見) 芋穴よりも古いが近代以降のものか。

第3号溝(旧M H S D-3)(第74・75図 P L 10・32)

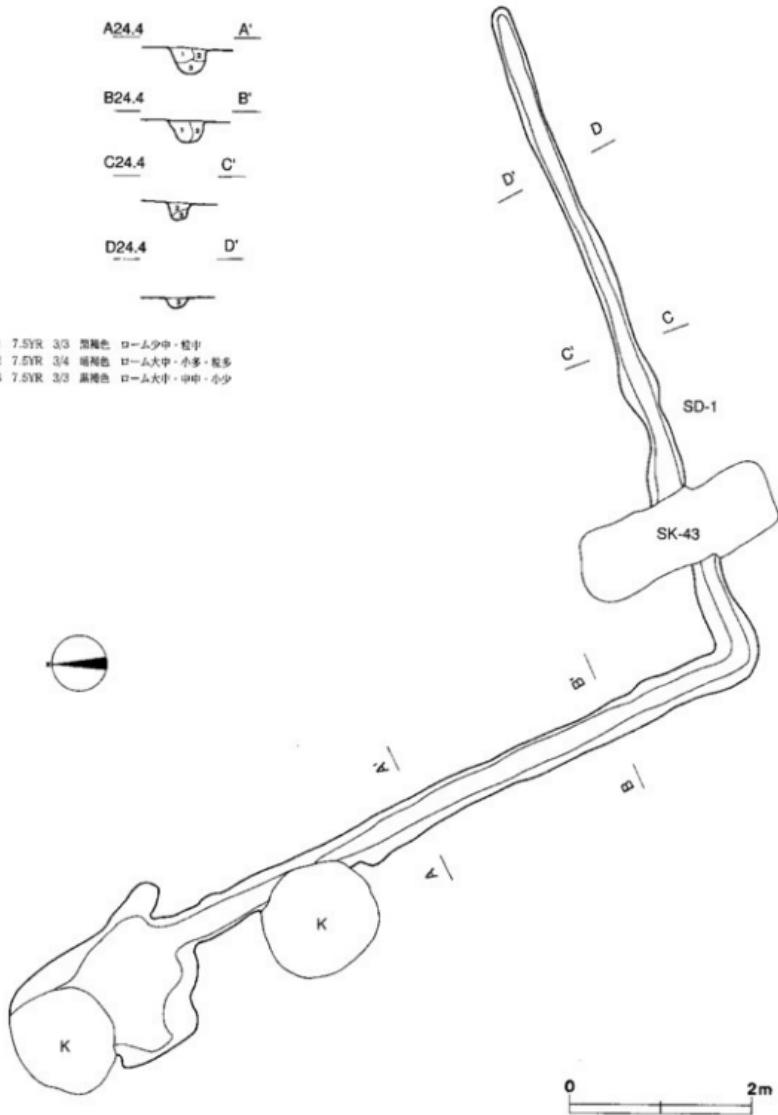
(位 置) 前谷東遺跡エリアの北東部分に確認された。一部緩い傾斜地にかかる。同溝に接して第5号溝が北西方向にのびる。周辺には第35号土坑や第1号火葬墓が存在する。

(形 状) 平面形は「く」の字状の溝で、南西隅から82.7mの部分で直角に折れ、29.4mで南東端に至る。主軸はN-54°-E・N-33°-Wである。幅0.6~1.1mで深さ50~80cmを測り、断面形は底面はやや平坦で上部が開く。第3号溝と重複し、新旧関係は不明である。

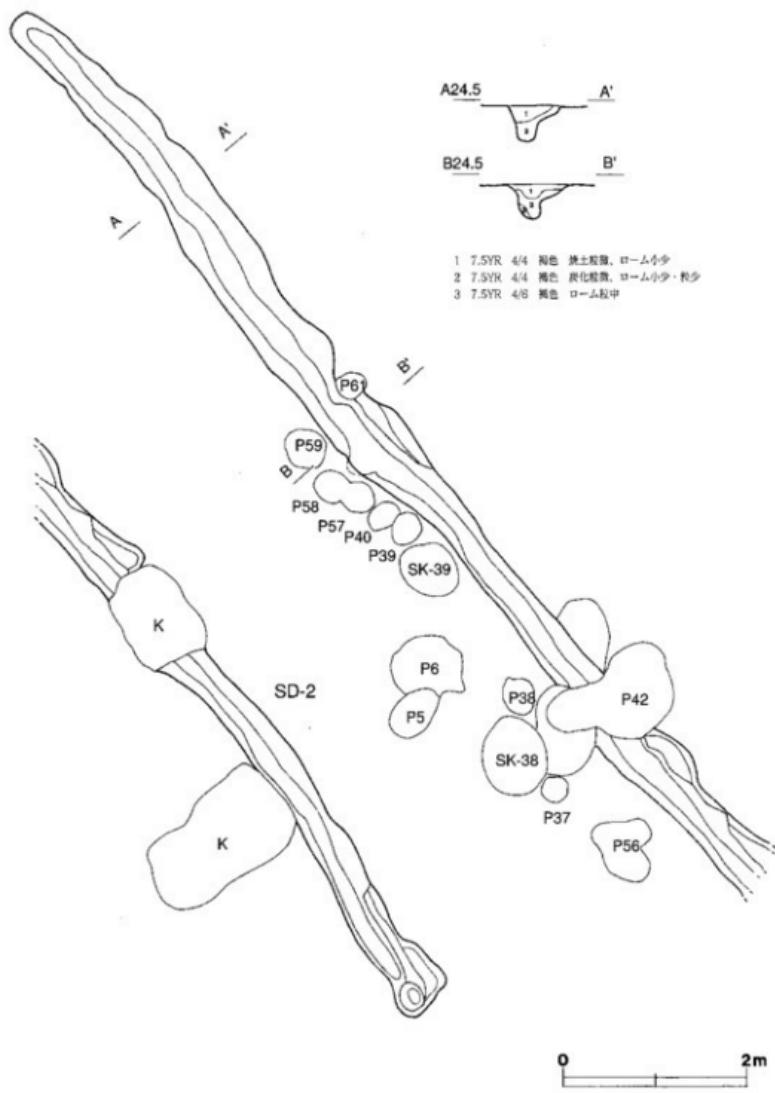
(出土遺物) 繩文土器の混入が見られた他に、No.1~4の須恵器・磁器・鉄製品が見られた。



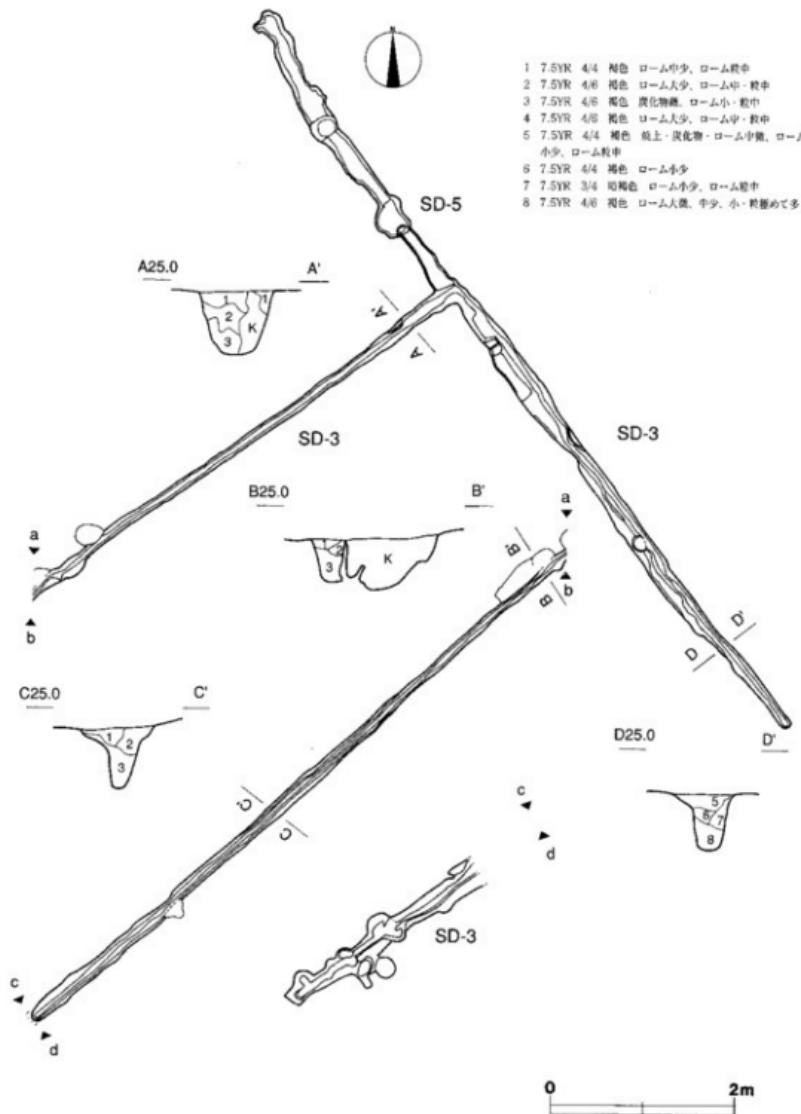
- 1 7.SYR 3/3 黒褐色 ローム少中・粒中
 2 7.SYR 3/4 灰褐色 ローム大中・小多・量多
 3 7.SYR 3/3 黑褐色 ローム大中・印中・少少



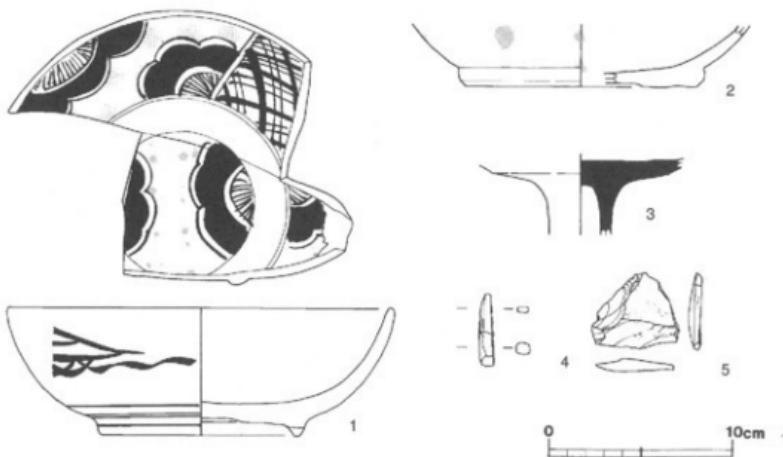
第72図 第1号溝



第73図 第2号溝



第74図 第3号・第5号溝



第75図 第3号溝出土遺物

これらの多くは溝の東側の覆土上層から出土した。No.1の染付皿または鉢は肥前系の磁器である。No.2は瀬戸・美濃系の陶器と考えられる。この他、図化していないがプリントによる染付がなされる磁器塊類が出土している。No.5は粘板岩製の砥石破片である。

(覆 土) 覆土下層の第4層はロームブロックが多く含まれた。

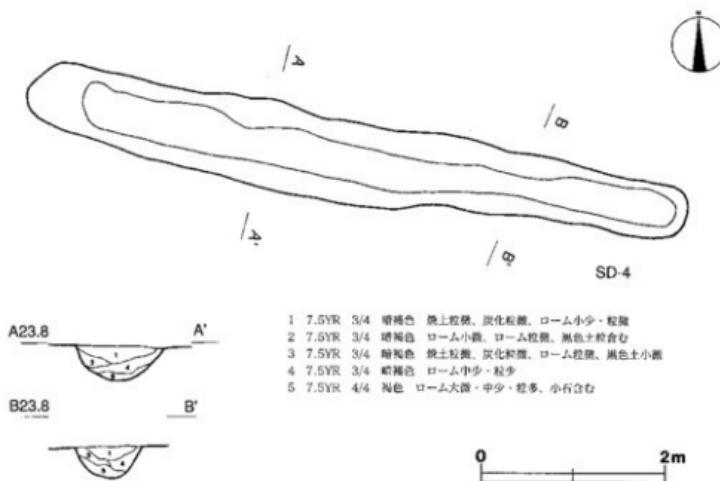
(所 見) No.1の染付皿または鉢は18から19世紀中に収まるものと思われるが、プリントによる染付がなされる磁器が出土していることから、より新しい時期が考えられる。

No.	種別	器種	法量 (cm · g)	特徴
1	磁器	皿または鉢	口径20.2 残高6.9 底径10.1	底部底の内壁墨台 口唇に墨跡、その他は白釉 玄青が墨の剥離 50%
2	陶器	鉢	残高(3.2)底径12.1	底部輪高台 内外面に反程施す 内面に2箇所粘土目 覆土乳白色 20%
3	須恵器	高杯	残高(4.0)脚部径3.2	色調は外面墨、内面灰褐色 ブラック 倒立で焼成か 30%
4	鉄製品	不明	長さ3.9 幅3.0 重さ3.0	刀子に類似した形態であるが、刃部なし。
5	石製品	砥石	長さ4.7 幅4.0 厚さ0.7 重さ12.03	縦条痕残る 粘板岩

第4号溝(旧MHS D-4)(第76図 P L 10)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの北東部分に確認された。3G-32、3H-I-33区にまたがり、緩い傾斜地に所在する。ピット群が近接している。

(形 状) 平面形は直線的な溝で、長さは7m・幅は1mである。底面は丸底、深さ35cmであ



第76図 第4号溝

る。主軸はN-80°-Wである。

(出土遺物) 繩文土器の混入が見られた他に、遺物は出土していない。

(覆 土) 最下層の第4層にロームブロックが含まれる。

(所 見) 時期的には近代以降か。

第5号溝(旧MHS D-5)(第74図 P L10)

(位 置) 前谷東遺跡エリアの北東部分に確認された。3D-E-20、3D-21、3E-22、3F-23区にまたがり、同溝に接して第3号溝が南東・南西方向にのびる。

(形 状) 平面形は直線的な溝で、長さは17.4m・幅は1.4mである。第3号溝に接する部分で深さは北西端で30cm、南東端で10cmと浅い。主軸はN-33°-Eである。幅0.6~1.1mで深さ50~80cmを測る。第3号溝と重複し、新旧関係は不明である。

(出土遺物) 繩文土器の混入が見られた他に、遺物は出土していない。

(覆 土) 褐色土である。

(所 見) 時期的には第3号溝と同様な時期と考えられる。

5. 遺構外出土遺物(第77~80図 P L32)

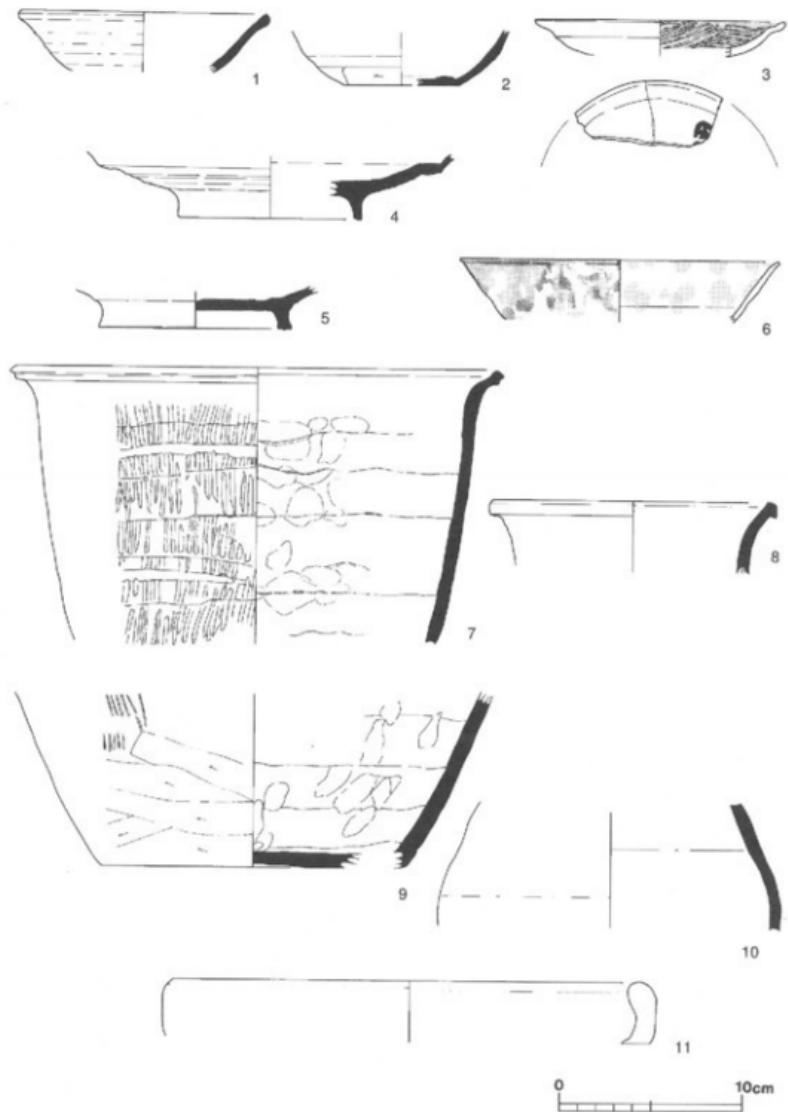
ここで遺構外出土遺物としたものは、グリッド出土のものや遺構として調査し始め途中で遺構でないと判断したものから出土した遺物を含んでいる。東原遺跡エリア・前谷東遺跡エリア・前谷西遺跡エリアから出土した古代以降のものをまとめて掲載した。

遺物出土の傾向として、前谷東遺跡エリアから須恵器・灰釉陶器などの古代の遺物が目立って出土しており、東原遺跡・前谷西遺跡エリアから近世以降の遺物が出土している。

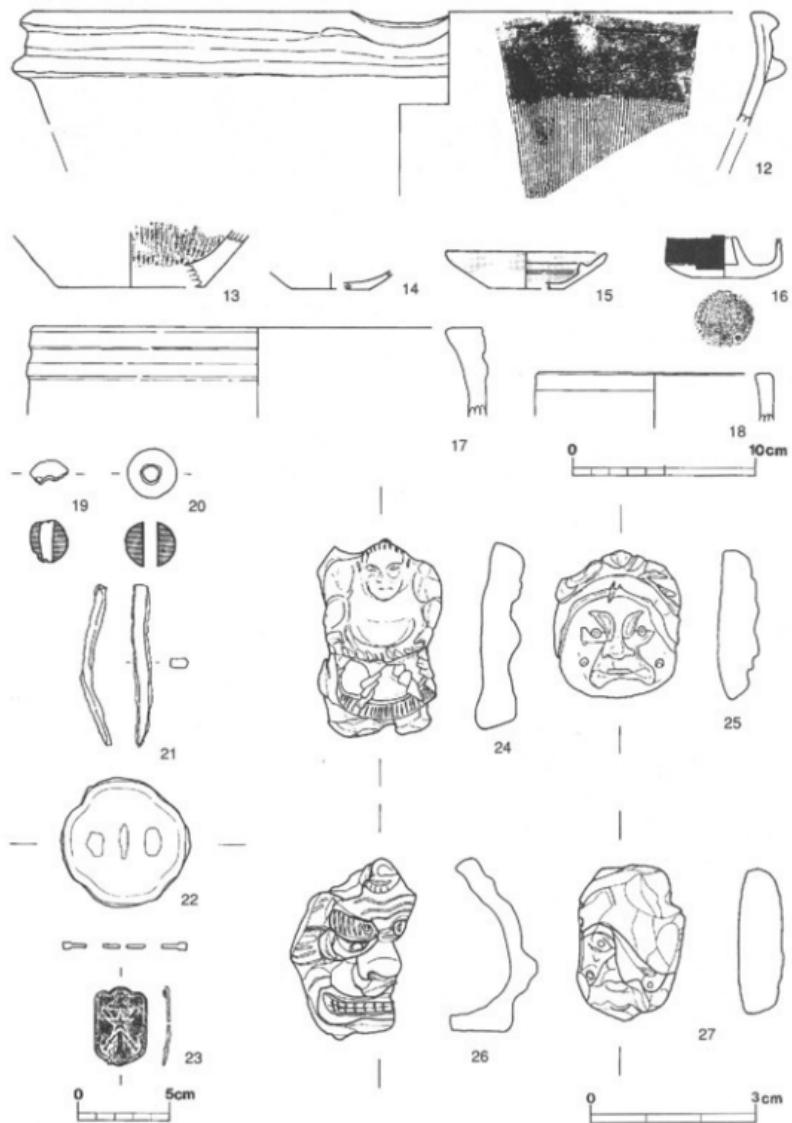
①古代の遺物

No.1~10・14は古代の遺物でNo.1・2・4・5・7~10は須恵器である。いずれも新治産須恵器と覺しきものであり、器種は壺・高台盤・瓶または鉢・甕が出土している。No.3・14は土師器で、No.3には墨書きがなされ、器形的に見慣れない器種である。No.6は灰釉陶器の椀類であろうか。これらはいずれも平安時代の9世紀代を中心とする時期のものと考えられる。当遺跡群からは同期の堅穴住居跡などの集落を構成するような遺構は確認されておらず、墓域を構成する遺構のみが確認されている。よって、これらの遺構外遺物も墓域を構成する遺構との関連性も想定できよう。

No.	種別	器種	法量(cm)	色調	特徴
1	須恵器	壺	口径13.5 残高3.0	灰	口唇部やや肥厚 岌部側縁へり削り 艶上に雲母
2	須恵器	壺	残高2.7 底径6.0	灰	底面側縁へり削り 底面回転へり削り 艶上に雲母
3	土師器	皿	口径(13.6) 残高1.9	明赤褐	内皿 口唇内面に継 外面に判読不明な墨書き 内面磨き
4	須恵器	高台盤	残高(3.3) 底径(9.6)	灰	口縁部直角 艶上に黒色粒
5	須恵器	高台盤	残高(1.9)	青灰	底面回転へり削り 艶上に黒色粒
6	灰釉陶器	椀 瓶	口径(17.0) 残高(3.1)	灰黄	口唇部外縁 内外面に施釉 艶上灰白色
7	須恵器	瓶または鉢	口径(24.8) 残高(14.8)	灰白	縦方向の糸跡 口縁部直角 艶上に雲母
8	須恵器	甕	口径(15.8) 残高(3.8)	黄灰	自然釉が付着 艶上緻密で黒色
9	須恵器	鉢	残高(8.3) 底径16.6	灰オーラブ	底面砂目痕 外面に横方向の糸跡 艶上に黒雲母
10	須恵器	甕	残高(6.7)	灰黄	胎土緻密で黒色
11	土師瓦上蓋	焰 焰	口径(14.2) 残高(3.3)	暗赤褐	口唇部が肥厚内湾 艶上に黒雲母と赤色粒
12	陶 壺	挽り鉢	口径(39.4) 残高(6.1)	赤褐	内外面に施釉 口縁部に往々付く 艶上は墨色緻密
13	陶 壺	挽り鉢	残高(2.8) 底径(8.0)	橙	胎土上に橙色
14	土師器	小 皿	残高(0.9) 底径(4.2)	にぶい褐	底面回転糸切り、後にげ 艶上に雲母
15	陶 壺	撥水受皿	口径(8.8) 残高(2.0) 底径(4.0)	褐	底面回転糸切り 表面に鉄釉 艶上が吼白色 糜状の仕切り



第77図 遺構外出土遺物(1)



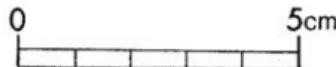
第78図 遺構外出土遺物(2)



28

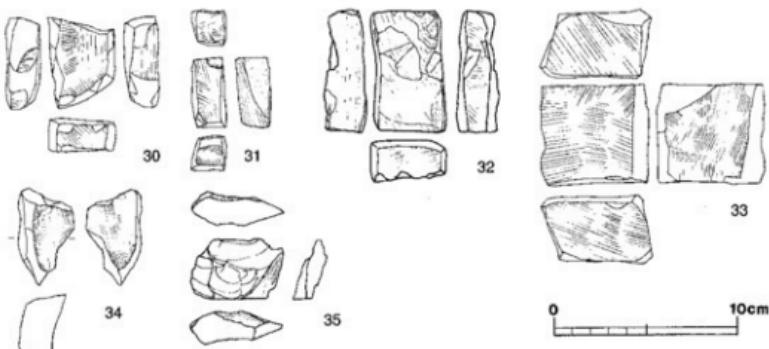


29



第79図 遺構外出土遺物(3)

No	種別	器種	法量(cm・g)	色調	特徴		
16	陶	壺	残高(2.3) 底径(3.2)	暗褐	直立した円筒状の芯に横穴が開く底面板張り蓋土乳白色		
17	瓦質土器	火鉢	口徑(24.4) 残高(4.8)	黒灰	口唇肥厚 外側始"状 黒雲母含む		
18	陶	壺 類	口径(12.6) 残高(2.5)	灰黄	胎土灰色緻密 口唇上施釉なし		
19	土製品	土 玉	残高(2.2)	にぶい黄橙	破片。		
20	土製品	土 玉	胎高2.2 最大径2.7 孔径1.2	浅黄橙	胎土に赤色粒。焼成良好。		
21	鉄製品	和 釘	長さ8.6 重量14.0	断面具方形 一部折れ曲がる			
22	鉄製品	釘	径7.0 厚さ0.4 幅0.2 重量51.4	透し孔2ヶ所			
23	陶製品	バッジ	長さ4.2 幅2.8 厚さ0.1 重量11.5	表面には交差した剣と鎌のついた鍔と星があしらわれている 裏にはビンの痕			
24	土製品	泥面子	長さ3.5 扇幅2.0	化粧まわしを付けた丸土 表面のみ型押し、裏は粗面 胎土褐色で緻密			
25	土製品	泥面子	長さ2.6 幅2.2	頭巾を被る童子 表面のみ型押し、裏は粗面 胎土褐色で緻密			
26	土製品	泥面子	長さ3.1	一部欠損 目をつり上げ、歯をむき出しにする獣子頭 表面のみ型押し 痕密			
27	土製品	泥面子	長さ2.7	一部欠損 人面 表面のみ型押し、裏粗雑			
28	銭	寛永通寶	径24.6 重量2.6	銅錢 新寛永			
29	銭	寛永通寶	径22.7 重量2.2	銅錢 新寛永			
No	器種	出土地點	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
30	砥石	P-46区大	4.8	3.5	1.8	43.57	流紋岩
31	砥石	K-51区大	1.7	3.75	1.8	20.90	凝灰岩
32	砥石	K-51区大	6.4	3.6	2.2	90.36	安山岩
33	砥石	2J-48区	5.8	5.3	3.5	180.45	凝灰岩
34	砥石	2U-29区	4.9	2.9	3.05	70.09	砂岩
35	砥石	U-46区大	4.6	3.2	1.6	14.90	砂岩



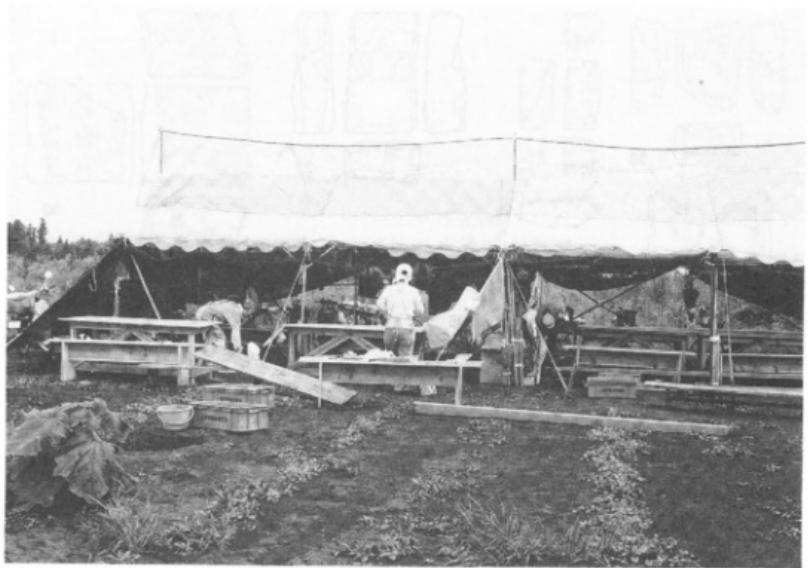
第80図 遺構外出土遺物(4)

②近世以降の遺物

近世以降の遺物として、陶磁器などや土製品、鉄・銅製品、石製品が出土している。

陶磁器は、No.15・16が瀬戸・美濃系の陶磁器である。No.12・13・18は産地不明である。No.11・17の土器は在地産の土器である。No.19・20の土玉は古墳時代や古代のものとは異なる。No.24～27の泥面子以外に2点出土しており、この内1点は表裏面を型押しして合わせている。

砥石は全部で6点出土している。(表中のグリッド区大の意味は、20×20cm四方のグリッドの意味で、グリッド名のある杭を北西隅におく)。



休憩所の引越し



東原被災地作業状況

第4節 東原觀音塚

東原觀音塚は土浦市田村町字東原に所在する。塚の所在する位置は東原遺跡の南々西にあたり、標高は約24mを測る。同所は農道の交差点に位置する。

発掘調査は平成3年9月10日から平成3年10月17日にわたり行われた。調査面積は約50m²で小規模なものである。本遺構は觀音塚と呼ばれているが、現在塚で行われている信仰は觀音信仰ではなく庚申信仰であった。(土浦市教育委員会「土浦の石仏」1985では東原庚申塚と表現されている。)

1. 遺構(第81図 P L33)

東原觀音塚は塚1基からなる。塚の現状は全体的にススキなどの植物が繁茂して、塚頂部には松の幼木が生えていた。また頂部には径約40cmの古死した松の切り株が残る。この他これらの植物に埋もれるように石造仏や板碑、そして「ウレツキ塔婆」が遺存していた。

調査にあたり草刈りを行い、松の幼木は伐採し抜根した。この塚の規模は南北5.5m、東西3.8mの長楕円形で高さは1.1mである。農道に面した塚の西側は一部削平されているようである。断面図に見られる塚頂部の凹みは、抜根の結果できたものである。

塚の調査は長軸・短軸に沿って1/4分割し、基盤土層であるローム層上面まで掘り下げを行った。この塚は土を盛って作られたもので、土層は24層からなる。最下層は第12層の黒褐色土層で炭化物が多量に混入していた。この土層は一定の厚さで水平に堆積しており、旧表土と考えられる。この旧表土は裾部端では存在せず、ローム層まで削平を受けているようである。塚の構築にあたり、周辺の土層を削平して積み上げたことが考えられる。

構築土層は褐色土層と暗褐色土・黒褐色土からなり、大方の土層の堆積状況は、色調が異なる土層を交互に積み上げているようである。土層の積み上げ方は、中央部を厚めに、裾部を薄く積んでいる。

残存部分の裏面は精査して分層し、写真撮影の後土層の実測を行った。

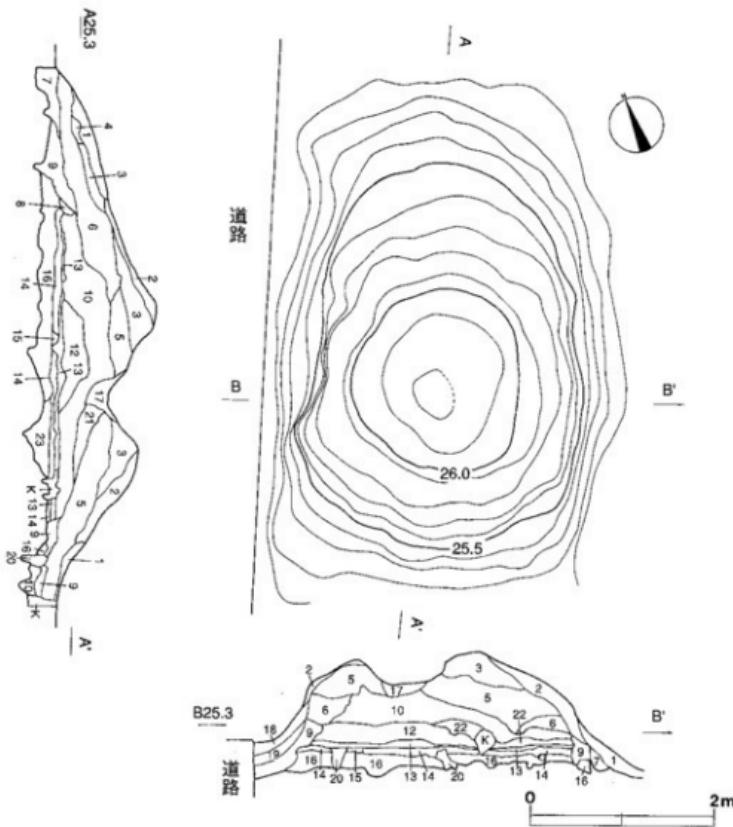
掘り下げ時の遺物出土状況は、頂部付近から現代の喰箸・割箸や近世のカワラケが出土した。この他、混入物として縄文土器が出土し、すべて縄文時代前期黒浜式土器である。

ちなみに塚頂部の石造仏と板碑は田村町内の神国寺境内に移し安置した。

2. 遺物(第82図 P L34)

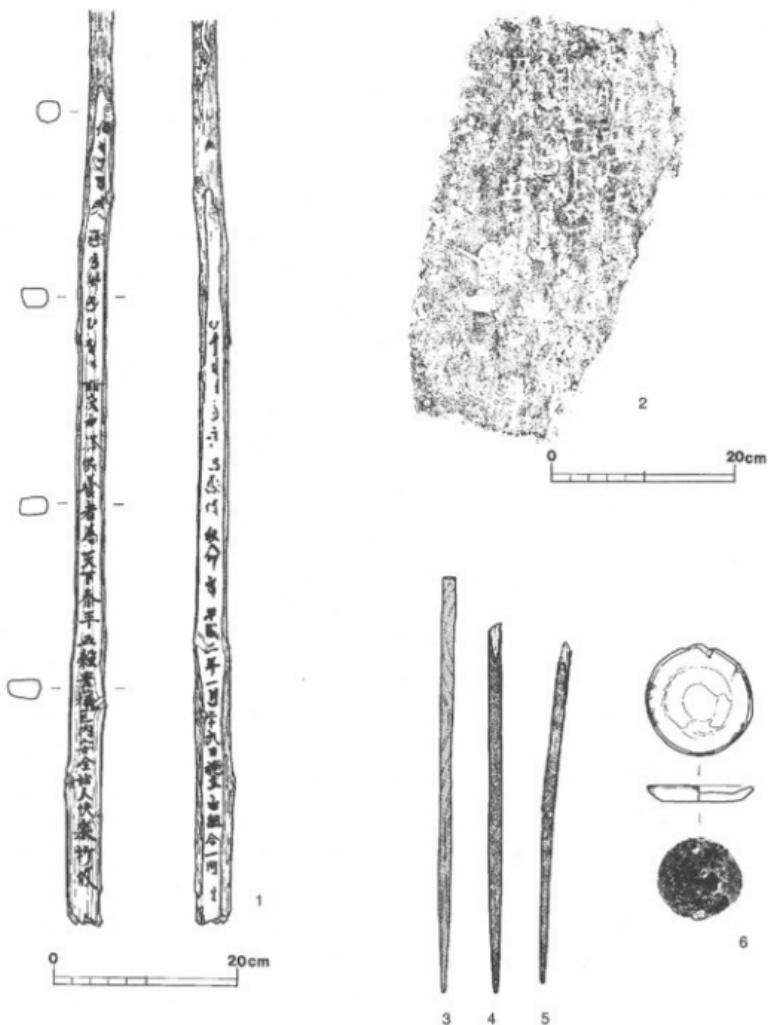
遺物は塚頂部から石造仏・板碑・「ウレツキ塔婆」・カワラケなどが出土している。

石造仏は勢至菩薩像と考えられ、台座と本体が別に作られている。丈量は高さ70cm・幅30cm・



- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 7.SYR 4/6 棕色 ローム小多 | 13 10YR 3/3 墨褐色 腐化粒少、ローム中少 |
| 2 10YR 3/2 黑褐色 ローム中混 | 14 7.5YR 3/2 墨褐色 腐化粒多、ローム大混 |
| 3 10YR 3/3 暗褐色 ローム小混、腐殖土 | 15 7.5YR 2/2 黑褐色 腐化粒多、ローム小混 |
| 4 7.SYR 5/1 灰色 腐殖中少 | 16 7.5YR 3/4 墨褐色 腐化粒少、ローム大・中多 |
| 5 10YR 3/2 黑褐色 ローム中混、ローム小少 | 17 7.5YR 3/2 墨褐色 ローム大・中少 |
| 6 7.5YR 3/3 墨褐色 ローム中・少少 | 18 7.5YR 4/6 墨色 ローム中少 |
| 7 7.5YR 4/4 暗色 ローム大中 | 19 7.5YR 3/2 黑褐色 腐化粒・ローム小中、黑色土粒少 |
| 8 7.5YR 4/4 暗色 ローム大多 | 20 7.5YR 4/4 棕色 ローム中多 |
| 9 7.5YR 3/2 黑褐色 腐化粒・ローム中少、ローム小少 | 21 7.5YR 3/4 墨褐色 ローム小少 |
| 10 7.5YR 4/3 棕色 腐化粒少、ローム中・小少 | 22 10YR 3/2 黑褐色 腐化粒混、ローム中少 |
| 11 | 23 10YR 4/4 棕色 腐化粒混、ローム大少 |
| 12 10YR 3/2 黑褐色 腐化粒混、ローム小中 | |

第81図 東原觀音塚



第82図 東原觀音塚出土遺物

奥行10cmで、形は光背型である。銘文などは記されていない。

Na₂の板碑は縦45cm・横25cmの不整長方形を呈する。材質は雲母片岩の板石である。この板碑には、一面の上部に三行にわたり文字が刻み込まれている。文字は風化が激しく、最初の「天明五」の文字しか判読ができない。しかしその痕跡から一行六文字程度掘り込まれているようである。

No.3～5は木製の現代の塗箸であり、塚上から出土している。出土した箸は、皆現在市販されているもので、5種類のものが確認できた。No.3は木目がプリントされた塗箸で、長さ22.3cmを測る。No.3・4は明るい小豆色の塗箸で、長さは本来22.2cmを測るもので、両方とも折損している。この他に暗い小豆色の塗箸(長さ19.9cm)や黒色のもの、そして割箸が出土している。

これらの箸の中で、表面のプリントや塗装の多くが白色化し風化しているものがあり、先端より約1/3は光沢を持ち従来の状況を保っているものが見られる。これは塚上に箸を突き刺したため、風雨に曝されていない部分が風化を免れた結果と考えられる。またこの光沢と風化した部分の境界は斜めに残っていることから、箸は地面に対し斜めに差し込まれていたと考えることができる。

No.6は素焼きのカワラケである。塚上の土層中から出土した。このカワラケは完形のもので、口径5.7cm、底径4.5cm、器高0.9cmのものである。内面の中央部分はやや盛り上がり、底面は回転糸切り痕が残っている。口唇部にはタール状の付着が7ヶ所観察され、当時燈明用に使われたことが分かる。

この他、出土物として釘2本とプリント染め付けの磁器や繩文土器が出土している。

最後に住民の方に拝聴したことを記す。この庚申講に加わる家は70～80軒で構成され、周辺に同様な塚が2基あり、同様な講を結んでいる。この庚申講に関わり行われる行事は、庚申の日やまたこの日が月末にあたる日を選んで、頭家(当番の家)を中心に会合を開く。会合の趣旨は不明であるが、直会(なおらい)の席となるのが通例である。この席で食事に使用した箸は、塚に持つて来て、巡るように刺し並べるという。塚を囲んでの祭礼は4年に1度行い、寺の坊主を呼んで供養をし、「ウツレキ塔婆」を立てる。地元では庚申を「クサガミサマ」を祭っていると想え、農作物豊穣の祭礼としてとらえており、本来の庚申講の意味が不明瞭になってしまっている。

第5章 調査のまとめ

今回の調査は、大きく分けると前谷遺跡群と東原觀音塚の調査に分かれる。これらは調査面積が30,000m²にも及ぶ広大なものであった。

前谷遺跡群で確認された遺構・遺物の主要な時代は、旧石器時代と縄文時代と平安時代といえる。遺跡群内での遺構の密度は全体的に希薄である。

旧石器時代の遺構として、前谷東遺跡エリアからブロックが1ヶ所検出された。チャートを石材とした剥片から構成され、基本層序第1層のソフトローム中から出土した。遺跡群内からは尖頭器も出土しており、この内の1点は男女倉型尖頭器と呼ばれるもので、信州産の黒曜石を石材にしているものと考えられる。中部高地との関連が伺える資料といえる。

縄文時代は前期から中期の遺構・遺物が検出された。遺構としては堅穴住居跡・ピット群・土坑・集石・焼土址が検出された。堅穴住居跡は前期前半の黒浜式期のものと、中期前半の阿玉台Ia・Ib式段階のもとで、小規模な集落を形成していたことが理解できる。

特に阿玉台Ia・Ib式段階の遺構・遺物については、阿玉台式上器の分布の中心とされる東関東において明瞭な出土例が少なく、貴重な出土例といえよう。同期の堅穴住居跡は非常に特徴的なもので、壁高が非常に高く、床面には炉がなく屋根を支える柱穴らしきものもない。柱穴や炉の有無は、阿玉台式期の一般的な堅穴住居跡の特徴といえる。現在までの阿玉台Ia式等の資料は貝塚出土のものが中心になっており、遺物が堅穴住居跡等から出土した意味は大きい。また大規模な面積の調査により、同期の遺構の多様性や、同一台地上における特定遺構の偏在から、利用目的により土地を選択する縄文人の行動の様子が読み取れる。

平安時代の遺構としては、火葬墓や方形区画墓などが検出され、堅穴住居跡などの居住施設は全く見つかっていない。火葬墓などから出土した遺物から、これらの遺構は9世紀代のものと考えられる。この時期、遺跡群内は墓域として利用され、徹底したほどの土地利用の画一性が見られた。火葬墓が4基と方形区画墓が3基見られ、方形区画墓の内1基から火葬骨蔵器が埋納されて出土した。遺跡群の周辺には谷をはさんで、寺畠・長峰などの同期の「村落内寺院」が確認された集落遺跡が存在し、関連性が伺われる。

本遺跡群出土の遺物の中で特筆すべきものとして、板状土偶があげられる。これは完形品であり、同地域の出土品としては希なものである。今後類例の出土に期待が寄せられる。

東原觀音塚は、江戸時代から現代まで信仰の対象として祭られてきた塚である。現代は周辺の人々によって庚申信仰の場として生き続けてきたものである。

今後これらの資料が活用されることを念じて筆を置くことにする。

報告書抄録

ふりがな	ひがしはら まえたにひがし まえたににし ひがしはらかんのんつか							
書名	前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）・東原觀音塚							
副書名	田村沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	関口 滉	著者名	関口 滉 福田礼子 吉澤 信 塙田恵一					
編集機関	土浦市遺跡調査会							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300-0812 茨城県土浦市下高津2-7-36							
発行年月日	1998年3月							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号				mf		
ひがしはら 東原	いがらせらんつちうらし 茨城県土浦市 たるもあじゆみ 田村町字東原	D-47 5384	36° 5' 2"	140° 15' 24"	19910422~ 19910625	13,750	土地区画 整理事業	
まえたにひがし 前谷東	まえとうにひがし 土浦市田村町 あざまえやつ 字前谷ツ	D-46 5383	36° 5' 4"	140° 15' 28"	19910617~ 19911017	9,600	同上	
まえたににし 前谷西	まえとうににし 土浦市田村町 字前谷ツ	D-45 5382	36° 5' 8"	140° 15' 24"	19910909~ 19911017	11,000	同上	
ひがしはらかんのんつか 東原觀音塚	ひがしはらかんのんつか 土浦市田村町 字東原	D-48 5385	36° 5' 1"	140° 15' 22"	19910910~ 19911017	50	同上	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東原	集落跡 墓	縄文時代 平安時代	堅穴住居、土坑 火葬墓、方形区画墓	縄文土器、石器 土師器、須恵器	中前期玉台Ia・Ib式期主体 平安時代には墓域			
前谷東	散布地	旧石器時代	ブロック	スクレイパー、刮片	石材はチャート主体			
		縄文時代	土坑、埋没谷	縄文土器、石器、土偶	完形の板状土偶			
	墓	平安時代	火葬墓、土坑	土師器、須恵器	平安時代には墓域			
前谷西	集落跡	縄文時代	堅穴住居、土坑	縄文土器、石器	前期黒浜式期が主体			
東原觀音塚	塚	近世以降	塚	カワラケ、箸				

写 真 図 版



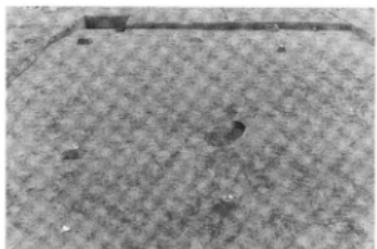
航空写真（1975年1月14日国土地理院撮影）



試掘調査状況



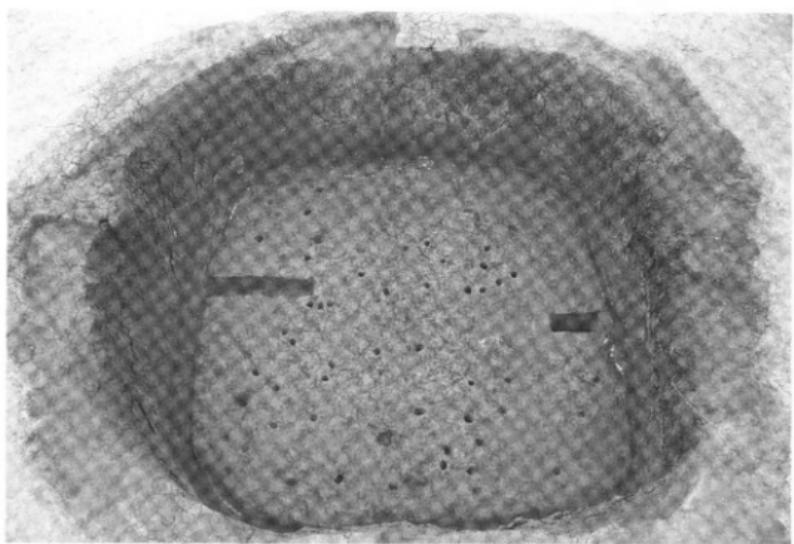
基本層序



旧石器時代調査区



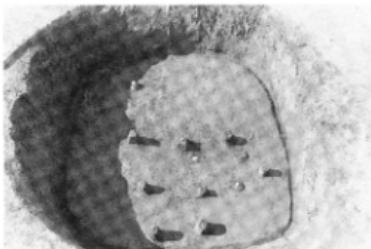
同遺物出土状況



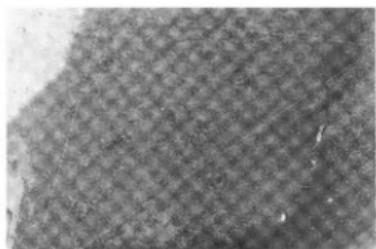
第1号住居跡完掘状況



第1号住居跡床面検出状況



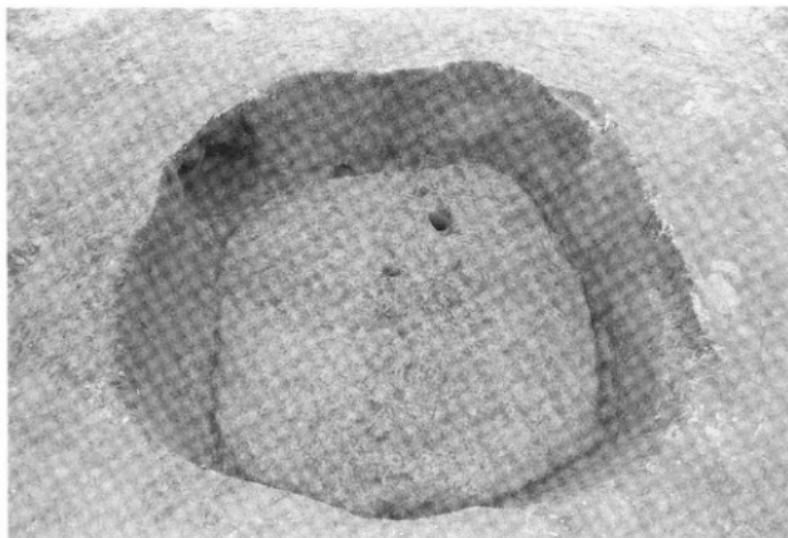
同遺物出土状況



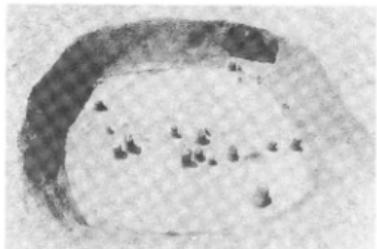
同小ピット確認状況



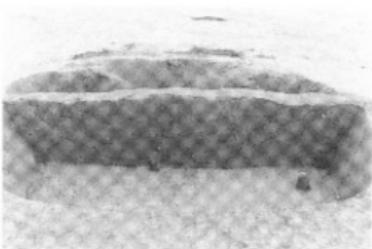
同小ピット土層堆積状況



第2号住居跡完掘状況



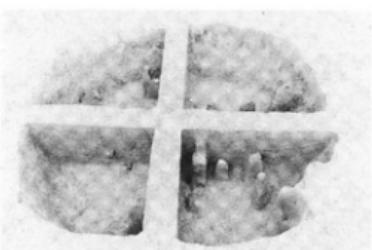
第2号住居跡遺物出土状況



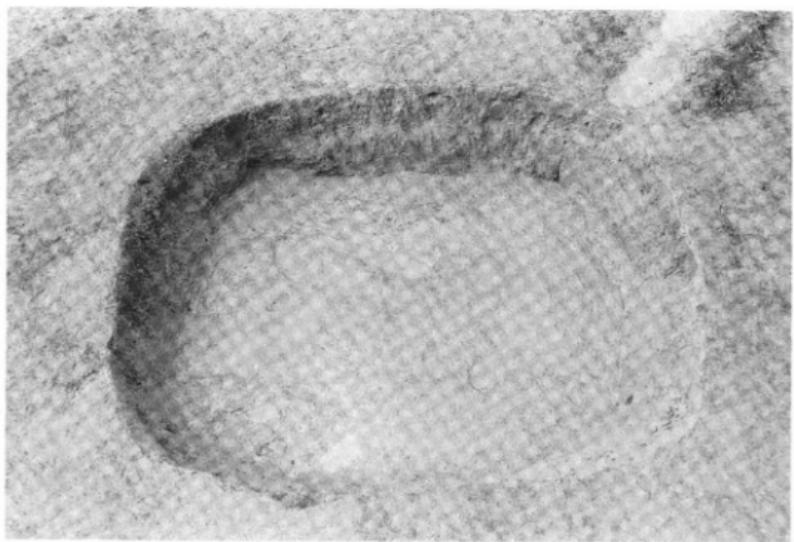
同土層堆積状況



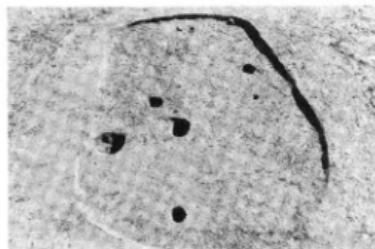
第4号住居跡作業状況



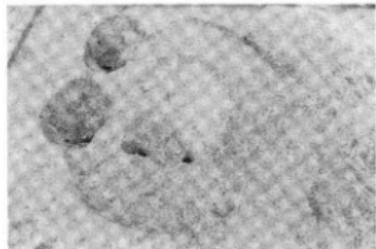
同遺物出土状況



同完掘状況



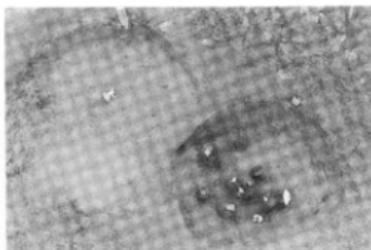
第5号住居跡完掘状況



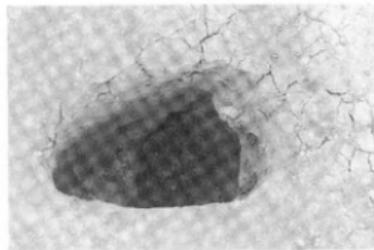
第6号住居跡完掘状況



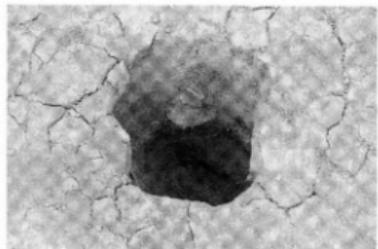
ピット群完掘状況



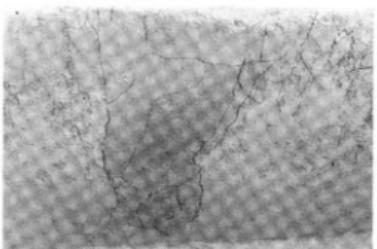
第6号土坑遺物出土状況



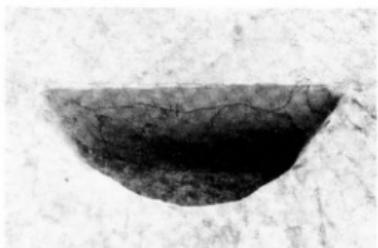
第13号土坑完掘状況



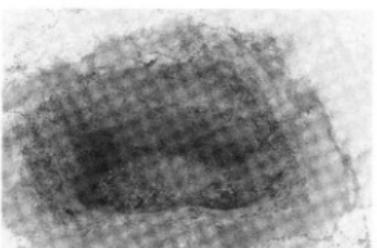
第14号土坑完掘状况



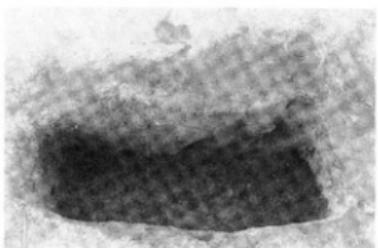
第24号土坑土层堆积状况



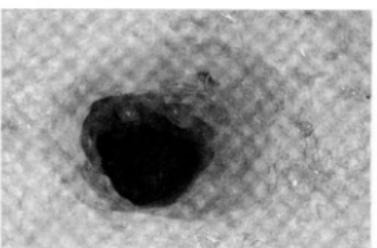
第34号土坑土层堆积状况



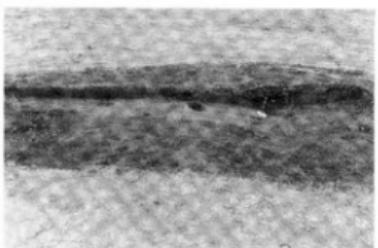
第50号土坑完掘状况



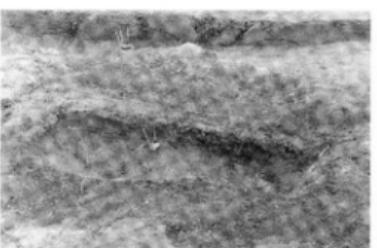
第51号土坑完掘状况



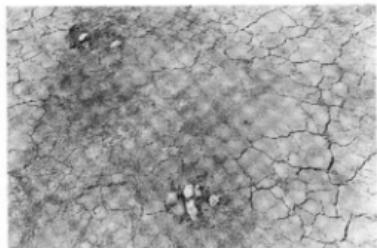
第54号土坑完掘状况



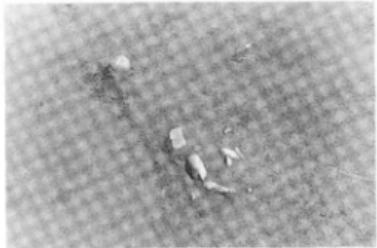
第2号烧土址遗物出土状况



第5·6号烧土址遗物出土状况



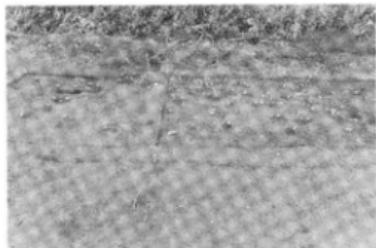
集石出土状況上位



同出土状況下位



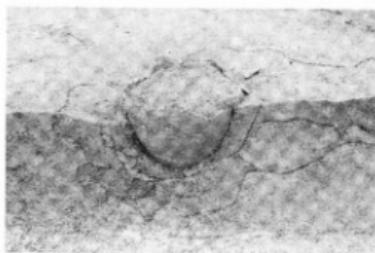
埋没谷全景



同遺物出土状況



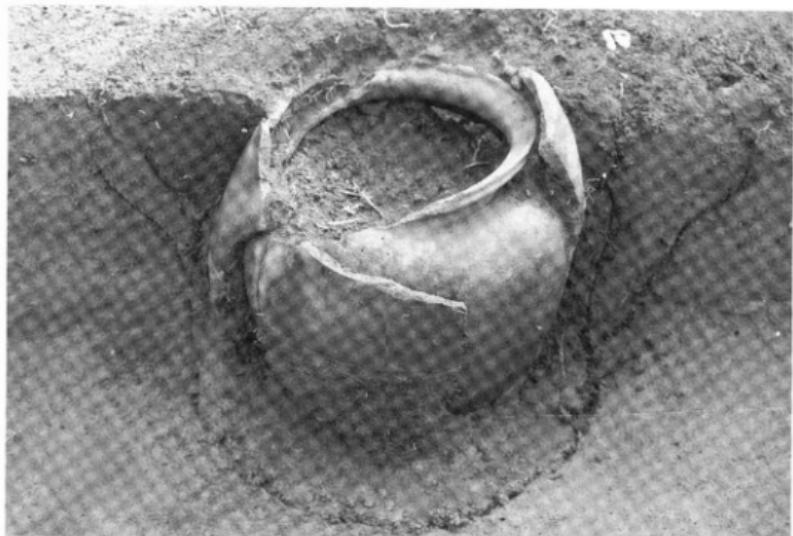
同作業状況



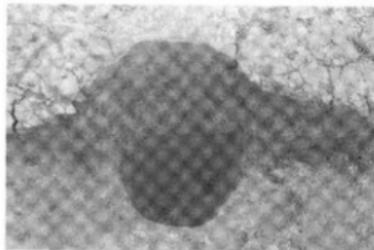
第1号火葬墓檢出狀況



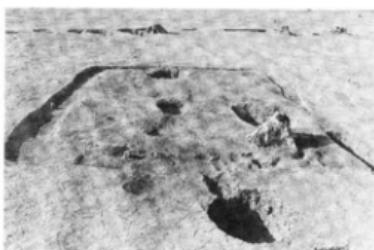
第2号火葬墓檢出狀況



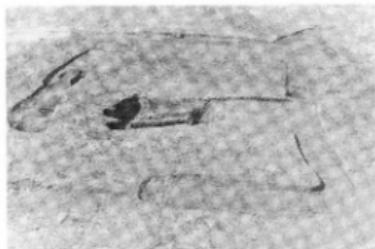
第4号火葬墓檢出狀況



第3号火葬墓完掘狀況



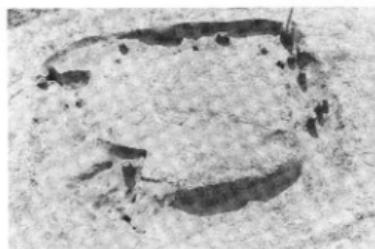
第1号方形区画墓完掘状况



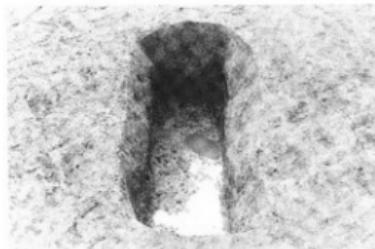
第2号方形区画墓完掘状况



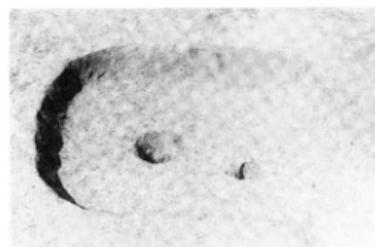
同遗物出土状况



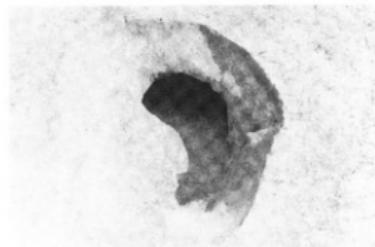
第3号方形区画墓完掘状况



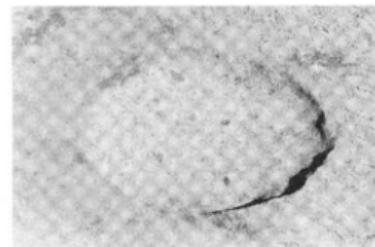
第29号土坑完掘状况



第33号土坑完掘状况



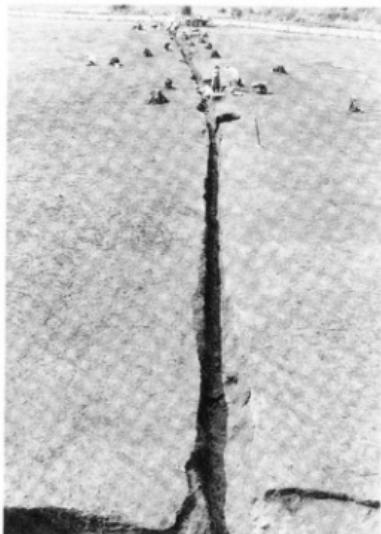
第36号土坑完掘状况



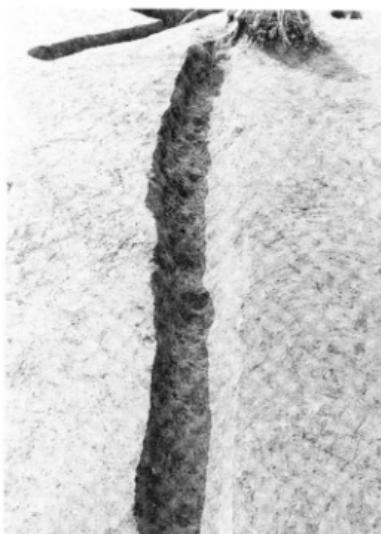
第37号土坑完掘状况



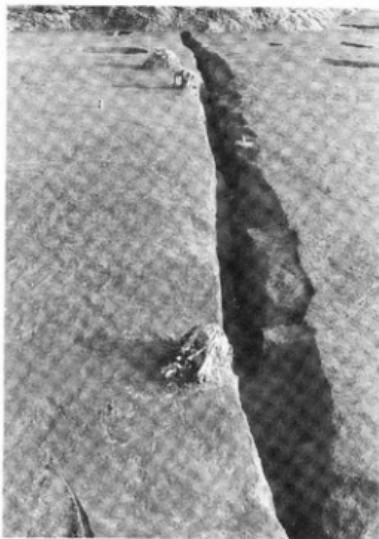
第1号沟完掘状况



第3号溝完掘状況（東から）



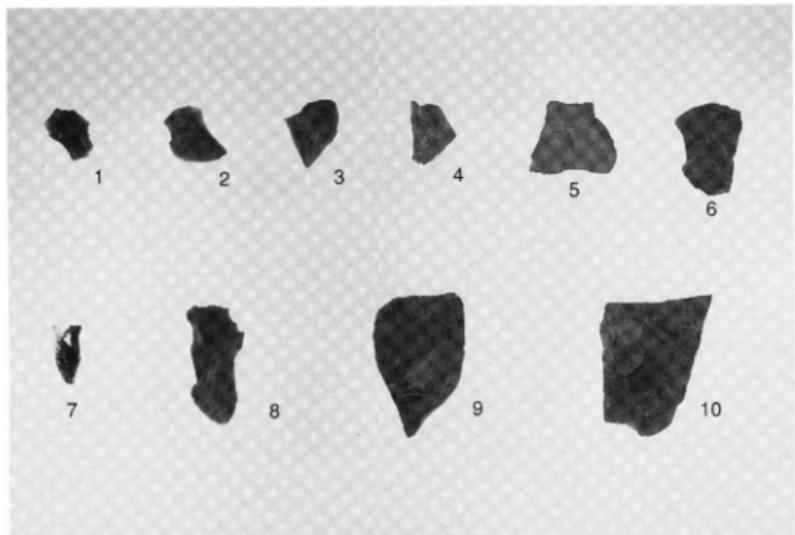
同溝完掘状況（北から）



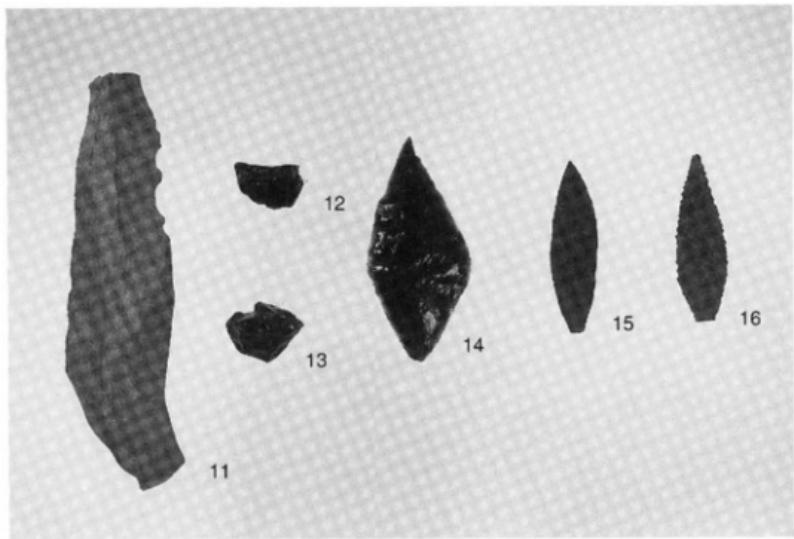
第4号溝完掘状況



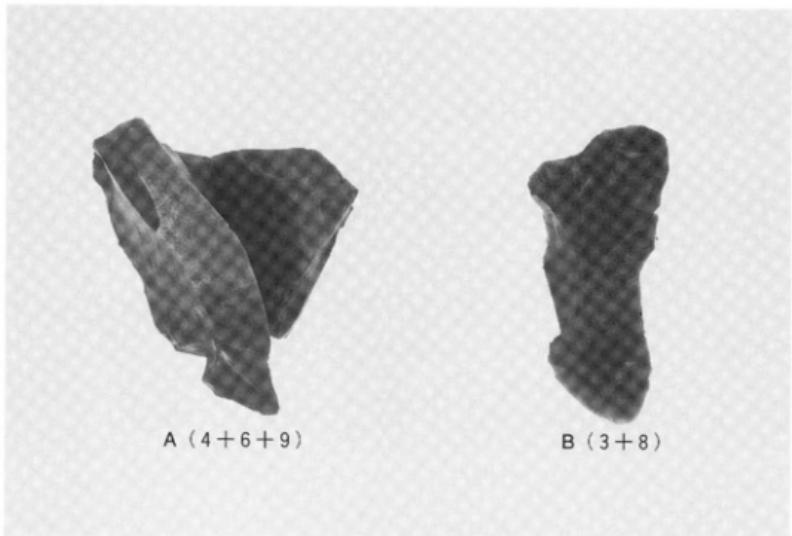
第5号溝完掘状況



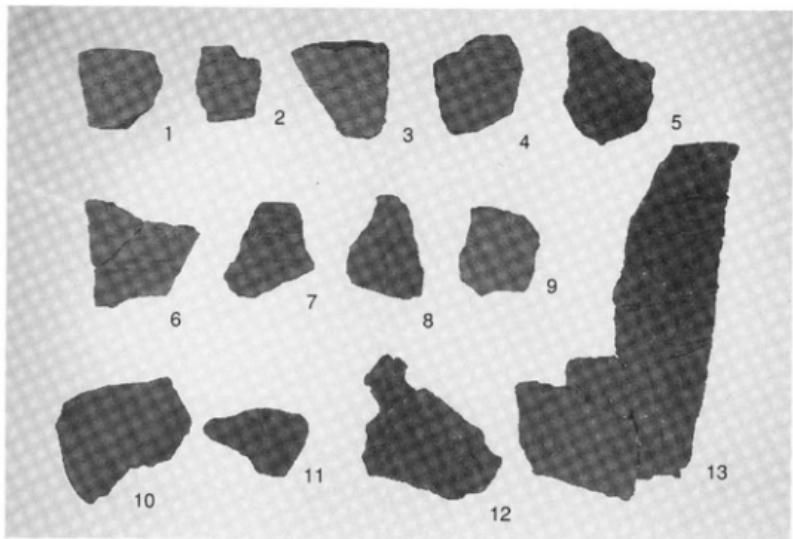
旧石器時代出土遺物



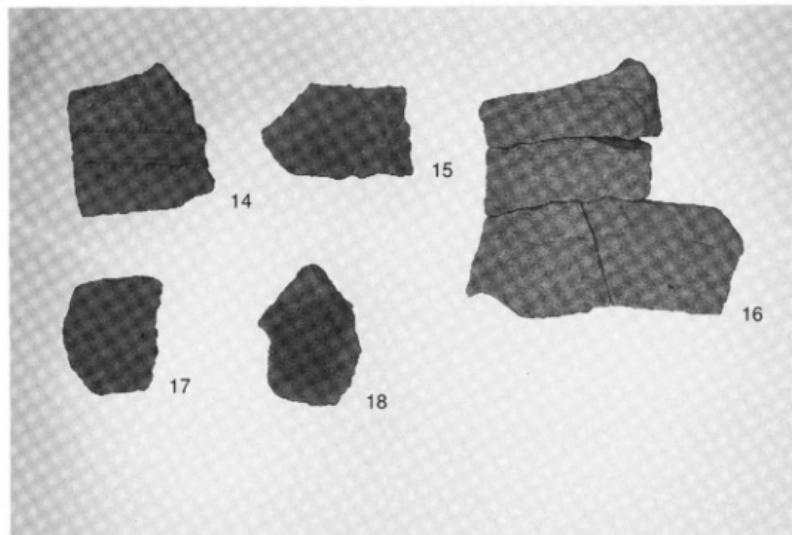
同遺構外出土遺物



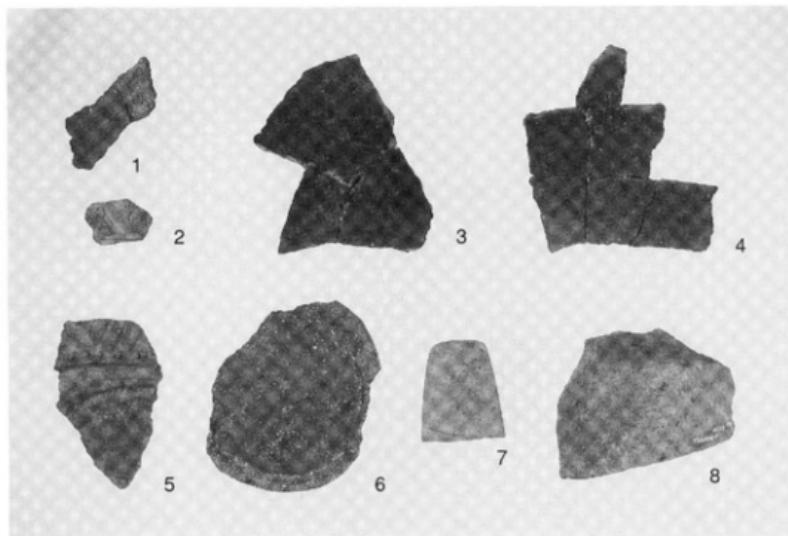
旧石器時代接合資料



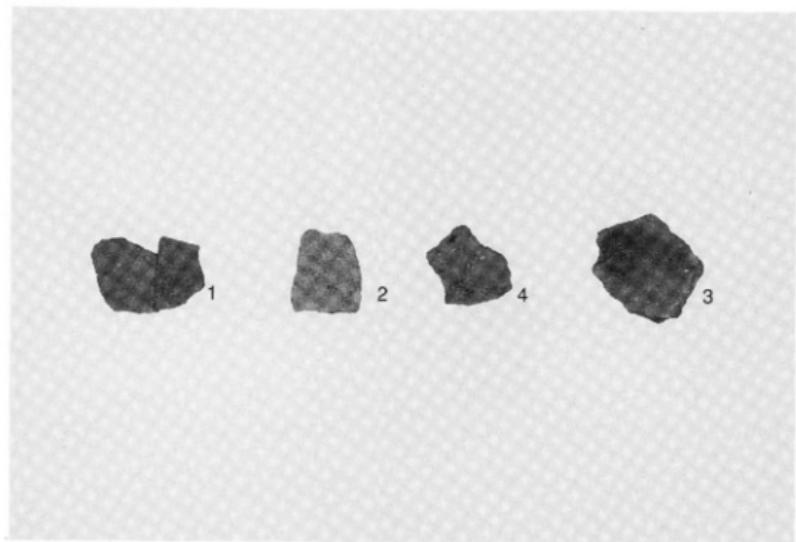
第1号住居跡出土遺物(1)



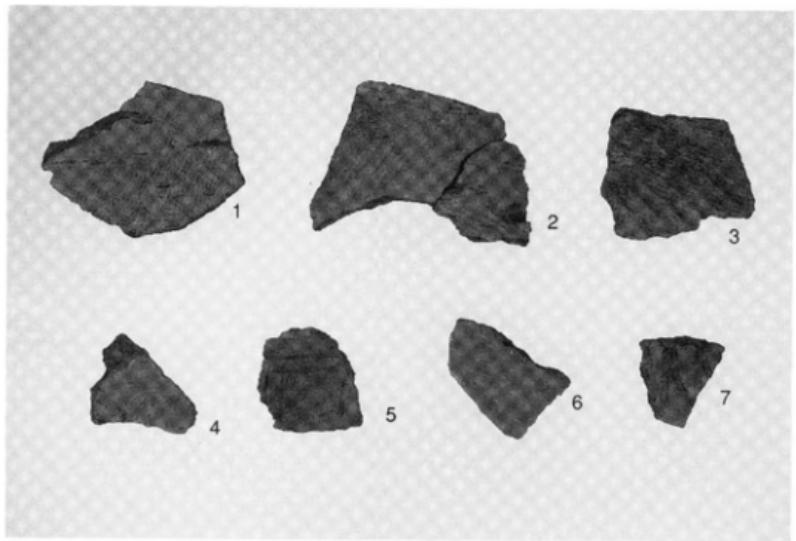
第1号住居跡出土遺物(2)



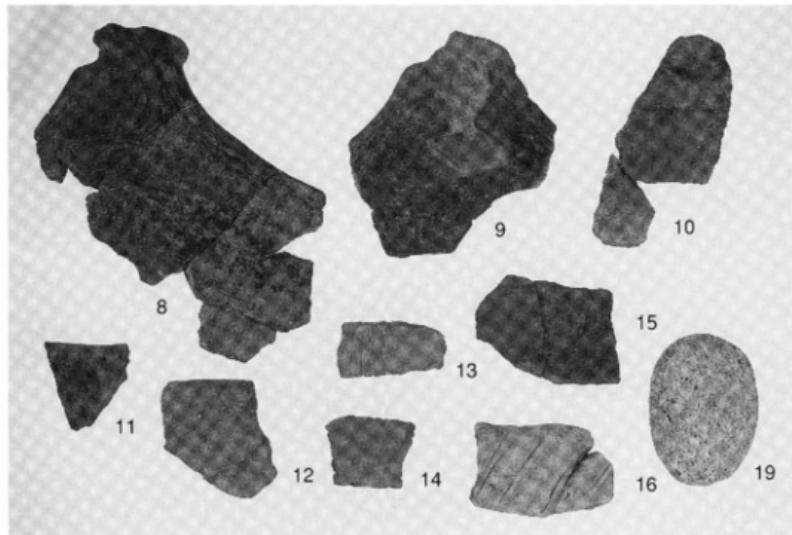
第2号住居跡出土遺物



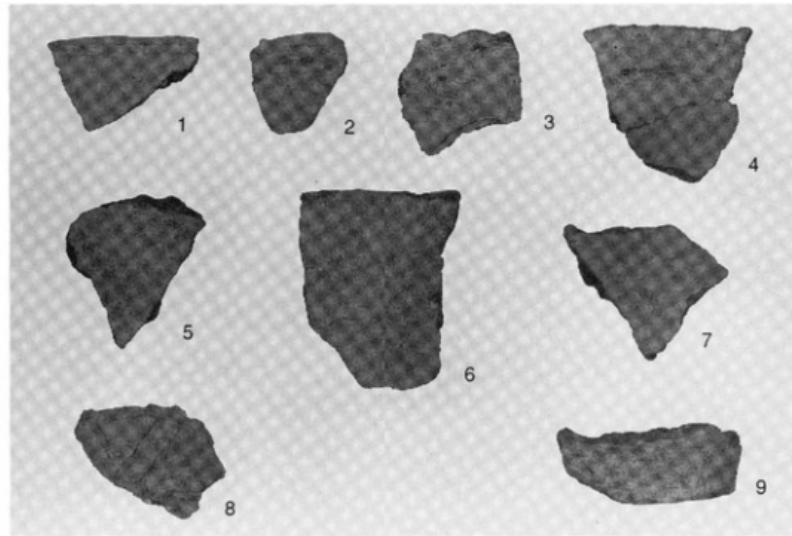
第3号住居跡出土遺物



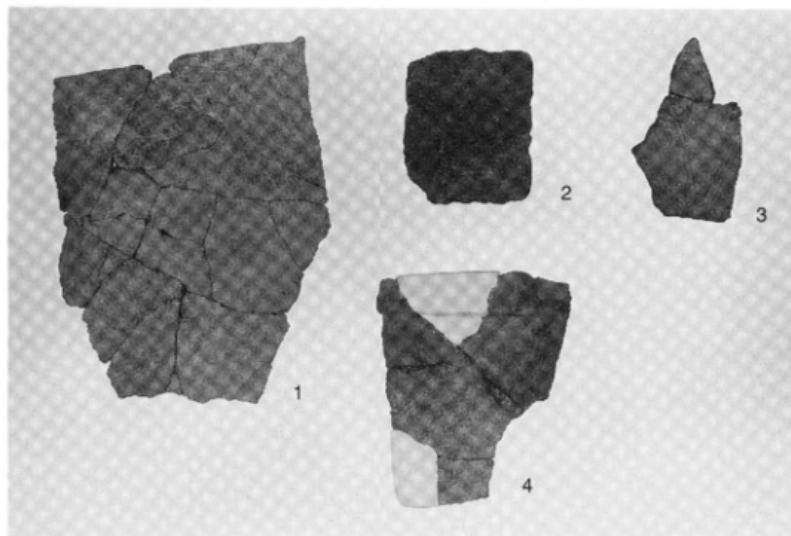
第4号住居跡出土遺物(1)



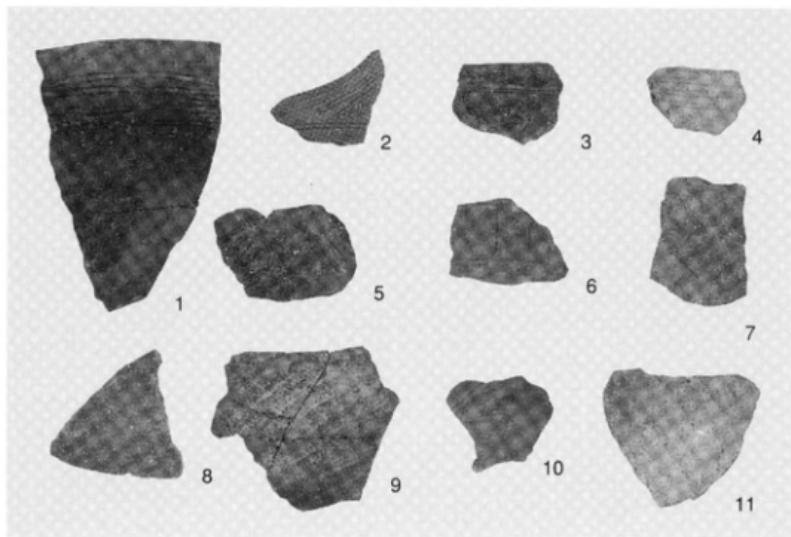
第4号住居跡出土遺物(2)



第5号住居跡出土遺物



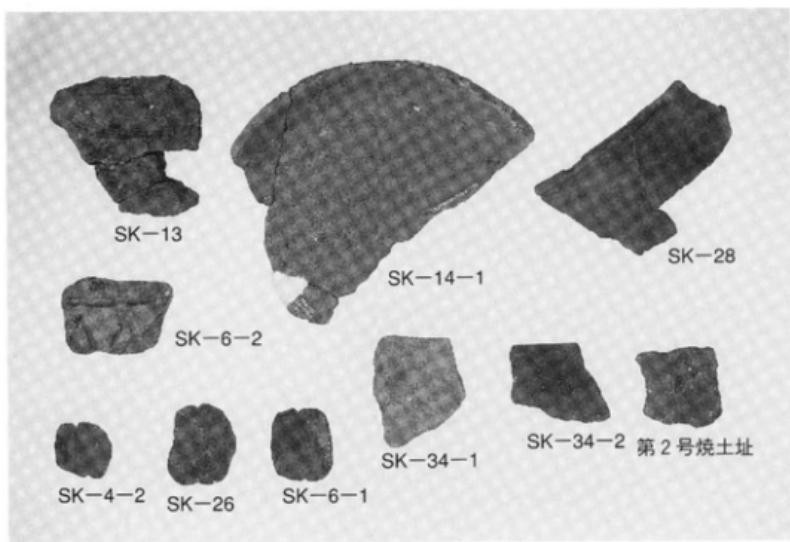
第6号住居跡出土遺物



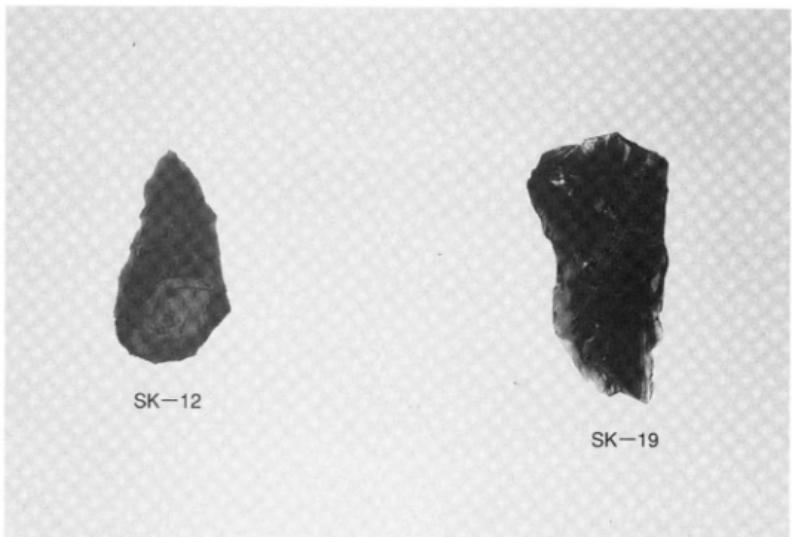
ピット群出土遺物(1)



ピット群出土遺物(2)



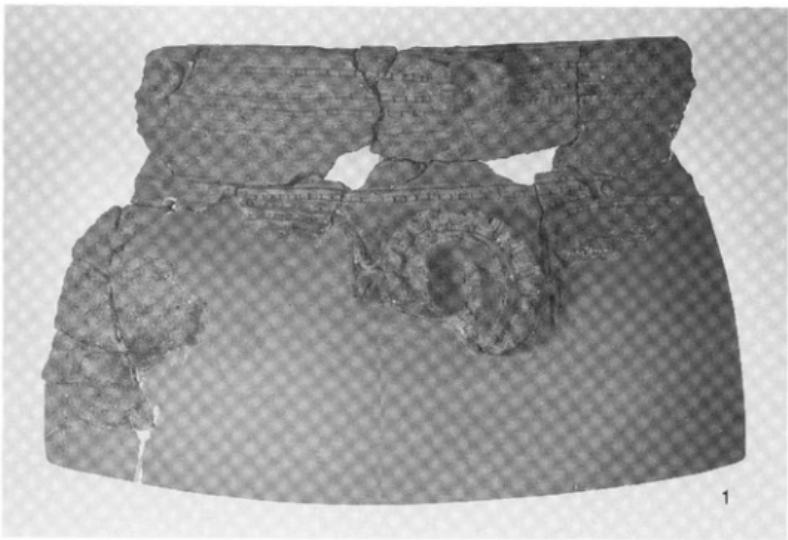
土坑・焼土址出土遺物(1)



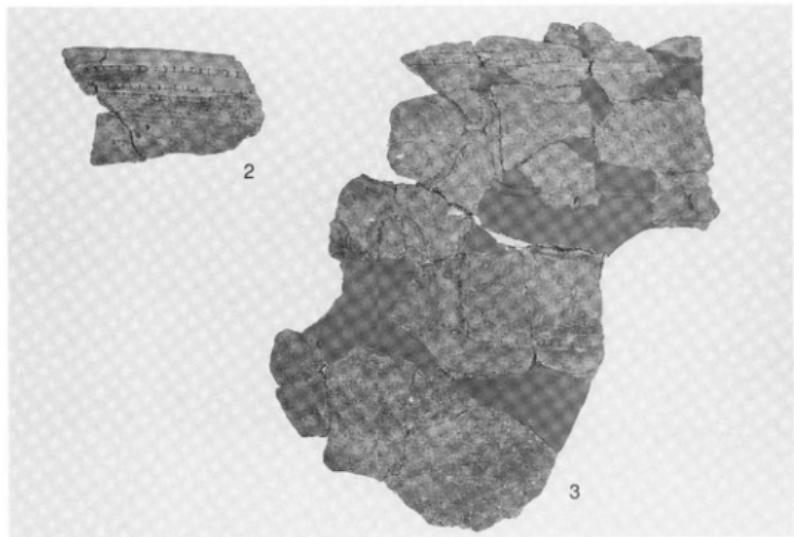
SK-12

SK-19

土坑·烧土址出土遗物(2)



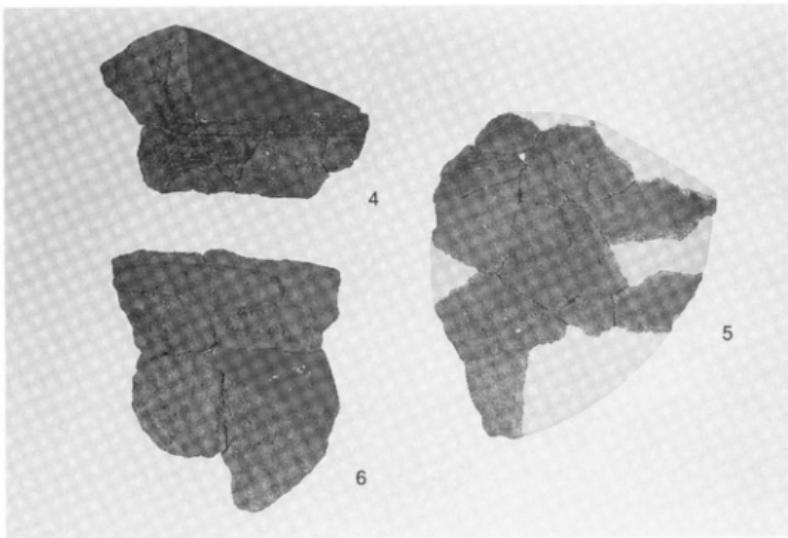
埋没谷出土土器(1)



2

3

埋没谷出土土器(2)

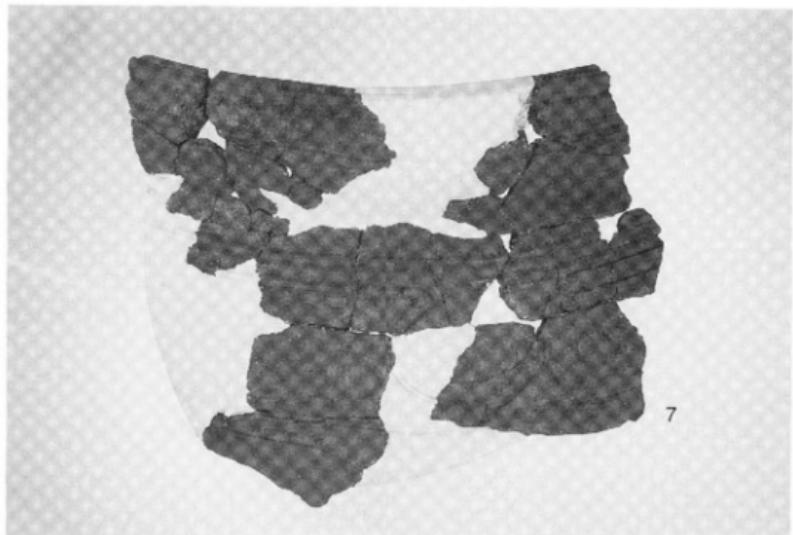


4

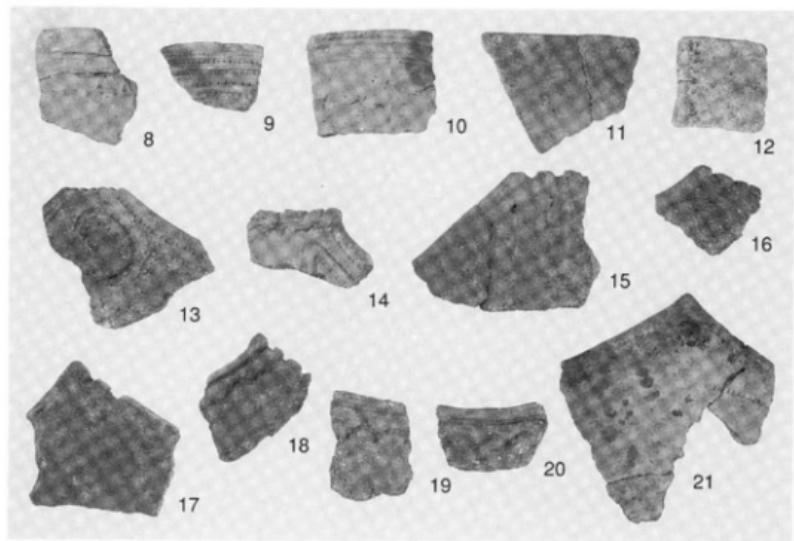
5

6

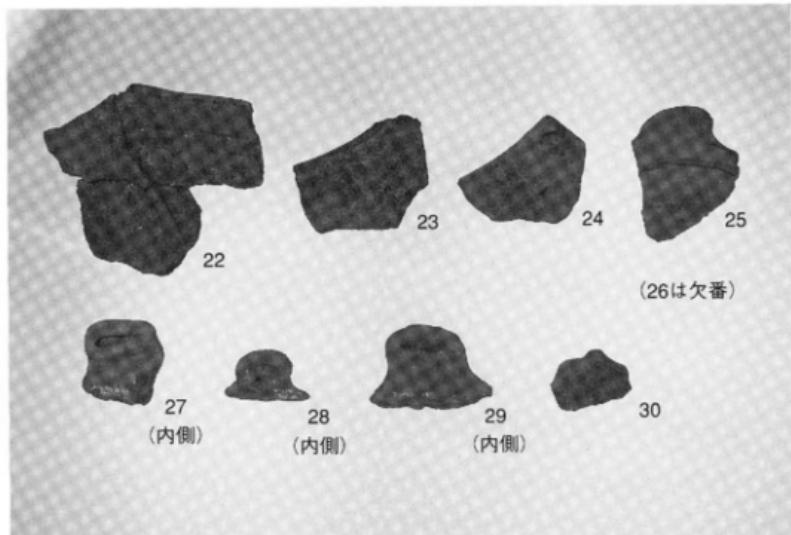
埋没谷出土土器(3)



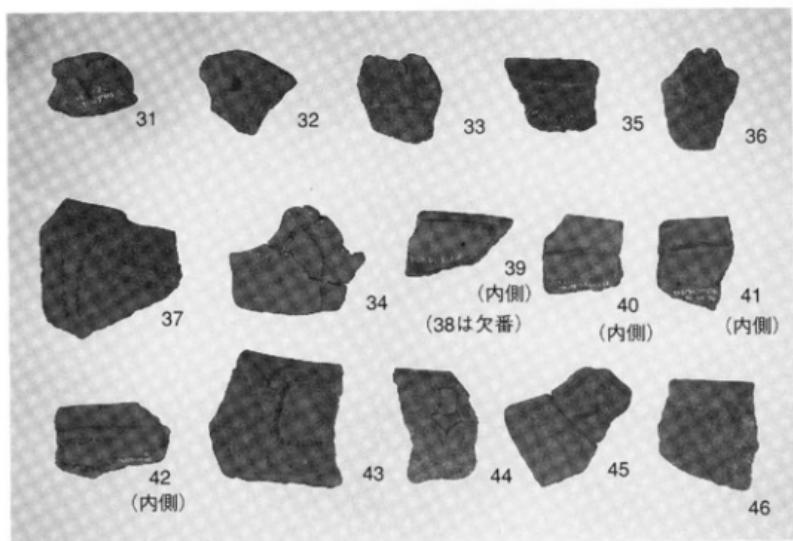
埋没谷出土土器(4)



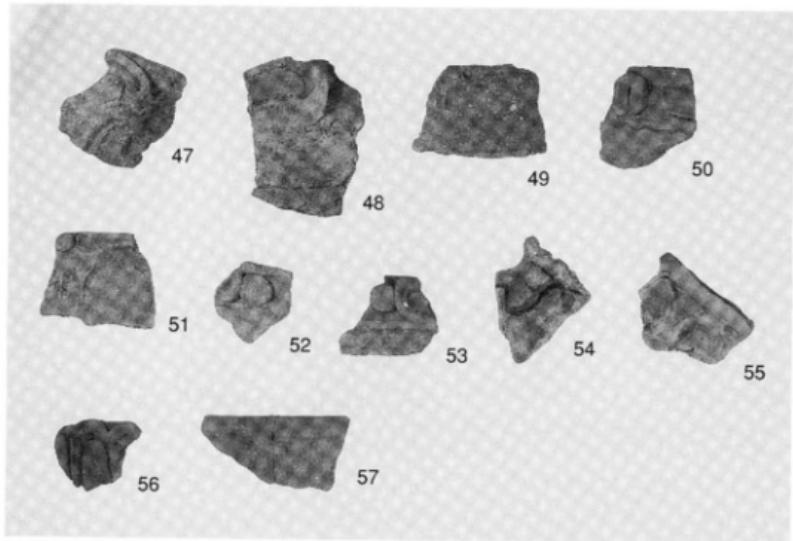
埋没谷出土土器(5)



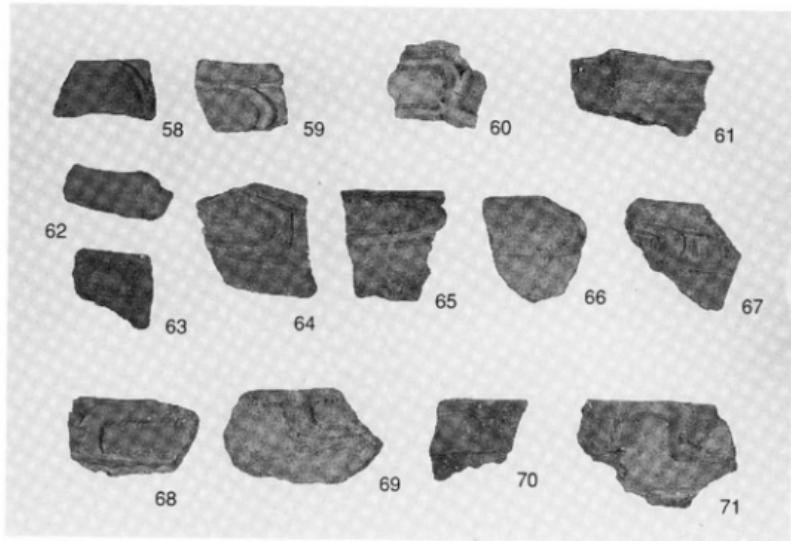
埋没谷出土土器(6)



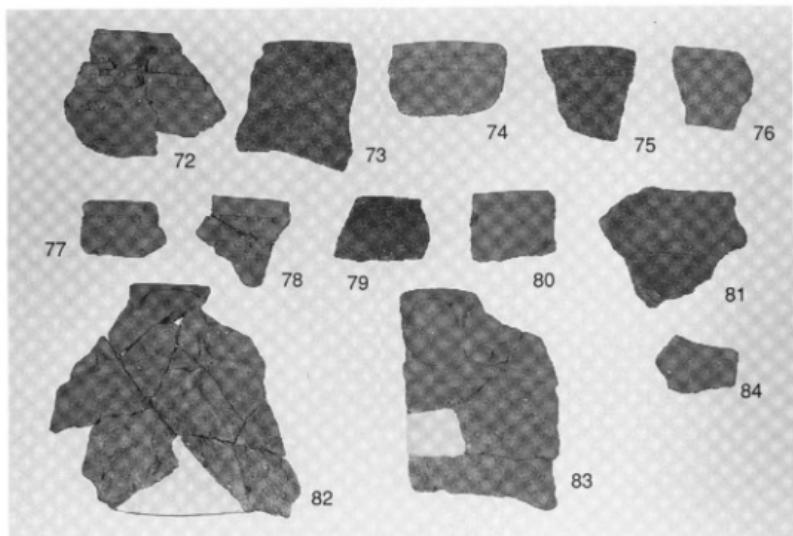
埋没谷出土土器(?)



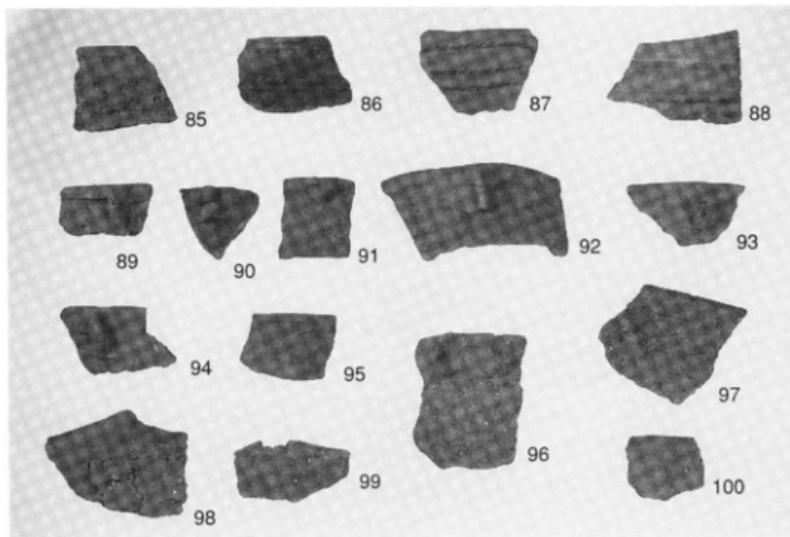
埋没谷出土土器(8)



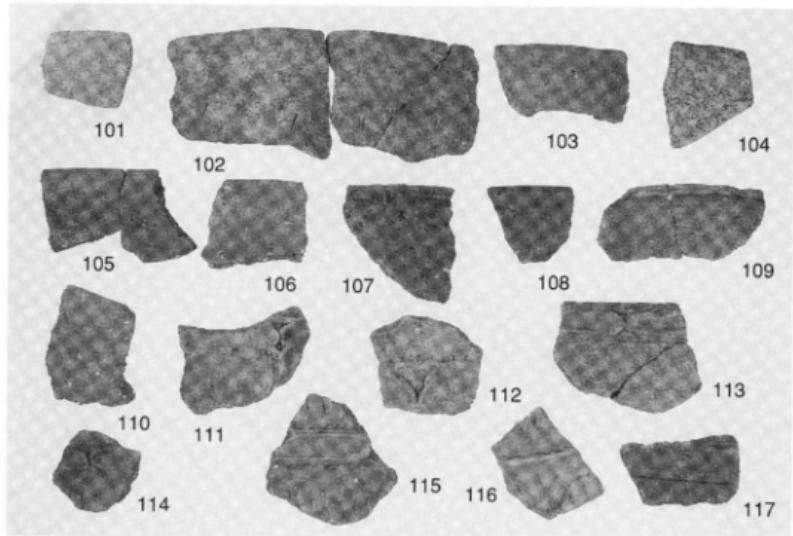
埋没谷出土土器(9)



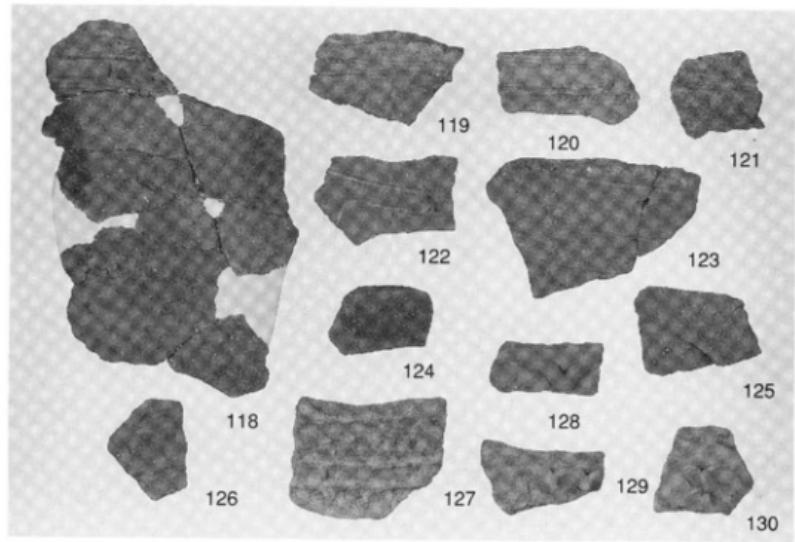
埋没谷出土土器(10)



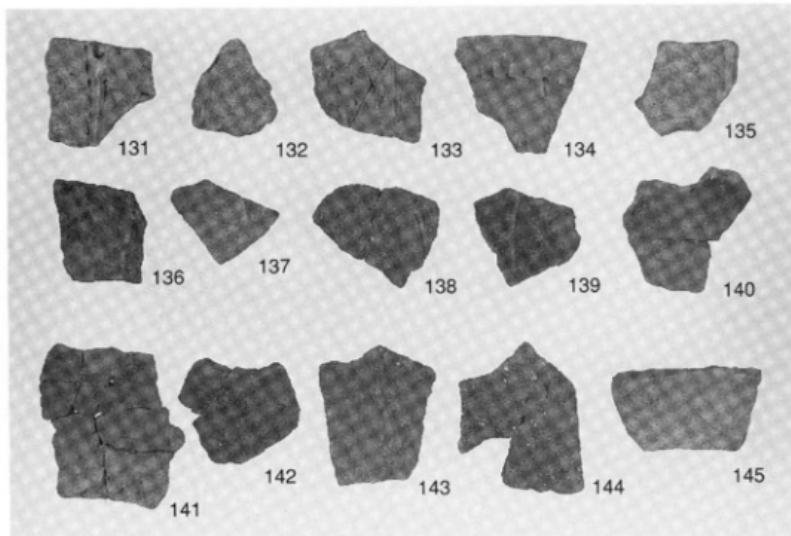
埋没谷出土土器(11)



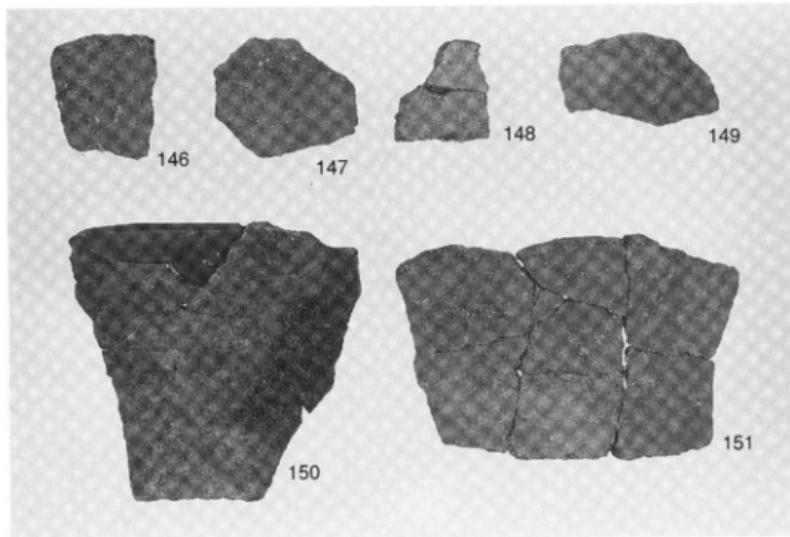
埋没谷出土土器(2)



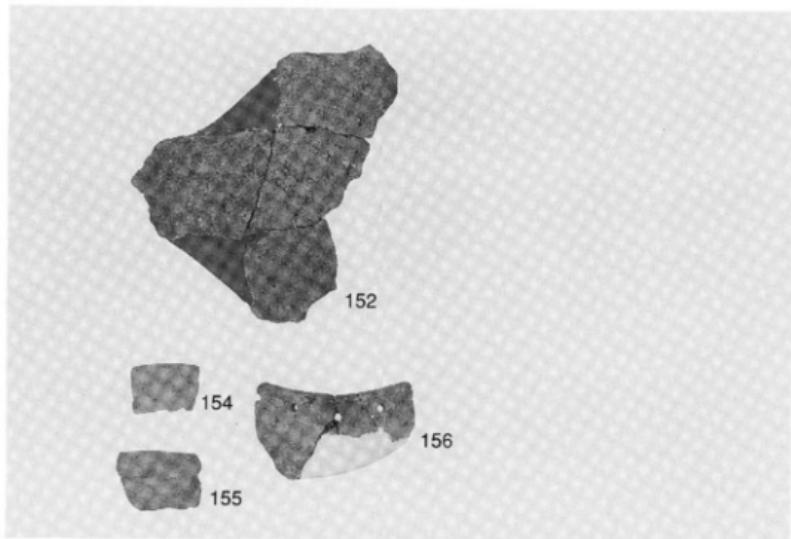
埋没谷出土土器(3)



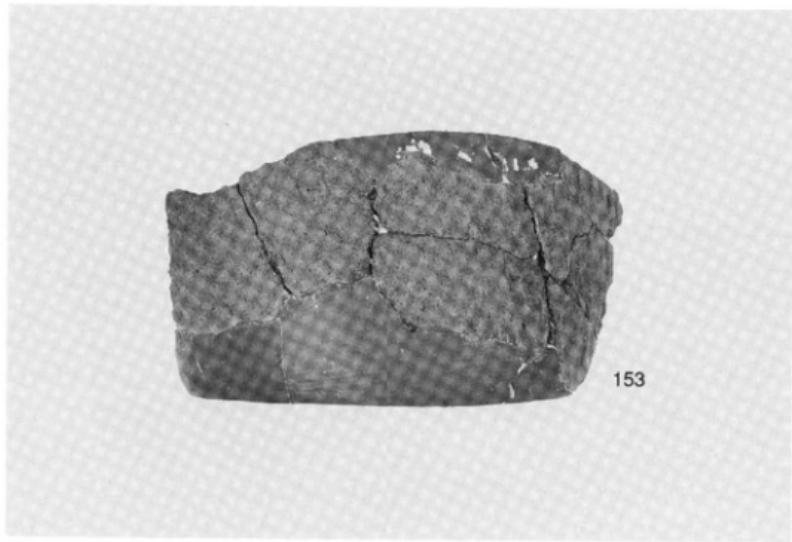
埋没谷出土土器(4)



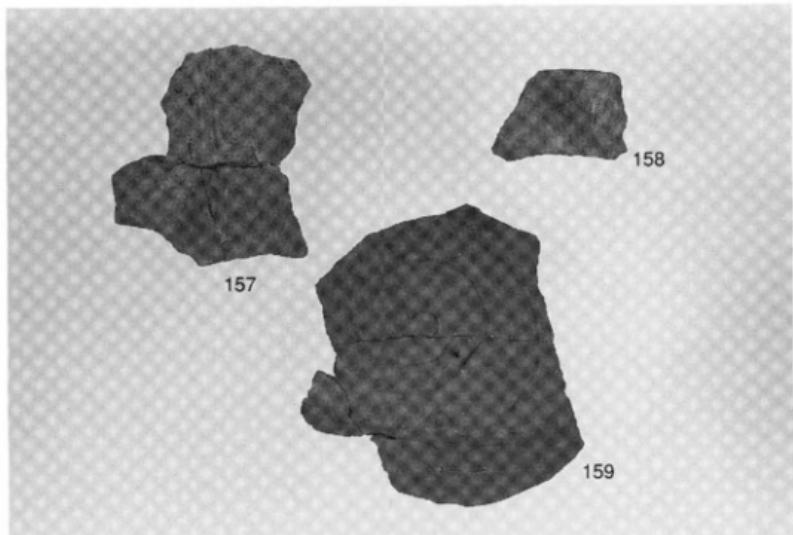
埋没谷出土土器(5)



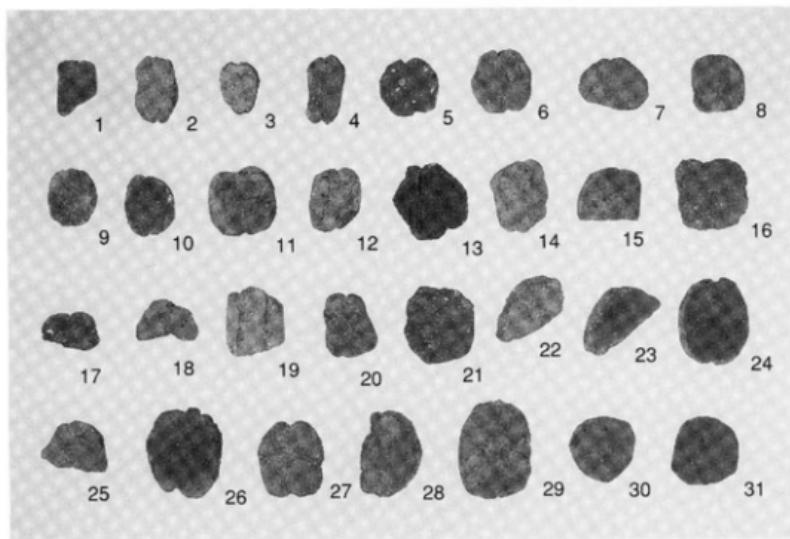
埋没谷出土土器(6)



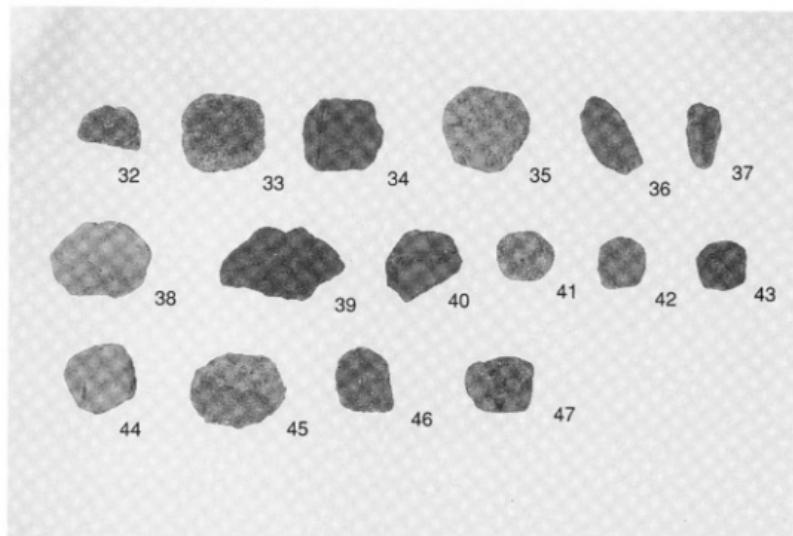
埋没谷出土土器(7)



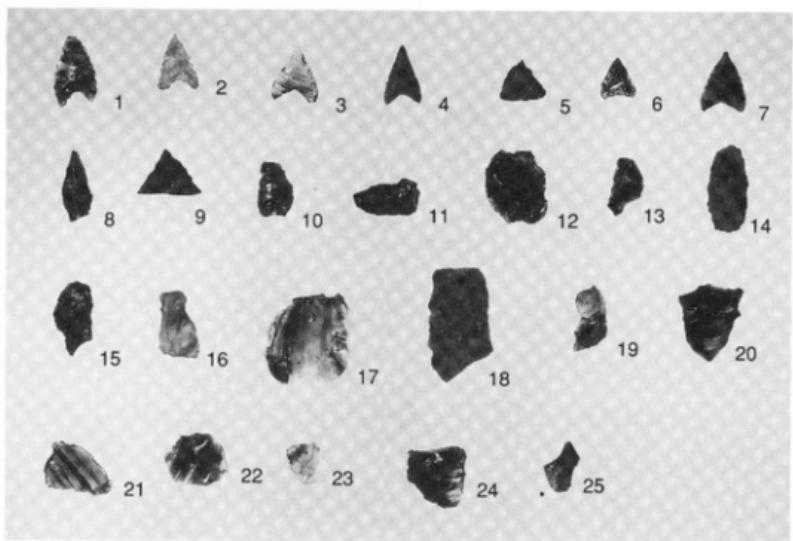
埋没谷出土土器(8)



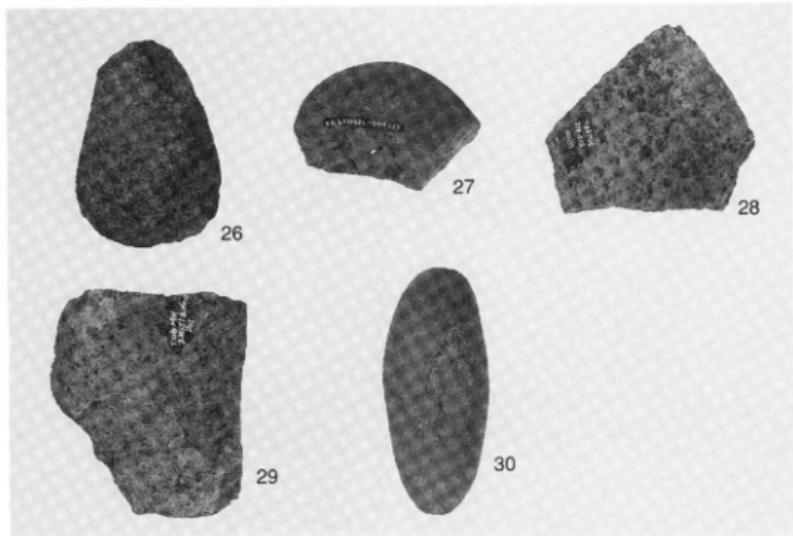
埋没谷出土土製品(1)



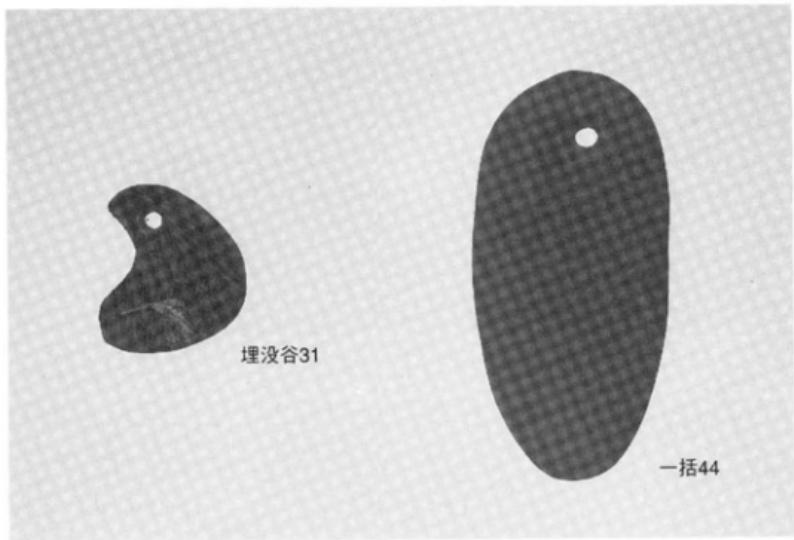
埋没谷出土土製品(2)



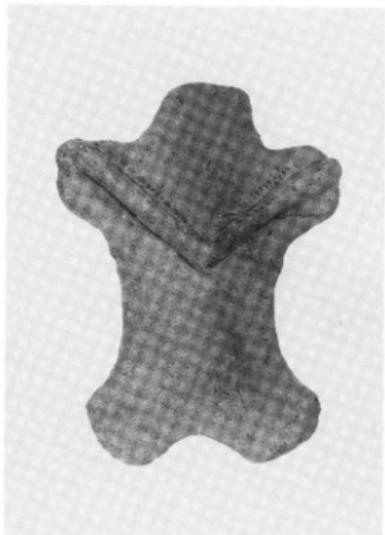
埋没谷出土石器(1)



埋没谷出土石器(2)



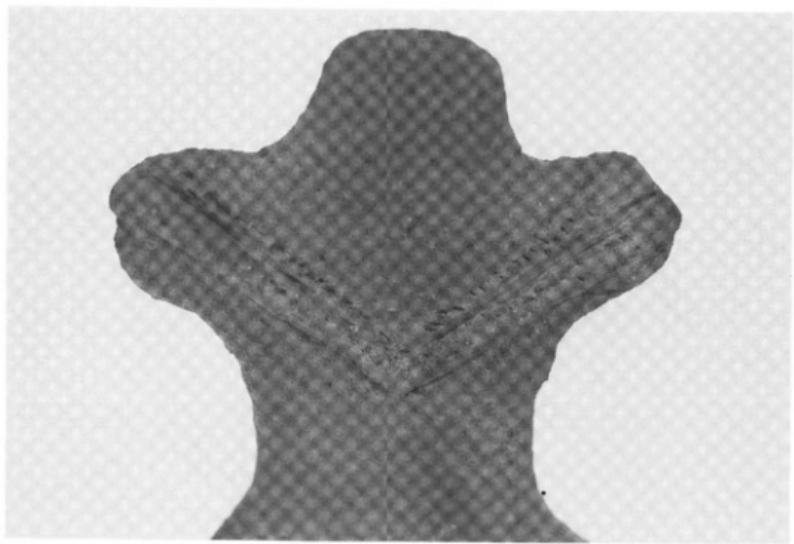
埋没谷等出土石制品



板状土偶（表）



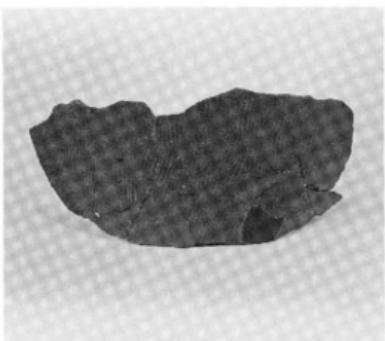
同（裏）



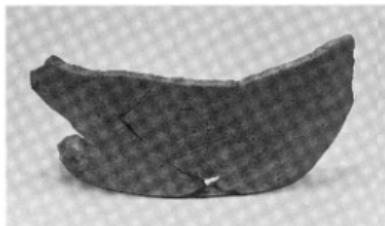
同胸部 接写



第1号火葬墓出土遗物



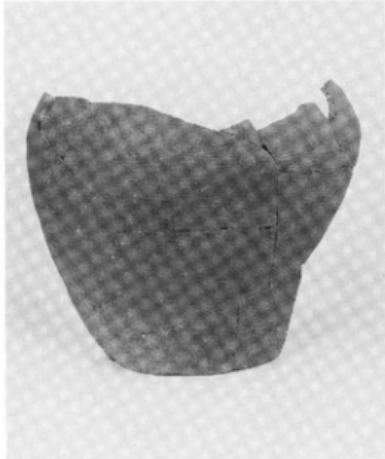
第2号火葬墓出土遗物



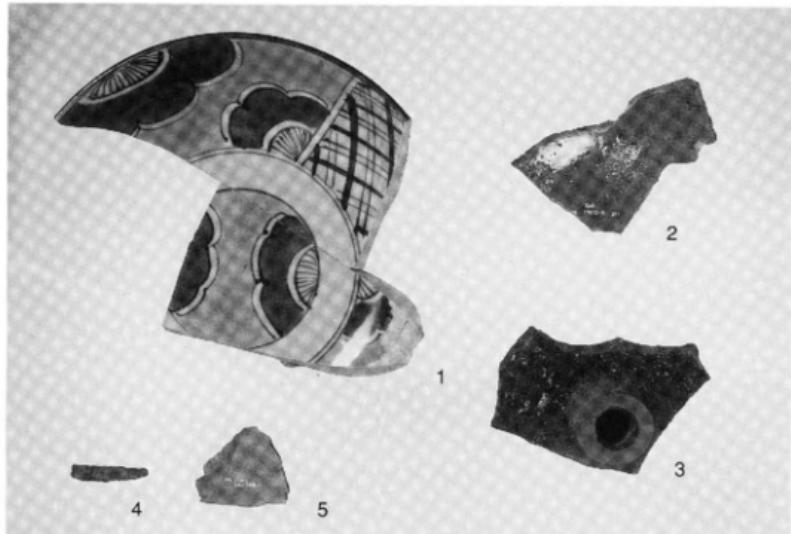
第4号火葬墓出土遗物(1)



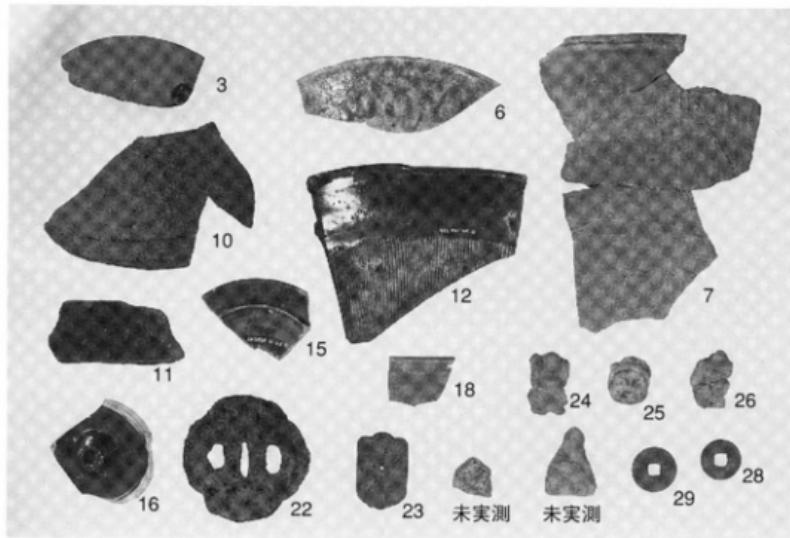
同出土遗物(2)



第2号方形区画墓出土遗物



第3号溝出土遺物



遺構外出土遺物



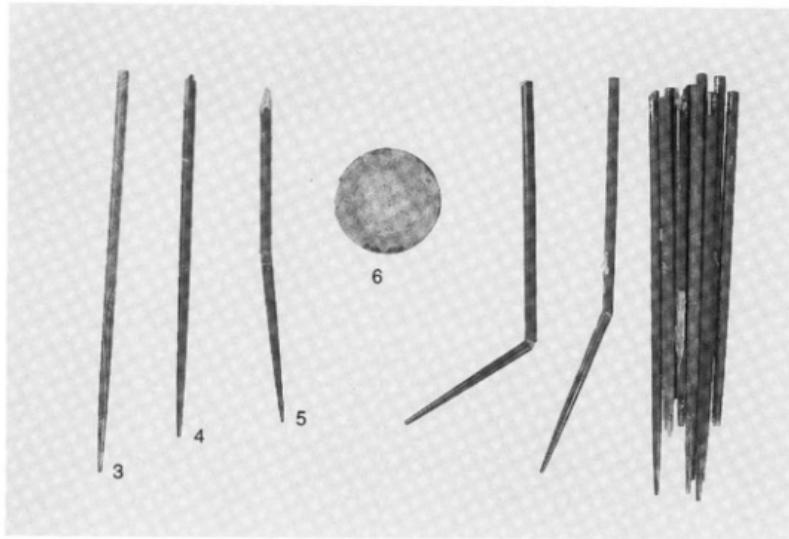
東原觀音塚全景



同調査状況



塚上にあった石仏・板碑（神国寺境内）



同出土遺物

前谷遺跡群
(東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡)

東原觀音塚

田村・沖宿上地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 4 集

発 行 日 1998年3月

編 集 土浦市遺跡調査会

発 行 土浦市教育委員会

問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

〒300-0811 茨城県土浦市上高津1184

T E L 0298(26)7111

印 刷 株式会社 光和印刷

〒310-0836 茨城県水戸市元吉田町1823-22

T E L 029(247)4362
